

---

**ぬるい恋愛 “ 情熱という、理想というmelancholy ”**

美位矢 直紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぬるい恋愛 “情熱という、理想というmelancholy”

### 【Nコード】

N4169E

### 【作者名】

美位矢 直紀

### 【あらすじ】

誰の為の恋なのか？何の為の愛なのか？時に自虐的に、時に卑怯に、理想の女性を追い続ける“涼介”。譲れない理想とは？人の心に届く情熱とは？10年前に別れた恋人への思いを引きずったまま、恋愛という、人間にとって必要不可欠な領域を泳ぎ回り、しかしどんな時も自分だけが傷付かない道を選ぶ涼介の“ぬるい恋愛”の行方は……。アフォーリズムとシークエンスを意識しました。「恋愛」を取り巻く男女の心理の中に在る、ざらついた部分を追求出来ていれば幸いです。ご感想等ございましたら、お気軽にお寄せ下さい。

# 1・・・嘯(うそぶ)く心

(このまま暫く付き合つ事も出来る・・・来週振られようと思えばそれも出来る・・・)

涼介はハンドルから手を離し、まぶた瞼を閉じていた。

(ほんと腐った野郎だ・・・)

まゆみの気持ちなど丸で考えず、まゆみの心を踏み躪る場面だけを“いけしゃあしゃあ”と考えている自分のぬるい心に嫌気が差した涼介は、心の中でそう吐き捨てた。

(・・・今朝あんなに強い日差しで起こされたのに・・・)

自分の醜い算段から逃避する様に、涼介は目の前に重く広がるミディアムグレイの低い空に視線を投げ出した。

車は旧10号線からバイパスへ合流する交差点の最前列で信号待ちをしていた。

青く光っていた歩行者用信号は点滅を始めていた。

(・・・)

視界の隅に入り込んで来た青色の点滅に一瞬目を向けた涼介は、再び瞼を閉じた。

(・・・両方とも駄目だ、今日別れよう。)

アクセルを踏み込む前に結論を下した涼介の心は、空の色と同じくらい鈍どんよりとしていた。

(・・・涼介、何考えてんだろ・・・)

綺麗な姿勢で助手席に座り、涼介が創る会話の無い空間を心地良

く受け入れているまゆみは、時折澄んだ瞳を涼介に向け、この先ずっと涼介から貰えるだろう愛情に寄り添って行く自分の未来を想像していた。

「俺、雨とデブ嫌いなんだよ。」

二人の間に続いていた沈黙を画する涼介の最初の言葉は、優しさとは無縁の、自身の感情をそのまま口にする事に吟味も躊躇いも無い安易な自己主張だった。

「・・・私も雨は好きじゃない。」

「なんかデリカシー無いでしょ？ 雨もデブも。」

「・・・ひどい人ね。」

「・・・でも好きでしょ？」

「・・・自信たっぷりね。」

「でも、好きでしょ？」

涼介はまゆみを一度も見ること無く同じ言葉を淡々と重ねた。

「・・・」

涼しく核心を突く涼介の意地悪な問い掛けに、まゆみは恋心を更に心地良く擦じ伏せられ、涼介の横顔から視線を外せなかった。

「・・・軽くメシでも食つところか。」

予想外に車の流れが滞っているバイパスを嫌った涼介は、会話の脈絡を無視し、再び安易な自己主張をした。

「うん・・・」

「渋滞避けよう。」

「・・・うん・・・」

まゆみは穏やかな表情で涼介を見つめていた。

（・・・何であんな事言っちゃうんだ・・・駄目だな俺は・・・くそっ、仕方ない・・・）

涼介は再び自分を吐き捨てた。そして吐き捨てた自分を庇護し、開き直り、横顔に刺さり続けるまゆみの視線に笑顔を向けた。

「・・・」

まゆみは涼介の笑顔に満面の笑みで答えた後、満足した様にゆくりと街並みに視線を変えた。

「……………」  
涼介はまゆみが残した意味有り気な余韻よゐんに、暫くまゆみの横顔を見つめさせられていた。

( ……恋愛つてのは夢とか希望とか、情熱とか理想とか、そんな様な物を振り翳かざしてる内は空回りするだけかも知らないな…………… )  
正面に向き直った涼介は自分の傲慢じゆうまんな素性すじょうを棚に上げ、まゆみの意図的な行動に心の中でそう嘯うそいた。

車内は静かだった。

まゆみはサイドブレーキの辺りに雑然と重ねられているCDを一枚一枚手に取っていた。

( ……家まで送ってくなら西公園降りた辺りだし、駅迄なら食後の車の中だな…………… )  
涼介は視界に捕らえているファーストフード店迄の距離を流麗りゅうれいに縮められない事に少し苛立ちながら、まゆみに別れを告げる場面を考えていた。

まゆみは中央区の唐人町に住んでいる博多の女性だった。涼介の住む小倉とは都市高速道路、九州自動車道と繋つないでも70分近くの距離があった。

「ミスチル、好きなの？」  
CDの中から“Mr・children”を見つけ出したまゆみは、無邪気な笑顔を涼介に向けた。

「……………そうだね。」  
涼介は前を向いたまま笑顔を作った。  
「何か意外だね……私もミスチル好き。」  
まゆみはそう言つて嬉しそうにCDをプレーヤーに差し込んだ。

( ……降つて来たな…………… )  
涼介はまゆみの言葉を拾わず、フロントガラスに姿を現した雨に

心の中で舌打ちをした。

涼介は一人の女性を傷付ける事の重大さを真摯しんじに受け止め、同じ過ちを二度と繰り返すまいとする自戒の心を然も当たり前前の様にならずと等閑なおよこりにしたまま、まゆみに切り出す別れ話のタイミングと、別れを告げた後、まゆみが車から降りる迄に交わすだるう言葉の選比方や使い方と向き合っていた。

まゆみは微笑を滲にじませていた。

10月19日の日曜日、午後3時過ぎ、小倉市街へ繋がるバイパスは渋滞が始まっていた。

雨粒は街の至る所で弾け合い始めていた。

車内には“Mr. children”のメロディと、この先ずつと交わる事は無いだろう二人の思惑が漂っていた。

「・・・ぬるいな。」

邪魔な雨を拭ぬぐうワイパーのスイッチを入れた時、涼介は心の声を思わず口にした。

「えっ？何か言った？」

「・・・いや、何でもないんだ。」

涼介は正面を向いたまま努めて自然にそう答えた後、まゆみと一度視線を交わし、ドリンクホルダーのホルビックにゆっくりと手を伸ばした。

## 2・・・耽(ふけ)る前夜

(多分女性は親密になると何でも話せる間柄になりたいと思うんだろうな・・・。しかし男はどうなんだろう、何も話さなくても分り合える関係になりたいって思ってるんじゃないだろうか・・・。いいのかな、それでお互い・・・。自分はどうなんだ?・・・) ベッドの中でそんな事を考えていた涼介は、ゆっくりと首を右側に動かした。

同じベッドの中で、まゆみが眠っていた。

(realismとromanticism・・・communicationか・・・)

涼介は視線を天井に戻し、胸の上に置いてあった両手を頭の下で組んだ。

(喋りたい女と会話したい男・・・って、誰かが言ってたな・・・)

涼介の自問自答の対象はまゆみだけではなく、過去、縁のあった女性にも向けられていた。

(何だか色々喋ってる彼女に、優しいつもりで適当に相槌を打つた彼が“んな事どうでもいいじゃん”みたいな素振り(そぶ)をどっかで見せちゃうと、“もう私の事あんまり好きじゃないのね”か、“聞いてよ、折角喋(せうかくしゃ)ってるのに!”の、どっちかだもんな・・・。悲劇のヒロインと遠くを見つめる詩人・・・三つも四つも喋ってるのに何も語ってない女と、一つだけで三つぐらい語りた男・・・)

涼介は恋愛における男女の相互理解という普遍の命題を他人事のように捉え、耽っていた。

「ふーっ……。」

涼介は大きな息を一つ吐き、体を起こした。そして枕元の煙草に手を伸ばし、火を付けた。

(……何でこんなに寝顔って優しいんだろう……。)

涼介は燻る煙越しにまゆみを見つめていた。

まゆみは左肩を下にし、涼介に体を預ける様にシーツに包まっていた。ラブホテルの間接照明は、そんなまゆみの素顔と滑らかな腰のラインを美しく涼介に届けていた。

(……まゆみのせいじゃないんだよな……何も悪い事なんかしちゃいないし……。)

涼介は心の中でそう呟きながら、通り過ぎて行った女性を思い出していた。

(……ほんと、綺麗だよな……。)

涼介は左の指先で長く延びている煙草の灰を一度灰皿に落とし、再びまゆみを見つめた。

(……女性って素晴らしいな……。)

涼介は、明日、別れを切り出すかもしれないまゆみの寝姿に、男性が女性を守ろうとする行動の原点は、実は意外とこんな瞬間にあるのかもしれないと考えていた。

10月19日の日曜日、午前2時を回っていた。

二人の体が離れて1時間近くが経っていた。

ベッドのコントロールパネルの横で、セブンスターが空になっていた。

涼介は鼻持ちならないナルシステイックな美意識の下、男女の恋愛感情を耽り、女性を褒め称える事に因つてまゆみへの罪悪感から逃れ様としていた。



### 3・・・サイトとの出会い

松岡まゆみと佐久間涼介という、32歳と34歳の、世間の常識として分別と良識を備えている筈の二人は、携帯電話のメール機能を利用した“出会い系サイト”という、男女の間を取り持つ現代最強の手っ取り早い武器を使い、2カ月程前、暑さのピークを迎えなのまま終りそうな8月に知り合っていた。

“恋人を見つける”というテーマの下、携帯電話やパソコンのメール機能は、過去、男女が経験した事の無い特殊な会話方法として独特で絶大な利用価値と効果があった。しかしその利便性故に恋愛関係を生む為の苦しみや決心は、常に曖昧なまま進展する形となっていた。

本来、恋愛を成就させる為に乗り越えなければならぬ障害は、相手に対する一生懸命な気持ちで克服していた。畢竟、そんな一生懸命さの中には勇気や誠実さという、人の心を動かすエネルギーが充満し、第三者をも納得させるだけのパワーがあった。だからと言って出会い系サイトで出会う男女にそのパワーが無いとは言われないが、男女が心を通わせる為の普遍的なプロセスを省略、超越出来る出会い系サイトの性質上、その量は減少し、質は落ちていた。

出会い系サイトは得てして文字の量や質に制約があった。その現実は一面識も無い者同士が相手の文字を頼りに思いを巡らせ、タイムリーな感情を画面に集約しようとした時、言葉と態度では伝えられそうな微妙なニュアンスを制約内で簡潔な文字に置き換えられない事が多々あった。それは相手の真実を模索する場面で遣り切れない苛立ちを抱かせる事となっていた。しかしその苛立ちは、相手に送信する全ての感情や情報がコントロール出来る事を利用者に気付

かせる事にも繋がり、恋愛に貪欲で孤独を嫌う男女の相談窓口として、或いはストレスを発散するツールとしては絶大な威力を發揮していた。

出会い系サイトで知り合う男女は例外無くお互いの素性を理解する事を急いでいた。出会い系サイトを次々と検索していれば、自身の望む理想に近い個人情報をいくらでも抽出出来るからだだった。それは恋愛という行為からは切り離せなかった筈の、気持ちの逡巡や時間や手間を省くという、恋愛に対して自己中心的で殺伐とした合理性を追求する男女を増やす事となっていた。

恋人が欲しいと願う男女にとって、出会い系サイトの機密性や利便性は、その代償として世代に因っては備わり様のない危機回避能力を要求していた。微笑ましい出会いや危険な巡り合わせ、結婚や犯罪は、結果としてその能力に準じていた。

方円の器に従い、色んな器に因ってその相を変える水のように、出会い系サイトを利用して恋愛を求める男女は、“出会い系サイト”という器に心理を合わせていた。それは利用する人の価値観一つで、幸福にも不幸にも出会える事を意味していた。

涼介は食品会社に勤めるサラリーマンだった。

涼介の勤める食品会社は食材の流通だけではなく、イタリア料理を提供するレストランの運営を事業の一つとし、直営店は元より、80年代前半からフランチャイズ店を含めたレストラン事業を全国展開していた。そして90年代に入る前には時流にも乗り、レストラン事業は会社の中心的部門に迄成長していた。

2年前の2001年4月、涼介は神奈川県横浜市関内にある本社企画開発部から、福岡県北九州市小倉にある北九州支店企画開発部

に転勤し、主任から課長代理に昇格していた。

小倉は涼介の地元だった。

涼介は育った街の高校を卒業後、神奈川大学に進み、そのまま横浜で今の会社に新卒で就職し、当時のバブル景気に煽られ、存分に仕事も遊びもこなし、恋愛に於いても、神様が全ての人に満遍なく与える掛け替えの無い出逢いを経験していた。

涼介は横浜での15年間で“涼介”という人格やライフスタイルを構築させていた。その事實は、例えば小倉が涼介の地元と雖も、小倉という街に簡単に解け込めない体質を涼介に齎していた。

涼介は小倉に戻って来たにも拘わらず、日々の生活の中で俗に言う“じゃん言葉”を使い続けていた。しかし涼介のその行為は地元で叩き上げられた取引先の担当者や小倉に二店舗ある直営レストランの店長に、“地元のくせに”という苛立ちを呼び込み、“郷に随えない気障な奴”という烙印を押される事に繋がってしまった。そして涼介に絡み付くそんな揶揄は、当然の様に仕事上の関係者に吹聴され、人伝に誇張され、“仕事も満足に出来ない奴”という尾鱈までも付く事となり、レストランでアルバイトをしている学生からも好奇の目で見られる様になっていた。しかし涼介はそんな噂でストレスを溜める程自分の仕事に不真面目ではなく、誰かに媚びる事もなかった。

涼介は自分が新参者であり、役職上、目上の社員に冷徹な指示を出している事を理解していた。故に仕事を進める上での摩擦やアクシデントには寛大だった。しかしプライベートでインディビジュアルな欲求が満たされない、欲しい物や求める物が満足や充実に届かない、そんな小倉という街と横浜の間にある耐え難いギャップには正に“新参者”として苛まれ、その度に街の全てに心を閉ざし、追い込まれ、多大なストレスを溜め込んでいた。そして諦めにも似た

遣り切れない苛立ちを抱え込み、虚脱感と闘い、心に嘗て経験した事の無い様なネガティブな気持ちを抱き、地元で管理職として仕事を続けて行く事の意味を自身に問い掛け続けていた。

涼介は小倉に戻って以来ずっと、生活のモチベーションを高いレベルで維持出来た横浜での生活を渴望し続けていた。それは涼介の心の中に、覚悟を決めて置かれた現実に身を溶け込ませるという選択肢が存在しない事を意味していた。実際、涼介は北九州支店に転勤して来た10ヶ月後、降格を覚悟の上で横浜本社に戻るべき稟議書と、新規事業への参入に関する企画書を本社人事部の部長と直属の部長に提出していた。

涼介は叶わぬ夢など無いと自身に言い聞かせていた。しかし人事異動の3月は淡々と過ぎ去り、4月に入る前、企画書の件など無かったかの様に新入社員教育の責任者という役割を支店長より直々に命令されていた。

涼介は日頃から無口だった。そしてそんな涼介を取り巻いている現実には更に涼介を無口にさせ、人付き合いを御座なりにさせ、孤立させていた。

2002年の春、涼介が籍を置く企画開発部には四人の新人が配属されていた。全員北九州市内にある大学を出ていた。その中に岡部恭子がいた。

恭子はエレガントなスリーセクションレイヤーにタイトなダークスーツを瀟洒に着こなす、決して柔らかいとは言えない目元が印象的な女性だった。

恭子は新入社員研修と、現場教育を兼ねた例外なき6ヶ月間の店舗実習を終えた後、涼介とペアを組んで取引先に出向く事が多かった。

恭子は涼介を慕っていた。涼介は恭子に、将来リーダーとして人を引っ張る素質がある事を感じていた。

ペアという性質上、二人は時間を多く共有していた。休日であってもお互いの自宅にあるパソコンにデータを送信し合っていた。それはある意味必然、二人の間に仕事以外の会話を増す事となっていた。そして恭子は何時の頃からかその会話に困<sup>よ</sup>って、更に涼介に惹<sup>ひ</sup>き付けられていた。

二人は二度ベッドを共にしていた。

初めてのセックスは恭子が入社した年の12月、ペアを組んで2ヶ月が過ぎていた取引先の忘年会の日だった。そしてその次の日、涼介は出会い系サイトのアドレスを自分の携帯電話にブックマークしていた。

きっかけはセックスの翌日、恭子から頻<sup>ひんぱん</sup>に送信されて来たメールの中に在った。

恭子にとつて涼介とのセックスは画期的な出来事だった。その事実は、まったりと甘い内容のメールを涼介に何度も送信させる事となっていた。そしてそんなメールの一つに、恭子は占いサイトのURLを貼り付けてあった。

涼介は恭子のメールに丁寧<sup>ていねい</sup>に付き合っ<sup>て</sup>はいたが、占いのサイトまで几帳面に開く程恭子のメールに入り込んではいなかった。それよりもその占いサイトの広告欄に、兼<sup>か</sup>ね兼<sup>が</sup>ね興味を持っていた出会い系サイトの入り口が慎<sup>つつ</sup>ましく巧<sup>たく</sup>みに貼り付けられてあった事の方が、涼介にとつては恭子とのセックスよりも画期的な事だった。

涼介は出会い系サイトを一度閲覧したいと思っていた。しかしそのサイトが援助交際を希望する書き込みに毒されているのならば意味が無いとも思っていた。アクセスしても出て来る結果は大学時代に通っていたテレクラと同じで、一頻<sup>ひとしき</sup>り遊<sup>あそ</sup>んだ後は虚<sup>きよ</sup>無<sup>む</sup>感<sup>かん</sup>に支配されるだけだろうと、自身の行為の美化と甘い性<sup>せい</sup>根<sup>ね</sup>の弁<sup>べん</sup>護<sup>ご</sup>を先回りさせていた。されどそのサイトのページ目には、真面目な交際を希望する男女に出会いを提供するという、涼介の予期していなかった

言葉が書かれてあった。その真つ直ぐなコンセプトだけを穏やかな明朝体で表現した飾り気の無いキャッチコピーは、出会い系サイトを利用する女性の不埒な誘い文句を閲覧する事で自慰し、嘲笑し、憐憫する事を準備していた涼介の、ある意味期待を裏切っていた。

涼介の邪な好奇心は、その出会い系サイトに自身を登録する事を戸惑う理性を凌駕していた。結果的に下らない出会い系サイトだったとしても、小倉での生活からは永遠に得られないだろう刺激を、少しは与えて貰えるかもしれないと思っていた。

恭子との二度目のセックスは最初のセックスから2週間後、仕事納めの日だった。二人は部内の飲み会を終えた後、二次会を別々に抜け出していた。

恭子の心の中では、すでに涼介は相愛の彼氏だった。

2003年を迎え、涼介の携帯電話が受信する恭子からのメールはプライベートなもので占められ、仕事帰りに二人で食事に行く回数も増えていた。

涼介は恭子の気持ちに気付いていた。しかし涼介は加速度の付いた恭子の思いを、反発し合う磁石の様に一定の距離を保ちながら跳ね返っていた。そしてその磁力を自己都合で自在に変化させ、仮に三度目のセックスがあったとしても、そこには愛情など無いという暗黙の了解を介在させようとしていた。

涼介には恭子の恋愛感情を、上司と部下の間で繰り返される単純接触に端を発した錯覚であり、セックスはその錯覚に気付くまいとする、倒錯した感情の終着点だったという結末へ軟着陸させなければならぬ理由があった。涼介はこの年も本社企画開発部へ新規事業展開に関する企画書を提出し、人事部には本社復帰希望書を提出していた。

涼介が選ぶ行動の動機は、全て小倉という街に対して溜め込んだストレスにあった。そしてそのストレスは、恭子と、恭子という媒介者がいなければ辿り着けなかった出会い系サイトを、涼介のプライベートに組み入れた形となっていた。

涼介は生活環境の膠着と、投げ遣りな自分に対する愛着と、理想に対する執着の摩擦によって生じた粗悪な情熱で恭子を取り込み、鬱積している自身の美学の捌け口として、不安定な情緒を救ってくれる女性として、恭子を冒瀆していた。

涼介にとって恭子は、自身のプライドを守れる“いい女”でしかなかった。

2003年3月、人事異動名簿に名前が無かった事に落胆していた涼介は、各部署に正式な異動辞令が出た二日後、支店長から二通の公式書簡を受け取っていた。一通は新規事業展開に関する企画調査を継続せよという指示書だった。そしてもう一通は、本社企画開発部への復帰希望について、酌量の余地はあるが根拠薄弱であり正当性に欠けるという趣旨の回答書だった。

涼介は気付かぬ内に体裁だけを取り繕うチームリーダーに成り下がっていた。そしてその事実がチームに軋轢を生じさせている事を会社に見抜かれていた。実際、涼介は二通の公式書簡とは別に、所属する企画開発部の部長から一通の指導書を渡されていた。そこには欠落した協調性への注意と、中間管理職として持つべき責任感についての訓戒が記されてあった。

涼介は自身の心が荒み、利己主義に走っている事に気付きながらも敢えてそれを無視し、理想の扉を強引に抉じ開ける為にチームと個人を使い分け、横浜本社復帰を勝ち取ろうと結果を出し続けた。しかしストレスにもがき苦しんでいる涼介には、仲間に対する思い遣りの欠片も無い不純で不誠実なそんな行動に、人の心を動かす説得力など無いと気付く心の余裕は無かった。

涼介は自分を見失っていた。そして自分を取り戻す術を見つけないまま、インディビジュアルな理想だけを滾らせ、自己都合だけで小倉という街に擦り寄り続けていた。



#### 4・・・重ねる洞察

( 2時半か・・・ )

腕時計を外し、コントロールパネルの横に置いた涼介は、ベッドの中で再び考え始めていた。

眠れない涼介の隣で、まゆみは寝息を立てていた。

涼介は初めて出会い系サイトのURLを開いた日から9ヶ月近くの間、様々な女性とメールで会話を重ね、対面を重ねていた。大阪から博多に出張で来ていた女性も居れば隣町の主婦も居た。顔を合わせて30分後にはラブホテルに入っていた女性も居れば、メールで会話をしていた本人ではなく、その女性の友達と食事をした事もあった。或いは画像を交換した後に連絡が取れなくなった女性や、待ち合わせの約束をした前日に送られて来た画像を見て、その後の受信を拒否した女性も居た。

涼介にとつてまゆみは、ラブホテルで一夜を共にした五人目の女性だった。食事だけで終わった女性を含めれば、まゆみは七人目の女性だった。

( どんな形でも、初めて会った時の雰囲気ってのは重要なファクターなんだよな・・・ )

涼介はベッドの中で考えていた。

メールで出会いを求める女性は、メールの中では明らかに恋をしていた男性を初めて視覚で捉えた時、その男性の仕草の端々に出て来る癖やセンスが何れぐらい自身の感受性を刺激し、何れ程の好印象となつて心にインプットされるかに因つて恋心に“けり”を着ける事が出来た。しかし“感受性”には雰囲気や表面的な物腰という、

その印象を幾らでも操作出来てしまう抽象的な概念に直感的に反応してしまふ性質があつた。ある意味人間の業しごうでもあるそんな直感おおもひは、概ね性的欲求を満たそうとする潜在意識に支配され、曖昧あいまいで主観的な判断を下している事が多く、メールで男性と出会おうとする女性の直感や、その直感を導き出す感受性は、更にその傾向を顕著けんちやくにしていた。

出会い系サイトに恋の仲介を依頼する女性の多くは、手に入れ様と決めた男性に絡み付いているリスクを予測し、的確な判断を下す為の理性を心の隅に追いやる事が好きだつた。しかし心の隅に追いやつた筈はずの理性の中に在る、完全に放棄する事など出来ない自己防衛本能が、自分の前に現れた男性を受け入れ様と決めた気持ちが生解なのかどうか、時間の経過に因つて違つた側面を見せるかもしれない男性の言動を事ある毎ごとにチェックしていた。しかし短い時間の中で二人の相性に答えを出そうとする無理な洞察しんさつは、恋愛対象を見極める能力の未熟さを自分に気付かせる事となつていた。されどそんな事実を認めたくない女性のぬるい自尊心は、自己防衛本能の恩恵を受ける為の柔軟性に欠けるゆるい理性をかばう為に、洞察の矛盾ぼつこ先さきを現実から未来へと徐々に切り替え、二人が創るであろう微笑ましい想い出を先回りし、自己防衛本能までも説き伏せ様と画策していた。それは理想を追求する為に乗り越えなければならぬ困難な命題たいていに対峙するよりも、自身が持つ恋愛観の再構築をし、恋愛という行為の中に在る未知の喜怒哀楽を享受きやうじゆする事の方が大切だと信じ様とする、ある意味種類の違う、女性の生理的な部分に存在している、もう一つの自己防衛本能の働きでもあつた。

出会い系サイトを利用する女性の自尊心にへばり付いている“ずるい”主観は、居心地の良い答えを幾らでも導き出せる場所を探る事に長けていた。その場所は恋愛の理想を夢想する事が満喫出来る“恋愛観”と言う山の稜線に存在していた。同時にその場所は、自身の一連の行動を社会の常識に流れ込ませる時に、最終的な検証を

しなければならぬ分水嶺でもあった。

女性の殆どは自らの意思で出会い系サイトに分け入ったにも拘らず、殆どの女性は恋人になるかもしれない男性と知り合った直後、馴れ初めが“出会い系サイト”だという、身の回りの人達に女性としてのプライドを傷付けられ兼ねない、事ある毎に揶揄されるかもしれない、自分の身に一生付き纏う事になるかもしれないそんな事実を、ある意味“時効”だと割り切れる日が来る迄隠し続けて置きたいと思っていた。故にそんな女性は、例え“恋愛”と言う山の稜線で恋愛関係を満喫している最中であっても、自己保全を強かに考えているゆるい理性に従い、二人が密やかに下山出来るルートを確認しておくことと躍起になっていた。更に万が一下山ルートを間違え、二人の馴れ初めが公になり、好奇の目が自分に向けられた時の為に都合の良い言い訳や身に漂わせる哀愁、或いは開き直る為に必要な処方箋を自尊心に持たせる準備もしていた。

ぬるい恋愛には心の何処かに必ず疚しい部分があった。その疚しさは血液の様に体中を駆け巡り、マスメディアが声高に叫ぶサイトの危険性や、サイトが街中に氾濫させている甘い香りを放つイメージ広告、そして身近な同姓から伝え聞く、誇張された美しい体験談に反応しようとする好奇心をサポートしていた。そしてそんな女性の疚しさは、出会い系サイトは理想の男性と知り合う為のものだとする主観が、詰まる所社会の倫理から認知されないのならば、刹那の悦楽に溺れてもいいとする、何処か付け焼刃的で、その場凌ぎの感を否めない自虐的で独善的な理屈を成立させる準備もしていた。そんな女性の御都合主義的思考の組み立ては、恋愛に限らず、生きて行く上で人と人との繋がりがあがる以上、人生の何時か何処かで必ず自分の態度や言動を省みる事となる、“自己中心”を野放しにしている主義に原因があった。

女性は潜在的に24時間自分の事を偏愛していた。結果、必然的に生まれる自己中心主義に、ある意味“妙味”すら感じていた。そしてそんな女性の何処までもゆるく、ぬるい理性には、例えば自分

の恋愛を“物語”として仕上げる事に対する恐縮おそしやくの概念など毛頭無かった。

（強したたかなのは・・・俺じゃないのかもしんないな・・・。）

涼介は心の中でそう呟いた。

出会い系サイトを泳ぐ女性の中には、理想の恋人を探すという可憐れんな目的を途中で快樂に差し替え、メールに費やした時間の対価を貪欲どんよくに求める人も居た。そんな女性は立ち止まって振り返れば見える筈の正しい行先に褒美ほつびは無いと決め付けていた。そして立ち入った出会い系サイトの中で、誰にも言い訳が出来ない、恋愛という言葉葉を口にする事すら恥ずかしい孤独な場所迄行き着き、そこで快樂むほを貪る事に独自の正当性を見出していた。

出会い系サイトを泳ぐ女性の欲望には限りがなかった。メールという手軽な飛び道具を使い、感動する様な出会いを経験する事も、恋する事で発見出来る従順で素直な自分も、そしてその恋に美しく付随して欲しい魅力的なセックスも、愛される事で感じる優越感や握れる主導権も、そしてその愛にも付随ふすいして欲しい熱く燃えるセックスも、更には裏切りや偽りや割り切りも、それらは何時か必ず、しかしその気になれば何時でも意のままに体感出来という、女性にはそういう権利が許されると信じる事にも貪欲だった。

（・・・全部欲しいんだらうな・・・。）

涼介は眠る事を諦めたかの様に洞察てんさつを重ねていた。

“恋愛”が持つ性質上、バランス感覚は重要だった。しかし自身の値打ちを信じる女性程、出会い系サイトで知り合った男性と初めてデートをした時、譲れない価値観を常に前面に押し出し、しかもその価値観を押し売る事に時間を費やし、その時に男性が見せる所作しよさばかりを気にし、二人の間に流れる空気を硬くしている事が多かった。

恋をしようとする男性は、女性の想像力を凌駕りょうがする程の洞察力を意外と働かせていた。そして男性は女性を彩いろどる神秘的で抽象的な部分に惹かれる生き物だった。故に魅力と称されるものを努力して身

に付け、自分には値打ちがあると自負している女性が振り翳す理想や情熱は、男性の“恋愛”には余り重要ではなく、寧ろ邪魔になっていた。

(・・・恋愛で自分を守っちゃいけないんだよ・・・)

涼介は自問自答していた。

“恋”はどんな形で、どんな状況で始まっても区別も差別も無かった。それ故に“愛”は、その人間の本質を晒した。

## 5・・・判断の手順

(・・・まゆみの掲示板、少し冷めた感じのいい女を想像させる言葉が並んでたな・・・)

涼介の回顧と洞察は、10月19日、午前3時を過ぎたラブホテルのベッドの中で、密度と速度を増していた。

クールなロマンチスト、嫌い？

プレゼントされるなら、シャネルのイヤリングより

プラダのサンダルの方がいい人、センス合うかも！

よろしく！

30代前半・172cm・59kg・A型・魚座

涼介は出会い系サイトを利用し始めて以来、軽さを全面に押し出した、誠実とは無縁の文章を意識してずっと掲示板に載せていた。そして涼介は日々移り変わる女性の掲示板に、自分と同じ様な感覚の文章を見つけては申し込みメールを乱打していた。

はじめまして。

私はプラダと、やっぱりヴィトンが好き。

それと、クールなロマンチストって

どんな人なんだろう。

メールからヨロシクです。

まゆみから届いた最初のメールは、涼介のモチベーションを上げていた。

涼介が女性にばら撒いた、何処かふざけた様な“ノリ”の軽い申し込みメールに対する返信は多かった。しかし涼介は、その殆どが相手に対する要求や自身の持つ“魅力”と称される部分をいきなり報告して来ている事に辟易していた。

まゆみは会話の流れを守り、文章の“間”をセンス良く使っていた。涼介はそんなまゆみの簡潔なメールに魅力を感じ、親近感を抱いていた。

涼介はまゆみと交すメールでの会話に力が入っている事に気付いていた。涼介にとってその事実は、全く予期していなかった嬉しい誤算だった。そして涼介はその誤算が導く樂觀の下、まゆみと何時か会う事になっても、二人の間に流れる空気に違和感は無いだらうと憶測していた。

(でも違っただよな・・・)

過剰な自問自答を繰り返している涼介の体の中は、まゆみを肯定したいとする血流と否定したいとする血流がぶつかり合っていた。

(最後の砦だっただよ今夜が・・・まゆみとの関係・・・)

涼介はまゆみと知り合った日から今日迄の3ヶ月間を大切に丁寧に抱え込んでいた。しかし結局はゆみとの恋愛の進退をセックスに委ね、そしてそのセックスから溯って相性を吟味するという物哀しい判断の手順を、何時もの様に実行していた。

涼介は女性に対する慇懃無礼さを象徴しているかの様な独善的で高慢な世界観の下、まゆみとの恋愛を主観的論理で紐解こうとしていた。その行為は自分に忠実でありたいと願う自己陶醉者の特徴で

もあつた。

二人は接触を重ねる度、お互いが見せ合う自然な素振りに込められているだろう意図を激しく探り合っていた。電話口では心理を読む事に神経を使い、食事では物腰を確認し続け、酒では素性を見抜こうとしていた。

涼介はまゆみと接触する時間が累積するにつれ、まゆみの一挙手一投足に対し、言葉にする程重要ではないが、やり過ぎすには奥歯に物が挟まった様な微妙な不快を感じていた。

まゆみが涼介に放つ恋愛観は、女性として譲れないプライドをちらつかせる事から始まっていた。涼介はメールでの会話ではそんな気配すら漂わせていなかったまゆみの言動に、電車の吊り革に掴まっている女性のコートを飾るファーの毛先が、座っている自分の鼻先で優雅に揺れている様な、悪気のない分許してしまわざるを得ない鬱陶しさを感じていた。

涼介はまゆみの事を、捨て切れない香りを持つ、プレゼントされた趣味の少し違う香水の様だと感じていた。そしてその香水を使う為には、自分が培って来たセンスを少なからず無視する必要があると思っていた。

涼介は何時の頃からか、過去、出会い系サイトで知り合った女性達と同じ様にセックスを最終的な判断材料とすべく、まゆみに対する振る舞い方を変える決断をしていた。しかしまゆみはそんな涼介の思惑を見抜いているかの様に、セックスの持つ意味を涼介に対する言動の端々に鏤めていた。

まゆみにとってセックスは、相手に対するあらゆる要求をストリートに伝える事が解禁される行為であり、結婚という現実に二人が迷わず突き進む事を誓う行為だった。

涼介はセックスに因ってまゆみとの間に予期せぬ化学反応が起こ

り、深く結び付き、まゆみという人格に対する妥協の数が減る事を願っていた。

涼介が自身の体中に発した、二人の付き合いに結論を出すのはセックスの後でも遅くはないという伝令は、まゆみに対しても機能し始めていた。そしてそんな涼介の明確な目標は、研ぎ澄とまされた話術や包容力となってまゆみの心を的確に惹き付けていた。

まゆみは涼介の誠実さと強引さが同居するエスコートや意表を突くアプローチに、過去に経験のない新鮮さやときめきを感じ、心を開いても大丈夫だと確信出来る迄の判断の手順に、例外を加えるべきかどうか戸惑っていた。

まゆみは、涼介が放つ魅力という不可解な快感に心を揺らしていた。

まゆみは穏やかで滑らかな、そして時折その言動を理解する事に困難な“涼介”という概念の圧力に、自身の持つ理想の輪郭りんかくや将来に対する思いを上手く伝えられていると錯覚さうかくさせられていた。そしてそれ以上に“涼介”という一男性を、二度と出会えない紳士だと錯覚させられていた。

まゆみと涼介が持っている情熱の色は同じだった。しかしその質は、混じり合う事のない水と油の様だった。

(.....)

涼介はベッドの上で上半身を起こした。

「最低だな。」

思わず声を出してしまった涼介は、“はっ”としてまゆみを見た。まゆみは眠っていた。

「ほんと最低だよな.....」

涼介はまゆみの穏やかな寝顔を見つめながら、まゆみの耳に届かない微かな声でそう呟いた後、ベッドからそっと抜け出し、ラブホ

テルに入る前にセブンイレブンで買って置いたブラックの缶コーヒ  
ーを冷蔵庫から取り出し、冷蔵庫の上でビニール袋に入ったままに  
なっていたセブンスターを抜き出し、ソファーに投げ出されてあっ  
たバスタオルを裸の下半身に巻いた。

(・・・・・・・・)

涼介はブラケットの僅かな明かりを頼りに、煙草に火を付けた。

センターテーブルの上に置かれたまゆみの腕時計の針は午前3時  
25分を指そうとしていた。

(・・・・・・・・)

涼介は煙草を燻くゆらせながら視線を一度まゆみに向け、ベッドとは  
違う方向に歩き始めた。

まゆみは姿勢を変える事無く眠っていた。その事實は、まゆみの  
張しやうっていた予防線がセックスを最後の判断材料にしようという、陰  
湿しつで冷酷な涼介の計算に切り刻まれた事を意味していた。

## 6・・・理想の嘆き

(・・・)

涼介はドレスルームの中に居た。

涼介にとってセックスは、自身の系譜けいふを創る本能の様な、温かい家庭を作る為だけに営まれる無味無臭で独善的な作業の様な、次世代に繋つなげたい野望の為に組み込まれたスケジュールの様な行為ではないという美意識があつた。

(・・・悦よろこんで貰もらえる様な、悦よろこばせたくなる様な、お互いそんな裸でありたいし、時折嘘や演技をして欲しいし、奮ふるい立つ様なたまらない表情や動きも欲しいし、大胆になれる会話も大切だし・・・ずっと愛せる、馴なれ合いになんない様な努力をしてみたくなる・・・しようと思える・・・意表を突いたりとか・・・波長の合った・・・陶醉とか満足をお互いが差し出せる・・・はあっ・・・)

涼介は鏡に映る自分の姿に愛想が尽きた様な溜息ためいきを吐き、思いを心に落とす事を止めた。

「・・・愛あいなんだよな・・・」

涼介は俯うつむき、自分に一言そう吐いた。

涼介は何時か必ず同じ理想を持つ女性と出逢えると思っていた。そしてその女性が持つ情熱を守りたいと強く思っていた。しかしそれが愚ぐにもつかない詭弁きへんではないかとも思っていた。

(愛あいってなんなんだろう・・・)

涼介はカランのレバーをゆっくり押し、静かに落ちる水で煙草の火を消した。

(・・・欲しい時に無いのは何時も愛と灰皿だよ。)

涼介は消した煙草を見つめ、想い描く理想と現実をシニカルに言葉で掛け合わた。

(……………)

涼介は一気に缶コーヒーを飲み干した。そして空になった缶の中に濡れた吸殻を入れ、寝付けない顔に張り付いた疲れを取る為に顔を洗った。

(愛があれば温かい家庭と最高のセックスが約束されるんだろうな……………)

涼介は顔を洗いながら心でそう呟いた後、壁に取り付けられたステンレスのバーに掛かる、ラブホテル独特のリネンの匂いがするフエイスタオルに手を伸ばした。

「……………大袈裟なんだよ。」

涼介は鏡に映り続ける自分にそう吐き捨てた。そして顔を拭きながら心の汚れも拭き取りたいと思っていた。

ベッドに戻った涼介を露出したまゆみの柔らかい背中が迎えていた。

まゆみは寝返りを打っていた。

(……………)

涼介は腰の辺り迄ずり落ちていたシーツをまゆみの肩までそっと引き上げた。

(……………エッチの相性ってあるよな……………)

涼介はベッドの傍に立ったまま、まゆみの寝姿を見つめていた。そしてセックスの相性という、一人の女性と今後の人生を共に構築して行く上で、世間では上位に位置付けられるとは思えない不謹慎な項目で、まゆみとの関係を否定する理由を脳の右から左へ伝達していた。

(もう駄目なんだろうな……………)

体をベッドに横たえた涼介は、ぼんやりと天井を見つめていた。

(・・・昇天ないのは辛いな・・・)

涼介はまゆみとの結論を、心を軋ませながら客観していた。

(俺の恋愛って何なんだろう・・・)

涼介は体を振り、ベッドに潜り込む前にコントロールパネルの横に置いたセブンスターに右手を伸ばし、箱から抜き出した煙草を持つたまま、また仰向けに戻った。

涼介という人格には、未だ情熱や理想や、理性や協調がバランス良く共存していなかった。その事実が結論としてそうせざるを得ないという、守るべき穏やかな生活を意識的に形作り、与えられた環境や掴み取った家庭を保全しようとする懸念になる事が現実を生き抜く為のささやかな知恵であり、その為に支払った犠牲に執着しない事も知恵であり、それが人間に与えられた生存本能の一つである事を涼介が理解出来ていない事を意味していた。

涼介はこの人と生涯一緒に居るべきだという、五感と六番目の感覚に響く決定打を放ってくれる女性を欲しがっていた。無条件に恋し、愛し、叱り、許し、何時までも新鮮な気持ちで居られる女性を欲しがっていた。ある意味それも人間が持つ本能の一つだった。しかし涼介は恋愛を重ねる度、その思いには無理があるのではないかと薄々感じてもいた。しかしそれでも涼介は、自身が持つ、女性に対する正直で純粋な欲求を自ら否定する事の虚しさを嫌った。取り巻く状況や計画や打算に則り、自分を偽り、第三者の意見に耳を貸し、好きになろうと努力して、心を後から追いかせる様な、そんな情熱を経由しない恋愛では、守らなければならない愛を守るべき愛に変わり、そしてその時に誓うだろう愛を生涯貫く信念に、何時か必ず揺らぎが生じると頑なに思い込んでいる為だった。

(・・・未だ見ぬ女性が理想なんだよ・・・)

涼介は再びベッドの上で上半身を起こし、そう嘆いた。

(美的感覚や知性が・・・。スマートで尊敬出来る、美しくてキレイのある女性に憧れてんだろうな、多分・・・畜生・・・)

涼介には望む愛を妥協無く勝ち取りたいという願望があった。し

かしその願望に因って現実から逃避し続けている、スティックでもクリエイティブでもない、性質たちの悪いインディビジュアリストそのものになっていて自分を哀れんだ。

(・・・何でこんな風になっちまったんだろうな・・・)

涼介はそう考えながらコントロールパネルに左手を伸ばし、エアコンを切った。

眠れない涼介にとって部屋の空気は冷たく、乾き過ぎていた。

(・・・ぬるいな・・・)

涼介は隣で眠るまゆみが寝苦しくなまって目を覚ますかもしれない事を無視し、過去の恋愛を振り返えろうとしている自分の為に環境を整えた事を嘆いた。

(勘弁かんべんしてくんないんだな・・・マキ・・・)

涼介は更に、自分の理想だった女性にも嘆きを入れた。

(恋は厚あつがましくなきや出来ないし、しかし本当の恋は厚がましいやつには出来ないんだよな・・・ふうっ・・・手に負えないガキと一緒だな、まったく、マキ以来・・・)

涼介はそう考えながらベッドに横たわった。そしてまゆみに背を向ける形でシーツに包まり、枕に深く頭を埋めた。

「マキか・・・」

涼介は溜息ためいきを吐く様に一人の女性の名前を口にした。

マキという女性は、涼介が嘆く理想の原点だった。そして涼介は心に刻まれているマキという原点を、今でも愛していた。

(・・・)

涼介はマキとの想い出を手繰り寄せ始めていた。

エアコンの切れた部屋には更なる静寂せいじやくが訪れていた。

涼介が吸おうと箱から取り出していた煙草は、長さを変えないまま灰皿の横に転がっていた。

(・・・何時だ?・・・)

涼介は眩しさを嫌う様に寝返りを打った。

涼介は完全に閉まっていなかったカーテンの隙間から入り込む長方形の強い日差しで起こされていた。マイナスイオンから程遠いと思われる空気の動かない部屋の中で、涼介の頭から膝あたり迄だけに太陽の光が降り注いでいた。

涼介には眠った実感が無かった。ずっと自身の恋愛を考えていた様な感覚が頭に残り、疲労感が体を支配していた。

(……………)

涼介は時間を確認しようとして右腕を上げたが、そのまま右腕をコントールパネルの所まで伸ばし、置いてある筈の腕時計を探った。

(8時か……………)

涼介は長方形の日差しが当たらない位置まで体をずらし、灰皿の横に転がっていた煙草に火を付けた。

(昨日は何時ぐらいに寝たんだろう……………)

体を仰向けに戻した涼介が気だるく吐き出した煙は、部屋に入り込む光のラインの部分だけ鮮明に漂っていた。涼介はその煙の形をぼんやり見ながら、昨夜呑み込まれ掛けた想い出の続きを手繰り寄せ様としていた。

(マキか……………)

涼介は新しい恋愛の始まりや終わりに、心を必ずノックする女性の名前を心で呟いた。

ベッドの上に象られた長方形の日差しは強さを少し増していた。

煙草の煙は、より鮮明に浮き上がっていた。

涼介はマキの事を鮮明に思い出していた。

「おはよ。」

煙草の先に長く伸びた灰を灰皿に落とそうと体を捻った時、その声を涼介は肩越しに聞いた。

「……………おはよう。」

まゆみの声に不意を打たれ、一瞬にして現実を引き戻された涼介は、出来るだけゆっくり振り向いて朝の挨拶を返したが、その言葉

も顔も硬い事に気付いていた。

涼介はまゆみの存在を忘れていた事に動揺していた。

「・・・早いよね。」

まゆみは照れくさそうに、恥じらいと充実が同居している柔らかな瞳でそう言った後、シーツを引っ張り上げながら体を涼介の方に初々しく近づけた。

涼介にはまゆみのその行為が、存在を否定されまいとする心の叫びの様に見えていた。

「・・・まあね。でも、また寝ると思う。」

涼介はまだ動揺していた。

「そうなの？」

まゆみの返事に深い意味はなかった。全てをさらけ出した後のさり気ない自然な反応だった。

「・・・だね。」

涼介はまゆみを深く見つめるしかなかった。

「・・・もう。」

まゆみは恥ずかしさと寝起きの顔を隠す様にシーツを更に引き上げた。

(・・・参ったな・・・)

涼介は煙草を消し、深い息を一つ吐いた。

まゆみにとっては、涼介に全てを投げ出して迎えた初めての朝だった。涼介にとっては、まゆみに対する“けじめ”をぞんざいに出来ない事実を突き付けられた朝となっていた。

## 7・・・最初のデート

“ トウルルルルル・・・ トウルルルルル・・・ ”

涼介は待ち合わせ場所に向かうタクシーの中でまゆみに電話を掛けた。

「・・・もしもし・・・お疲れ・・・ごめんな・・・もう少しで着くから・・・了解・・・それじゃ。」

涼介は8時の待ち合わせに30分程遅れそうだった。

“ ピッ。 ”

まゆみは電話を切った後、直ぐ目の前に迫った涼介との最初のデートに、心臓の鼓動を体中に響き渡らせていた。

(・・・)

まゆみはテイラウンジのソファから立ち上がった。

グランドハイアット福岡のロビーは、まゆみが期待していた静けさと落ち着きを裏切る程の人で溢れ、ざわついていた。

まゆみと涼介の最初のデートは9月6日、土曜日の夜だった。

二人はセンスを試す様な、想像力を駆使させる様なメール交換を続けながらお互いを探りあい、写真を交換し、声を確かめ、想像力を落ち着かせ、リラックスし、会いたい気持ちとスケジュールを一致させる迄に2週間近く掛けていた。

(・・・)

まゆみはグランドハイアット福岡のアトリウムで自分の居場所を

探しながら涼介を待っていた。

キャナルシティを構成するグラントハイアット福岡を待ち合わせ場所に指定したのはまゆみだった。

（あのままティラウンジに居れば良かったな・・・。）

5分先の行動を決められないまゆみは、緊張と不安と、ある種不思議な孤独を感じながら行き交う男性をさり気なく見てしまっていた。

まゆみは待ち合わせ時間の10分前に、グラントハイアットに向かうタクシーの中で涼介からのメールを受信していた。しかし容赦なく迫り来る涼介との初対面に緊張で神経を高ぶらせていたまゆみは、そのメールをデートのキャンセルだと思い込み、開く事を躊躇っていた。

覚悟を決めたまゆみがタクシーを降りる前に開いたメールには、“30分ぐらい遅れるから”という、遅刻を連絡する文字が刻まれてあった。

落胆に支配されつつあったまゆみの心は、再び心地良い緊張感に包まれると共に、自身の独り善がりよを苦笑いで片付けられる程落着きを取り戻していた。そしてその落ち着きは、涼介が現れる時間が来る迄の間、ティラウンジのソファでアイステイという、ずっと憧れていた“待ち方”を選ばせていた。

まゆみはティラウンジを優しく囲むグラントハイアットの気品が好きだった。何時の頃からか、何時か必ず最愛の彼氏との待ち合わせ場所に使いたいと思っていた。

ティラウンジからは三階まで吹き抜けている巨大なガラスの壁越しに、色彩鮮やかな甘いカクテルを解き放ち続けている様なキャナルの噴水が見えていた。まゆみはその噴水を緩やかな曲線を描き込んだカラフルな壁で包み込んでいる、情緒を刺激するオペラの劇場

の様な巨大な空間が好きだった。そしてその傍に架かる洗練された石橋からグラウンドハイアットへ渡り来る最愛の彼氏を、穏やかに見つめ続けながら待っている時の充実感を味わってみたいと願っていた。

“ ガタガタガタ …… ガタガタガタ …… ”

まゆみは心に宿る幸福の形に浸っていた。実らせた恋の輪郭が見えて来た時にだけ享受出来る至福の時間だった。しかしそんなまゆみのささやかな満足感に突然幕を引く様に、まゆみがテーブルの上に置いてあった携帯電話は、最小にしていた着信音の意味が無い程ガラス面を弾く音を強く響かせて遠慮なく震え始め、まゆみを一気に現実に引き戻していた。

反射的に携帯電話をテーブルから拾い上げたまゆみは、画面を確認した後、暫く手の中で振動をそのままにしてしまっていた。

メールではない涼介の予期せぬ一撃は、まゆみの膝の上で震え続け、まゆみの体を硬直させるには十分な威力があった。

気持ちを整理出来ないまま携帯電話の震えを止めたまゆみは、恋愛に心の準備や思惑は通用しない事を痛感していた。

まゆみは目の前の物が何も見えなくなる様な緊張に襲われていた。そして涼介と会話を交すまゆみの声は当然の様に震えていた。

まゆみは涼介との待ち合わせを取り巻く30分位の間に、何度も感情を乱高下させていた。その原因は全てまゆみの揺れる恋心にあった。

まゆみは大切な用事を思い出した人の様に、慌てて席を立っていた。テーブルの上に残されたアイステイはその量を殆ど変えず、グラスに汗をかいていた。

「どうも。」

涼介はドライバーにそう答えて、ビジネスセンタービルに店舗を

構える福岡シティ銀行の前でタクシーを降りた。  
まゆみに“遅れるから”というメールを送信して40分が過ぎていた。

涼介がその日仕事を切り上げる事が出来たのは7時30分を回った頃だった。社内に残っている同僚に退社の挨拶をし、何時もなら会社が借り切っている七階フロアから地下一階の駐車場迄向かうエレベーターを一階で降りていた。

涼介がテナントビルのエントランスを出た時に見た腕時計は7時45分を指していた。

涼介は落ち着いていた。まゆみへ送信する、待ち合わせに遅れる旨のメールを作りながら、取引先に商談にでも行く様な雰囲気歩いて5分の距離にある小倉駅へと向かっていた。

在来線の改札を通り過ぎ、小倉駅北口にある新幹線の自動券売機に向き合う迄に涼介はメールを送信していた。その文面には、慣れた足取りで立ち止まる事無く淡々と改札を抜け様とする涼介同様の、感情の起伏などなかった。

涼介は小倉⇨博多間を繋ぐ新幹線がいねんの概念が好きだった。時刻表を気にしなくてもいい発着本数や、その距離を20分で繋ぐ利便性だけでなく、その20分間という絶妙な間合いの中にある、独特な静けさが与えてくれる孤独や孤高が好きだった。

涼介は博多駅からグラウンドハイアットへ向かうタクシーの中で無造作そつぷにまゆみに電話をしていた。

涼介は何分後かにまゆみと初対面するという現実を前にしても緊張感に包まれる事は無かった。まゆみの顔はメールで送信されて来ていた。会話もしていた。何よりも“出会い系サイト”での出会いに慣れている事実が大きく作用していた。しかしその慣れは恋愛に対する冒涇ぼうじやくなのではないかと、心の何処かに居るもう一人の涼介か

らの問い掛けを生む事にもなっていた。

涼介には答えが出せなかった。しかし涼介はこの2週間、曲りな  
りにも恋をしていた。

タクシーを降りた涼介は福岡シティ銀行の脇からキャナルシティ  
のメインアプローチを抜け、人で溢れてあふいるクリスタルキャニオン  
やスターバックスを横目で見ながら、緩やかな曲線で構成された通  
路を歩いていった。

通路にもカラフルな色を放つ噴水を眺める人が溢れていた。

(・・・・・・・・)

涼介はグラウンドハイアットへと繋がる石橋の前で歩く速度を緩め  
た。

石橋の上も人で溢れていた。ガラスの向こうに映るペストリーブ  
ティックやバーも人で溢れていた。

(・・・・・・・・)

涼介は銀色に重く鈍くにぶく光り構えるグラウンドハイアットの重厚なド  
アを視界に据えたまま、予期せぬ賑やかなキャナルシティに気持ち  
を重く鈍く光らせながら石橋に足を乗せ様としていた。

涼介は雑多や混雑に身を置く事が苦手だった。

(・・・・土曜の夜のキャナルに来る事はもう無いな・・・・)

涼介はまゆみとの最初のデートのドアを開ける前に、心の中でそ  
う呟いた。

(・・・・・・・・)

涼介は音も無く閉まるうとしていいる重厚なドアを背に立ち止まり、  
洗練された空間を眺めていた。

アトリウムの空気は乾いていた。

(・・・・・・・・)

涼介はゆつくりと歩き始めた。

ティラウンジでは落ち着いた物腰の人達が思い思いの時間を過ごしていた。

エレベーターの前では若いカップルが談笑していた。

フロントに掛けられた時計は8時35分を指していた。

(.....)

涼介はアトリウムの中央でシンボリックに聳える大理石の柱の10M程手前で立ち止まった。

涼介の視界には、思い思いの場所へ歩く人達が映り込んでいた。

しかし涼介の視線は、大理石の柱を背にして俯くまゆみうつむを捉えていた。

(.....)

涼介は初めて捉えたまゆみの全体像を受け入れていた。そしてまゆみと交した2週間分の会話が無駄では無かった事に満足しながら、二人の間にある距離をゆつくりと縮め始めた。

「どっも。」

「!!!.....」

まゆみは突然体を貫いた声に驚いて振り向いた。

「.....」

まゆみは息が届く距離に写真のままの涼介が居る事に膝ひざを震わせていた。

「今晚は。」

涼介は言葉の出て来ないまゆみに笑顔でそう挨拶を続けた。

「.....涼介さん！」

まゆみは涼介を瞳に大写しにしたまま、思わず叫んだ。

「.....初めまして。」

涼介は笑顔のままそう言った。

「.....涼介さん.....」

まゆみは緊張に因って叫んでしまった事を取り消そうとするかの様に、もう一度涼介の名前を口にした。

「ごめん、遅れたね。」

涼介はまゆみを驚かせた事を察し、爽やかな声で少し戯けた表情を作った。

「……………」

まゆみは近過ぎる涼介との距離に、痛む胸も視線も普通に戻せないまま涼介を見つめ続け、挨拶をする事すら出来ないでいた。

「ごめんな。」

涼介はもう一度謝った。しかし今度は真摯な態度で心を届けた。

「……………」

まゆみは涼介の視線から逃れる様に少し俯いた。

「…………初めまして。」

涼介は俯いたまゆみを茶目つ気たつぷりに覗き見上げ、再び戯けた感じでそう言った。

「…………初めまして……………」

まゆみは涼介の仕草に、やっと笑顔で答えた。

「どうも。」

涼介は穏やかな笑顔を見せていた。

「…………来ないかと…………思っちゃった……………」

まゆみの表情には柔らかさが戻っていた。

「来るさ。」

「……………」

まゆみは涼介を見つめていた。

「お腹空いてる、よね？」

「…………うん。」

二人は初めて会った場所で暫く語り合った後、肩を並べてアトリウムを歩き始めていた。

「何処に行く？」

「じゃあ・・・私に任せて・・・くれる？」

涼介が見せる気遣いや気さくな振る舞いは、まゆみに普段通りに喋る勇気を与えていた。

「了解。」

涼介はまゆみに対する期待に、顔を綻ばせていた。

「ありがとう。」

まゆみは照れながら顔を綻ばせていた。

まゆみは涼介の第一印象が幾ら良くても、最初のデートで見せる涼介の一挙手一投足を注意深く観察しようとして心に決めていた。しかしその動機は、涼介との恋愛を受け入れる事を出発点とした、結果に因って結論を変える事のない、ある意味不謹慎な優越感に浸りたいと願う心に端を発していた。

涼介は曲りなりにも恋をしていたまゆみとの2週間と、今、目の前に居る“まゆみ”という女性を重ね合わせていた。

「美味しいよね、ここの料理。」

まゆみは目の前に居る涼介が期待を裏切る人ではないと思いついでいた。

「そうだね。」

涼介の心はときめきを欲しがっていた。まゆみが持つ得体の知れない創造的な何か、自身の五感から心に伝達される事実を欲しがっていた。

「此処、よく使うの？」

「ううん、一度だけ来た事があるの。」

まゆみは心で育てていた幸せのイメージ通り、“アロマーズ”に涼介を誘い、キャナルから吹き上がる噴水に手が届きそうな席で、店内に背を向けていた。

「そう。」

「・・・ね、ワインは何時も白なの？」

「そうだね・・・嫌いだった？」

「うづん、そうじゃないけど・・・お肉いっぱい頼んじゃったから。」  
「なるほど。」

「・・・ね、涼介さんは博多によく来るの?」

「涼介“さん”は止めようよ。」

「そう?・・・でも・・・。」

「初対面じゃないんだし。」

「えっ?・・・。」

「そんな感じだって事さ。」

涼介はそう言って笑顔を投げた。

「ん」と、・・・じゃあ・・・涼介。」

まゆみはそう呼べる事の嬉しさを顔に滲ませていた。

「・・・。」

涼介は笑顔を作っていた。

「・・・あつ、そうそう、さっきの質問。答え聞いてないっ!」

「ん? 何だったっけ・・・僕があなたの事好きかって事?」

「えっ?もう!・・・。」

「好きだよ。」

「・・・もう・・・。」

天井が高く開放感のある店内に心地良く流れている気品や、センスが薫<sup>かお</sup>る料理は二人の会話に明るいうリズムを与えていた。

「ごめんごめん、よく来るよ、博多にも支店があるからね。でも此処のレストランは来た事無かったなあ、キャナルには取引先があるからグラントハイアット結構使うんだけどね。」

「そうなんだ・・・。」

まゆみは笑顔だった。

「他にも沢山いい店知ってそうだね。」

「そんな事ないよ・・・。」

まゆみは微笑を心から湧き出しながら明るく否定した。

「・・・。」

涼介はまゆみを見つめていた。

「・・・？」

まゆみは涼介が見つめる理由を目で問い掛けた。

「髪、綺麗だよね。」

「えっ、本当！？・・・ありがと・・・。」

まゆみは滲ませ続けている微笑の上に嬉しさを溢していた。

まゆみは涼介をクールな自信家だと思っていた。メールや電話で話す涼介に、会話の切り出し方も物事の考え方もある種嫌いで否定したい部分を感じていた。しかしまゆみは、今夜涼介が見せている人懐っこい一面や聡明な立ち居振る舞いに、心の隅にずっと忍ばせ続けるつもりでいた涼介への猜疑心を、好奇心に変えようとしていた。

涼介はまゆみに悟られないギリギリの所で気を使っていた。時に大胆に、時に謙虚に、そしてたまに自分の出来の悪い部分を晒す事で、まゆみに付け入る隙を与えていた。

涼介は明らかに二人の空間を演出していた。それは涼介が描く今後の展開に必要な作業でもあった。

「出ようか。」

「うん。」

まゆみの涼介に対する恋心は、過去の男性との比較に因って具体的になるうとしていた。涼介もまゆみを生涯忘れられないだろう女性と比較していた。

「ご馳走様でした。」

アトリウムで待っていたまゆみは、レストランから出て来た涼介に丁寧にお礼を言った。

「美味しかったね。」

涼介はまゆみに対するお礼を、そう表現した。

「うん。」

まゆみの笑顔に曇りはなかった。そしてその笑顔は、ほんの2時

間前、涼介に見せていた笑顔とは明らかに違っていた。

グランドハイアットを出た二人は、キャナルの噴水が連なるスターコートを見ながらゆっくりと歩いていた。

まゆみは涼介を左肩に感じながら、並んで歩いて欲しいと思っていた。

涼介はまゆみの少しだけ後ろを歩きながら、さり気なくまゆみを観察していた。

まゆみのナチュラルカールは、その毛先にフェミニリティを漂わせ、白いカットソーの首元に光るシルバーのネックレスを包み込む様に揺らしていた。指輪は無かった。左腕にはエレガントなドレスウォッチが光り、ストレッチパンツとスクエア・トウのパンプスは黒く、バッグはPRADAだった。

(・・・絶対負けないのにな・・・)

まゆみはキャナルを彩る噴水や、中庭で身を寄せ合うカップル達に触発された様に心の中でそう呟き、涼介に寄り添った。

まゆみは涼介と腕を組んで、もっとゆっくり歩きたいと思っていた。そうすれば中庭の主演を勝ち取れると直感していた。

「キスしようか。」

「えっ!!!」

涼介の不意を打つ言葉にまゆみは慌てた。

「キスしようよ。」

涼介は歩きながら、まゆみの方を見る事無くもう一度誘った。

「・・・こんな・・・所で?・・・」

まゆみは複雑な心で、歩き続けている涼介の背中にそう言った。

「そうだよ。」

涼介は振り向いてまゆみの歩を止めた。

「だって・・・」

まゆみは食事中から涼介とのキスを想い描いていた。しかしまゆみの台本では、キャナルシティの中庭は涼介に凭れ掛かり、優越感

に浸りながら綺麗に立ち去る場所だった。

「だって・・・何？」

涼介の優しい声は少し意地悪だった。

「えっ・・・だって・・・、此処で？」

まゆみは涼介を深く見つめた。

まゆみは拒否している訳ではなかった。出会ったその日に交わすかもしれない甘いキスは当然想定していた。しかし涼介を見つめるまゆみの瞳は、今夜二度も不意を打った涼介に対するささやかな抵抗と、この状況だからこそ涼介の心を驚掴わしづかみにしてしまえる筈はずの、可愛い仕草や素敵な言葉を探し出せない自身の未熟さに落胆する心の内を覗のぞかせていた。

「じゃ、止めとこう。」

涼介はそう言っつて、まゆみから視線を離れた。

「・・・」

まゆみは涼介を見つめ続けていた。

噴水を照らす甘い照明と、グランドハイアットの客室に灯る優しい光が、まゆみの瞳に艶つやを与えていた。

（えっ！！）

まゆみは一瞬の出来事に慌あわてた。

まゆみは揺れる心を涼介に伝える前に唇を攫さらわれていた。

涼介は心地良い香りが通り過ぎる様な優しいキスをまゆみに贈っていた。

（えっ！！・・・）

まゆみは再び慌てた。

“止めとこう”と言った直後、当たり前の様に唇を重ねていた涼介は、まゆみに瞳を閉じ忘れさせる程の速さで再びまゆみの唇を奪っていた

深く、長いキスだった。

まゆみは羞恥心を忘れ、観念し、“揺れ”を止められた心と溶けてしまいそうな体を涼介の意思に預けていた。そしてまゆみは自身

の戸惑いや抵抗が涼介に取っては違う次元の物なのだと、絡み合う唇から悟らされている事を感じ取っていた。

周りの目を気にしない涼介のキスは、まゆみの願い以上に二人を中庭の主役にしていた。

(.....)

まゆみは胸の鼓動が痛いと感じていた。そして乱れた呼吸を元に戻す為に、歩きながら大きな息を夜空に向かって吐き出した。

頭上には、二人に覆い被さる様な建物の僅かな隙間から月が見えていた。

中庭に佇む人達は、まゆみと涼介に好奇の目を向けていた。

まゆみは涼介に絡まり、隠れる様に歩きたいと思っていた。

涼介はまゆみが手を伸ばしても届かない位置に背中を置いていた。

まゆみは普通に歩き続ける涼介の背中に追い付く事も、喋り掛ける事も出来ないまま、少し顔を赤らめて涼介の後を追っていた。

「博多駅までお願いします。」

キャナルシティを出た涼介の歩き方や行動には迷いが無かった。

そしてその淡々とした行動の答えは、乗り込んだタクシーの中で、ドライバーに告げる形としてまゆみに伝わる事となっていた。

「.....最終、間に合うよね？」

キス以来、まゆみが涼介に語り掛けた最初の言葉は、甘い余韻に浸れる会話を望んでいた自身の心とは裏腹の、涼介の“博多駅”という言葉に反応してしまった問い掛けだった。

「全然大丈夫だよ。」

涼介は左を向き、笑顔を投げた。

(何であんな事言っただらう.....)

まゆみには涼介の瞳が、甘え方を知らない不甲斐無い自分を責めている様に見える。

(何か喋んなきゃ.....)

まゆみは涼介の落ち着いた雰囲気あせに焦あせっていた。

「・・・あの・・・（えっ！！）・・・」

涼介は、“場”の空気を変え様と喋り始めたまゆみの唇を静かに塞ふさいだ。

まゆみの心は、キャナルシティの中庭で交したキスの時とは違った意味で複雑に揺れていた。

まゆみはタクシーの中でキスをされながら、今夜は涼介にもっと会話をして欲しかったと思っていた。涼介の優しい笑顔や他愛ほかつよの無い話をもっと欲しかったと思っていた。しかしまゆみは思いの外ほかつよ長く長い涼介のキスに因って段段と思考能力を奪われていた。そして涼介に対する自分の“ちっぽけ”な望みなど、もうどうでも構わ無いと思ってしまう程体温を上げていた。

まゆみは熱く火照ほてる体から、自身が望む恋の形にこだわる事の無意味さを知らされていた。そしてまゆみの体は自意識とは掛け離れた部分で涼介のキスに熱く答えていた。

「・・・長過ぎたかい？」

「・・・ばか・・・」

まゆみは艶つややかな瞳で涼介を見つめ、誰にも聞き取れない様な声でそう言った。

タクシーの中のキスで、涼介は今夜まゆみに三度不意みたびを打っていた。その事實は、涼介という男性を深く知る迄まゆみが心の中に張り巡らせて置きたかった最後の防護壁を、着実に解かし始めていた。

（・・・・・・・・）

まゆみは博多駅がもう少し遠くにあって欲しいと思っていた。そしてまゆみは熱く火照ほてった心と体を元に戻せないまま、タクシーの中で涼介が創る沈黙に従っていた。

まゆみは、足を組んでシートに深く凭もたれて街を眺めている涼介を“ずるい”と思っていた。同時にまゆみは、心を掻き乱し続ける涼介から放って置かれる事に快感を探し始めていた。

「……………」

まゆみは我慢し切れず、涼介の横顔を見つめた。

まゆみの瞳には涼介の横顔が上品に映っていた。無理をして演出している風でも、玩もてあそんでいる風にも、まゆみの瞳には映っていないかった。サーモンピンクのシャツの首元をラフに開き、外したネクタイをスーツの胸ポケットに無造作むずずに突っ込んでいる気障きざな姿は、逆にまゆみの心に強烈な独占欲を湧かせていた。

まゆみは今日のデートで見つけて来た涼介の一挙手一投足をスタイリッシュという前向きなイメージで括くろうとしていた。それは一気に恋に落ちてもいいとする心が導き出した、ある意味二人の今後に覚悟を決めた結論でもあった。

「今日は有難う。」

涼介はまゆみに対する感謝の言葉で沈黙を解いた。

フロントガラスの先に博多駅が見えていた。

まゆみは穏やかな涼介の声に、切なさで体を締め付けられていた。

「こちらこそ……………」

まゆみの声は消え入りそうだった。

「本当は自宅近くまで送りたいかったんだけど……………」

「ううん、いいの……………」最終間に合うの？」

「大丈夫だよ。」

「新幹線？」

「そうだよ……………」唐人町とんじんちょうだったっけ？」

「うん。」

「運転手さん、この後唐人町ま……………」

「ううん、いいの、私も此処で降りる。」

まゆみは涼介の言葉を遮かきとった。

「……………」

涼介はそれ以上何も喋ろうとはしなかった。

「じゃね……………」気を付けて帰んなよ。」

「涼介も気を付けて帰ってね。」

二人の最初のデートが新幹線の改札の前で終わろうとしていた。

涼介は11時21分の終電5分前に改札を抜け、歩きながら振り向き、まゆみに軽く手を上げた。

笑顔で手を振り返えすまゆみの胸には、張り裂けそうな程涼介が溢<sup>あふ</sup>れていた。

まゆみは背を向けた涼介を目で追っていた。

涼介は階段を昇ろうとしていた。

まゆみは小さくなる涼介の背中をずっと目で追っていた。

離れていく二人の距離に漂う空気は紛れも無く恋人同士の重さを含んでいた。



(・・・これでいいのかよ・・・いや、これでいいんだよ・・・)  
涼介は圧力で軋む窓の外で緩やかに流れる町の灯りに焦点を合わせられないでいた。

(ときめいた、か・・・)

涼介はメール画面に目を落とした。そして送信ボタンを押し、携帯電話の電源を切った。

「相変わらずぬるいな。」

涼介は自身の行動を自虐的な客観で振り返り、切り捨てた。それは美化され続ける珠玉だった日々を思い出す為のルーティンの様にもなっていた。そして小倉駅に着く迄の20分間という、絶妙な間合いと独特な静けさが与えてくれる孤独の中で、涼介はまた何時もの様に“マキ”という理想の原点を振り返ろうとしていた。

梅雨明けを知らせ様とする雷雨が、バブル景気の香りが残る元町を激しく叩き付けていた。

1991年、横浜に夏が来ようとしていた。

「お疲れさん！」

「お疲れです。」

「おっ、今昼飯か？」

「はい、今日ラスト迄なんです。」

勢い良く休憩室に入って来た店長は、食事中の涼介に二、三言葉を投げて窓の方へ歩いて行った。

外は滝の様な雨が降っていた。遠くで雷が砕ける音も聞こえていた。

4月、レストラン事業を全国展開している食品会社に大学新卒で入社していた涼介は、関内にある本社の企画開発部に配属され、その年の6月1日から現場での接客サービスのノウハウ、関連業者との取引形態、パートやアルバイトのシフト調整や商品管理システムを研修する為に、元町にある直営レストランで勤務していた。

涼介が研修に出向いたレストランは、雰囲気の良い、美味しいイタリア料理を提供する店として人気があった。石川町や元町商店街で働く人達や地元の人からも、ランチやディナーを気軽に堪能出来る店として愛されていた。

「すげえ雨だな。」

店長は二階にある休憩室の窓から裏通りを見ながら涼介に言った。

「そうですね。」

涼介は箸を止めて返事をした。

「もう仕事には慣れたか？」

「はい、大丈夫です。」

涼介は元町店で1ヶ月半を過ごしていた。

「そうか。」

店長は外を見たまま満足そうに頷いていた。

「佐久間、明日バイトが三人入るから、よろしくな。」

店長は自分のデスクに戻りながら、落ち着いた声で涼介にそう言った。

「色々教えてやってくれ、それが佐久間の為にもなるから。」

椅子に深く腰を下ろした店長は、そう付け加えた。

「はい、分かりました。」

「頼むぞ。」

店長は涼介に期待していた。

「はい。」

何時もなら夕日が差し込んでいる筈の窓の外は夜の様に暗く、街

路樹は強風で乱舞していた。

涼介は残りの賄いまかなを黙々と胃の中に掻き込んでいた。雷のフラッシュが時折音もなく窓を明るくしていた。

(やべえやべえ。)

取引先との電話対応で朝礼に少し遅れた涼介は、昨日の店長の言葉を思い出しながら、小走りで列の一番後ろに付こうとしていた。朝礼は店長の何時もの訓示くんじが終わり、フロアスタッフのアルバイト募集で採用された三人の女性の簡単な自己紹介が始まっていた。

(マジかよ……。)

採用されたスタッフが全員女性だとは思っていなかった涼介は、列の一番後ろで彼女達をチラッと見た後、そう心の中で呟いた。

(やり難にくいよなあ……。)

涼介は顔を俯うつむきがちにさせながら、彼女達が働き易やすい様にサポートして行くにはどうしたらいいかを考え始めていた。

“じゃ、どうぞ。”

(……。)

涼介は顔を上げた。それは店長が最後に残った女性に挨拶うながを促す声だったが、涼介はその声が自分に向けられたかの様に反応し、その女性に視線を向けた。

“山崎マキです。宜しくお願いします。”

(……。)

涼介はマキの顔をじつと見つめていた。

“……はい、始めてですけど、早く仕事を覚えて……”

(……。)

涼介は店長と二、三言葉を交わしているマキから視線を外せなかった。

涼介は雷に打たれていた。一人の女性が放つ、全てを焦こがす雷の様な強い力に体を縛しばられ、胸を射抜いぬかれ、呼吸を止められていた。

(……。)

涼介はマキを強烈に見つめ続け、その瞳はマキの姿を全身に取り込み続けていた。

涼介は一瞬にして恋に落ちていた。  
想像を遙かに越えた一目惚れだった。

(.....)

涼介は瞬きを忘れ、挨拶を終えたマキを見つめ続けていた。

山崎マキは山手に在るフェリス女学院大学の二年生だった。19歳の半ばを迎えた、細身で、少し日焼けした肌に艶やかなショート黒髪と奥二重の大きな瞳が印象的な女性だった。

マキはスケジュールの空いた時間を上手く利用して働いていた。ランチタイムの時だけでもあれば、ティータイムからラスト迄働く事もあった。

マキに仕事を教える涼介は充実を感じていた。

マキは仕事を教わる涼介に対して屈託がなかった。

涼介はマキの全てが好きだった。呑み込みの早いクレバーな仕事振りも、媚を売らないスマートな言葉も、仲間同士で交わすエッチな話題にもセンス良く付き合うバランス感覚も、時折見せる茶目っ気や、たまに誰にも融合しないクールな思考も、自信と不安が混在する主語のない会話も、そしてそんなマキのベースとなつている大らかさに、涼介は魅力を感じ、舞い上がり、心を揺さぶられ続けていた。

涼介はマキと出逢つて、恋愛に求める理想という不確定要素の多い概念を初めて具体的に認識していた。

マキは予感していた。

二人が出逢つた朝、マキは涼介の純粹で力強い視線を心にしっか

りと感じていた。マキはそんな涼介の視線に込められた思いを、何時か必ず全身で受け止める事になると予感していた。

マキも涼介に一目惚れをしていた。マキが自身の心に結論付けていた“予感”という感覚は、言葉も交した事のない男性を恋する事に躊躇う心が、自身に対して最大限譲歩して導き出した言い訳に過ぎなかった。

引き付け合う二人の恋心は、取り巻く全ての人に対する優しさや思い遣りという前向きな感情となって発散されていた。一つの出逢いに因って引き出された健全な精神は、理屈や定義ではない、人間として誰もが持っている“愛”という概念の本質を二人に見つめさせる機会を与えていた。そしてその愛は、お互いを見つめ合う“恋”という激しい感情と融合し始めていた。

マキと涼介は、そうなる事が当然の様に8月の頭には恋人同士となっていた。

二人は、人生の中で二度は無い様な相思相愛という、誰もが一度は描き求める理想の下で、尽きる事のない愛情を注ぎ合おうとしていた。

「……終つちまうなんて……」

涼介は新幹線の中で、過去の恋愛を今更ながら嘆いた。

涼介の心の中で封印され続けているマキとの想い出は、樽の中で熟成されるワインの様に、長い年月をかけて極上の風味を付けていた。そしてそのワインは、昔、最も愛した恋人を思い出す時に感じる切ない色ではなく、今でも愛しい人を想う時に感じる哀しい色を付けていた。

（付き合っただ直ぐだったんだよなあ、車無かったし、買っつもりだ

よってマキに言ったら、ヤツ、セリカが好きだつて言うもんだから結局セリカになっちまってさ、参ったなあ、あの時は……。

……そうだよ、八月に下田まで泊まりに行つたんだよ、そのセリカで……。プライベートビーチの雰囲気良くてさあ、ビーチパラソルの中でマキがサンオイル塗つてて、黒のビキニがたまわなくて、寝たふりしながらチラチラ見てたんだけど、ヤツは俺が寝てるつて勘違いしててさあ、そつと俺のサングラス外してキスしやがったんだよ……。束ねた髪、色つぼかったなあ……。あれ以来だよ、マキの着替えとか小物が俺ん家に増えて来たのは……。石川町の駅裏にある炭焼き屋にもよく行つたなあ……。ヤツのバイトがラスト迄の時は必ず行つてたもん。仕事中、廻りの皆にバシない様にサイン送つてさ……。擦れ違ふ時なんか“タワーレコードで待ってるねっ”つてヤツが耳元で囁いてさ……。

ベイブリッジの上でキスした事もあつたなあ……。十月だったかなあ……。思い切つて車停めて、橋の上に降りて夜景見たんだよなあ……。

そうそう、会社の飲み会でよく冷やかされてたんだよ……。“お前達付き合つてんのかよっ！どうよ山崎！そうなの？なあ、佐久間、言つちやえよ、俺、山崎の好きなんだからさあ”とか酔つた先輩に言われちゃつて、一緒に居た皆からも集中攻撃されたんだよな……。飲まされてたもんなあ、調理場の人達なんか“彼氏いんの？いないの？やつぱは佐久間なの？”とかしつこく突つ込まれちゃつて、冷々しながら見てたもん……。あの時は俺も会話に入つて行けなくてさ、ただ飲むばかりで、しかしよく耐えてたよ、ヤツ……。……そう、その後だったんだよ、トイレに行った筈のマキが戻つて来ないもんだから心配になつちやつて覗きに行つたら、通路の横に隠れてやがつてさ、ガバツつて抱き付いて来て、“来てくれると思つた”だもん……。まったく意地らしくて可愛くて、抱きしめて思わずキスしちゃつたもんなあ……。

風に戸惑う 弱気な僕  
通りすぎる あの日の幻影  
本当は見た目以上  
涙もろい過去がある

止めど流れる 清か水よ  
消せど燃ゆる 魔性の火よ  
あんなに好きな女性に  
出逢う夏は二度とない

Southern all stars  
“TSUNAMI” by

涼介は本牧一丁目にワンルームを借りていた。マキは根岸が実家だった。

仕事先のレストランがある元町と二人の家は一本の道路で繋がっていた。

涼介にとってマキとの恋愛は、ロケーションまでも人生の中で二度は無い様な珠玉へんぎゆうだった。

(.....)

涼介は流れ去る町の明かりに、珠玉の過去を顧みかえり続けていた。

(.....そう言えば最初のクリスマス、あいつ、俺の部屋ですつと待っていてくれたんだよなあ.....。残業終って、店から持って帰ったケーキとシャンパンを“ただいまっ”って渡して、“どっか行く？”って聞いたたら、“何処どこにも行かないっ”って笑って、“ねえ、座って”って、俺をソファに代わりにテレビ見始めちゃってさ.....。

あの時の月も忘れらんないなあ.....正月休みだったかなあ、寒い夜だったんだよなあ.....俺ん家からビデオショップ迄歩いて行

つてさ……。ヤツは俺の左腕を抱え込む様にぴったりくっついててさ……。綺麗な月が出てたんだよ、“寒いね”とか言い合いながらさ……。まったくほんと、昨日の様だよ……。

中華街で二人だけのお疲れさん会もよくやったなあ。あの時はチャーミングセールが終った次の週だったんだよ、俺が思いっきり酔っちゃって、ゲームセンターでUFOキャッチャー意地になっちゃって、だってマキがビーサンの片方一発で取っちゃうもんだからさ……。 “いねえな、何処行ったんだ？”ってキョロキョロしてたら、ヤツは道路の向かい側にあったベンチに座ってて、アイス食いながらビーサン履いた足を振ってた……。まったく小癩こしかくだったけど、可愛かったなあ……。

座席に深く凭もたれ、頬杖ほおづえを付いている涼介の顔は穏やかだった。

（……。俺が四月に本社へ戻った時、ヤツ、何だか悲しがつてたんだよなあ……。 “本社って言うても関内かんないなんだからそんな顔すんなよ”とか、“このまま一緒に職場に居るよりは健康的じゃん”とか言ってた……。俺ん家だったなあ、あの時……。）

人は誰も愛求めて闇に彷徨う運命

そして風まかせ oh , my destiny 涙枯れるまで

見つめ合うと素直にお喋り出来ない

津波のような侘しさに I know… 怯えてる , Hoo…

めぐり逢えた瞬間から魔法が解けない

鏡のような夢の中で

想い出はいつの日も雨

Southern all stars “ TSUNAMI ” by

( 12月27日なんだよなあ、マキの誕生日……。最初の誕生日

は俺ん家だったし、だから二度目は最高のクリスマスと誕生日にしようって約束してたんだけど、小っちゃな事で揉めてさ、何だか二十三日の夜に俺とどっかの女性が関内のBARで飲んでたって、美由紀に見られちゃってたんだよな……。“何でそんなBARで二人なの！”って、あんなに機嫌の悪いマキを見たのは初めてだったな……最高のイヴにしようってしてた日にだもん……馬車道のレストランで、ディナー用のローソクがテーブルの上で燃えて、もう直ぐアペリティフが来るって時だったんだよ……。“同僚の相談に乗ってただけだよ！”って言ってるのに全然信じて貰えなくてさ……。“帰る！”とか言い出しちゃって、こつちもマジになっちゃって料理そっちのけで一から詳しく説明してさ……ヤバかったよなあ、あの時……。その後山下町にあるヤツのお気に入りのBARに連れてかされてさ……。言わされたんだよ、“愛してるって”。“ごめんなさい”って……。“私はもつと愛してんだから”って。おまけに“今日は酔うからね”って。何だか怒った様な、してやったりの様な、そんな顔してたなあ。今思えばヤツの計算通りだったのかなあ……。

涼介の胸は想い出に据えられ、締め付けられていた。

（クリスマスの次の日に二人でプレゼント買いに行ったんだっただ……。“まーだ買ってなかったの！”とか言いながら嬉しそうでさ……。“まーだ買ってなかったよ、ヤツの傘小っちゃくて、“俺、雨嫌いなんだよ”って言ったたら、“私は雨もリヨウも好きよ”って、まったく普通の顔しやがったままでさ……。しかしあの時はヤツの方が一枚上手だったんだよ……。ポールスミススのピーコートだよ……。紺がいいって……懐かしいなあ……前から欲しがってたやつだったんだよなあ……。ほんとヤツの方が上手でさ……。店から出て来ないんだよ……。“どうしたんだろう”って戻ったら、左手で俺の袖口掴んで右手をハンガーに伸ばして、“これ、着て”だもん……。“ねっ”ってさ……。嬉しそうに俺の手を引っ張ってレジまで持って行っっちゃったもんね、あいつ……。“私、ステん

カラー好きなの。リヨウ、似合うよ”ってさ……。

……最初のクリスマスの時もヤツが意表を突く様にペアリング  
買って来てたしな……。

時計を右腕にする様になったのもヤツなんだよな……。下田の  
帰りに“やっぱ右だよな”って、ヤツが右腕に付け替えたのがきつ  
かけだし……。その時初めてヤツも右腕に時計してんの気付いて  
さ……。まったく……。)

愛が終わり 目醒める時

深い闇に 夜明けが来る

本当は見た目以上

打たれ強い僕がいる

泣き出しそうな空眺めて波に漂うカモメ

きつと世は情け oh , sweet memory 旅立ち

を胸に

人は涙見せずに大人になれない

ガラスのような恋だとは I know : 気付いてる , H

o o …

見も心も愛しい女性しか見えない

張り裂けそうな胸の奥で

悲しみに耐えるのは何故？

Southern all stars “ TSUNAMI ” by

(ザ・ヨコで祝ったマキの誕生日、最高だったなあ……。内緒に  
してたんだよ、前の日に誕生日は俺ん家でいいねって言ったら、ち

よつとムスツとしちゃってさ……。喜んでたなあ……。窓の外はランドマークから大棧橋から真下は山下公園だし、氷川丸もベイブリッジもキラキラ光ってて、マリンタワーまでさ、何だか新鮮に見えたもの……。ルームサービスでシヤンパン頼んでさ……。でもケーキ忘れちゃってたんだよな……。しょーがねえなあみたいな感じで買いに行ったなあ、二人でコンビニまで、ピース売りのやつ……。ローソクもワンパック買ってさ……。ケーキにヤツがローソク一本ずつ立てて、“大好きなりヨウと迎える二度目の誕生日っ！”とか言っちゃてさあ……。酔っぱらって、明るくなって、素直になって……。無邪気でさ……。忘れらんないよ、まったく……。

見つめ合うと素直にお喋り出来ない

津波のような侘しさに I know... 怯えてる、Hoo...  
めぐり逢えた瞬間から死ぬまで好きと言って

鏡のような夢の中で

微笑をくれたのは誰？

好きなのに泣いたのは何故？

思い出はいつの日も... 雨

Southern all stars  
“ TSUNAMI ” by

(ふう・・・)

マキの事を思い出し続けながら新幹線を降りた涼介は、出そうになる溜息ためいきを我慢し、柔らかく息を外に逃がした。

深夜だというのに、ホームには残暑を物語る生ぬるい夏の風が渡っていた。

涼介の周りには、足早に歩く人が溢あふれていた。

(何であんな風になっちまったんだろう・・・結婚するのが当たり前で、安心してたのかな・・・)

涼介は会社のあるテナントビルの通用口から階段で地下に降りながら、そんな事を考えていた。

(・・・マキが一番大切だって気持ち、伝えてるつもりでいい気になっちゃってたんだろうな・・・)

地下駐車場に繋がる鉄の重い扉を開けた涼介は、車のキーを取り出そうとしていた。

(・・・確かにマキの事・・・深く考えずに遊んじゃってたし・・・)

涼介はハザードランプを点滅させた。

「・・・ぬるかっとな。」

車に乗り込む前に、涼介はそう自分に投げた。

(・・・)

涼介は自分の恋愛の行き着く先を照らそうとする様に、ヘッドライトを点けた。

深夜の地下駐車場にエンジンのアイドリング音が響いていた。

(しかしマキに対する気持ちはぬるくなかったぞ・・・)

涼介はハンドルを握ったまま、マキとの事を考え続けていた。

“ドン”・・・

ハンドルを叩いた音が一度、鈍く車内に響いた。

(・・・何を今更そんな自己弁護してんだよ・・・)

涼介は深い溜息の後、そう自分に吐き捨てた。

(・・・何処に行きたいんだよ・・・)

駐車場出入り口のシャッターを開き、車を路上に放り出す前に、涼介は更にそう自分に吐き捨てた。

涼介は何時か何処かでマキと必ず再会出来ると信じていた。故に

涼介は自分に割り振られた恋愛の現実を見据えて前に進むより、過去を振り返り続ける事の方が重要だと信じていた。しかしマキとの距離は、マキを思い出す度に確実に遠くなっていた。

(・・・本当にまた会えると思ってるのかよ・・・会ってどうすんだよ・・・でも会わなきゃ駄目なんだよ・・・)

涼介は虚無感と戦っていた。そしてその虚無感はマキへの想いを打ち負かそうとしていた。しかし涼介は、更に強く自分に忠実であり続け様ともしていた。

(.....)

涼介は車を走らせながらコンソールボックス辺りを弄り、サザンオールスターズのCDを探した。

涼介の心の中には、新幹線に乗り込んだ時からずっと、サザンオールスターズの曲が流れ続けていた。

(...運命・宿命...。辛いもんだな...。)

涼介は考えていた。世の中を牛耳る無常の現象と、人間の意思を超越した力を持つ運命や宿命という、考え方一つでその後の人生を善悪どちらにでも曖昧に誤魔化せてしまう命題を考えていた。

モノレールの高架を抱え上げる様に真っ直ぐ延びている大通りは、昼間の渋滞が嘘の様に涼介の運転する車を走らせていた。

涼介はマキの幻影を追い求める様にアクセルを踏み続けていた。

ザ・ホテル横浜でマキの21歳の誕生日を祝った次の年、社会人3年目を迎えていた涼介は、新たに培われた人脈の下、所属する企画開発部の飲み会や他の部の会合、同僚や取引先の女性社員がセツティングする合コンに誘われるまま全て参加する日々が続いていた。

仕事や環境に対する慣れが生んだ涼介の心の余裕は、時間を都合する手順を覚えていた。しかしその事實は、同時にマキに対して幾許かの不誠実があっても対処や説得が出来るという、不埒な余裕までも心に同居させる事となっていた。

マキは涼介に寛大だった。

涼介は二人の關係に危機的状況など無いと“たか”を括り、大好

きなマキに甘えていた。

マキは涼介との幸せな結末を常に想い描いていた。

涼介はマキとの間に幸せな結末が来る事を当たり前だと捉えていた。

生活を自分中心に回していた涼介は、就職活動という理由で、マキがアルバイトを7月に辞めていた事に暫く気付かないまま元町店に出入りしていた。

マキはレストランで涼介と同じ時間を共有出来ない事実の重さに耐えられなくなっていた。

涼介はマキの強がりを見抜けないでいた。そして二人の時間を後回しにしていた。しかしマキは涼介に明るく振舞う事を怠る事は無く、責める事も無かった。

夏を迎え様としていた。

マキは不安と期待と、時間を持って夏を待っていた。

マキは夏が好きだった。

二人の恋は夏に始まっていた。

マキは夏が二人の局面を変えてくれると信じていた。悲しい事など想像出来なかった、出逢った年の8月に戻れると信じていた。

涼介のマキに対する慢心は、10月に多摩プラーザにオープンするレストランの開店準備で多忙だという理由だけで、マキとの時間を等閑にさせていた。

マキは涼介の夏の休暇を待っていた。

涼介の夏は仕事が優先されていた。

マキは同じ時間軸を持つ異性或大学の友人達に、大学生活最後の夏を満喫しようと数多く誘われていた。

マキは持てた。マキを取り巻く異性の中には、涼介の存在を知りながら積極的にアプローチして来る者も居た。

マキの涼介に対する想いは揺れていた。そして不安を隠す為の明るさを目立たせながら、気丈に耐えていた。

マキは空白のままのカレンダーを携えたまま、涼介を振り払う事

が正解なのかもしれないと考え始めていた。しかしマキは結局、涼介との予定が決まらない夏のカレンダーに、涼介以外の予定を落とす事は無かった。

マキとつては暑くて長い夏、二人の間には電話越しの会話が増えていた。電話口の涼介は淡々と然も当たり前前の様に仕事に追われる日常を口にしていった。マキは“愛してる”という素直な心情を言葉にする事が出来ないまま、涼介からの“愛してる”を待っていた。

マキは涼介の部屋へ行きたい気持ちを行動に移せない日々を送っていた。

涼介は一日の終わりに5分だけでもマキが部屋に居て欲しいと、自分勝手な願望だけを日々膨らませ続けていた。

夏が終わる頃、マキは夜中に一度だけ衝動的に涼介の部屋へ言った事があった。涼介は留守だった。途方に暮れたマキは自宅に戻って涼介からの電話を待つよりも、涼介の部屋で涼介自身を待つ事を選んでいった。されどマキのその選択は、一人頼杖を付いて涼介の好きな歌を何度も口ずさみながら、涼介を待ち続ける夜を過ごす結果となっていた。

秋が来ていた。

10月、マキがカレンダーに記入した“涼介”の名前は二度だけだった。

二人は出逢った頃のように“好きだ”という気持ちを上手く伝えられず些細な喧嘩を繰り返していた。そしてその喧嘩には、恋愛を成就させる為の弊害と成り得る“慣れ”が生まれていた。

“慣れ”はその場を上手く切り抜ける要領を二人に与えていた。しかしその代わりに“思いやりという愛情”を妥協する気持ちも二人に与えていた。

涼介は二人の現状を楽観していた。

マキは二人が築き続けて来た恋愛そのものに疑問符を付け様とする弱気な心に苦しんでいた。

「・・・あいつ、今どんな生活してんのかなあ・・・。」  
涼介は運転しながら呟いた。

(子供いんのかなあ・・・あいつの事だからバリバリ仕事してんだ  
ろうなあ・・・はあっ・・・。)

涼介は視線を遠くに置いたまま、溜息を一つ吐いた。

「もう10年なのに・・・やべえなあ・・・。」

涼介は脱力感に襲われていた。

(・・・あの広告代理店にまだいんのかなあ・・・。)

涼介はそれでも“あの日”に戻ろうとしていた。

二人の恋愛は、三度目のクリスマスを迎える前に終止符が打たれていた。

夏が過ぎた辺りから涼介が誘う二人のデートは何時も喧嘩の後だった。

11月の半ば、二人で過ごす時間や愛情を淡々と流そうとする涼介の態度にはつきりと文句を言ったマキに、涼介は何時もなら見せない様な投げ遣りで醜い悪態を吐いていた。

涼介にとってマキの言い分は凶星だった。涼介の直観的で受動的な態度を、マキは理性という真偽を識別するナイフで整然と抉り取っていた。それはある意味、マキの涼介に対する心からの愛情だった。そしてその愛情は、涼介にマキへの想いを見失ってしまった事を後悔させるには十分な威力があった。

涼介は醜い姿を見せた事に対する罪悪感を日々募らせていた。

マキは涼介に言い様の無い切なさを感じ始めていた。

11月の終り、涼介は反省している気持ちを伝える為にマキを仲

直りの食事に誘っていた。しかしそれにも拘らず涼介は、マキが望む二人の時間に悉く首を横に振っていた。

12月を迎えていた。

仕事の都合に因ってマキとのデートを何度も何度も押し流していた涼介は、その都度電話でマキに謝っていた。しかし涼介と出来るだけ長く一緒に居たいとするマキの心は、電話を通して聞こえる涼介の自戒や反省の言葉の端々に、自分を中心として行動を組み立てている感情を透かしていた。

結局、二人の仲直りの日は12月二回目の日曜日迄ずれ込む事となっていた。それは涼介にとつて遅く、マキには遠過ぎた。

涼介は少しだけ不安な気持ちを抱えていた。しかし涼介の心の中に燻る傲れる感情は危機感に無頓着だった。

涼介は夏以来続いている二人の感情の食違いを、恋愛中、必ず何度が訪れる筈の倦怠期の様な物だと捉えていた。だとしたら二人の関係は何れ元に戻って、更に絆が強まる筈だと考えを結んでいた。

涼介は自身の中にある粗雑な感情を、時間の流れのせいにしていった。そしてその流れに、柔軟で謙虚な気持ちを保てない、鼻持ちならない自信という舵の無い船を浮かばせ、マキを乗せていた。

マキは涼介に流されまいと思っていた。

12月12日の夜だった。

「寒いなあ。」

本牧の裏通り、涼介はマキのお気に入りのお店まで歩きながら呟いた。

待ち合わせ場所は涼介の自宅から程近い“司”だった。

涼介はマキと出逢う前から“司”に通っていた。マキはそんな涼介に連れられ、初めて“司”に来た時、一瞬にして“司”を好きになっっていた。

「雪でも降んじゃねえか?・・・」

涼介はブルゾンのポケットに両手をつっ込んだまま四つ角を右に

曲がり、月を探した。

涼介は50M程の、車一台がやっと通れる筋に入っていた。その筋の中央辺りに、一箇所だけ明るく光る場所があった。

「まさか満席って事は無いよな……。」

そう呟いた涼介の耳に、筋の先に在る本牧通りを走る車の乾いたエンジン音が届いていた。

「こんばんは！」

涼介は暖簾のれんをくぐり、檜ひのきの引き戸を開け、カウンターに背を向けていた板さんに声を掛けた。

「はい、いらつしやい！・・おうっ！いらつしやい！久し振りだねえ！」

声の主が涼介だと分かった板さんは嬉しそうにそう言った。

「今日は一人かい？」

板さんは涼介に向かって続け様にそう聞いた。

二人は常連になっていた。週に何度も通っていた頃もあった。

「いえ、後で来ます。」

「そうかい、じゃあ奥だね、・・はい二名さん座敷っ、ビール持っ  
てって！」

板さんの声は軽やかに店内に響いた。

「……。」

涼介は変わらない板さんの元気な声に会釈して座敷に向かった。

「うめえー！！」

座敷でマキを待つ時は何時もそうだった様に、涼介は一人で先にビールを流し込んだ。

「うめえよ。」

涼介はビールを一段と美味しく感じていた。そして半年近く前には同じ場所で頻繁ひんぱんに感じていた幸せを思い出していた。

「さて、と。」

涼介はメニューを広げた。

「はい、いらっしやい！久し振りだねえ！奥に居るよっ！」

涼介の耳に、板さんの声が届いて来た。

(……………)

涼介はメニューを見ながら顔を緩ませていた。

「お待たせーっ！」

「おう、お疲れ！」

涼介は存在感たっぷりに目の中に飛び込んで来たマキを綺麗だと感じていた。

「待った!？」

「いや、俺も今来たばかりだよ。」

マキの笑顔は涼介の心を根こそぎ出逢った頃に引き戻していた。

「そう。」

座敷上がったマキは、マフラーを解きながら笑顔を弾けさせていた。

「何飲む？」

涼介は聞いた。

「……相変わらず、やるじゃんって感じだねっ。」

マキはコートを脱ぎ、嬉しそうに涼介を見つめながら素直な気持ちの口にした。

「何言ってるんだよ……何にすんの？」

「もう生頼んで来ちゃった。」

マキの笑顔には屈託くつたくが無かった。

涼介は3週間振りに見るマキの姿にときめいていた。目の前には初めて逢った日を思い出させるマキが居た。そして涼介は、ときめきの中に存在する得体の知れない“何か”から、忘れ掛けていたものを思い出す様に命じられていた。

マキは涼介を見た時、涼介を愛している事を改めて気付かされていた。しかしマキは、涼介にとって最良の女性は自分ではないので

はないかと思う気持ちを振り払えずにいた。それは涼介を信じる気持ちは何度も打ち負かされ、涼介を愛し続けて行く自信を完全に取り戻せない心が、これ以上深い傷を負うまいとする防衛本能を働かせているせいだった。

「・・・広告代理店に就職が内定したんだってな、美由紀から聞いたよ、おめでとう。」

「ありがとう。」

マキは嬉しそうに照れた。

「お待たせっ！」

生ビールを持った板さんが座敷に上がろうとしていた。

「マキちゃん、ちよつと見ない間に一段と綺麗になつたねえ。」

「えーっ、そんなあ・・・」

「いやいや綺麗だよ・・・」

板さんはマキにそう言った後、涼介の方を向いた。

「あなた、マキちゃん大切にしなきゃ罰当たるよっ・・・羨ましいねえ、まったく・・・じゃ、ごゆっくり！」

板さんは機嫌が良さそうだった。座敷を出る前に二人に見せた笑顔がそれを物語っていた。

「板さんがビール持って来るなんて、初めてじゃねえーか？」

「そうだったっけ？」

二人は顔を見合わせた。

「・・・マキの事が好きなんだよ。」

涼介はそう言って自分のグラスにビールを注ごうとした。

「あら、嬉しっ・・・私って、やるじゃん。」

マキはおどけた。

「ああ、ほんとにやる・・・」

マキは涼介が喋り終わらない先に、グラスに注がれたビールを横取りして飲み始めた。

「おいおい、生来てんじゃん。」

「美味しーっ！」

「・・・まったく。」

涼介は困った笑顔でマキを受け入れていた。

「注文決まったら呼びなっ！」

姿の見えないカウンターから板さんの声が聞こえて来た。

「はいっ」

マキは答えた。

「・・・じゃ、乾杯だね。」

マキはそう言っつて涼介のグラスにビールを注ぎ始めた。

「・・・」

涼介は優しい瞳でマキを見つめていた。

「よしっ。」

マキは両手で持っていたビールをテーブルに置き、ジョッキを右手に持った。

「じゃ、乾杯・・・」

「ねねっ、もうだいたいぶ飲んじゃってる？」

マキは涼介の言葉を遮り、ジョッキを差し出す前に身を乗り出した。

「・・・いや、これで二杯目だよ。」

「そっか、いい感じだねっ。」

「いい感じだねって、な・・・」

「乾杯っ！」

マキは涼介のグラスを鳴らした。

「まったくお前つてヤツは・・・」

涼介は笑っていた。

「・・・」

生ビールを飲みながら、マキの瞳は涼介に微笑み掛けていた。

「美味しいっ！」

「な、美味いだろ？俺と居ると。」

「うん。」

マキは笑った。

「あれ？・・・素直じゃんか。」  
「でしょ！」

マキは久し振りを見る涼介の笑顔に、涼介の全てに困<sup>よ</sup>って何物にも代えられない時間を貰<sup>もら</sup>っていた事を思い出していた。

「久し振りだね、ここに来るの。」  
「そうだよな、来てなかったもんな。」

涼介はマキの作るリズムに心地良く包まれていた。

「・・・久し振りだね。」  
差し向かっている涼介に、マキはもう一度、今度は少し真面目な声でそう言った。

「ん？」

「・・・私達。」

「・・・そう？」

涼介はマキの問いに対して、過去はそれ程重要ではないという意思表示をした。

「逢いたかった？」

マキは無邪気にまた身を乗り出し、涼介に顔を近づけて悪戯<sup>いたずら</sup>っぽい目使いでそう聞いた。

「もちろんさ。」

「・・・逢いたかった？」

マキは楽しそうに意地悪くもう一度聞いた。

「決まってるじゃない！」

涼介は茶目<sup>ちやめ</sup>つ気を見せるマキをきつく抱きしめて、“ありっただけ”の愛情を何度も何度も伝えたい衝動に駆<sup>か</sup>られていた。

「お待ちどうさまでした。」  
身を乗り出していたマキは仲居さんの声に反応し、体を元に戻した。

「うわあ、美味しそう！」

運ばれて来た料理はマキの大好きな物だった。

「ありがと、食べたかったんだあ、キンキの煮付けと掻き揚げ。」

「だろ！・・・だと思って先に注文しといたんだよ。」

二人は三週間分の想いを素直に晒さらしていた。そして夏以来、二人の心に積み重なったままの嫌な思い出を、一つずつ笑い飛ばしていた。

マキはずつと笑顔だった。

涼介はマキの笑顔に愛しさを感じていた。そして出逢った日からずっと、マキの笑顔が強い自分を作る原動力になっていた事を思い出していた。

涼介は直感していた。今、マキに“愛してる”と、言葉で心を伝えるべきだと直感していた。しかし同時に涼介は、その直感を静観出来る程、二人の間に充実した時間が流れている事実を客観していた。

マキは待っていた。マキは自身の心を覆おほう暗雲を吹き払う、涼介の力強い言葉を待っていた。大好きな人から貰いたい、最高の響きを持つ、愛し続ける自信を取り戻せる、一生大切にしたい言葉を待っていた。

マキはずつと笑顔だった。涼介にはマキのその笑顔が、二人の恋愛に憂うれいなど無く、深い絆が解ける訳がないと思ひ込ませる程美しく映っていた。

「ははっ、何だよそれ。」

「いいじゃん、そんな事もあんのっ！」

二人の間には他愛の無い会話が続いていた。

マキは笑顔のままだった。

涼介はマキの笑顔に、マキへの想いを形にする事を躊躇ためらい始めていた。

涼介は今夜マキに、半年近く続いた二人のぎくしゃくした関係を反省するつもりだった。そしてもう一度、この場所から新たに始まらないかと言うつもりだった。しかし涼介は何の憂うれいも無い様なマキ

の生き生きとした素振りに、会話を止めて迄マキを愛している事を真面目に伝えるよりも、このまま喋り続ける事が正解なのかもしれないと感じ始めていた。そしてそんな涼介の心に巢食う、はじめに対する横着な感情は、マキの気持ちを察する努力や、二人の未来の為に自身が決心して来た事を心の隅に葬ろうとしていた。

二人の間には会話が続けていた。

マキは相変わらず、ずっと笑顔のままだった。

涼介はマキが見せる仕草に神経を研ぎ澄ます事を止めていた。そして自身が持つ手前勝手な自信を再び揺り起こし、マキとの大切な時間をこのまま押し流そうとしていた。

ぬるい姿だった。

涼介はマキへ贈るべき永遠の愛を心で握っていた。しかしその思いを紐解かず、表現する事にもがこうとせぜず、意を決する事に目を背け、愛情に無二の価値を付ける情熱を注ぎ惜しんでいた。

マキは涼介に力強く心を鷲掴んで欲しいと思っていた。求める前に奪って欲しいと願っていた。

涼介は考えていた。そして涼介は、今夜マキに実行出来ない優しさや思いやりの代償が、計り知れない物ではないという結論を出そうとしていた。

(・・・まあ、いいか・・・)

涼介は心底愛する、守るべきマキに伝える大切な一言を封印し、生涯で最後かもしれない崇高な直感という感覚を心の隅に葬った。

マキの瞳には涼介の楽しそうな姿が映っていた。

マキは、愛する涼介ならば必ず会話の何処かで涼介らしい愛情表現を見せてくれると信じていた。それ故にマキは涼介のどんな些細な愛情表現でも、不変という付加価値を付け、それを至福の瞬間として、全身で素直に受け止める為の感情のピークをずっと維持していた。しかし涼介はマキの機嫌を伺う様な取り留めの無い話で時間を潰し、マキが望んでいない愛想を振り撒き続けていた。

マキの瞳には涼介の楽しそうな姿が映り続けていた。

マキは涼介の笑顔に、最良の女性はあなたでは無いという結論を突き付けられているのではないかと思ひ始めていた。そしてその思いは、マキの全身に失望という、心から取り出す予定の無かった感情を徐々に伝達していた。

マキの瞳には涼介の喋り続ける姿が映っていた。

(・・・リヨウ・・・)

マキは空しい結末に耐える為の勇氣に火を点け様としていた。

マキは冷静になってはいけない場面で情熱の灯を消していた。そして断腸の思いで失望をナイフに変え、涼介への愛を永遠に誓う筈だった感情をゆっくりと削り始めていた。

マキはずっと笑顔だった。しかしマキの心には宴の後の様な、誰に慰められても微動だにしない物哀しさが溢れ出していた。

「ほんと美味しいね、此処の料理。」

「だよな。・・・熱燗頼む？」

「・・・うん。」

「やっぱり日本酒だよな。」

涼介はマキにそう言った後、隣の座卓を片付けに来ていた仲居さんに声を掛けた。

「んーと、それじゃ・・・」

涼介はメニューを見ながら仲居さんに注文を始めた。

「ふう・・・。」

マキは涼介に気付かれない様に天井に向かって息を一つ吐いた。

「・・・はい、それをお願いします。」

涼介は仲居さんにそう言ってメニューを閉じ、グラスに残っていたビールを飲もうとしていた。

マキは涼介を見つめていた。

二人の間には、会話の休憩の様な時間が流れていた。

涼介にとっては何でもない、極普通の穏やかな沈黙だった。

マキにとっては、もう後へは引けない沈黙だった。

「・・・此処に來ると何時も食べ過ぎちゃうんだ。」

「分かるよ、それ・・・てかさ、俺達にピッタリの様ないか？此処・・・落ち着くしさ・・・。・・・そうそう、今年のクリスマススなん・・・」

「別れたい？」

「ん！？・・・今何ってった？」

「・・・別れたい？」

「おいおい、何だよ突然。」

涼介は面食らっていた。

「別れたい？」

「・・・どうしたんだよ急に・・・酔ってんのか？」

「・・・酔ってないよ・・・。」

マキは首を横に振りながら涼介に優しい笑顔を向けた。

「・・・あのさ、別れたい訳ないじゃない。」

涼介はマキの突然の問い掛けに、何をどう処理すればいいのか困惑していた。

「・・・。」

マキは黙っていた。

「・・・。」

涼介は喋る言葉が出て来なかった。

「・・・別れよっか。」

マキは自分が作った沈黙に責任を持つ為に、思いを言葉にした。

「お待たせしました。」

座敷の入り口で仲居さんの声が聞こえた。

「・・・あのさあ、マキ、本気で言ってるの？」

「お酒来たよ。」

マキは笑顔で会話を止めた。

「・・・。」

涼介はマキを見つめていた。

「・・・。」

マキは熱爛を座卓の上に置いて去ろうとする仲居さんに会釈をした。

「……はい。」

マキは涼介に徳利を差し出した。

「……マキ、冗談だよな？」

「……冗談なんかじゃないよ。」

マキは座卓に置かれたままになっていいる涼介のお猪口に日本酒を注ぎながら、柔らかい顔でそう答えた。

「……ねえ、何で突然そんな事いうの？・・訳分かんねえし・・てか、何か俺の事試してんのか？」

涼介は少し語気を強めてそう言った。

「……。」

マキは涼介を正面で見つめていた。

「……。」

涼介はマキの視線から逃げる様に煙草に手を伸ばした。

「……終りにするなら、今だよね。」

「今だよねって、なあ、マキ、おかしいぞ、お前……。」

涼介の目は訴えていた。

「そうかなあ……。」

「そうだよ。」

涼介の声に力が入った。

「……それだけ？……。」

マキは、二人の恋愛を終わりにしたくないという思いを瞳に込めて涼介を見つめていた。

「それだけって？」

「……それだけ……なんだ……。」

「……ああ……それだけだよ。」

「……。」

マキは肩から息を逃がした。

「……。」

涼介は俯き加減で煙草の煙を一つ吐いた。

「・・・じゃあ・・・別れよ。」

「じゃあ別れよってさあ・・・本当に本気で言ってるのか？」  
混乱で舞い上がった涼介の心は埃のように漫然と体の中を漂い、  
自身を落着かせる事に精一杯だった。当然、マキの瞳の中にある  
切なる想いを洞察する事など不可能だった。

「・・・本気だよ。」

マキは笑顔に乘ろうとする哀しさをぎりぎりの所で押さえた。

「・・・どうしちゃったんだよ、お前・・・。」

「・・・。。。」

マキは涼介のその問い掛けには答えず、座ったままマフラーを巻き始めた。

「・・・勘弁してくれよ・・・。」

涼介はマキへの愛情を言葉にする事が出来ないでいた。

「・・・なあ、マキ・・・。」

涼介は今夜が二人の未来を決める大切な夜だと直感しておきながら、一度心の隅に葬った“愛してる”の言葉を蘇生させて取り出す事が出来なかった。

涼介は唯、マキを目で追っていた。

マキはコートを着終わろうとしていた。

「・・・。。。」

涼介は煙草の火を消した。

「・・・。。。」

マキは席を立つ前に涼介を深く見つめながら、言葉で愛を伝えて欲しいと心で縋った。

「・・・。。。」

涼介は黙って俯いたまま、また煙草に火を点け様としていた。

「・・・。。。」

マキは涼介の無言に、滲みそうになる涙を耐えていた。

二人はほんの少しだけ意地を張っていた。マキは来年から始まる

未知の環境に飛び込む前に、今夜涼介に二人の間に何ヶ月も続いた嫌な流れを断ち切つて欲しいと願っていた。涼介は今夜、幸せを育む為に乗り越えなければならなかった最大の壁を傍観してしまっていた。マキはごく僅かだけ結論を急ぎ、涼介はごく僅かだけ素直になる事が出来なかった。

涼介は煙草を燻らせていた。

マキは耐えていた。

二人は些細な自己主張で、愛という名のもとに同じ方向を見つめ合い続け、無二の人生を二人で構築して行く為の転機を遣り過ぎるうとしていた。

「……………」

涼介は愛するマキに、今、伝えなければならぬ大切な言葉を口にするより、その切なる想いを今夜どの場面から切り出しても構わなかった事を振り返っていた。

涼介は愛を甘く見ていた。

マキは愛の深さを決め付けていた。

「……………じゃあ……………ねっ。」

マキは笑顔を振り絞つて席を立ち、二人の間に続いていた長い沈黙を区切った。

「じゃあねって、マキさあ……………」

涼介は立ち上がったマキを媚びる様な瞳で見上げた。

「……………」

マキはゆっくりと踵を返した。

「……………」

涼介は言葉を選んでいった。

「……………」

マキは背中に出そうになる辛い気持ちを堪えていた。

「……………」

涼介は黙つたままだった。

「……………」

マキは振り返えらなかつた。

(・・・じゃあねじゃねえよな・・・まったく・・・)

涼介はマキへの愛情を怠け、情熱を出し惜しみ、マキを呼び止める事もマキの後を追う事もせず、煙草の煙を吐き出しながら心でそう呟き、お猪口に残っていたぬるい日本酒を飲んだ。

「何かあつたの？」

何も言わず飛び出して行ったマキを心配していた板さんは、支払いを済ませ様とレジに来ていた涼介に立ち入った。

「いや、別に、何でもないです・・・。」

涼介は笑顔を作れなかつた。

「そう・・・なら、いいんだけど・・・。」

板さんはマキの涙を心に仕舞った。

「ごちそうさまでした。」

「・・・あいよっ、有難うございましたっ。」

「どうも。」

涼介は会釈した。

「・・・。」

板さんは店を出て行くこととする涼介の背中に、何かを伝えたい視線を送っていた。

「ふーっ・・・。」

櫛の引き戸を閉めた涼介は、はっきりとした息を夜空に向かって一つ吐いた。

(・・・クリスマスまで何とかかなるかなあ・・・)

涼介は月を探しながら心の中でそう呟き、自宅へ続く本牧の裏通りを歩き始めた。

「・・・大丈夫だよな・・・。」

涼介は冷たくなって来た両手をポケットに突っ込み、自分自身にそう問い掛け、再び頭上を見渡した。

月の出ていない、寒い夜だった。

涼介は何時かの寒い冬の夜、青く澄んだ輝きを放っていた月の光に照らされ、マキと寄り添いビデオシヨップまで歩いた時の二人の蜜月を振り返り、切ない気分を追い払おうとしていた。

「・・・大丈夫大丈夫。」

涼介は見えない月に向かってそう言った。それはマキの決心を見縊り、マキとの恋愛をぬるく樂觀している証でもあった。

“司”でマキが涼介に背中を向けた夜から一週間が経っていた。しかし涼介は暮れ行く年の中で仕事に追われている現実を盾に、マキへの連絡を怠っていた。自宅に散らばるマキの洋服や下着、化粧品やアクセサリーが、その位置を変える事無く存在感を示している事も、涼介に見当違いのぬるい余裕を持たせる事となっていた。

あの夜、愛するマキに素直な気持ち伝えなかつた事は大きな誤りだったと涼介は気付いていた。しかしその後、マキに心を寄せる事を逡巡し続けている事実の方が、より致命的だという事には涼介は気付いていなかった。

涼介はクリスマスを一人で過ごした。そして涼介は、一つの年が終わろうとしている賑やかな街に身を委ねる度、大切な女性を無くしたのではないかという、ずるい焦りを感じ始めていた。

涼介はマキを惜しみなく奪わなければならない事を理解しているにも拘らず、その情熱を自分で自在に組み立てた都合の良い運命論に凌駕させ、懸命で健気な姿をマキに見せる事を美しいとしなかつた。そんな涼介の愛情を都合良く運命に依存する流儀は、愛は情熱を乱舞させ、形振り構わず遮二無二掴み取るものでは無く、受身の形を貫く概念に美学を見出していた。そこには守るべき女性を守るべき時に守れない、自意識過剰な男の醜いナルシズムがあった。

涼介は年が明けて暫く経った頃、取引先から会社へ戻る途中の閑

内駅で美由紀に会った。

美由紀はマキの親友であり、涼介は美由紀と親しくしていた。

「佐久間さん！」

美由紀は涼介の後ろ姿に声を掛けた。

涼介はその声に気付かず、改札を出ようとしていた。

「佐久間さん！！」

美由紀は真顔で二度目の声を出した。

「……おう、久し振りだね、元気？」

涼介は歩く速度を緩めながら自分を呼ぶ声の方へ徐おもむきに振り返り、

相手が美由紀である事に顔を緩め、美由紀が目の前に走り来る迄待

った後、落ち着いた声でそう言った。

「元気じゃないですよ！マキと全然逢ってないんですか！？」

美由紀は挨拶を省いて迄、事の重大さを声に乗せた。

「まあ……ね。」

涼介は少したじろいだが、まだ落ち着いていた。

「まあねって、別れるんですか！」

美由紀は鬼気迫ききせる声と顔で核心を突いた。

「……別れるっ……」

「マキは本気だったんですよ！……何で？……この前私ん家で

めっちゃめっちゃ泣いたんだから！！」

美由紀の叫び声は構内に響いていた。

「……」

涼介は美由紀の声に乗ったマキの事実じじつに、言葉にしようとしてい

たマキへの思いを心に押し戻かえされていた。

「何でなんですか！……佐久間さん！……何でなんですか！！」

「……」

美由紀の強い瞳に涼介は天を仰いだ。

「……リヨウのお陰で優やさしくなれるんだよって、リヨウが居るから強くなれるんだよって……私……何時もそんな話聞かされてたのに……この前突然私ん家に来て……あんなマキの姿初めて見た

んだから！」

「……………」

気持ちを畳み掛けて来る美由紀の姿に、涼介は喋る言葉を失っていた。

「何で電話ぐらいしてあげないんですか！！」

美由紀は更に訴えた。

「……………」

涼介は美由紀の直情に心を切り裂かれ様としていた。

「ねえ！何で！！」

「……………」

涼介は美由紀を直視出来なくなっていた。

涼介は心の中で眠らせていたマキへの深い想いを、突然美由紀に荒々しく叩き起されていた。そして目の醒めた“マキへの愛を玩ぶ自分”という人格に鏡を向けられ、その中に映り込んでいる軟弱な心を正面から見つめさせられていた。

「……………」

美由紀は瞳で涼介を叩いていた。

「……………」

涼介は喋れなかった。美由紀から向けられた鏡には、言い訳の一つも探せない、情けない自分の心が晒さらされていた。

北風の強い午後だった。

美由紀は木枯らしの様な風に髪を乱されながら訴え続けていた。

涼介はコートコートの裾を翻弄ひたひたられながら、立ち竦すくんでいた。

美由紀は涼介に、“マキは本気だったんですよ！”と何度も叫んでいた。そして“何でそんなひどい事するんですか！”と食い下がっていた。最後には“マキに電話してあげて下さい！”と懇願こんがんしていた。

（……………）

涼介は街へと消えて行った美由紀の残像を、暫しばくその場所からず

つと見ていた。

涼介の胸は張り裂けていた。

街路樹の落ち葉が涼介の足元で舞っていた。

(.....)

涼介はマフラーを巻き直し、ゆっくりと歩き始めた。

(.....)

気持ちを立て直せないまま歩いている涼介の視線の先に、駅の入りに立ち並ぶ公衆電話があった。

涼介の頭上にはミディアムグレイの空が重く広がっていた。

北風は街を乾かし続けていた。

涼介の瞳は公衆電話を捉えていた。

(.....)

立ち止まっている涼介の心の中には、マキへ捧げるべき“愛してる”という魂の聲が湧き上がっていた。

北風は街を乾かし続けていた。

(.....)

涼介はステンカラーコートの際を立てた。そしてコートを慈しむ様に両手をポケットに入れ、公衆電話に背を向けた。

駅に向かつて足早に歩く人達が涼介の横を通り過ぎていた。

歩道の落ち葉は時折激しく舞い上がっていた。

涼介は情熱を曝け出す自分を美しいとせず、不埒な美学を貫き、ナルシズムを忠実に守った。それは同時に涼介が育むだろう今後一切の愛に対して、人として誰もが潜在的に持っている、愛に対する直情的で無骨な感情を永遠に封印する事も意味していた。

(.....)

涼介は北風に抗う様に歩きながら、2年前のクリスマス、コートをプレゼントすると言い出した時のマキの笑顔を思い出していた。

涼介は最愛の女性に心だけは手前勝手に摺り寄せ<sup>す</sup>ていた。しかし涼介にはそんな自分のぬるい行動の代償が、計り知れない悔恨<sup>かいこん</sup>の情となつて今後ずっと胸を支配し続ける事になるなどと、夢にも思つていなかった。

ドキドキする様な恋をしたいけど

思い通りに運ばない時は

夕暮れの風 吹かれると何故

切なくなつたり思い出したり

今ならやり直せるかもしれないけど

言い出せる筈なくて

ごめんねなんて 絶対言わない私でも

“好き”とあなたは言つてくれたのに

後悔をずっと想い出に そつとしてる方がいい

忘れないでいい

もし またやり直せる時が来たら

同じ過去は繰り返さないよ

Y SECTION S .  
“ PACIFIC SHORE HOTEL ” b

マキもクリスマスを一人で過ごしていた。12月27日の誕生日も一人で過ごしていた。寂しくて、遣<sup>や</sup>り切れなくて、誰彼の区別無くCDを聴き続ける夜もあった。

マキはあの夜、“別れよっか”と言つた事をずっと後悔していた。

“サヨナラ”なんて言わなきゃよかった

何時でもあなたからのコール待ち続けてた

だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ

過ぎた時も今も大切にしたい

何時か素直になれたら 大切な物見えると  
信じ続けてるけど

“サヨナラ”なんて言わなきゃよかった  
何時でもあなたからのコール待ち続けてた

“ P A C I F I C S H O R E H O  
T E L ” b y S E C T I O N S .

マキはあの日以来、電話の前から動けない夜が増えていた。受話器を握り締め、ダイヤルをプッシュし掛けた事もあった。しかしマキは出逢った頃のように素直になれないまま孤独と戦っていた。

マキは涼介を信じていた。例えそれがどんな形でも、ほんの僅かな時間であっても、涼介が愛情を必ず自分の元へ届けてくれると信じていた。第三者から見れば苛立ちを覚えそうな、そんなつまらない拘りが唯一の正解だとマキは信じていた。

だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ  
過ぎた時も今も大切にしたい

キラキラ季節は短か過ぎたけど  
想い出ばかり今でも溢れてくる  
夜が長くて 眠れなくて  
片付けたアルバム何度も何度も見る  
近過ぎる過去だから 傷がまだ痛むけど  
いい恋してたと思う

“サヨナラ”なんて言わなきゃよかった

何時でもあなたからのコール待ち続けてた  
だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ  
過ぎた時も今も大切にしたい

“ P A C I F I C S H O R E H O  
T E L ” b y S E C T I O N S .

マキは就職する広告代理店の東京本社勤務が決まっていた。住居も会社が寮として借り上げているマンションの一室を使う事が決まっていた。

新しい年が明け、入社のための身辺整理を始めて以来、マキは入寮を決めた事を悔やみ、入寮をキャンセルすべきかどうかを悩んでいた。

マキは涼介との間に残されている筈はずの絆を信じていた。寮は恵比寿にあつた。入寮しなければならぬ3月も近く迄来ていた。マキは涼介に寄り掛かりたい想いを心から溢あふれさせながら、横浜を離れる事実が、涼介との絆に絶望的な溝を作るのではないかと恐れていた。

マキは涼介の事を二度と出逢えない最高の恋人だと思っていた。そして涼介との結婚をずっと願っていた。マキはあの日“司”で涼介に背を向けた時からその想いをより一層強くしていた。故にマキはその思いを伝えられないまま環境が変わり、生活が変わり、人間関係が新しくなる事で、涼介への愛情を何時いつか心の隅で梱包してしまうかもしれない自分の行動を先回りし、責めていた。そこには明るくて大らかなマキとは別の、微妙に恋愛に臆病で、恋に戸惑い、愛を躊躇ためらう、見た目より涙もろくて強くないマキが居た。

山手の丘には桜の季節が来ていた。元町に続く坂道には春の息吹が満ちていた。商店街には新しい気持ちを充実させている人達の笑顔が弾けていた。

涼介は塗り変わる景色の中で、失った女性の大きさに今更ながら気付いていた。朝起きて眠る迄、そして夢の中迄も、全てに於いて最高の時間をマキが与えてくれていた事に気が付き、胸を擦じられていた。

マキは新たに始まった生活の至る所で涼介と過ごした最後の夜を振り返っていた。そして涼介に翳かさしてしまった半熟のままの恋の駆け引きを、絶対にやってはいけない事だったのだと後悔していた。

二人は紛れも無く掛け替えの無い最高の出逢いをしてきた。しかしその最高の出逢いを最良の出逢いに変えて行くには二人は若かった。世界で一番で、一生で一人の人だと、形振り構わず素直な思いをぶつけ、お互いの心に不変の愛を誓うには二人は若かった。主観的で情熱的な恋と、自己犠牲さえ厭いとわない愛を重ねて恋愛を成立させるには、二人は若かった。

涼介の部屋には、マキの物がそのまま残っていた。寮での一人暮らしが始まったマキの部屋のクロゼットには、涼介からプレゼントされたピーコートが掛けられていた。

二人の結末を、若氣の至りいたという言葉だけで片付けるには、余りに無情だった。

(.....)

涼介は信号待ちの間にCDを止めた。

左ウインカーの点滅音が車内を優しくノックしていた。

助手席のガラス越しには、涼介の自宅があるマンションが見えていた。

「・・・逢いたい。」

涼介は呟いた。

あれから10年が過ぎていた。マキに“別れよっか”と切り出さ

れた日から一度も逢わないまま10年が過ぎていた。

2年前、転勤で小倉に戻る為の荷造りをしていた時に、涼介はマキの荷物を処分する事が出来なかった。

涼介には捨てられなかった。

涼介にはそれが全てだった。

(.....)

涼介は駐車場に車を滑らせ、エンジンを切った。

フロントガラスのずっと先に青く輝く月が出ていた。

涼介は美しいその月と、何時か本牧の路上で、マキと二人寄り添って見上げた月を重ねていた。

10・・・依存の副産物

受信トレイ

<未開封>	エリカ	2003/09/07
0:12		
<未開封>	まゆみ	2003/09/07
0:05		
<未開封>	まゆみ	2003/09/06
23:36		
<開封>	岡部恭子	2003/09/06
20:17		
<開封>	まゆみ	2003/09/06
20:04		

: : :

(.....)

涼介は自宅の在る八階で止まろうとするエレベーターの滑らかな感覚を合図に、眺めていた受信トレイの画面を閉じた。

涼介は車を降り、駐車場を歩きながら携帯電話の電源を入れていた。そしてエントランスでエレベーターを待つ間、受信メールを確認する為にセンターへの問い合わせを済ませていた。

(.....)

涼介は目の前に長く延びている室内共用廊下に遠慮がちに靴音を響かせ、右手に持ったままだったキーケースの釦を玄関ドアの前で弾き、鍵をシリンダーに差し込んだ。

(長い一日だったな・・・。)

受信していたメールを開く事無くエレベーターを降りていた涼介は、心の中でそう一言呟き、外気より少し温度が低いホールの明かりを点け、一人暮らしには広過ぎるリビングに向かい、上着をソファに投げた後、コーヒーをドリップする為にキッチンへ行った。

マンションのキッチンには少し大き過ぎるガラスのダイニングテーブルの上に置いてある電話から、ファックスされた紙が二枚滑り出していた。メッセージが録音されている事を知らせるランプも点滅していた。

(・・・。)

涼介は冷蔵庫に並ぶボルビックを一本取り出し、一口唇に当て、残りをコーヒーマーカーのカップに注ぎ、テーブルの上に出しっ放しだった少し深煎りのコーヒー豆を粉碎し始めた。

(・・・。)

涼介は漂うコーヒの香りに自宅に戻って来ている事を実感していた。そしてその実感にもっと深く浸る為に、粉碎したコーヒー豆をペーパーフィルターに移し、コーヒーマーカーの電源を入れ、自分に宛てられた全ての連絡に背を向けてバスルームに向かった。

「ぬるいな・・・。」

涼介は歩きながら、直視すべき恋愛を育てる事に不得手な、自身の“やわ”な恋愛体質を嘆いた。

(もう一度だけ逢わせて欲しい・・・。)

例え残酷な現実が待っているとしても、涼介はマキとの再会の場面に常に意識し、思い描いていた。そして世の中に偶然など無いと信じている涼介に、必然としてマキとの再会を神様が贈ってくれるのなら、その場面を丁寧に受け取り、心に絡まり続ける一つの恋愛にけじめを付けたいと思っていた。

(・・・勝手だな・・・)

涼介はユーティリティの壁に張り付いた鏡に向かい、自分の表情に滲み出ているしみつたれた心を見つめ、そう吐いた。

シャワーから出て来た涼介はドリップの終っていたコーヒーをマグカップに入れ、ミルクを落とし、ダイニングテーブル用の椅子とは別に一脚だけ置いてある、銀黒の皮で覆われた背凭れの大きいエグゼクティブチェアに座り、ノートパソコンの電源を入れた。

パソコンには魚町店と紺屋町店の店長から、冬限定デザートサンプル画像5枚と、恭子から新商品の開発に関する会議用資料が送信されて来ていた。

(・・・今やつとかなきゃ・・・だな・・・)

涼介は、ほんの2時間前迄一緒に居たまゆみではなく、マキに馳せた想いの余韻を区切った。

ダイニングの明かりは眩しい程に涼介を照らしていた。リビングに敷かれたコルクの床には、涼介の影が長くはつきりと象られていた。

涼介はコーヒーを飲みながらサンプル画像を一枚一枚液晶に映し、各画像に対して書き込まれているコンセプトを客観的に吟味しながら、コメントを添付する作業を始めていた。

(こんなとこかな・・・)

涼介は煙草に火を点け、まだ一杯分程保温されていたコーヒーをカップに注ぎ、チェックを終えた画像を各店舗に送信した。

9月7日、日曜日の午前1時30分を回っていた。

(ふーっ・・・)

涼介は思考のスイッチを切り、椅子の背凭れに深く体を沈めた。

(・・・そうだ、もう一通あったんだ・・・)

ベッドに潜り込む事を考えていた涼介の頭は、突然誰かから何かを指摘された様に一瞬我に返った。

涼介は体を起こし、恭子から送信されて来ていた会議用資料を開く為にマウスを握った。

(.....)

涼介は会議用資料に目を通しながら、まゆみとの食事中に恭子から受信していたメールの内容を思い出していた。

(.....)

涼介は時計を見た。そして頭の中から消していた全ての連絡に目を通して置くかどうか考えていた。

ファックスは恭子からだった。受信時間は“20:55分”と刻印されていた。紙面は取り急ぎ確認する必要の無い折込み広告の配布表と販促備品の発注書だった。そして紙面の余白には、まゆみとの食事中に届いたメールよりもストレートに、涼介の居場所を知りたがっているメッセージが添えられていた。

(.....)

涼介は煙草を消し、コーヒーを飲み干した。

涼介は留守番電話の相手も恭子だろうと思っていた。

(.....)

涼介は恭子からの会議用資料に一通り目を通した後、パソコンの電源を切った。

マウスの横には、投げ出されたままの携帯電話があった。

(.....)

涼介は携帯電話を見つめていた。

#### 受信メール

涼介って誰にでもそんなコト言ってるんでしょ?? (^|~^)  
すごく慣れてる感じ…

でも今日会って涼介とゆっくり話してよかった  
思ったより自然で優しい感じがしたよ (^|~^)

私も好き

まゆみ 2003/09/06 23:36

受信メール

もうすぐ家につくよ(^| ^)

涼介はまだだよな？

今日は楽しかった

ありがとう(^| ^)

まゆみ 2003/09/07 0:05

受信メール

リョウくん リョウくん 応答せよ!!

ごめん!! エリカ酔ってるーっ! f ^ | ^ ;

ねっ リョウの家遊びに行ってもいい?? (^| ^)

エリカ 2003/09/07 0:12

(.....)

涼介の意思はエリカから届いていたメールに反応しようとしていた。

涼介はエレベーターの中で開いた携帯電話の受信メール一覧に、エリカの名前があつた事はしつかり認識していた。そしてエリカからのメールを開いてしまえば返信したくなるだろう事も認識していた。しかし涼介はエレベーターの中で未開封のままメール画面を閉じていた。それはメールの送信者が例えエリカであっても、今夜はこのまま誰とも接する事無く眠りに就きたいとする気持ちの表れだった。しかしきっかけはどうであれ、涼介は今夜見るつもりは無かつた受信メールをベッドに入る前に開いていた。案の定、その事実はエリカへの返信を明日に持ち越してはいけないと考える涼介の神

経を刺激していた。

長い一日だった。

涼介の心は疲れていた。

(・・・・・・・・)

涼介はエリカへ返信するメールの文面を明確にイメージ出来ないでいた。

涼介はチェックを終えた画像を各店舗に送信し、煙草に火を点けた時点で切ってしまった思考のスイッチを再び入れ直してみたいが、自身の心に妥協無く思考を言葉として表現する事に戸惑っていた。

(・・・・・・・・)

涼介は左手に持っていた携帯を閉じた。

涼介はエリカに返信する文面に、生半可な安<sup>なまはんか</sup>い言葉を簡単に並べてしまうかもしれない可能性を良しとしなかった。

涼介は疲れていた。

(・・・・・・・・)

涼介はダイニングの明かりを消した。

明かりの無くなったリビングの壁は、ブラインドの隙間から入り込む街の光で美しく照らされていた。

(・・・・・・・・)

涼介は描き出された様に重なる何本もの横縞<sup>よこしま</sup>の光を暫く<sup>しば</sup>見つめていた。そしてエリカが今、何処<sup>どこ</sup>で何をしているのかをぼんやりと考えていた。同時に、パソコンに送信されていた恭子からの会議用資料の余白に“また食事に誘って下さい”と書かれてあった事を、ふと思い出していた。そしてまゆみがメールに載せていた“誰にでもそんなコト言ってるんでしょ”という言葉を、まゆみから引き出す事になった自分の言葉を思い出そうとしていた。

(12時半か・・・・・・・・)

涼介は電話の液晶画面に目をやっていた。

昼過ぎに目覚めた涼介は、条件反射の様にダイニングテーブルにあるパソコンの前に座り、目の前の景色に焦点を合わせず、漫然と煙草を吸いながら気だるい頬杖ほおづえを付いていた。

(.....)

涼介は立ち上がり、バスルームへ向かった。

リビングの窓に掛かるブラインドは、外が良い天気である事を示す様に反射し切れない日差しを膨ふくらませていた。キッチンのダイニングテーブルの上では、消え残った吸殻の細い煙がガラスの灰皿の中で立ち昇っていた。そしてその隣に在る電話は、メッセージの録音を知らせるブルーの光を昨夜からずっと点滅させていた。

部屋中に心地良いコーヒーの香りが漂い始めていた。

オーブンレンジからはパンを焼くタイマーの音が聞こえていた。

(.....)

シャワーを済ませた後、食事の準備をしていた涼介は、視界から排除出来ない光の点滅に観念した様に電話のメッセージ再生ボタンを押した。

“もしもし、岡部です。課長代理、留守なんですか？・・・留守ですよね？・・・ひよつとして誰かと居たりしてっ！・・・ごめんなさい、明日の会議の件でお電話しました。資料はメールで送ってま

すので宜しく願います。”

(.....)

涼介は食事の準備を中断する事無く背中はその声を聞いていた。

食事中涼介は、まゆみとエリカにメールを送信する為に、二人と交わした送受信記録を何日か前まで遡さかのぼって読み直していた。

昨夜涼介は最終の新幹線の中でまゆみに強烈な殺し文句を送信していた。そしてそのメールに対してまゆみから届いた二通の返信メールには、好きな男性に対して従順に成り行く心情が映し出されていた。

(.....)

涼介は食後のコーヒーを飲みながら、まゆみに安心を感じて貰う為のメールを考えていた。

送信メール

メール遅れたね、ごめん。

週末空けといて。会いに行くから。

まゆみ                    2003/09/07                    13:15

涼介はまゆみにそうメールを送信した。

新規メール作成    宛先    エリカ

昨日は悪かった。

もう寝ちゃってZZZ・・・たんだよ、あの時間。

ごめんな。

今日は忙しいんだろ？

仕事頑張れ！

じゃ、また(^|^)

サブメニュー    編集    戻る    13:22

(こんな感じかな.....)

涼介は心でそう呟いた後、エリカにメールを送信し、煙草に火を点けた。

涼介の小手先は割と繊細だった。テンションの違う文面を使い分けられる事が器用だとは言えないが、始まったばかりのまゆみと、その存在が少しずつ自身の生活に溶け込み始めているエリカへ、異なる人格を躊躇<sup>ためら</sup>いや罪悪感の存在を自由に操<sup>あそ</sup>りながら言葉をばら撒く決断力には長<sup>た</sup>けていた。そこには優しさとは掛け離れた、自分だけへの忠実に妙味<sup>みよみ</sup>を感じている涼介の姿があった。

エリカと涼介の出会い、まゆみと知り合う以前、涼介が出会い系サイトにストレスの発散を依存する為に、飾り気の無い短い言葉を残している掲示板に片っ端からアプローチを掛けていた6月だった。

エリカは涼介のぶっきら棒な申し込みに、唯一メールを返信した女性だった。

エリカは小倉北区に住んでいた。涼介はその事実が判ったメール交換の直後、エリカと会う事になるだろう“その日”を確実に迎える為に、送信するメールの文面が独り善がりにならない様、細心の注意を払う事を徹底して自分に言い聞かせていた。

エリカは仕事も小倉北区内だった。それ故に存在する共通の話題は二人のテンションを上げ、交換するメールは古くからの友達のような心地良いリズムを携える事となっていた。

涼介は差し出されたシチュエーションに老獪だった。メール交換の中で二人の間に生まれたりリズムに、涼介は付き合い始めたばかりの恋人同士の様なメロディを付けた。そして涼介はそのメロディの端々(はしばし)に、二人を繋いだ赤い糸の存在を鏤める事を忘れなかった。

二人はメールで知り合った6日後にセックスをしていた。そして二人はセックスが終った後に訪れる、お互いが持つ素直な部分を晒し合い易いベッドの中で、自身の本当の姿を伝え合っていた。

エリカはオレンジのカジュアルカールとローライズのジーンズが似合う、細身の体に可愛さと色気を纏わせているスタイリッシュな女性だった。

エリカは美容師の免許を持っていた。働いている美容室は魚町にあった。

二人は頻繁にメール交換をし、週に一、二度食事をしていたが、

セックスフレンドという領域を越える事は無かった。しかし次第に涼介の自宅でくつろぐ事が優先され始めた頃、二人はお互いの気持ち覗きたい衝動を隠せなくなっていた。

二人は予期せず生産された副産物の様な自身の恋心に気付いていた。しかしそれでも二人は、約束事の無い曖昧な夏を尊重しようとしていた。

エリカと涼介のセックスの相性は合っていた。お互い軽い気持ちで始まった分、二人はセックスを自由に大胆に楽しんでいた。

エリカと涼介は、お互いの個性が創り出す二人の時間に居心地の良さを感じていた。涼介は案外エリカと結婚しているかもしれないと、苦笑いを交えながら考えている時があった。エリカは涼介の外見が一目惚れする程の理想の男性だったとしたら、彼女になりたい為の代償として、自分らしさが消えていたかもしれないと思う時があった。

エリカは束縛も干渉もせず、物事を達観たっかんしている様な涼介の冷めた雰囲気の魅力を感じていた。

詰まる所エリカの夏は涼介を中心に回っていた。それはある意味立派な恋の始まりでもあった。

(・・・掃除しなきゃあだな・・・)

涼介は携帯電話を充電器に差込み、リビングへ向かった。

(いい天気だなあ・・・)

涼介はバルコニーに両肘を置き、街の景色を眺めていた。

空気を入れ替える為に開け放たれた窓から、強い日差しと街の雑音が部屋の中に流れ込んでいた。

(・・・1時半か・・・忙しい時間帯なんだろうな・・・)

腕時計から視線を外した涼介は、まゆみよりも、美容室で働くエ

リカの姿を想像していた。

## 11・・・二人の独善

芳野エリカは携帯電話が持つあらゆる機能を使い熟す女性に見受けられる芸術的な処世術を備えていた。その処世術には楽しい方向に貪欲に流れて行く事や、不安定な足場を華奢な思考でも臆さずに歩く事、自分の置かれていた状況を前向きに捉える事などが必須項目として織り込まれてあった。

9月19日金曜日の夜、エリカは涼介のリビングに居た。センターテーブルの上では、エリカが買って来た白ワインが空になっっていた。

エリカは取り敢えず目の前に居るまんざらでもない男性に、自身を委ねる事に対する葛藤に意味を持たせる事を良しとしていなかった。そんなエリカの潔さや大らかさは、結果的に自身の行動や判断に満足出来る時間を男性から勝ち取っていた。

(・・・・・・・・) エリカは絨毯の上でうつ伏せに体を伸ばし、甘いプレッツェルを食べながらファッション雑誌を見ていた。

金曜日、珍しく仕事を定時に上がっていたエリカは、自宅へ帰る様な普通さで涼介の家に涼介より先に“帰宅”していた。

Tシャツとカラフルなスパッツに履き替えてリラックスしているエリカの顔は、ワインのせいであまり赤みを帯びていなかった。

「エリカさ、実は俺の事かなり好きだろ？」

涼介はキツチンでパソコンと向き合ったまま、何の脈絡も無くエリカに話し掛けた。

「うん。リヨウは？」

エリカはファッション雑誌のページを捲りながらあっさりと肯定し、姿勢を変えないままそう聞き返した。

「・・・んー、あんまり好きじゃないかな。」

涼介はパソコンと向き合ったままだった。

「あ、そう。・・・シャワー浴びて来る。」

エリカは涼介の方を向いて大袈裟に驚いた表情を作り、少しふくれた顔をして立ち上がった。

「了解。」

涼介は穏やかな表情でキーボードを叩いていた。

「ねっ。」

涼介は突然耳元で聞こえたエリカの声に振り向いた。

「好きなくせにっ。」

涼介の背中に忍び寄っていたエリカは、人を窺める時の笑顔でそう囁き、涼介の右の頬にキスを一つ残して踵を返した。

（・・・いいセンスしてるよな。）

涼介はしなやかで張りのあるエリカの後ろ姿に見惚れながら、エリカの振る舞いに降参を意味する含み笑いを浮かべ、心の中でそう呟いた。

エリカは涼介が時折見せる意地悪なジョークを絶妙なセンスで切り返していた。涼介はそんなエリカに接する度に、心から勝手にしみ出て来てしまうエリカへの愛しみで、残して置きたい心の自由を自ら奪い取っている事を感じていた。

（・・・・・・・・）

涼介はエリカにまた一つ恋心を刺激された事実には酔っていた。しかし涼介はエリカがユーティリティに入った直後、音も無く猛烈に頭を回転させ始めていた。

（・・・今しかないな・・・）

涼介は少なくとも30分はエリカがリビングに戻って来ないだろうと思っていた。

涼介はテーブルの上に投げ出していた携帯電話を手に取り、エリカとの心地良い時間に区切りを付けた。そして限られた時間の中で自らが描いたシナリオをミス無く実行する為に、まゆみに気持ちを集中させた。

(.....)

涼介は自分の行動を嘲りながら、まゆみに送信するメールを作り始めた。

まゆみと涼介は9月6日のグランドハイアット福岡での初デート以来会っていないかった。しかしその後続いている二人のメール交換は、頻繁ではないが客観的には恋人同士そのもの間合いと内容があった。そう言う意味では、今夜、このタイミングで涼介がまゆみに連絡を取って置く事は、涼介の考えるまゆみとの今後の展開に必要な段取りだった。

涼介にとってまゆみの住む博多はある意味遠かった。新幹線に乗れば20分の距離だったが、車を使えば高速道路に乗っても1時間は掛かった。新幹線の最終が11時21分という時間も涼介には中途半端に思えていた。普通に考えれば恋人同士の間にある障害としては些細な事だった。しかし涼介はそんな他愛も無い外的要因だけで“恋人”との関係を等閑にしていた。

原因はエリカだった。

涼介はまゆみとの初デート以降、意識的にまゆみとエリカを天秤に掛けていた。そしてその天秤は常にエリカの方へ傾き、当然明日の土曜日も明後日の日曜日も、まゆみの気持ちを配慮した行動を計画するよりも、エリカと過ごす事を優先したいと思う方へ傾いていた。

(.....)

涼介はバスルームの方を気にしながらまゆみにメールを送信した。

送信メール

会いに行くのはやっぱり週末なんだけど、  
明日も日曜も仕事でバタつくと思うから  
27日じゃないと無理かもしれない。  
辛いけどさ。

まゆみ 2003/09/019 11:05

まゆみからの返信は早かった。

受信メール

忙しいのね。

私の事キライになった？ (^|^)

まゆみ 2003/09/019 11:08

涼介の対応も早かった。それはエリカがシャワーから戻って来る前に、自ら起こしたアクションを完結させなければならぬとする妙な焦りにあった。そしてその焦りは、今迄まゆみに見せて来た涼介らしいクールさや切れ味には程遠い、単にドライで、ぬるい役者が舞台上で演出の意図を履き違えて演技している様な文章を作らせていた。

受信メール

(^|^)(^|^)嫌いになった方がいいの？

今日は疲れちゃった(。|、)。

もう寝ちゃってもいいかな？

明日TELするよ。

おやすみ (^|^)

リヨウスケ 2003/09/019 11:14

(.....)

まゆみはベッドから抜け出し、部屋の明かりを点けた。

まゆみは煌煌としたシーリングライトの下で、涼介から届いた味気無い一方的なメールをずっと目で追っていた。

まゆみと涼介は9月12日の金曜日午後7時、博多駅の新幹線改札口で待ち合わせをしていた。

当日の午後3時過ぎ、まゆみの元に急な仕事飛び込んで来た。そしてその仕事はデートの時間が迫るに従って忙しさを増していた。

まゆみは仕事で押し流される時間の合間に、泣き出したくなる気持ちを押さえながら何度も何度も現況の報告を涼介にメールで送信していた。

自身の仕事の性質上、まゆみの事情が理解出来る涼介は、まゆみからの最終的な連絡を社内で待つ主旨のメールを、午後7時を少し過ぎた頃に返信していた。

まゆみも涼介も、予定通りならば二人で食事をしている金曜日の夜に予定外の仕事をこなしていた。

二人は待っていた。

約束の時間から2時間が過ぎた頃、まゆみはこれ以上涼介を待たせる訳にはいかない切実と、終る気配の無い仕事という現実の狭間で決断をした。そしてまゆみは断腸の思いで涼介にデートのキャンセルを電話で伝えた。

まゆみは涙が混じっている様な声で涼介に謝っていた。涼介は何時より明るく、そして優しく励ます事を忘れなかった。

その夜まゆみは、ぶつけ所の無いストレスを抱え込んだまま涼介とメールだけの会話を重ねていた。

まゆみは9月12日以降、涼介との接触がメールと電話だけとい

う現実に悶々（もんもん）とした日々を送っていた。

（・・・・・・・・）

まゆみはベッドに座り、涼介から届いたメールをじっと見つめた後、ほんの何分か前、自分が涼介に送信した、精一杯明るく振舞ったつもりのメールを読み返していた。

まゆみは必ず会えると信じていた今週末を待ち詫びていた。しかし今、今度は涼介の都合で、その今週末のデートが流れ様としていた。

まゆみは9月12日、デートをキャンセルした日からずっと、心を抉る様な不安に纏わり憑かれ、心に充満する寂しさと切なさで食事が咽喉を通らない程涼介に想いを募らせていた。

まゆみは、今、不意に涼介に電話をしても繋がらないだろうと思っていた。それは過去何度かあった今夜と似た状況の夜に、涼介の携帯電話が直接留守番センターに繋がるだけの虚しい体験をしている事に起因していた。

まゆみには涼介が、今、何をしているのかが心配でも、どうしようも出来なかった。故にまゆみはそんな事実を女性に突き付ける事が、涼介の恋人に対するスタンスなのだと強引に思い込もうとしていた。またそうしなければ、涼介とは恋人同士という間柄で括れない現実を冷静に見据えてしまいそうな自分が居た堪れなかった。

まゆみは二人の関係が良い雰囲気が続いている事を信じていた。しかし会える時間が余りにも少ない事実には悲観していた。

ある意味滑稽ではあったが、まゆみは涼介に対する揺れる想いの落とし所を抽象的で焦点のぼやけた洞察で強引に乗り切り、無理矢理気持ち落ち着かせる事で何と無く大人の女性で在り続けようとしていた。そんなまゆみの恋愛に不慣れな所作は、過去の恋愛の中に居た、純粹で真面目な男性の行動を基準にしている事を象徴して

いた。

(.....)

まゆみは携帯電話を枕元にある充電器に差し込み、部屋の明かりを消した。

明日の土曜日は朝一番で大切な契約があつた。まゆみは何時もより早く出社する手筈になつていた。

まゆみは今年の4月に独立開業したばかりの設計事務所の経理を任されていた。社員はまゆみと一級建築士が一人居るだけだった。

まゆみはそんな社員構成と仕事の性質上、休日を返上して経理以外の仕事をする事も多かった。

(.....)

まゆみは瞼を閉じる事が出来なかつた。

まゆみの脳裏には、涼介の声と顔が溢れ続けていた。

設計事務所の社長は鈴木周五郎という男だった。

まゆみは以前勤めていた建設会社の同じ部署で、長い間直属の上司として一緒に仕事をしていた鈴木周五郎に“俺の仕事を手伝つてくれ”と口説き落とされ、今の仕事に従事していた。

鈴木周五郎は独身だった。仕事の出来る、恰幅の良い、笑うと目が無くなる37歳の真面目な自信家だった。

鈴木周五郎は1月に辞表を提出し、まゆみはその2カ月後に退社していた。

鈴木周五郎が在籍中に画策した独立の為の根回しや取引先に便宜を図つて貰おうとする強引なやり口は、会社から反感を買い、部下達との軋轢を生んでいた。

鈴木周五郎が退社した後、まゆみは後を追う様に会社に辞表を提出していた。

まゆみは反感を買っていた。そして当然の様に二人の関係に好奇

な噂が飛び交う事となっていた。

仲の良かった同僚達も妬みと共に後味の悪いゴシップを流していた。

まゆみは前の会社に新卒で入社して以来、ずっと上司で在り続けている鈴木周五郎の存在感到に圧倒されていた時期があった。その時期はまゆみが女性としても社会人としても発展途上を自覚していた頃と重なっていた。結果としてまゆみは行き過ぎた尊敬の念と、男性であれば勘違いしてしまいそうな無邪気な姿を鈴木周五郎に振り撒く事となっていた。

鈴木周五郎は素直で従順なまゆみを部下として評価するよりも女性として評価していた。そしてその評価に恋心を加え、将来を共にする女性だと思ひ込む事に時間を掛けなかった。

実際、まゆみと鈴木周五郎の間には体の関係があった。

まゆみは恋愛感情が最初に脳裏を過ぎらない男女の関係が、鈴木周五郎との間で成立してしまった事に違和感を覚えていなかった。ある意味その事実には社内でもまゆみに向けられていた誹謗や中傷を冷静に受け流す余裕を生んでいた。同時にまゆみは一つのきっかけで豹変する人間の姿に、自分らしく生きる事の難しさを痛感させられていた。

まゆみは社内の噂に苛立ちを覚える事無く会社を辞めていた。そして鈴木周五郎に付いて行く事が自身に取っては良い選択だったのだと納得していた。

送別会はささやかな物だった。寿退社ではないまゆみに纏わる噂に対して、会社は最低限の儀礼だけで区切りを付ける事を選んでいた。

(.....)

まゆみは眠れなかった。

まゆみはベッドの中で、切ない想いしか与えてくれない涼介に強く抱きしめられたいと願う心と、それは叶わない夢なのかもしれないと思ふ心に苦しんでいた。そしてその苦しみは、数時間後に仕事で顔を合わせる鈴木周五郎に対する態度を、涼介と出会う前迄の様に戻して置きたいとする気持ちを浮き上がらせていた。

(.....)

まゆみは枕元にある携帯電話に手を伸ばして、“R”という名で保存してあるメール送受信履歴のフォルダを開いた。

まゆみは結婚の為の恋愛ではない、ドラマのヒロインが燃える様な恋愛の末に享受する最高の結婚を夢見ていた。

(.....)

まゆみは“R”の履歴を遡っていた。

まゆみにとつて涼介はドラマの中に出て来る王子様だった。鈴木周五郎は現実を生き抜く為に必要な、掛け捨ての保険の様な存在だった。

暗い部屋の中で、まゆみの顔だけに携帯電話の液晶画面が作る光が溢れていた。

(.....)

まゆみはあらゆる項目で貪欲に二人を天秤に掛けながら、“R”の履歴に浸っていた。

まゆみはある意味自分の置かれた状況に陶醉していた。そしてそんなまゆみの心に在る涼介とは異質の独善は、取り敢えず鈴木周五郎に掛けている保険を何時でも貯蓄型に替えられる様、その手続きを頭の中で終わらせ様としていた。

(寝なきや.....)

まゆみは、“おやすみ”と涼介に今夜送信した最後のメール迄履歴を読み戻した後、心の中でそう呟き、ナイトテーブルに置かれた充電器に携帯電話を差し込んだ。

まゆみは自分の恋心の有り方を整理出来た満足感を顔に浮かべ、

シートに包まっていた。

光の消え残る携帯電話のサブ画面は、  
“ 9月20日(土) 02:  
05”と液晶を浮かび上がらせていた。

## 12・・・理想との呼応

「失れーいつ。」

濡れた髪にタオルを巻き、体にはバスタオルを巻いて、歯ブラシを銜くわえたままりビングに戻って来たエリカは、ソファーに座り、センターテーブルに足を投げ出してテレビを見ている涼介を、そう言いながら仰あ々あしく跨またいで窓際のドレッサーに向かった。

(・・・)

涼介はエリカのその行為に反応する事無くテレビを見ていた。

(・・・あれ?・・・)

涼介が見せる何時もの様な“反撃”を期待していたエリカは、ドレッサーの上に置いてあったトートバッグの中から携帯電話を取り出す素振りに紛れて“ちらっ”と涼介を見た後、肩を窄すくめた。

「・・・元気い？」

受信と着信のチェックを終えたエリカは携帯電話をトートバッグに戻し、銜くわえた歯ブラシを手に取り、“意味深”な笑顔を浮かべながら涼介の横に擦すり寄り、そう言った。

「・・・元気だよ。」

涼介はテレビから視線を外さず、穏やかに返事をした。

「そっ・・・。」

エリカは素っ気無い涼介に“何だかつまんない”という意味を言葉と顔に出し、再び歯を磨き始めた。

涼介は安堵あんどしていた。

涼介は悪戯いたずらにエリカを無視している訳ではなかった。まゆみとのメール交換を思惑通り終え、予定通り隣にエリカが居る事の心地良さを、もう少しだけ“一人きり”で浸ひたらせて欲しいと思っていただけだった。

エリカは涼介に戯れ付きたいと思っていた。そしてエリカは、誘いに乗って来ない涼介に何かを企み始めていた。

(・・・よしっ！)

エリカは歯磨きを止めた。

「ねえ、リヨウ。」

「・・・？」

涼介はエリカの方を向いた。

「！！・・・おいおい・・・。」

涼介はエリカにされるがまま、エリカの体中から漂う良い香りに包まれていた。

「ははっ。」

エリカは涼介の顔を見ながら笑った。

エリカは涼介に抱き付いて、涼介の顔中にキスをしていた。

涼介の頬や唇は歯磨き粉だらけになっていた。

「お前なあ・・・。」

涼介は優しい瞳でエリカを怒った。

「じゃあねえ・・・。」

エリカは涼介に包まったまま、弾ける様な笑顔で涼介の顔に付いた泡を楽しそうに指でなぞり始めた。

「・・・。」

涼介は諦めた様な笑顔で、エリカの悪戯を受け入れていた。

「はははっ・・・逃げろっ！！」

エリカは一頻り涼介の顔で遊んだ後、そう言って涼介から飛び上がり、ユーティリティに戻って行った。

(・・・ほんとにまったく感じてだな・・・。)

涼介はソファアの上で戯れ付いて来たエリカの残像を心で眺めていた。

(・・・さて、と・・・。)

ソファアを立ち上がった涼介の心には、まゆみとのメール交換が思惑通り運んだ事の安堵感と、味わい深いエリカを独占している心

地良さが充満していた。

「うわっ、びっくりした!!」

鏡の前に張り付いてフェイスケアをしていたエリカは、突然開いたドアに振り返った。

「・・・そう?」

涼介は無表情でそう言った後、エリカに話し掛ける事も歯磨き粉だらけの顔を拭う事もせず、ユーティリティの中で飄々と裸になるうとしていた。

「・・・・・・・・。」

エリカは涼介が見せる淡々とした行動の中に潜む、そうせざるを得ない様な圧力に、仕方無く再び鏡と向き合った。

涼介が動く度、二人の肌は何度か触れ合っていた。

エリカは鏡に顔を近づける程、後ろに居る涼介に対して無防備になる自分の姿勢を敏感に意識していた。

鏡には涼介の裸が映っていた。

エリカはバスタオルを体に巻き付けているだけだった。

「エリ、お前やっぱ可愛いよ。」

涼介は鏡に映るエリカに向かってそう言った。

「!.....」

この後起こるかも知れない涼介の強引な行動を想像し、胸を高鳴らせ、体を熱く火照らせていたエリカは、突然発せられた涼介の言葉に“ドキッ”としながら鏡に映る涼介を見つめた。

(・・・あれ?・・・なんだ・・・)

エリカは明るく落胆した。

涼介はエリカに優しく語り掛けた後、エリカの感情を全く無視するかの様にバスルームに消えていた。

(ちよつと期待してたのにな・・・)

エリカは自分の照れた顔を鏡に映していた。

涼介の行動はエリカの期待を無視し、エリカを少し落胆させてい

た。しかしエリカは時折涼介がさり気なく見せる、恋人同士でなければ出来ない様な鈍感を装った意地悪が好きだった。そしてそれに一喜一憂いっさいちゆうさせられている自分が気に入っていた。

「そんなあ、あつたり前じゃん！」

心地良い緊張から開放されたエリカは、自分でもびつくりする程の明るさでバスルームの折れ戸を派手に開け、涼介を覗のぞき込む様にそう言った。

「何だ、もう一回入んの？」

涼介はシャワーを顔に浴びせながら振り向かずそうとぼけた。

「入らないよつ。」

エリカは可愛い猫が飼い主に戯じゃれる様な姿でそう言った。

「それにしても随分遅い返事だったな。」

涼介はシャワーを止め、シャンプーを手にした後、一瞬エリカに笑顔を見せた。

「・・・コーヒーたてとこか？」

エリカは活き活きとしていた。

「・・・・・・・・」

涼介は背中に感じるエリカの存在に、泡だらけになりつつある髪から右手を離し、親指を立てた。

「じゃあ後でね！」

エリカのその声には、躍る心が乗っていた。

（・・・ほんと可愛いやつだな・・・）

涼介は心の中でそう呟きながら、呼応し合う二つの心に理想を見ている。

エリカのたくし上げられたままのＴシャツから綺麗な胸が出ていた。足首にはシルクの黒いパンツとカラフルなスパッツが一緒に絡からまっていた。涼介はそんな格好のまま横を向いて膝を抱える様に眠ってしまったエリカにそつとシーツを掛け、ベッドを抜け出した。

（可愛いよな、まったく・・・）

涼介は寢室のドアを開ける前に振り返えり、心の中で呟いた。

(・・・エリカなのかな・・・)  
キッチンの明かりを点け、コーヒーをドリップする準備を始めていた涼介は、煙草を燻らせながら心でそう呟き、守るべき愛を考えていた。

エリカの見せる反応は涼介が思い巡らすイメージに敏感に呼応していた。エリカの感情を表す言葉やその声は、涼介が意地悪をしても焦らしても、笑わせてみても強引でも不意を突いても、“エリカ”を創っている感受性の輝きを失う事無く、涼介が期待する以上の表現力で涼介を魅了していた。

涼介にとってエリカとのセックスも申し分なかった。

(きつとそうなんだろうな・・・)

涼介は煙草を消し、コーヒーをマグカップに注いだ。

エリカは涼介の求めるものを多く持ち、涼介が理想として描く恋愛の形を多く具現していた。

(・・・)

涼介はキッチンに漂うコーヒーの香りに包まれながら椅子に深く背を凭せ掛けた。そしてダイニングテーブルに投げ出されたままになっっていた携帯電話をぼんやりと見つめた。

涼介は遠くを見ていた。見つめている携帯電話が霞む程、遠くを見ていた。

涼介はマキという失った理想を思い出していた。同時に理想という概念を再検証させてくれるエリカを顧みていた。

(・・・)

涼介は姿勢を変える為に瞳を動かした。

(・・・ふっつ・・・)

瞳には焦点の合ったキッチンの光景が戻って来ていた。

(・・・)

涼介は徐に左手を伸ばし、携帯電話の電源を入れた。

受信メール

おやすみ

まゆみ

2003/09/19

11:57

(.....)

涼介は画面を見つめながら、遠くを見ていた。

(...寝よう。)

涼介は再度ぼんやりと遠くを見つめ続けそうになる前に携帯電話を閉じ、立ち上がった。

照明が消えたキッチンの中、ダイニングテーブルの上で携帯電話の光だけが消え残っていた。

携帯電話の液晶画面には“9月20日(土) 02:05”という表示が浮かんでいた。

### 13・・・対角の感覚

(・・・)

9月27日の土曜日、まゆみはハイアット・リージェンシー福岡に向かうタクシーの中で、3週間振りに会う涼介との二度目のデートに少し緊張していた。

まゆみが涼介に抱いていた不安は、毎日涼介とメールで会話をしていたという現実<sup>よ</sup>に因<sup>よ</sup>ってかなり緩和されていた。更に鈴木周五郎というもう一つの現実が、まゆみの不安定な気持ちの支えになっていた。

(・・・“社長は止めてくれ”・・・か・・・)

まゆみは緊張を少しでも紛<sup>まぎ</sup>らわす為に、涼介に会えない間、鈴木周五郎と行った食事の時の事を振り返っていた。

まゆみは涼介と会うタイミングを外し続けていた3週間の間に、鈴木周五郎と四度食事に行っていた。一度目は“仕事の打ち合わせがしたいんだ”と言われて無理矢理呼び出されていた。二度目は残業していたまゆみの仕事を手伝った後、“食事に行こう”と誘われていた。三度目と四度目も何かに託<sup>かこ</sup>けてはいたが、鈴木周五郎が強引な事<sup>こと</sup>に変わりは無かった。

(涼介ならあんな誘い方しないだろうな・・・)

涼介に会う前に涼介との恋愛を肯定して置きたかったまゆみは、ある種独特な落ち着きや雰囲気のある涼介の仕草に思いを馳<sup>は</sup>せながら、涼介と鈴木周五郎を同じ土俵で比較していた。

まゆみは鈴木周五郎の事を嫌いな訳では無かった。しかしまゆみの心を牛耳<sup>うしじ</sup>る独善的な思考は、涼介で間違いないとしたい為に鈴木周五郎にどんな役でも買わせる事となっていた。

(いい人なだけだな・・・)

まゆみは心を落ち着かせていた。それは同じ土俵で涼介と鈴木周五郎を戦わせた結果からではなく、涼介を横綱に見立て、鈴木周五郎を露払いつばひに見立てた自分に満足したからだった。

(ふう……)

ハイアット・リージェンシー福岡の前でタクシーを降りたまゆみは一つ息を吐き、待ち合わせ場所に向かって歩き始めた。

(……ふう……)

まゆみは一階にある“ル・カフェ”の前でもう一つ息を吐いた。

(今日も待つのかなあ……)

まゆみは時間を確認した。

腕時計は涼介が指定した場所の前で7時20分を指していた。

(10分前か……)

まゆみは期待と不安で心をざわつかせていた。

「いらつしやいませ。……ご案内致します。……禁煙席でよろしいですか？」

店内のエントランスで立ち止まったまゆみに、黒のスーツを瀟洒せうしやうに着こなした男性が優しく声を掛けた。

「……いえ……」

まゆみは煙草を吸わなかった。

「かしこまりました。」

「……」

まゆみはその男性に会釈えしやくをし、後を追った。

「じゃあ、それをお願いします。」

まゆみはそう言ってメニューを閉じた。

壁際の席に案内されていたまゆみは、ホールスタッフに勧められるまま、聞いた事の無い名前のカクテルを頼んでいた。

(・・・)

まゆみは緊張していた。それは店内を見渡す落ち着きの無い瞳に出ている。

(・・・)

まゆみは携帯電話で時間を確認した。

(やっぱり今日も待つのかなぁ・・・)

まゆみはそう思いながら、自分が居る場所の対角に連なる窓ガラスの向こうを眺めていた。

(・・・でも・・・何だか・・・リョウらしいな。)

まゆみは視線を店内に戻し、不安を打ち消す為に意識して強くなるようにした。

店内には夜空に鏤ちりほめられた星を見に行きたくなる様な音楽が流れていた。それぞれのテーブルには、“楽しい”という声が聞こえて来そうな男女の笑顔が溢あふれていた。

(・・・雰囲気いいなぁ・・・涼介って何時もこんなお店使うのかなぁ・・・)

まゆみは店内の落ち着いた景色を心に取り込みながら、涼介が選んだ店を好きになろうとしていた。

(ふう・・・)

まゆみは再び窓の向こうを歩く人影に涼介を探した。膝の上では携帯電話が玩ばれていた。

「お疲れ。」

「!!。」

まゆみは不意に掛けられたその声に驚き、振り向いた。

「うわっ!!・・・」

涼介を見上げるまゆみの瞳は瞬まはたきを失っていた。

「お待たせ。」

涼介は爽やかだった。

「えっ!?!・・・居た・・・の?・・・」

「いや、来たばかりだよ。」

涼介は爽やかだった。

「・・・びっくりしちやった・・・。」  
「そう?・・・いいじゃない、たまには。」

涼介は本来現れるべき筈の方向とは違う角度からまゆみに声を掛け、鳥が静かに舞い降りる様にまゆみの対面とめんに座ろうとしていた。

「・・・いつも驚かせるのね・・・。」

まゆみは頬を朱色に染め、正面に座った涼介にそう言った。

「・・・トイレに行つてただけけど途中電話が入っちゃってさ、戻つて来たら見覚えのある女性の後ろ姿があつたからね・・・いいタイミングだつたんじゃない?・・・あ、どうもありがとう・・・それじゃあね、ビールを。」

二つ隣の席に置いたままだった煙草とメニューをスタッフが気を利かせて持つて来てくれた事に気付いた涼介は、まゆみとの会話を止め、お礼を言い、メニューを広げる素振りも見せずに飲み物をそのスタッフに頼んだ。

「・・・。」

まゆみは予測不可能な涼介を見つめていた。

涼介がハイアット・リージェンシー福岡の“ル・カフェ”を使うのは三度目だった。最初は今年の2月、保険会社に勤める25歳の女性と来ていた。二度目は6月の終わり頃、中洲なかすのクラブに勤める23歳の気さくな“博多っ子”だった。そしてその二人共、出会い系サイトで知り合っていた。

「決まつたかい?」

涼介は笑顔とメニューを広げてまゆみの前に差し出し、煙草に火を点けた。

「・・・うん・・・。」

「お待たせしました。」

料理を決め兼ねかねているまゆみの前に、スタッフが真っ赤に染まったロンググラスのカクテルを置いた。

「ご注文はお決まりですか？」

続け様に涼介の前にビールを置いたスタッフは、二人に尋ねた。

「……………」

涼介はまゆみを待っていた。

「……………」

まゆみはメニューと向き合っていた。

「もう少し待って貰えますか？」

涼介はまゆみの意思を尊重する為に、スタッフにそう告げた。

「かしこまりました。」

「すみません……………」

まゆみは去り行くスタッフに会釈をした。

「…………じゃ、乾杯しよう。」

涼介は煙草を消した。

「うん。」

「それ、何て言うの？」

「…………分かんないの。」

「なるほど。」

涼介はグラストップに派手な飾りとフルーツが溢れる程盛られているカクテルの名前を、まゆみが知らない事に“ほっ”としていた。

「じゃ、乾杯。」

涼介は自分のグラスを持ち上げた。

「……………」

まゆみは持ち上げ難そうにロンググラスを触っていた。

「……………」

涼介はまゆみを見つめる瞳の温度を下げながら、待っていた。

二人は流暢に言葉を放ち続けていた。

涼介は饒舌の端々で、まゆみを困らせたり、怒らせたり、笑わせ  
ていた。

まゆみは涼介が見せる予期しない新たな姿に楽しく裏切られ、満

足し、気持ちを高揚こじやうさせていた。

(・・・やっぱり違うのかな・・・)

涼介はそう思いながら三杯目のビールを飲み干した。

涼介は今夜、まゆみの素性を探り出す為に自分の“間”を放棄していた。そして折に触れ、話題の決定権や会話の結論をまゆみに譲っていた。

「涼介って呼んで良いって言ったよね？」

まゆみは、すでにそう呼び続けている事実をわざと横に置いて、あらためて問い掛けた。

「いいよ。」

「・・・嬉しい・・・。」

「そう？」

涼介はまゆみとの会話に、二人で何かを構築こうちくしたくなる様なモチベーションが生まれて来ない事を見つめていた。

「・・・結構飲んじやった・・・。」

まゆみは甘えた声で、涼介からの優しい言葉をねだった。

「そう？」

涼介は、溶ける様な声で呟いたまゆみはその言葉に優しい笑顔を向けながら、まゆみが望んでいる“涼介”を装よそおい切れなくなる前に店を変えるべきだと直感した。

「うん・・・。」

まゆみは充実感を表情に浮かべていた。

「・・・出ようか。」

涼介は更に優しい笑顔をまゆみに向けながら、雰囲気を見捨て、自分の擦ねじれた思いが露呈ろていする危険を避ける為に直感を即決した。

「・・・うん・・・。」

もう少しこの店で“涼介”を感じていられると思っていたまゆみは、少し意外だという表情を浮かべながらも、涼介に従った。

「・・・。。。」

涼介は静かに立ち上がり、ある意味二人の付き合いに結論を出せ

るセックス迄のプロセスを強かに考え始めていた。

「お待ちせ。」

涼介はまゆみにそう声を掛け、ハイアット・リージェンシー福岡の車寄せで待機しているタクシーに迷わず向かった。

「・・・ご馳走様でした・・・。」

先に“ル・カフェ”の外に出て、食事代の支払いを済ませ様としている涼介の姿をドアガラス越しに眺めていたまゆみは、涼介の後ろを追う様に歩きながら、“あの人と知り合いなの？”と、さり気なく質問をぶつけるタイミングを計っていた。

涼介は“ル・カフェ”を出る前に、近寄って来た若い男性スタッフと親しげに二、三言葉を交わしていた。まゆみはその姿をドアガラス越しに見ながら、涼介のプライベートを全て知りたいという思いを強烈に掻き立たせていた。

「シーホーク迄お願いします。」

涼介はタクシーにまゆみが乗り込んだ事を確認し、ドライバーにそう告げた。

(シーホーク?・・・涼介って意外と“べた”かも・・・)

最初のデートの時と同じ様に、シートに浅く座り直し、足を組んだ涼介をまゆみは横目で見た後、そう連想した。

(・・・ひよつとして態とクールにしているのかも・・・まさかデートコース調べてて、マニュアル通りだったりして・・・)

続け様にまゆみはそう連想し、隣に居る涼介からは窺い知れない一面を想像しながら、その一面に“可愛い”と微笑み掛けた。

「最上階のバーに行ってみようよ。」

涼介は落ち着いた声をまゆみに向けた。

「・・・うん。」

まゆみは二人の立場が一気に入れ変わり、主導権を手元に引き寄せられるかもしれない晴れやかさに心を躍らせていた。

タクシーはホテルオークラ福岡の前を通り過ぎ、西中島橋を渡ろうとしていた。

涼介は右手で頼杖ほおじえを付き、雑踏ざつとつを眺ながめていた。

「知り合い？」

まゆみの心は、涼介に対する好奇心を唐突とつとつに口に出せる程余裕が生まれていた。

「誰と？」

「さつき話してた人。」

「・・・何度か行ってるからね、顔覚えててくれたんだよ。」

「そうなんだ。」

まゆみは微笑んでいた。

「・・・どうしたの？」

涼介はまゆみの微笑みの訳を聞いた。

「え？・・・いや、そうだったんだって思って。」

「・・・知り合いの方が良かったの？」

「そうじゃないけど・・・。」

「・・・けど？」

「・・・いいの、ちょっと聞きたかっただけだから・・・。」

まゆみの心の余裕は、涼介がどんな女性と何度来たのか、強烈に知りたい直情を押し殺せる程になっていた。

「そう。」

「・・・。」

まゆみは含み笑いを窓の外に向けた。

「デートで使ったのは今日が初めてだよ。」

涼介はまゆみを見ずに、そう嘘を吐いた

「えっ？」

まゆみは涼介の言葉に含み笑いを消され、涼介の方に振り向く事を強制された。

「そういう事が聞きたかったんじゃないの？」

涼介は笑顔をまゆみに向けていた。

「そうじゃないけど……。」

まゆみは少し困っていた。

「……シーホークのバー行った事ある？」

涼介は一度視線をまゆみから切り、もう一度まゆみを見つめ、話題を変えた。

「……二、三回行ったかも……。」

「そう……。」

涼介は笑顔を見せていた。

「……。」

まゆみは質問の意図を理解していた涼介に混乱していた。

（……駄目だな、俺は……。）

涼介は街並みに視線を変え、嫌味な自分の心を責めた。

タクシーは昭和通りで渋滞に巻き込まれていた。

歩道には昼間の様に人が溢れていた。

「ね……。」

涼介は徐に座り直し、真顔でまゆみを見た。

「……。」

まゆみは再び指摘されるかもしれない凶星に構えた。

車内にはエンジンのアイドリング音だけが響いていた。

スモークガラスではないタクシーは、どの角度からも後部座席の様子が良く見えていた。

まゆみは、最初のデートの時と同じ様に惜しみなく唇を奪われていた。

（……ぬるいな……。）

涼介はまゆみを掬い伏せる長いキスで、自身の嫌味な部分に蓋を  
している事に辟易していた。

（まだかよ……。）

心の中でそう呟く涼介の前を、タクシードを来たスタッフが歩い

ていた。

二人は35階フロアに堂々と構えているバーラウンジの長い店内を、途中幾つもの心地良さそうなソファ―席を通り過ぎ、俯瞰すれば海に向かって矛先を突き付けている様に見えるだろう、シーホークホテルの先端部分に向かって延々と歩いていった。

「どうぞこちらに。」

スタッフは涼介に向かい、丁寧にそう言った。

(辿り着いたって感じだな……)

涼介は、その側面を窓ガラスに貼り付けている様な座り難そうな椅子と、車のハンドルぐらいしかない、頬杖も付けそうにない丸いテーブルが置かれた場所に案内された事に白けていた。

「飲み物お決まりになりましたらお呼び下さい。」

スタッフはそう言って、メニューをテーブルの上に置いた。

涼介は会釈しただけだった。

「綺麗ね。」

まゆみは夜景を見ていた。

「……そうだね……」

涼介は悶々とした気持ちを抱えたまま、無難な笑顔で夜景に目を向けた。

「涼介ってロマンチストなのね。」

「……そう……かな？」

ある種紋切り型の言葉でまゆみからそう評された涼介は、自嘲気味の声で否定も肯定もしなかった。

「そうだよ……だってこんなとこに連れて来るんだもん……」

まゆみは微笑んでいた。

(……ロマンチストか……)

涼介は無難な笑顔を作れているかどうか気になっていた。

涼介は望む望まないに関わらず、シーホークの最上階から見える

夜景と雰囲気をまゆみに贈ろうなどとは思っていなかった。

「……でも、女性にとつてはそっちの方が嬉しい。」

喋らない涼介にまゆみは微笑を重ねた。

「……………」

涼介は、無難な笑顔を作れているかどうか、気になっていた。

真下に見える砂浜には小さな波が寄せていた。正面には背の高いビルが何棟か並んで建っていた。

（……もう新鮮な驚きやときめきは無理なんだろうか……）

涼介はシーホークの最上階から見える夜景を眺めながら、横浜や東品川で享受して来た珠玉の夜景を思い起こしていた。

涼介は“夜景”を通して想い出と現在を戦わせるといふ自虐的な賭けに出ていた。そしてそんな傲慢な自分の態度を観照すれば、詰まる所当然の様に“現在”が賭けに負け、全てに於て想い出を越える事は無い“現在”という現実が身に染みる筈だと思っていた。そうすれば“現在”を象徴するまゆみへの思いに丁寧さが生まれ、まゆみの全てをもっと大切にしようとする筈だと思っていた。

（……………）

涼介は揺れ動こうとしない自分の心を客観していた。そして自分の行動が正解だったのかどうかを考えていた。

涼介は多くを望み過ぎている事を理解していた。受け入れるべきは目の前の現実だという事も理解していた。更に無い物ねだりは現実逃避者の烙印を押される事も理解していた。

まゆみは涼介を真似る様に夜景を見ていた。

涼介はずっと窓越しの夜景に顔を向けていた。

「お決まりですか？」

一人のスタッフが、二人の様子を伺っていたかのようなタイミングでテーブルの傍まで来ていた。

「決まった？」

涼介は我に返った。

「……………」

まゆみは開いていたメニューにゆつくり目を向けた。

「……すみません、もう少し待ってください。」

涼介にそう言われたスタッフは、必要以上の笑顔を二人に見せ、席を離れた。

「……決まったかい？」

涼介の声は優しくかった。

「んーと……、じゃあ、時が止まる様なカクテル。」

何度もメニューを捲り直していたまゆみが、突然顔を上げてそう言った。

「……そう……。」

涼介はまゆみに返すべき言葉を探せなかった。

涼介はまゆみが放った言葉と、その言葉に添えられた笑顔に、ある意味完璧に心を揺さぶられ、降参させられていた。そしてシーホークのバーだけでなく、まゆみにも白け様としていた。

(多分あの店でもそんな事をスタッフに言ったんだろっうな……)

涼介は“ル・カフェ”でまゆみが飲んでいたカクテルを思い出していた。

まゆみは微笑を涼介に投げ掛け続けていた。

「了解。」

涼介はまゆみのセンスを受け入れる事も、太刀打つ事も出来ず奈落の底へ落ち行く自分の心に鞭を打ち、笑顔でそう答えた。

「……。」

まゆみは嬉しそうに黙っていた。

二人の間には、重さの違う空気が流れていた。

「……。」

涼介は笑顔のまま喋らないまゆみにどうする事も出来ないまま左手を上げ、スタッフを呼んだ。

「じゃあ彼女にはアルコールの少ない甘くて綺麗なカクテルを。それと、マイヤーズをウィルキンソンで割って下さい。」

涼介は思惑通り賭けに負け、“現在”が身に染みていた。しかし涼介はまゆみの全てを大切にしようとする気持ちを湧き立たせる事無く、“現在”を冷静に受け止めていた。

(・・・この最上階でこんなにクールになるなんて、やっぱり思ったより普通の人のかもしれない・・・ホテルに誘う言葉でも探してるのかな・・・それとも、もうこのホテル予約してるのかも・・・)

まゆみは涼介が喋らないのはBARの雰囲気<sup>雰囲気</sup>に圧倒されているからだ<sup>と</sup>と洞察<sup>とくさつ</sup>していた。同時にもつと不思議な人であつて欲しい欲望に駆られていた。

(だったら今夜誘われても上手く断ろう。そして最高のタイミングで、次は小倉に行くから泊めてねって可愛く言ってみよう・・・) まゆみは涼介が握っていた恋愛の主導権が今夜自分の手中に収まると確信し始めていた。そしてその思いは、ポツポツと何かを喋る涼介に“意味深”な笑みを投げ掛けさせていた。

(時間余っちゃったな・・・)

涼介は全てに何かが足りない事に失望していた。

(俺が悪いんだな・・・原因は俺だ・・・)

涼介は物哀しい捨て台詞を心の中で吐きながら、何週間か後に迎えるだろうセックスの為だけに、過去に経験の無い憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な気分<sup>気分</sup>で世間話をまゆみの前に置いていた。

「・・・・・・・・」

涼介は自分の心と言動に辻褄<sup>つじつま</sup>を合わせられないまま煙草に火を点け、席を立つタイミングを見計らっていた。

(これからどうするのか・・・)

まゆみは会話の中で、涼介の心の中を見計らおうとしていた。

二人の会話にリズムは無かった。

お互いのグラスは空になつていた。

恋愛に順序など無いと考え、道無き道を這いずり回り、時に恋愛をゲームの如く捉え、人に言えない様な経験を幾度となく重ねて来た涼介という名のエゴイストは、路肩に綺麗な花が咲き乱れている遊歩道を散策する様な、健全な恋愛のスタイルを貫こうとしているまゆみに歩み寄り、心を開く事を諦めていた。

「・・・行こうか。」

涼介は煙草を消した。

「・・・そうね。」

まゆみは此処から先が勝負だと思つていた。

まゆみは涼介から何時、何処で、どんな形で魅力的なアプローチをされても、或いは癖のある言葉を投げ掛けられても、しかりキヤツチし、期待を持たせた優しい言葉で涼介を宥め、駅まで送つて行く心の準備を終えていた。

「・・・。。。」

涼介はテーブルの上のセブンスターをポケットに仕舞つた。

「・・・。。。」

まゆみはハンカチをバッグに仕舞つた。

涼介はシーホークのBARで二人が共有したのは時間だけだったと、自嘲気味に振り返りながら席を立つた。

まゆみは涼介がこれから先どんな行動を取るのか、期待しながら席を立つた。

涼介は何処か緊張している様な雰囲気や体を漂わせ、ずっと無言で歩いていた。BARの長いフロアを歩いている時も、エレベーターの中でも、シーホークホテル一階の広いエントランスを歩いている時も、涼介は何も喋らなかつた。

まゆみは余りにも長い涼介の沈黙に緊張し始めていた。それでも



( どうしよう…… )

まゆみは今夜自分なりに割り出して来た涼介像が、波に浚さらわれる砂浜のオブジェだった事を認識しながら、涼介との会話の端々(はしばし)で、“涼介”という人格の再構築を必死に試みていた。

(ほんとにどうしよう…… )

まゆみは涼介を掌握くわしよするどころか、恋愛の主導権に触れさせてすら貰えていない事にも気付き始めていた。

32歳独身というまゆみの現実には、多くの男性と簡単に接する事が出来る出会い系サイトをまゆみに泳がせていた。そして今迄の生活を続けていれば巡り会う事は無かつただろう涼介という人間に出会わせ、恋をさせていた。しかしその恋を愛に昇華させて行く時に必要な、男性に対するまゆみの洞察は余りにも幼な過ぎていた。

(ねえ・・涼介・・キスして・・お願い…… )

まゆみは根拠の無かつた自分の予測に今更ながら絶すつた。

(ねえ、お願い…… )

まゆみは、今、此处で涼介にキスをされて救われたいと思っ  
た。

まゆみの予測では、タクシーの中は涼介が突然真顔になり、最初のデートの時の様にキスをして来る場所だった。

まゆみは自己矛盾を混沌こんとんと心に抱えていた。そして懇願こんがんと挑発を瞳たなに携たえて涼介を見つめていた。

二人は新幹線の改札に向かう階段を昇っていた。

「じゃあ次は小倉で待つてるから。」

「うん……。」

まゆみは、タクシーの中でそんな話をしていた事を思い出して  
た。

「時間経つの早いな。」

「……そうね、ほんと早いよね……。」

「もっと一緒に居たかったんだけどさ。」

「うん・・・でも、今度小倉ですつと一緒に居れるじゃない・・・。」  
まゆみは何かに焦っていた。

「本当に昼間から来る予定なの？」

「だって・・・一緒に映画とか見たいし、それに涼介がどんな街に住んでるのか見てみたいし・・・小倉って行った事がないの、だから。」

「俺、実はあんまり昼間にデートした事がないんだよね。」

「だからいいんじゃない！公園とか歩いてみようよ！」

「そうなの？それは勘弁してよ。」

「いや！」

まゆみは何かに焦っていた。

「・・・ま、いいけど。」

「そうそう！ビデオ借りて見るっていうのもいいよ！」

「昼間っからエロビ？」

「もう！」

「まあ、それもいいな、煙草も吸えるし、エッチしなくなったらすぐ出来るし。」

涼介は立ち止まり、そう言ってまゆみに微笑み掛けた。

「もう。」

「エッチしたいでしょ？」

「もう、何でそういう事いうの！！！」

二人は改札口の横にある券売機の前で向かい合っていた。

「だって、ずっと一緒に居たいって事はそういう事でしょ？」

「もう、意地悪・・・。」

「・・・ちよつとこつち来てみ。」

涼介はまゆみの肩に手を掛け、改札口前の人溜まりから通路の死角にまゆみを誘った。

「何??？」

まゆみには涼介が何を考えているのかを考える余裕がなかった。

「キスしたい？」

「えっ！！」

「キスしたくない？」

「・・・でも・・・やだ・・・こんな所で・・・。」

まゆみは混乱していた。

涼介は真っ直ぐまゆみを見ていた。

向かい合う二人の横を、家路を急いでいるだろう人達が歩いていった。

まゆみは躊躇いを赤く染まった顔に出しながら、視界に入っているだろう通行人をまるで気にしていない今の大胆な涼介と、タクシの中でキスを強烈に懇願していた瞳にまるで気付かなかった涼介が、紛れも無く同一人物だという事実には怖さを感じていた。

「・・・。」

涼介は優しい瞳で、真っ直ぐまゆみを見つめていた。

「・・・。」

まゆみは俯いていた。

「・・・そう・・・じゃ、止めとこう。」

涼介は時間を動かした。

（もう・・・。）

涼介の心を掴んでいない事に焦り、切なく軋むまゆみの心は、畳み掛けて来る涼介の意地悪に対して既に焦がす物が無かった。

「・・・。」

涼介は困惑しているまゆみの瞳を無視し、まゆみの両肩に手を乗せた。

「・・・。」

まゆみの耳には周囲の雑音が届かなくなっていた。激しく脈打つ鼓動だけが耳に届いていた。

二人の傍を、家路を急ぐ人達が歩いていった。

涼介は音も無くまゆみの唇を滑らかに奪っていた。

まゆみは、涼介の大胆な行動は愛があるからだと自身に言い聞か

せていた。

「……………」

まゆみは涼介の唇が遠ざかった事を確認する為にゆっくりと目を開けた。

涼介は優しい笑顔を浮かべていた。

「……………」

まゆみは肩から力を抜く事を許されなかった。そして立って居る事を諦めた<sup>あきら</sup>い程、胸の鼓動に全身を支配されていた。

まゆみは涼介の笑顔に誘われるまま微笑もうとした時、再び唇を奪われていた。

深く強いキスだった

まゆみは焦げ尽くしていた自分の恋心が、涼介の野性に因<sup>よ</sup>って跡形も無く溶かされ様としている現実を傍観<sup>ぼっかん</sup>していた。そして今夜二人で過ごした時間の全てに於<sup>おい</sup>て、何一つ自分の意志で涼介の心を動かした物は無いという真実をはっきりと悟らされていた。

新幹線改札口の正面に掛かる時計は11時15分を指していた。

「じゃ。」

「気を付けてね。」

改札を抜ける涼介にまゆみは軽く手を振った。

改札を抜けた涼介は、まゆみの瞳に映る自分の姿を小さくさせ続けながら、その声に振り向いて左手を軽く上げた。

涼介の背中を見つめるまゆみの瞳は、明らかに愛しい人を見送る輝きを放っていた。

「……………」

涼介はもう一度振り向き、まゆみに軽く手を振った。

まゆみは嬉しそうに手を振り返した。

離れ行く二人の距離に漂う空気は、紛れも無く恋人同士の重さを含んでいた。

（最低だな……………）

まゆみに背を向けた涼介はそう吐き捨てた。それはまゆみとの最初のデートを焼き写したかの様な今夜の自分の行動に向けられていた。

15・・・素直さの放出

(・・・・・・・・)

涼介は一号車の窓側で煙草の煙を吐き出していた。

(今別れたばかりなのに・・・声が聞きたいよ・・・電話しちゃおうかな・・・)

涼介と奏<sup>かな</sup>でる未来を夢見る乙女心に体中を支配されているまゆみは、自宅へ帰るタクシーの中で、脳裏に焼き付いた涼介の残像に語り掛けていた。

(何であんな風になっちゃうんだろう・・・これで結婚するから金貸せって言ったら詐欺師じゃねえか・・・)

トンネルに入った新幹線の窓に映っている、虚脱感を漂わせた<sup>き</sup>気障な男の姿に涼介の心は語り掛けていた。

(・・・前の時は嬉しい事一杯書いてくれたメールが直ぐ来たんだけどなあ・・・)

例え一瞬で終わったとしても、恋愛の主導権を涼介から奪いたいと切なく願うまゆみは、自ら動くべきかどうかを迷っていた。

「しょうがない。」

涼介はそう呟いて携帯電話を取り出し、メールを作り始めた。

「しょうがないなあ・・・。」

自分が考える恋の駆け引きで、恋愛の主導権を一度だけでも涼介から奪う事を諦められなймаゆみは、そう呟いた。

(・・・・・・・・)

涼介は新幹線の中でメールを送信し、携帯電話をワイシャツのポケットに仕舞っていた。

(10分以内に必ず来る・・・)

まゆみは携帯電話を握ったままタクシーに揺られながら、涼介からの連絡を待っていた。

送信メール

お疲れ^^

明日俺ん家から仕事に行つて欲しいんだ。

逢いたい。

12:30には家に居るから。

エリカ            2003/09/27    11:35

(・・・・・・・・)

涼介は一度仕舞った携帯電話を取り出し、素直で正直な気持ちを打ち込んだ画面を見つめていた。

博多発最終の新幹線が到着した小倉駅のホームは、家路を急ぐ人並みが続いていた。

涼介は携帯電話を左手に持ったまま、ホームを歩く人の流れに身を任せながら、恋を知ったばかりの中学生の様な気持ちでエリカからの返事を待っていた。

涼介は今夜これから更に続く“今夜”を、エリカにずっと隣に居て欲しいと思っていた。

涼介は会社のあるテナントビルの地下駐車場から車を放り出す時、ずっと左手に携帯電話を握ったままだった。

(しかし土曜の夜なんだよな……。)

涼介は運転しながら、エリカが何処で遊んでいようと必ず連絡が入ると信じ、そしてそれが良い返事だと信じ、明日二人で食べる朝食の食材を買う為に、自宅近くにある行き付けのコンビニエンスストアではなく、堺町にある24時間営業のスーパーマーケットに寄ろうとしていた。

(頼むから電源だけは入れといてくれよ……。)

涼介は右手だけでハンドルを操作しながら何かに縋すがっていた。同時にエリカからの連絡が何時、どんな形で入って来ても対処する事を考えていた。

涼介はエリカが望むなら、例えばそれが明け方だったとしても迎えに行くつもりだった。

(……もう20分も経ってんのかよ……。)

涼介はエリカにメールを送信した時間と、現在の腕時計の針の位置を確認し、最悪、エリカに電話を掛ける事を考えていた。

(……!!。)

その振動は、不意打ちとなって涼介の左手から胸に伝わった。

(……。)

涼介は気持ちが一気にポジティブになって行く感覚を脈々と体に

走らせながら、メールの相手が誰なのか確認したい逸る気持ちを押さえ、冷静を装い、目の前に見えているスーパーマーケットの入り口附近に取り敢えず車を路上駐車させ様と、ハザードランプを点滅させた。

(.....)

涼介は縦列駐車をする為に後ろを見ながら、未だ安心出来ない現実が存在している事実、装った冷静を解除出来なかった。

(イエスでもノーでもいいから、お願いだからエリカであってくれ.....)

涼介は受信したメールを開く前に、久し振りに目に見えない“何か”に祈っていた。

受信メール

おつかれ っ！

いいね、それ

今日は何やってたの??

エリはさっきまで仕事だったんだ(・|・)

後輩のカットモデルしてた(+|+)

髪変わったよ 色も

シャープウルフのミディアム&アッシュ(^|^-)

ハズカシ f^|^;かも

じゃ、先にリヨウんち行ってるね

おなか空いちゃった！何か食べにいこ！(^|^)

エリカ 2003/09/27 11:55

(.....)

涼介は瞳をメール画面に釘付けたまま顔を綻ばせていた。

エリカのメールは涼介が伝えたかった情熱を理解していた。そして涼介への愛情を照れながらも伝えていた。

(.....そうか、ヤツは飯を食ってないのか.....)

涼介は目の前のスーパーマーケットに何故か感謝しながら、自然と湧き出る想いをメール画面に伝達し始めていた。

送信メール

( ^ | ^ )

髪型変わった!?

また一段と可愛く&色っぽく

なったって訳だね。

やるじゃん (^ | ^ )

メシはさ、俺が何か作るよ。

家でビールを“クイツ”ってのはどう?

エリカ            2003/09/28    0:04

エリカは今が旬だった。時代を力強く生き抜く為の術を自身の体中に覚え込ませるかの様に、仕事も遊びも恋愛もタフにこなしていた。

エリカが操る術の中には、例えば好きな人との関係が恋人同士なのかどうか曖昧な時期であっても、“私たち別れよ”と明るく切り出せる様な、ある種独特な自己完結の感覚が組み込まれていた。エリカの持つそんな感覚は、時代を嘆く大人達にしてみれば“無知で世間知らず”であり、自由の意味を履き違えている幼稚な行動だと決め付けられ兼ねなかった。しかしその感覚は、大人達が多感な時代に過ごして来た時代の儀式やお世辞に合理性や利便性を感じない世代の、退化している様で実は進化し続けている、生き抜く事に対するの抑圧に惑わされまいとする素直な情熱かもしれない。涼介はそんなエリカが創り出す、客観的には魅力としか言い表せない素直さに、恋愛に関する神経が束になっっている部分を強く刺激されていた。

(.....)

涼介は装う必要の無くなった“冷静”を穏やかに身に纏い、返っ

て来るだろうエリカからの返事を待つ事の心地良さを満喫まんきつしていた。車内にはスーパーマーケットから放たれる光が助手席まで届いていた。そしてその光は助手席に置かれた携帯電話を浮かび上げさせていた。

(・・・おっと、早いな・・・)

涼介は携帯電話を光らせ、振動させている相手がエリカだという事に疑いを持っていなかった。

受信メール

ウンウン！

ビール飲みたかったんだ(^^)

じゃ、待ってるね！

エリカ            2003/09/28    0:08

(・・・)

涼介は合鍵の存在にも改めて感謝していた。そして涼介は合鍵の持つメリットを最大限享受さいだいがんきょうじゅした様な至福しふくに浸ひたっていた。

やっと夏本来の暑さを取り戻していた8月最後の金曜日、二人はたまに顔を出す焼肉店で夕食を取ろうと魚町アーケードを歩いていた。

「合鍵作つてよ。」

エリカはそう言つて涼介を見上げた。

ザボビル前の歩行者用信号は赤だった。

二人は歩く速度を緩めていた。

エリカは組んだ腕を解ほどかないまま涼介の返事を待っていた。

二人の正面には、大きな鍵を象かたどった広告看板が夜空を突き刺さす様に飾られ、ネオンの光で輝いていた。

「いいよ。」

涼介は広告看板を見ながらそう言った。

「やったあ！・・・じゃ、行こー!!」

エリカは嬉しさを体中に走らせていた。

エリカの足取りには迷いが無かった。

涼介はエリカに左手をぐいぐい引つ張られながら、アーケードの中を少し早足で歩かされていた。

「やったねっ。」

エリカは出来上がった合鍵をキーケースに掛けて、嬉しそうに涼介の目の前で揺らしながらそう言った。

キーショップを出た二人は、ゆっくりとアーケードを歩き始めていた。

「お前はあの店で合鍵を何本作ったんだ？」

「・・・ナイショ!!」

エリカはそう言って涼介の腕に組み付いていた。

「・・・なるほど。」

涼介は笑っていた。

「ね、和食にしよう。」

「何だよそれ・・・日本酒飲みたくなっちゃったのか？」

「うん！」

(・・・・・・・・)

エリカに連れられて合鍵を作った時の事を思い出しながら軽やかに運転していた涼介の胸は、恋愛に必要不可欠な“ときめき”を充滿させていた。

助手席では食材の入ったビニール袋が揺れていた。携帯電話も助手席で揺れていた。

涼介は車の振動を心地よく全身で受け止め、エリカに思いを馳せていた。それはまゆみとのデート中に余儀なくされていた自己嫌悪が闇に葬られている事を意味していた。そしてその事実は涼介が自分らしくある為に培い、常に纏っていたスマートな雰囲気も涼介に呼び戻していた。

(長いのか短かいのか、不思議な夜だな……)

涼介はビニール袋を左手に提げ、自宅マンションの駐車場を歩きながら、“時間”という、それを感じる人間の心一つで、その長さやがどうにでも決まる概念に翻弄ほんろうされていた今夜を振り返っていた。

「魔力持つてるよな。」

涼介は約束の時間を15分程過ぎている事を腕時計で確認した後、そう呟つぶやいて愛しい女性が待っている部屋に急いだ。

(ん?……)

涼介はその振動を、マンションのエントランスで感じていた。

(誰だろう……)

涼介はワイシャツのポケットの中にある携帯電話に手を伸ばさず、歩く事も止めず、エレベーターの前でメールの送信者であって欲しくない女性の顔を頭の中に並べ始めた。

(……)

涼介は血流を思考回路に送り込みながら、メールを開いた。

受信メール

今どのへん??

エリカ 2003/09/28 0:44

(……参ったな……)

涼介は、ぬるい算段をしていた自分に対する言い訳とも取れる思いを口にした。そして涼介はその算段の対象として頭に並べていた女性から逃れる様に、エレベーターに乗り込んだ。

(しかし最高のタイミングだな・・・。)

涼介は、ある意味自分の醜い素性を再認識させてくれたエリカにだけは、誠実で素直な自分を放出したいと思っていた。

(・・・。)

涼介はキーケースから鍵を取り出し、玄関ドアの前で立ち止まっていた。

涼介はインターホンを押すべきかどうかを考えていた。

「お帰りっ。」

「お疲れ。」

内側から開いた玄関は、エリカの弾ける笑顔と、外気より少し暖かい空気を涼介に届けた。

「どう？髪・・・変??・・・」

エリカは涼介のサンダルを突っ掛けたままポーズを取った。そして茶目つ気たつぷりにその場で一回転した。

「・・・やるじゃん。」

「良かったあ！」

エリカは喜んでいた。

「似合ってるよ。」

「うれしっ。」

二人は玄関ホールに立ったまま会話で戯れ付いていた。

「・・・そうだなあ、そっちの方が透明感のあるキャバクラ系って感じかな。」

「あら？褒めといて喧嘩売んのね。」

「違うさ、最近のキャバクラは可愛いくてお洒落で上品な奴しか働けないんだぞ・・・ん?・・・」

涼介はエリカの瞳に力が入っている事に気が付いた。

「・・・何時行つたの？」

「・・・さつき。」

「また口説いたんでしょ？」

「口説きやしないけど・・・ホテルに誘われたかな。」

「あーそう、ふーん・・・うわつ、何作んの!？」

エリカはもつと何か言いたそうな顔で涼介を見ていたが、そんな事はもうどうでもいいかの様な変わり身の速さで、涼介の持つビニール袋を覗き込んだ。

「・・・。」

涼介はそつとビニール袋を床に置いた。

「ねえ、何つ・・・くん・・・」

「・・・。」

涼介はしゃがみ込んでいるエリカの両腕を掴んでゆつくりと体を起こし、エリカが喋れなくなる程強く抱きしめた。

「・・・くる・・・しーしーよーつ・・・。」

エリカの右の踵かかとは浮き、左足は爪先が揺れ、左の頬は涼介の胸に埋うもれていた。

涼介はエリカの髪から洩もれる上品な香りに抱かれていた。

エリカの足から離れたサンダルの片方は、涼介の足元で裏返しに転がっていた。

「くるしーつ。」

エリカはそう言いながら涼介の背中を叩いた。

「ごめんごめん。」

涼介は腕を解き、我に帰った。

「もーつ。」

エリカは少し口を尖らせていた。

「ごめん、悪かったよ・・・。」

「・・・嬉しいんだけど・・・強く抱き過ぎだよ・・・。」

エリカは幸福感を敢あえて隠す様な瞳で涼介を見上げた。

「エリ。」

「・・・？」

「お詫びにキスしてよ。」

「何それ、どーゆー事!？」

「やなの？」

「やだ。」

「あ、そう・・・。」

涼介はそう言って、エリカに優しいキスをした。

涼介はエリカを抱きしめながら魅力的な女性だと改めて思っていた。  
た。

エリカは涼介のキスに、心をときめかせていた。

「何か結婚してるみたいだね。」

エリカはダイニングテーブルの上に食材を並べながらそう言った。

「それってプロポーズして欲しいのかな？ある意味。」

リビングでネクタイを外そうとしていた涼介はそう答えた。

「ははっ、それってプロポーズしたいのかな？ある意味。」

「・・・別に。」

「あら、残念。」

エリカは涼介に笑顔を向けて、肩を少し窄めた。

「・・・エリ、俺達相性いいと思う？」

涼介はエリカの居るキッチンへ歩きながらそう言った。

「いいよ。」

エリカは素直だった。

「・・・だって、さっきメールが来た時嬉しかったもん。リヨウに逢いたいなあって思ってたんだよ、何してんのかなって。そしたら来たじゃん。うわっ、こんな事あるんだ!って。・・・あー、リヨウも今私の事考えてくれてるんだなあって、嬉しかったもん。」

エリカは食材を包装しているビニールを丁寧に剥がしていた。

「・・・。」

涼介はエリカの横顔を見つめながら、自分が恋や愛を考えた時に使う多くの表現より、その深さも厚さも、重みまで凌駕りょうがしているエリカの言葉に心を揺さぶられている事を実感していた。そして素直と言うのはこういう感情を指すのだと気付かされていた。

「だってさ、さゆりに仕事終わったら御飯食べに行こうって誘われてさ、それに今日は何時もエリを指名してくれる・何だっけな、メルローズで店長してるって言ってたかな・結構イケメンなんだけど、その人から飲みに行こうってしつこくメール入って来るし、どうしようかなあ、お腹空いてるし、どっちに行こうかなあって考えててさ・後10分りヨウのメール遅かったら、会えなかったかもだったんだよ・取り敢えずさゆりには何とか言ってみようん家に来たけどね。」

シンクで食材を洗い始めていたエリカは、独り言の様に喋っていた。

「サンキュ。」

「うわっ、びつくりした！」

エリカは真後ろに居た涼介に思わず身をひるがえ翻した。

「お疲れ。」

涼介はそう言ってグラスに注いでいた白ワインをエリカに渡した。

「・・・ありがと。」

右手でグラスを手にしたエリカは、左手で胸を押さえ、笑った。

「しかしそのイケメン君と飯を食ってる途中だったとしても、15分後には会えたる？」

涼介は態わざと得意げにそう聞いた。

「・・・どうかな・・・。」

エリカは微笑んでいた。

「・・・それじゃ、乾杯って事で。」

涼介は穏やかな表情でエリカの右手にグラスを近づけた。

「了解っ。」

エリカはそう言ってグラスを鳴らした。

「了解？」

「・・・たまにはいいじゃん・・・リョウの口癖が移ったんだよ。」  
エリカは笑っていた。

「なるほど。」

涼介は邪な物よしまが何も無い、素晴らしい時間をエリカから享受もちうけしている事に微笑みながらグラスに口を付けた。

「・・・美味しいね。」

「だな。・・・なあ、エリ、バルサミコとオリーブオイルをよく掻き混ぜてくれないか。」

「OK！」

「ガーリックライスはいらないよな？」

「食べる食べる！」

涼介はソファを背凭れにし、エリカは涼介をクッション代わりにし、二人は縦に重なっていた。

(本当にエリカと結婚すんのかもしんないな・・・。)

涼介は食後のゆったりとした時間の中、足を投げ出してテレビを見ているエリカの髪を手櫛で梳かしながら、ふと、そんな事を考えていた。

(・・・。)

涼介は考え始めていた。

涼介は“出会い系サイト”という世の中に溢れるデジタルコンテンツを柔軟な姿勢で吟味しようとせず、先入観だけで評価を下してしまう、ヒエラルキーの中で生きる事を強いられた世代が、恋愛を見つける手段に善悪など無いと考える捌けた世代の行動力に嫌悪感を抱き、抽象的な懐古主義的論理だけを頭ごなしに振り翳す事の不条理を考えていた。

(・・・一昔前迄は外出しないと恋に出逢えないのが主流でさ、その流れは永遠に変わらないんだろうけど、それが全てで、本流だとする世代の経験の押し売りは、新しい価値基準を無意識に模索している世代に、げんなりとした温度差を感じさせちゃうんだよな。例外もあるけど、世の中は何時の時代も多数派が作り出す結果からの逆算で道理が成り立ってる訳だし・・・。

時代は人に遅しく生きる事を強要し始めてんだよな・・・どんな

恋愛にもリスクはあるし、当事者同士の心一つでどうにでもなっちゃう訳だしさ……。

……恋愛は車の運転に似てんのかもしないな……ほっとくと故障しちゃうし、気を付けててもトラブルに巻き込まれちゃったりするし……しかしさ、恋愛には保険が無いんだよ、まあ、ある種保険みたいな物を掛ける事は出来んだけど、結局それは恋愛を冒険する方の保険だし、それって相手の心を切り刻む裏切り行為だもんな……。

恋愛の正解は一つじゃないし、百組居れば百通りの正解がある訳だから、一人で百回恋愛すりゃ百回ともある意味正解かも知んないしさ……。まあ、結局どの正解も永遠に不安定なんだろうけど、出会い系サイトが廃れて行く事は考え難いな……。)  
涼介はエリカの髪を何となく梳かしながら、心の中で漫然と独り言を続けていた。

「きやははははーっ！」

エリカは涼介を背にテレビを見ながら笑っていた。

「……………」

涼介はエリカの奔放な愛情に包まれている事を実感していた。

涼介は携帯電話やパソコンを媒介して成り立つ、合理的に恋愛や快楽を追求出来る商品は、恋愛が人間としての本能であり、生きる上でのテーマである限り、計り知れない魅力が需要する側に存在し続けると思っていた。そしてその商品が流行り物ではなく、人間の心理に根付いた本物であるとするならば、近い将来何らかの形でそんな商品に法律で枷を嵌めたとしても、趣向を変え、或いは地下に深く潜り、逆に希少価値という、無い物をねだろうとする人間の欲求に付け入る付録を付け、今以上に媚薬の香りを漂わせながら生き続ける事は確実だとも思っていた。

「きやははっ！さまあ〜ず面白いよね！」

「だよな……さまあ〜ず好きなの？」

涼介はエリカの問い掛けに、具体的な現実呼び戻された。

「うん。．．あと中居君。」

「やるじゃん。」

「リヨウも好きなの？」

「そうねえ、いいねえ、大竹。あいつは好きだなあ。」

「ふーん。」

「さまあゝずはバカルデイの頃から好きだよ。中井君はさあ、バラエティのMCやらせたら、今、NO2だな。」

「．．トップは誰？」

「今田耕司って知ってる？」

「ふーん、やるじゃん。」

「．．誰が？」

「中居君と今田君。」

「俺じゃあないのかよっ！」

「ははっ、そつれて三村？」

「どう？」

「似てねーっ！」

振り向いていたエリカはそう言った後、体を元に戻し、左手に持っていた食べ掛けのプレッツェルを涼介の顔の辺りに差し出した。

「．．．．．」

涼介は手を使わずに銜えたプレッツェルの先でエリカの左の頬を突付き、エリカをもう一度振り向かせた。

涼介は両端からプレッツェルを食べ合うという、恋人同士でもなかなか出来ない様な恥ずかしい行為を平然とエリカに試みた後、甘いキスを楽しみ、続け様にエリカを困らせ様としていた。

「なあにい．．もう．．やらしい．．感じちゃうじゃん．．．。」

涼介の左手は、エリカの右の胸を優しく掴んでいた。

「もう．．やーだっ．．てば．．．。」

エリカはそう言って体をくねらせた。

涼介はエリカからその言葉をもっと引き出そうとするかの様に、

右手もニツトの中に入れた。

涼介の右手はエリカのブラをずり上げ、エリカの柔らかい左胸は涼介の思いのままになっていた。

「照れ……る……。。」

エリカは瞳を潤ませて涼介を見つめていた。

涼介は左手もニツトの中に入れ、唇をエリカの耳元に寄せた。

「あつ……。。」

エリカは涼介が走らせる刺激に耐え様と、テレビの方に投げ出していた両足を体の方に引き寄せた。

エリカの両腿にフィットしているウールのスパッツは、エリカの綺麗な足を、より長く見せていた。

涼介はエリカの震える様な吐息で本能に火を点けられていた。

エリカは涼介に胸を晒され、仰け反らされていた。

「……。。」

涼介は右手をエリカの敏感な部分に伸ばした。

「ああ……。。」

エリカは両腕を涼介の首に回し、潤んだ瞳を涼介に向け、恥ずかしさを吹っ切る為にキスをせがんだ。

エリカは涼介のキスに因って体中に潤いを増していた。

涼介はキスに因って滑らかさを増したエリカの体を優しく攻めていた。

二人は理性を解き放とうとしていた。そして情熱のあり方を大胆に堪能しようとしていた。

捲れあがったニツトとブラの直ぐ下で、エリカの胸が美しさを放っていた。

エリカの左の足にはスパッツとパンツが絡まったままだった。

目を閉じているエリカの唇は薄く開き、甘く切ない声を漏らし続けていた。

明るいうりビングでの、奔放な時間だった。

小癪こじやくで生意気を言う時のエリカとは違う純なエリカが、涼介に体を激しく突かれていた。

センターテーブルの上には、二人で作った食事と白ワインが少しづつ残っていた。

テレビの中では“さまあゝず”が笑っていた。

重なり合う二人の横でエリカの携帯電話が震えていた。

二人は秩序ちつじょやルールを越えて融合していた。

リビングのブラインドは、外の暑さを物語る様な強い日差しを受け止め切れず、光を部屋の中に孕<sup>はら</sup>ませていた。

(・・・)

12時前に目が覚めた涼介は、今朝エリカがドリツプしたであろうコーヒーをダイニングで飲みながら新聞を開いていた。

エリカは時間の限られた朝を象徴するかの様に、寝室のナイトテーブルやリビングの至る所にアクセサリーやグルーミング道具を置いたまま出掛けていた。しかし昨夜、食後そのままだったセンターテーブルの上の食器類は綺麗に片付けていた。

エリカは程好く息の詰まらない気遣いの出来る、自立という感覚を上手く表現出来ている女性の特徴を備えていた。例外なく男性はそんな特徴を持つ女性に愛しさを募らせた。当然涼介も、エリカに対する愛情という尊敬の念を日々大きくしていた。

(さてと・・・?・・・)

涼介はシャワーを浴びようと立ち上がったが、視界に捉<sup>とら</sup>えた予期せぬ物<sup>モノ</sup>に体の動きを止められていた。

涼介はシンクの横で逆さまに重ねられた食器類の傍<sup>そば</sup>に、居なくなつた主<sup>あかし</sup>を探しているかの様に光を屈折<sup>くっせつ</sup>させているリングを見つけていた。

(・・・あいつらしいな・・・)

涼介はリングを手に取り、慌しかっただろう今朝のエリカの姿を瞳<sup>ひとみ</sup>に浮かべていた。

シャワーを浴び終えた涼介は、部屋の空気を入れ替える為に全ての窓を開け放っていた。

青い空は高く吹き抜けていた。ベランダから流れ込む風は日差し程重くなく、秋が直ぐ近くまで着実に来ている事を告げていた。

### 受信トレイ

<未開封> まゆみ 2003/09/28

11:20

<未開封> エリカ 2003/09/28

8:45

(.....)

涼介はコーヒーマーカーに残っていたコーヒをマグカップに入れた後、何気なくチェックした携帯電話の受信トレイにあった二通のメールを開くかどうか考えていた。

涼介は最後に窓を開けた寝室から出る前に、昨夜自宅に戻って以来一度も触っていなかった携帯電話をハンガーに掛かったワイシャツのポケットから取り出し、金曜の夜からベッドの脇に置きっ放しだったドキュメントバッグを持って、ダイニングテーブルに置いてあるパソコンの前に座っていた。

ドキュメントバッグの中には、明日の月曜日に行われる会議に必要なレポートを完成させる為の資料が入っていた。

(.....)

涼介は煙草に火を点けた。そして涼介は再度受信トレイの画面を眺めながら、仕事を終らせる前にメールを開封しても、レポートを作成する集中力を維持する自信があるのかどうか、自分に問い掛けている。

受信メール

おはよー いつまで寝てんの〜っ!!

今BUSの中だよ( ^ | - ) -

コーヒー作り過ぎちゃったから飲んでね

あのさ、リヨウって私の事好き以上でしょ! ( ^ | ^ )

・・・ん?何?・・・聞こえない!・・・ ( ^ | ^ ) (

^ | ^ ) ! ! !

やっぱりね!

エリカ 2003/09/28 8:45

受信メール

昨日は有難う( ^ | ^ )

もつと一緒に居たかつたねf ^ | ^ ;

今日は何してるの?

ずっとメールが来ないから、

何だか心配になっちゃった・・・。

ひよっとして仕事中?

まゆみ 2003/09/28 11:20

( ..... )

涼介は携帯電話をテーブルの上に置き、漫然まんぜんとパソコンの電源を入れた後、立ち上がった。

( ..... )

涼介は開け放たれている窓を閉める為、部屋の中を歩きながら考えていた。

( ..... )

キッチンに戻った涼介は、立ち上げていたパソコンにネットワークパスワードを打ち込み、会社のパソコンに保管してあるデータに

アクセスした。

涼介は部屋の中を歩きながら、明日の月曜日、新規事業に関する企画会議に提出するレポートの概要をイメージしていた。

(・・・・・・・・)

涼介は会議用資料を液晶に表示する前に、パソコンに届いているだろうメールを確認した。

十通近く受信していた業務メールの中に、恭子からのメールが二通あった。

(・・・・・・・・)

涼介は恭子からの業務メールを読みながら、エリカとまゆみの事を考えていた。

(ふつつ・・・・・・・・)

後回しにした他の業務メールを読み終えた涼介は、大きな息を一つ吐いた。

涼介の頭の中には、三人の女性の姿が居座っていた。

(・・・・仕事だ仕事・・・・)

涼介は再び全ての業務メールをチェックし始めた。

涼介はマウスを動かしながら、企画開発部の課長代理として軽んずる事の出来ない責任の下、プロジェクトに参画している部下をチームとして結束させる統率力を発揮し、新規オープンするレストランを優良店舗として軌道に乗せる使命を担っている事を自分に言い聞かせていた。

パソコンに届いていたメールは、恭子を含め、全て来春オープンするレストランに関するものだった。

涼介の会社は、2004年3月、小倉北区大手町にイタリアレストランをオープンする予定だった。

涼介はマーケティングに関する全ての情報の処理や店舗運営に関する人事、スタッフ教育の段取り、関連業者との折衝、店舗のデ

ザインやメニューの選定、広告のレイアウトや備品のチェック、関連グッズの手配や日程の管理、新店舗をアピールする為のイベントや横浜本社で行うプレゼンテーションの為のソフト作成など、プロジェクトのリーダーとして一つ一つの業務を統括し、確実に処理して行かなければならない立場にあった。

涼介は横浜本社復帰を諦めていなかった。故に涼介はプロジェクトの指揮を執る役割を上層部が自分に与えてくれた事に感謝していた。

涼介はチャンスを与えてくれた上層部が、百万の立派な能書きよりも雄弁な、たった一つの結果を自分に求めている事を理解していた。そしてその結果に因って失っている中間管理職としての信頼を取り戻し、横浜本社復帰という3年越しの念願を論理的に自分の手で現実の物にせよという、暗黙の叱咤激励を受けている事も理解していた。

(.....)

涼介はパソコンに届いていた業務メールを全て読み返した後、考え始めた。

涼介は明日の会議の為にプロジェクトの進行状況を全て掌握し、俯瞰し、検証して置く必要があった。

ダイニングテーブルの上には携帯電話があった。

明日の会議には支店長も顔を出す予定だった。

涼介はミスが許されない状況を理解していた。

「まったく.....」

涼介は仕事に集中出来ていない自分に呆れながら、恭子からのメールをもう一度読み返す為に、マウスに手を掛けた。

恭子から届いていた一通目のメールには何枚かの写真やグラフのクリップと共に、大手町にレストランをオープンする必然性を説いたロジックが書かれてあった。二通目には10月10日に行われるプロジェクトの中間報告を兼ねた部署間の親睦会の概要が書かれていた。

恭子は一通目の最後に“最近食事に誘ってくれないんですね”と書いていた。二通目の最後には“佐久間課長代理は一次会ですぐ抜けちゃうから、今回は最後まで付き合って下さい”と書いていた。「ぬるいな……」

涼介は仕事を後回しにした自分にそう一言吐いて携帯電話を手を取った。そして新たにコーヒードリップする為に立ち上がった。

(……………)

涼介は芳醇なコーヒを味わいながら、恭子が二通目のメールに記していた、“最後まで付き合って下さい”の言葉に隠されているだろう意図を考えていた。

恭子は涼介の部下だった。涼介が小倉に戻って来た1年後、恭子は新卒で入社し、6ヶ月間の実務研修に出た後、企画開発部に配属されていた。

恭子は管理職らしい仕事振りや、管理職らしからぬ気さくな態度を時折見せる涼介の人柄に惹かれていた。

恭子は涼介との接触を重ねる内に、自身の魅力で涼介を振り向かせ、独り占めしたい欲望を心に秘める様になっていた。

恭子は世代を超えて持てる女性だった。それは恭子の恋愛を何時も男性を選ぶ側に居させる事となっていた。そしてその事実は、言い寄って来る男性に対して、“自分はそんなに簡単な女ではない”という戦術を身に付けさせる事に繋がっていた。

恭子の男性に対する理想と要求は遠慮なく押し上がっていた。涼介はそんな恭子の前に現れた、何処か距離を置いている様な眼差しで見つめて来る最初の男性だった。

恭子は涼介の洗練された行動や落ち着いた物腰に、激しく心を突き動かされていた。

恭子は恋をしていた。その恋はある意味恭子の素直な部分を引き出していた。故に恭子は涼介との関係が今年の2月、ベッドを共にして以来進展していない事に焦っていた。

(.....)

涼介は恭子の誘いに乗ってみようかと考えていた。

恭子はその行動に“切れ”のある、頭の良い女性だった。甘える事や人任せにする事を嫌う性格でもあった。仕事に対する負けん気が強く、プライドも高かった。それは隙すきの無いファッションやスタイルの良さにも表れていた。

(俺の恋愛は何処に行こうとしてるんだろう.....)

涼介はパソコンの画面をおぼろげに捉えながら、女性に対してけじめの無い自分が何時か支払う事になるだろう代償の大きさを考えていた。

(.....先ずは恭子からか.....)

涼介は心でそう呟き、コーヒーを一気に飲み干した。

..... Original Message .....

From: 佐久間 涼介

To: 岡部恭子

Sent: Sunday, September 28, 2003, 01:45 PM

Subject:

お疲れさん。

資料、的を得たい内容だったよ。

簡潔になってるしね。

一つ、

岡部が店のコンセプト作りの為に気を使った

ディテールがあったじゃん、

何故そこに拘ったのか、

理由を抽象的でもいいから言葉にしてみてもよ。

出来るだけ数多く。

考え方としては付加価値をつけるイメージだね。

余り難しく考えない様にな。  
岡部らしさが重要だから。  
それと、

週末はなるべく付き合おうよ。  
じゃ、明日。

- - - - - Original Message - - - - -  
n d - - - - - E

涼介は続け様にまゆみにメールを送信した。

- - - - - Original Message - - - - -  
From : 佐久間 涼介  
To : 松岡まゆみ  
Sent : Sunday , September 28 , 2003 , 01 : 51 PM  
Subject :

おはよう。

さつき起きたよ。

昨日は帰りたくなかったんだよ、実はf^|^ ;

今週末は小倉に来るんだっただね、

楽しみにしてるよ。

心配しなくていいよ、

結構夢中なんだから(^|^)まゆみに。

今日はさ、これから仕事なんだ。

そんな感じかな。

- - - - - Original Message - - - - -  
n d - - - - - E

(・・・。。)

涼介は考えていた。

涼介はエリカへ送信するメールの文面を、ゆっくりと時間を掛けてイメージしていた。

- - - - Original Message - - - -

From: 佐久間 涼介

To: 芳野エリカ

Sent: Sunday, September 28, 2003, 02:06 PM

Subject:

おはよう&お疲れ。

今、オレの事考えてたろ？

エッチなヤツだな^^

今朝起こせば良かったのに。

ま、エリカの優しさで良い目覚めだったし、

コーヒーも美味かったし。

やるもんだね(^-^)

そんなにオレを好きにさせてどーすんの？

仕事頑張れ^^

- - - - Original Message - - - - E  
nd - - - -

(・・・暑いな。)

涼介はエアコンのスイッチを入れる為に立ち上がった。

パソコンの画面は送信済みアイテムのページを映し出していた。

ダイニングテーブルの上には会議用資料が散らばっていた。

資料の上には、エリカのリングが置かれてあった。

10月10日金曜日の夜、魚町店が企画したオリジナルデザートフェアを紹介する広告の打ち合わせの為に、涼介は部下の広山と豎町まちにある広告代理店に居た。

涼介は広告への拘りこたわが人一倍強かった。あらゆる場所に於いてあらゆる人々に接触する最初のきっかけとなり得る広告は、その会社の資質やセンスが問答無用で問われる部分だと涼介は思っていた。それ故に涼介は、広告代理店から提示された各パーツのレイアウトやキャッチコピーの決定には、スケジュールに捉われる事無く時間を掛けていた。

「スイーツって言葉をどっかに入れといてね。」

「・・・どの辺りが指示してもらえませんか？」

会議室のテーブルの上には、コンテンツや色合いの違う広告の叩き台が散らばっていた。

「美味しそうな所に入れてよ。」

「・・・佐久間さん、何時もそうなんだから。」

担当者は笑っていた。

「だって、それを俺が決めたら意味無いじゃない。」

「まあ、そうですね。」

「手を抜いたら次は無いよ。」

「きびしっすね、分かりました。」

「何故そうなったのか説明して貰もらうからね、じゃないと納得も手直しも出来ないから。」

「分かりました。」

「じゃ、来週の水曜日、5時にウチで。」

涼介はそう言っただけの打ち合わせを締めた。

広山は涼介の隣で予定表に忙しく何かを記入していた。

会議室の壁に掛かっている時計は、午後7時30分を指そうとしていた。

「課長代理、打ち合わせが終わったら直接店に来てって部長が言うてるらしいんですけど。」

広山は会議室を出てエレベーターに向かう途中、打ち合わせ中に恭子からメールを受信していた事と、その内容を涼介に告げた。

「・・・大手町用の備品リストがき、全部仕上がってるかどうかチェックしてから行くぞ。」

涼介は今日中に終わらせて置きたい仕事の事を考えていた。

「あつ、すみません、そのリスト、岡部が全部仕上げて部長のサイン貰ったって、メールに書いてました。」

「マジか？」

「はい。課長代理に報告しといて下さいって書いてました。ほんとうすみません、忘れる所でした。」

「そう・・・。」

涼介は何かを考えている様な顔で広山に返事をした。

二人はエレベーターの前に立っていた。

二人はすでに部署間の親睦会に30分遅れていた。

「・・・でも一度会社に帰ろう。・・・歩いて行こう。どうせ15分も変わんないんだから。」

「・・・そうですね。」

「広山、場所知ってるよな？」

エレベーターの扉が開いた。

「はい。」

「堺町ぐらいだろ？」

「そうです。」

二人は自身の体を着実に車に近づけながら会話を続けていた。

「じゃあ決まりだな。」

「分かりました。」

「広山、帰り運転してくれ。」

「はい。」

「代理、明日から三連休ですね。」

広山は運転席のドアを開ける前にそう言った。

「そうだな。」

「何処か行くんですか？」

「どうして？」

涼介はそう言って助手席のドアを開けた。

「・・・いや、代理は三連休あったらどんな休日をごすごすんだろうなあって、単純に。」

運転席に座った後、広山はその質問をしながら車のキーをイグニッションに挿した。

「普通だよ。」

涼介はそう言って助手席のドアを閉めた。

「その普通に興味あるんですね。」

広山はエンジンを点火し、ギアをリバースに入れた。

「・・・そう言えば広山、明日から食の祭典じゃないか。」

「そうなんですよ。」

「・・・しょうがないな、持ち回りだしな。」

「結構疲れるんじゃないかって思ってるんですけど・・・本社の人間余り知らないし、部長と一緒にだし。」

広山は車を駐車場から出す為に、ハンドルを切り返していた。

「・・・。」

涼介は広山の言葉を拾わずに、広告代理店での打ち合わせ中に受信していた二通のメールを開こうとしていた。

「・・・代理とだったら楽しかったんでしょうけどね、横浜地元み

たいなもんでしようし。」

広山は喋らない涼介にそう言葉を付け足した。

車は旧電車通りを199号線に向かって走っていた。

「・・・今年もランドマークだったよな？」

二通のメールを読み終えていた涼介は、ふと思い出した様にそう言っつて話の続きを切り出した。

「えっ？・・・ええ、TOTOさんのシヨールームです。協賛して貰もらつてますし、TOTOさん結構メリツトあるみたいですよ。それに今年は東京電力も入ります。」

沈黙を続けていた涼介が突然発した問い掛けに、広山は少しびっくりしていた。

「・・・だったな・・・ホテルは・・・？」

「最終日だけインターコンチです。他は本社近くのビジネスです。」

「そうか・・・インターコンチ、いいじゃないか・・・。」

「そうですね。」

「・・・北九州空港からだよな？」

「そうです。福岡と熊本の社員は福岡空港からみたいですね。」

「朝一か？」

「いえ、11:30発ですね。」

「まあ、オブザーバーみたいなもんだし、広山、お前本社に仲のいい奴居るんだろ？」

「それが居ないんですよ、みんな移動になっちゃって。」

車は西小倉駅前で赤信号に捕まろうとしていた。

「・・・じゃあ俺が同期の奴に、いいキャバクラ連れてく様に言っついてやるよ。」

「ありがとございます。」

広山は笑顔を見せていた。

「まあ、勝手も知ってるし、旅行みたいなもんだからな。」

「そうですね・・・でも、部長に付き合わされるんだろっつなあ。」

「……………」

涼介は携帯電話をスクロールしながら笑っていた。

「変なスナックとかに行つて歌いまくるのだけは勘弁<sup>かんべん</sup>して欲しいんだけどなあ。」

「……部長、そんなにカラオケ好きだったか？」

涼介は広山にそう話し掛けながら、携帯電話を耳に当てた。

「好きみたいですよ。」

「お前はどんなんだ？」

「いや、僕も好きですけど……。」

「……………」

涼介は広山との会話を止め、プッシュしたダイヤル先の声を待っていた。

車は赤信号から開放されていた。

「……………」

広山は携帯電話を耳に当てている涼介を見て、反射的に息を殺していた。

「……………」

涼介は雑踏<sup>ざつたつ</sup>を眺めながら待っていた。

広山は涼介が作った予期せぬ静寂<sup>せいじやく</sup>に、息を殺し続けていた。

「……もしもし、お疲れさん。……大丈夫だよ、普通の飲み会だから。……家に帰ったら電話するよ。……じゃ、また。」

涼介はそう言った後、携帯電話を左手で握ったまま何かを考えていた。

車は新勝山橋を渡ろうとしていた。

広山は初めて見た涼介のプライベートに、言葉を探せないまま運転していた。

「……………」

涼介は安心させる優しい言葉ではなく、聞き分けの無い駄々っ子を黙らせる様な言葉を、態々<sup>わざわざ</sup>留守番電話サービスに放り込んだ自分に“甘さ”を感じていた。

涼介が電話を掛けたのはまゆみだった。

まゆみは今夜が親睦会だという事を知っていた。

まゆみは10月4日に決まっていた小倉でのデートを自身の事情によって前日にキャンセルしていた。涼介とのデートを断腸だんちやうの思いで一度キャンセルした事のあるまゆみは、二度目のキャンセルに耐え難がたい切なさを感じ、涼介に変な誤解だけはされたくないと痛切に思っていた。故にそんなまゆみは10月4日から毎日の様に、今からでも小倉に行きたいという趣旨しゆしのメールを夜中でさえ涼介に乱打していた。同時に電話ではキャンセルせざるを得なかった理由を延々と伝え、謝あやまっていた。

まゆみは切実だった。しかしその切実さは心の何処かで時間を作ろうとしていた涼介には逆効果だった。

まゆみは何度も涼介に会いたい気持ちを伝えていた。しかし涼介はその都度つど、仕事の延長線上にある“飲み事”が流動的に入る平日の夜は約束をしても守れないかもしれないと、まゆみを柔らかになだめていた。

まゆみは涼介に気持ちを受け入れて貰もらえない事に焦っていた。その焦りは明日に迫った涼介とのデートを前にして、まゆみから冷静さを奪う事となっていた。

まゆみは昨夜から今夜にかけて、涼介の携帯電話に束縛めいた言葉は何度もメールで送信していた。

(.....)

涼介は打ち合わせ中に届いたまゆみからのメールを再度開いていた。

まゆみはメールの文中に二度、“羽目を外さないでね”と書いていた。最後には“何時になってもいいから電話して”と書いていた。

車は魚町交差点ういづちまで信号待ちをしていた。

(.....)

魚町交差点で信号待ちをしている事に気付いた涼介は、メール画

面から視線を外し、広山の横顔のずっと先で輝きを放っている場所を見つめた。

涼介の瞳の先には、エリカが働く美容室があった。

「・・・彼女ですか!？」

広山は涼介からじっと見つめられていると勘違いし、沈黙を破った。

「・・・そうだね。」

涼介は視線をメール画面に戻し、そう答えた。

「大変ですね・・・。」

広山は初めて見た涼介のプライベートに驚き、困惑していた。そして状況をどう取り繕つくろっていいのか分からないまま咄嗟とつとにそう喋しゃべっていた。

「・・・そうだね。」

涼介は広山の顔に一度も焦点を合わさなのまま、打ち合わせ中に届いたもう一通のメールを再度画面に映し出した。

受信メール

お疲れ　　!!元気いゝ!?(^|^)

今から合コンなんだー

ちよつと飲んで来るね〜!!

チユツ (^|^) -

エリカ　　2003/10/10　　19:05

(.....)

エリカのメールを読み返している涼介の瞳は穏やかだった。

「・・・ひよつとして・・・違う・・・女性ですか？」

広山は涼介の左手にある携帯電話を覗き込みながらそう言った。

「・・・そうだね・・・。」

涼介は広山の視線を気にする事無くメールを作り始めていた。

新規メール作成 宛先 エリカ

お疲れ。

合コン、いいねえ。

ナンパしないように( ^-^ )

っーか、オレも今日は飲み会なんだ。

堺町あたりウロウロしてるかもだよ。

じゃ( ^-^ )

サブメニュー 編集 戻る 19:45

「・・・代理・・・やつぱ凄いですね。・・・それじゃあ代理の中で岡部は何番目なんですか・・・?」

広山は驚いている表情に好奇心を携え、何気なくそう聞いた。

「岡部?」

涼介は広山の顔を鋭く見た。

「!?!?・・・代理・・・岡部と付き合ってるん・・・ですよ・・・?」

広山は涼介の表情に少し焦っていた。そして余計な事を口走ったかもしれない不安に駆られていた。

「会社じゃそんな風になってんのか?」

涼介はメール画面の送信終了表示を確認し、携帯電話をワイシャツのポケットに仕舞いながらそう聞いた。

「・・・ええ・・・皆・・・そう思ってます・・・。」

「なるほど・・・。」

涼介は恭子に対する認識の甘さを思い知らされていた。

「・・・付き合ってるんじゃないんですか?」

喋る気配の無くなった涼介に広山は恐る恐るそう切り出した。

「広山、有難う。・・・でも、まあ、いいじゃないか、ノーコメントって事にしといてよ。」

「何かありそうですね。」

「いや、別に普通なんだけど、まあいいじゃない。」

涼介は親睦会の前に広山と二人だけの時間を与えてくれた、目に

見えない“何か”に感謝していた。

涼介は自分を見つめ直す機会を与えてくれた広山にも感謝していた。広山が涼介の一挙手一投足に興味を示さず、また示していたとしても気を使って黙っていたならば、今夜恭子が考えているだろうしたたかな戦術に嵌<sup>はま</sup>っていたかもしれないなかった。

涼介は気付かぬ内に過信していた。

十一日前、自宅のダイニングにあるパソコンから恭子にメールを送信した時、涼介は恭子の誘いに乗ってもいいのではないかとぬるく考えていた。それは関係のあった女性と揉<sup>も</sup>め事を起こす程恋愛が下手ではないとする考えに起因していた。故に今夜、恭子に誘<sup>いざな</sup>われるまま一夜を過ごしていたならば、涼介は知らず知らずの間に自惚<sup>つめぼ</sup>れていた事を最悪の形で思い知らされ、取り返しのつかない耐え難<sup>がた</sup>い問題を抱えていた可能性があつた。

涼介は男女の関係以前に存在する、蠢<sup>蠢め</sup>く思考の連鎖の中で成り立っている、目には映らない人の心の存在を忘れていた。欲しい物を手に入れる為には手段を選ばない人や、周到な策略でターゲットを囲い込む人も居るといふ、醜<sup>し</sup>くもあり、至極<sup>しごく</sup>当たり前でもある人の繋<sup>つな</sup>がり忘れていた。更には涼介自身が、そのどちらも日常で駆使している事実すら忘れていた。

(.....)

涼介は恭子に対する意志を明確にした。同時に、自分は持てる男なのだと勘違いし、行動に誠実さや謙虚さを欠いていた事を振り返っていた。

二人を乗せた車は会社のあるビルの地下駐車場に入ろうとしていた。

車の中は、再び静寂が訪れていた。

(.....)

涼介は静寂を嫌う様に始まった携帯電話の振動を胸に感じていた。広山は黙ったまま運転を続けていた。

(まゆみかな.....)

涼介は親睦会に合流する前に、もう一度まゆみに電話をして置くべきかどうかを考えながら受信メールを開いた。

受信メール

ナンパされないよーに！

エリカ 2003/10/10 19:50

(まったく・・・)

涼介の顔は緩んでいた。

広山は涼介の様子に無関心を装っていた。

「お疲れ様ですー！」

「お疲れさん！」

「！！・・・おう、お疲れ！」

広山が親睦会の扉を開けて発した挨拶は、上司が座る席へと向かう二人にこだまとなって跳ね返って来ていた。

「お疲れ様です。」

涼介は言った。

「おーっ、お疲れさん。やっと来たか。」

「すみません、遅れました。」

「・・・どうも、お疲れ様です。」

広山は涼介の後に続いた。

「おお、お疲れさん。」

二人は支店長に挨拶をした後、支店長を囲む様に座っている部長や他部署の上司に挨拶を始めていた。

「課長代理！こっちこっち！」

涼介の背中に一人の女性社員の声が刺さった。

「……………」

涼介はその声に振り向いて小さく手を上げた。

親睦会には30人近くの社員が集まっていた。それは現場を除いた、小倉支店に勤務する約八割に相当していた。

「ほぼ全員来てんじゃないですか？」

広山は用意されていた席に向かう途中、涼介に耳打ちした。

「みたいだな。」

涼介はそう言いながら腕時計を見た。

二人は1時間10分程遅れて親睦会に合流していた。

「お疲れさん。」

「お疲れ様です！」

涼介の一言に、複数の女性が挨拶をした。

「……ありがとう。」

涼介は席を用意していた女性社員達に礼を言いながら、珍しく座敷ではない雰囲気のあるダイニングに、上司に対する女性社員の頑張りを見た様な気がしていた。

涼介の両隣には、部内に五人在籍している女性社員の内の三人が座っていた。

二つ隣の席には恭子が居た。

「課長代理、どうぞ。」

隣に座っている女性社員が満面の笑みを浮かべて涼介にグラスを渡し、ビールを注ごうとしていた。

「あーあー、佐々木は人気あんなあ！」

「代理持てますねえ、相変わらず……いいよなあ、まったく。」

少し離れた席に座る同期と後輩の声が、ビールで満たされ行くグラスを持つ涼介の耳に届いて来ていた。

「……………」

涼介はその二人に対してグラスを持ち上げ、お互いを良く知る友

だからこそ成り立つそんな“挨拶”に、心地良く乾杯のポーズを取った。

「本当ですよっ!!」

同じテーブルの向かい側に座っていた涼介の部下が、勢い良く身を乗り出してそう叫んだ。

「あのさあ、皆言つとくけどさあ、課長代理は駄目だぞ・・・だって今日も待たせてんだから・・・3人ぐらい・・・ねえ、課長代理!」少し酔いが回っているだろうその部下は、そう言つて涼介の方に身を投げ出した。

「そうなんだよ、大変なんだよ、・・・なあ、広山。」

涼介は正面に座った広山にそんな“振り”とビールを差し出した。「えっ!? あつ、有り難うございます・・・ええ、・・・まあ、・・・代理、勘弁して下さいよ、ボケは苦手なんですから。」

「ははっ、広山、ここは乗って突っ込むんだよ。」

涼介は優しい眼差しでそう言つた後、広山に二人だけの乾杯を促した。

「お疲れさん。」

「お疲れです。」

二人が鳴らしたグラスは、上司と部下の関係を超越した響きを放つていた。

親睦会は涼介と広山の合流によって更に雰囲気が良くなっていった。それは二人が会社に貢献している事を誰もが認めている証でもあった。

「皆聞いてくれ!・・・おい、皆聞いているか!改めて乾杯するぞっ

!・・・佐々木!音頭とれ!」

全体を見渡せる位置に座っていた部長が徐に立ち上がり、その全体に響き渡る野太い声でそう言つた。

「・・・それじゃあ・・・。」

涼介は部長の言葉にゆっくりと立ち上がった。

会場には冷やかしの歓声と拍手が溢れていた。

「代理、そう言えばこの前、タカハシフーズの女の子が合コンしようって言ってましたよ。」

広山は少し酔っていた。

親睦会は整然から雑然へと変わっていた。

「おいおい広山、俺をダシに使うなよ、俺じゃないだろ？最近顔出してないんだから、タカハシさんとはさ。」

広山は涼介の話を聞きながら焼酎のお湯割りを一気に空けた。

「いや、代理ですよ、間違いないっすよ。」

「合コンですか!!」

広山の涼介に対する羨望せんぼうは、涼介の両隣に座っている女子社員の素早い反応によって羨望のまま区切られた。

「合コンするんですか?」

恭子も反応していた。そして会話に参加をする意志を、落ち着いた表情と共に涼介に見せた。

恭子の一言が大きなきっかけとなっていた。涼介の周りに居る女子社員達は、普段話せない恋の話を、ここぞとばかりに涼介に集中させていた。

涼介は目の前で飛び交い始めた女子社員達の惚気話のろけや、彼氏に対する愚痴ぐちに少し辟易へきえきとしていたが、涼介は相槌あいつちを打ち、宥めなだ、誉めほめていた。

恭子はその輪の中に加わってはいたが、笑いながら話を聞いている事の方が多かった。

(ここに居る皆は、俺が岡部と付き合ってると思ってんだよな。)

涼介は時折そんな事を考えながら、作り笑いを見せ続けている事に切なさを感じていた。

(しかし岡部は全然そんな素振りみせないな・・・皆も気を使ってる様だし・・・)

涼介はトイレに立つタイミングを計っていた。

「だよねえ！」

「ねっ、課長代理！そうですよねっ！」

「・・・かもしんないな・・・。」

涼介は話の一つ一つに穏やかな声で答えながら、何時まで経っても終りそうに無い、蒸し暑い梅雨時の湿気のように纏わり付く女子社員達の惚気話や愚痴にうんざりしていた。

(ふーっ・・・)

涼介はやつと得られた開放感に息を一つ吐いて、細い通路をレストルームまで歩いていった。

(岡部は何時もと変わんないな・・・。)

涼介はそんな事を考えながらドアを開け、レストルームの中で携帯電話の受信メール一覧を開いた。

涼介は親睦会の最中に携帯電話の振動を左の腿ももに何度か感じていた。

(岡部?・・・。)

涼介は思わず声を出しそうになっていた。

3通のメールを受信していた。メールは、まゆみ、恭子、エリカの順で届いていた。

涼介は二つ隣の席にずっと座っていた恭子からのメールに、ある種醒めた興味をそそられていた。

(・・・。。)

涼介は恭子からのメールではなく、最初にまゆみのメールを開いた。

受信メール

さつきはごめん、会議中だったの(´ー、)；

留守TELが入ってるなんてびっくりした！

・・・涼介に会いたい・・・

私たち付き合ってるんだよね？  
だったら束縛してもいいよね？  
そんな気持ちなの…。

私の事好き？（^―^）

まゆみ 2003/10/10 20:22

まゆみは涼介との恋愛に付き纏って離れない、嫌な予感を払拭はらいつくし  
様とする感情をそのままメールに乗せていた。

送信メール

お疲れ。

今夜は遅くなりそうだけど心配しないで。

好きだよ（^―^）

まゆみ 2003/10/10 21:05

涼介はまゆみからのメールを読み終えた後、間髪を入れずに感情  
の伴ともなわないゆるい情熱をまゆみへ送信した。

受信メール

お疲れ様です。

あんまり飲んでないようですね

何かあつたんですか？

課長代理の事だから心配してないですけど（^―^）

二次会、途中でまた抜けるんですよね？

みんなにバレないように私も抜けて

静かな所で一緒に飲みたい かな（^―^）

課長代理の行く所に連れてって下さい（^―^）

岡部恭子 2003/10/10 20:45

（・・・広山のお陰だな・・・）

涼介は次に開いた恭子からのメールを読み終えた後、広告代理店から会社へ戻る車の中で、広山とプライベートな話をする機会をくれた“何か”と、広山にもう一度感謝していた。

恭子は自身が望む最高の結末を迎える為に、ベテラン俳優に演技指導する脚本家を兼ねた新人監督の様に、自らが書いたシナリオの出来の良さを涼介に分かつて貰おうとしていた。

(・・・やっぱ苦手だな、こういう飲み会は・・・)

涼介の冷静な瞳はレストルームの鏡に映る自分を見つめていた。

(・・・)

涼介は滅入る気持ちで拭き拭きしようと、最後に残して置いたエリカからのメールを開いた。

「佐々木 つ！佐々木は何処だーっ！」

涼介の耳に部長の声が届いた。

(・・・何だろう・・・)

涼介はその声に携帯電話を閉じた。

店内では全員が立ち上がって一次会を締め様としていた。

「課長代理来ましたっ！」

男性社員の誰かがそう叫んだ。

「よし、佐々木、最後締めてくれ！」

部長の声は野太かった。

「はい、分かりました。」

涼介は笑顔を見せながら、親睦会を見渡せる場所に歩いた。

(・・・)

恭子は何時涼介と視線が絡み合ってもいい様に、ずっと見つめていた。

親睦会を終えた一団は、決まり事の無い小さな集団を路上で幾つか形成しながら分散しようとしていた。

(・・・)

涼介は歩きながらメールを作っていた。

日頃プライベートな部分を見せない涼介の人目をはばか憚らないその堂々とした行為は、廻りを一緒に歩く仲間を驚かし、無口にさせていた。

「代理、彼女ですか？」

酔っている広山の声はよく通った。

「そうだよ。」

涼介は後ろから近づいて来た広山にそう答えた。

「いいなあ、代理は！」

広山の声は大きく響いた。

「……………」

涼介は広山に笑顔を見せながら作り終えたメールを一度保存し、エリカから届いていたメールをもう一度開いた。

#### 受信メール

リヨウ、今どこで飲んでる??まだ飲むの?

エリはカラオケ行こうって誘われてるんだけど、

なんだかつまんない!!

みんなリヨウよりいいオトコなのにね (^|\_|^)

リヨウのせいだからね 責任とって!

この前行ったBARで待ってるから、

エリに会いに来なさい ( ^ | \_ . ) -

エリカ 2003/10/10 20:53

「何かハートマークついてますよっ!!」

広山は涼介の携帯画面を覗き込んでいた。

「だ……………」

涼介は広山の直ぐ後ろを恭子が歩いている事を知っていた。その上で涼介は広山の行動を受け入れていた。

「……………」

涼介は保存していたメールを呼び出し、送信キーを押した。

送信メール

お疲れ。

会いに来てい!?

了解、助けに行くよ。

オレもエリに会いたかったんだ。

じゃ後で。

エリカ

2003/10/10

21:20

涼介はステージに上がり同僚や部下の前で歌っていた。

涼介がカラオケボックスで歌うのは小倉支店に配属された年以來の事だった。

カラオケボックスの中は、涼介が歌う姿を久し振りに見た部下達のピーキーな反応で盛り上がっていた。そしてその盛り上がりは選曲リモコンを叩く部下達を更にエゴイスティックエキズティックにさせていた。

「どうも。」

歌い終わった後の涼介の一言はカラオケボックスの中に歓声と拍手を響かせた。

涼介の“場”の雰囲気きふうを察知する嗅覚きゅうかくは、ある意味役者だった。

「……………」

ステージから降りた涼介は恭子の隣に座った。

「課長代理、歌上手いんですね。」

恭子は涼介の歌を初めて聞いていた。

「そう?」

涼介はそう言って水割りを口に当てた。

「昔、結構歌ってたんでしょ?」

恭子は、底を見せない涼介の器うつわに興味を募らせていた。

「そうだな、ナンパしちゃあカラオケ行ってたからね。」

「そうなんだ。」

「でもって強引に口説いてホテルだよ。」

涼介が上げたカラオケボックスの中のボルテージは、二人に顔を寄せて話させる程になっていた。

「・・・遊んでたんですね。」

恭子は涼介が歌い終わつた後、自然に自分の隣に座ってくれた事を素直に喜んでいた。

二人はリラックスした表情で会話をしていた。

「岡部、大手町用の備品リスト、有難う。」

「えっ！・・・いえ、とんでもないです。」

「助かったよ。」

「そんなぁ・・・。」

恭子は照れていた。

「広山にも岡部ぐらいの“切れ”があれば言う事無しなんだけどな。」

涼介はマイクを片手にはしゃぐ広山に慈愛じあいの微笑を向けていた。

「・・・課長代理はもっと部下に仕事を押し付けてもいいと思いません。」

「そうかな？」

「だって・・・頑張り過ぎだもん。」

「・・・そう？」

「だって・・・でなきゃ今日だって親睦会、まだ遅れて来てたと思うし・・・。」

恭子の瞳は、上司と部下の関係を越えた親密さを涼介に放つていた。

「・・・そうだな。」

涼介の瞳は冷静を放っていた。

恭子と涼介以外の瞳は、ネクタイを緩め、ステージで歌っている広山を見ていた。

「・・・岡部、歌わないのか？」

「えーっ、私はいいです。」

「そう・・・じゃ、俺は行くから。」  
「えっ！」

涼介を独り占めしている事に優越を感じ、この先も独り占め出来ると確信し始めていた恭子は、穏やかな表情のまま何の脈絡みやくりやくもなくそう言った涼介に驚いた。

二週間程前からずっとこの日の事を強したたかに考えていた恭子は、二人の時間を作れるだろう二次会の数十分間を、涼介の心を完全に自分へ向かせる為に必要な、非常に大切な空間として捉とらえていた。

(代理は私のメール見てないのかな・・・。)

恭子は親睦会の最中に涼介へ送信したメールの事を考えていた。

涼介が恭子に見せた退散の意思表示は、限られた時間の中で涼介との間に良い雰囲気を作り出し、その雰囲気を壊す事無く待ち合わせ場所を決め、何時もの様に涼介に二次会を早々と抜け出して貰もらった後、優雅に合流する策略を実行しようとしていた恭子にとって、文字通り想定外だった。

「岡部、今夜一緒に飲みに行けないんだ。」

黙っている恭子に涼介はそう付け加えた。

「・・・・・・・・。」

恭子は涼介のその一言で、親睦会中に送信したメールを涼介が見た上で、涼介が退散の意思を突き付けている事実を理解した。

「・・・・・・・・。」

涼介は恭子が口にする言葉を待っていた。

「またあ、どうしたんですか？いきなり。」

恭子は局面を打開する為に、焦燥と混乱を“おくび”にも出さず咄はな嗟なげに明るく振舞った。

「約束があるんだ。」

涼介は二次会に入る前の路上で、エリカにメールを送信した時の気持ち思い起こしながらそう言った。

「約束？」

恭子はこのままの状況で時間が経過する程、自分が救われない女

になってしまいかもしれない事を脳裏に過ぎらせた。

「そうなんだ。」

涼介の顔は穏やかなままだった。

「・・・約束って・・・女性ですか？」

恭子は辛うじて笑顔を作り、状況を覆す為の時間を稼ごうと画策した。

「・・・・・・・・。」

涼介は黙ったまま頷いた。

「・・・その女性って・・・さつき課長代理がメールしてた人ですか？」

恭子は無意識に発した“女性”という自分の言葉で、路上でメールを送信する涼介の姿を思い出していた。

「・・・・・・・・。」

涼介はもう一度黙ったまま頷いた。

「・・・・・・・・。」

恭子は自分の顔から笑顔が消えている事よりも、涼介が二次会に入る前に路上でメールをしていた相手にどうすれば勝てるのか、そして自分のどんな魅力をぶつけければ涼介の気持ちを逡巡させる事が出来るのかを考えていた。

恭子は自身のプライドも守らなければならなかった。

「・・・・・・・・。」

「岡部、俺達は何も始まってないし、始まる事もないんだ。」

涼介は恭子の言葉を止めた。

「・・・・・・・・。」

恭子はじつと涼介を見つめていた。

喧騒の続くカラオケボックスの中は、愛を語り合っている様に見える二人に無関心を装っていた。その事実、ある意味恭子の策略通りだった。

「・・・・・・・・。」

恭子は開き直りに限りなく近い感情を心に溜めていた。

「じゃ、俺は行くから。」

涼介はそう言って立ち上がるうとした。

「あのセックスは何だったんですか？」

恭子は冷めた声で涼介の動きを止めた。

二人の間には歌声が乱舞していた。

「何も始まってないし、始まる事のない人に、佐々木涼介って言う人間はそんな事が出来るんですか？」

恭子は体を更に涼介に寄せてそう言った。

「……………」

涼介は恭子を間近で見つめさせられていた。

「課長代理は始まる事の無い人にも、その気にさせる様な優しさを見せられるんですか？」

恭子は言葉でも詰め寄った。

恭子の正直な感情には、凜とせざるを得ない哀しさと、振り向かせるべき男性をずっと振り向かせて来た意地と、涼介が今から会いに行こうとしている女性に、自分が負けている訳がないと思うプライドが詰まっていた。

恭子を見つめる涼介の瞳は、恭子から“あからさま”にされた自身のずるさとぬるさを素直に認めていた。

恭子は同僚達の視線を感じていた。しかし“眼差し”で涼介を責める事は止めなかった。

「岡部……ごめんな。」

「課長代……」

涼介は喋ろうとする恭子の左肩を押さえた。

「……岡部が俺に望んでいる関係は、こんな形からは生まれないと  
思うんだ。それは岡部も気付いている筈だよ。」

涼介は恭子に優しく語り掛けた。

「……恋する事に形ってあるんですか？」

「……形は結果論であって欲しいな。」

「だったら私との……」

「岡部っ！何か歌えよ！！」

一人の男子社員の声が、突然二人の会話に割り込んで来た。

「！！……えーっ……。」

優越という崩れ去る寸前の雛壇ひなだんの上で、涼介との関係を仕切り直す機会を探しつつも途方とほうに暮れ掛けていた恭子は、その声に因よって自分が救われ様としている事を直感し、振り向いて照れ笑いを浮かべた。

「……。」

涼介はゆつくりと立ち上がりながら、その声が引き分けを告げた審判の声に思えていた。

恭子は声を掛けて来た男性社員と何か喋っていた。

涼介は広山の傍そばに寄り、帰る事を耳打ちし、二次会の費用を渡そうとしていた。

「じゃ、俺は行くから。」

涼介は恭子の元に再び近寄り、そう言っって笑顔を置いた。

「課長代理……。」

恭子は“場”の空気を無視してでも涼介を引き止めたいとする気持ちを抑え、ドアへ向かって歩いて行く涼介を見つめる瞳に愛しさを込めた。

恭子は意識的に自身の性質たぢをカラオケボックスの中に振舞っていた。そしてその姿は同僚達に、二人の関係が前向きに進んでいる事を連想させていた。



20・・・魂の魅力

(・・・・・・・・)

涼介はネオンの中を少し早足で歩きながら、通りを吹き抜ける冷たい夜風に頬を叩かれていた。

「しょうがない。」

涼介はカラオケボックスの中で恭子に見せた自分のぬるさを棚に上げた。そしてポケットのの中の携帯電話を取り出し、恭子とのやり取りの最中に受信していたメールを開いた。

受信メール

もしも し、今どこ??

応答せよ!

早く来なさい!!

エリカ 2003/10/10 21:35

(やっぱりか・・・・・・・・)

涼介は納得と共に、メールの返信画面ではなく着信履歴に残るエリカを開いた。

(・・・・・・・・)

涼介は発信ボタンを押した後、左耳でエリカのを待った。

「・・・もしも・・・お疲れ。・・・ごめん、悪かったよ。・・・今向かってるから。・・・そうだね、後5分位だから・・・よろしく。」

┌

涼介はエリカに早く会いたいとする正直な足取りのまま、躍りそうになる声を理性で押さえ付けていた。

連休を控えた金曜日、夜の10時を過ぎた小倉の目抜きは店を変えて楽しもうとする人達で溢れていた。

堺町公園の脇に並ぶ露天では、黒いベロアの上に並ぶイミテーションが通りのアクセントとなっていた。小文字通りには当たり前のようにタクシーが二重駐車をしていた。

(・・・)

涼介は逸る気持ちを押さえながら信号待ちをする人波に紛れていた。

横断歩道を渡り、1分も歩けばエリカの待つBARがあった。

(長えな・・・)

涼介は既に二次会での出来事を葬っていた。

(・・・エリカなのかな・・・)

涼介は横断歩道を渡りながら、10年前のあの日、マキと待ち合わせをした“司”まで歩いた数分間を思い出していた。そして涼介は愛し続ける事も守る事も出来ず、決して忘れる事など出来ない女性となったマキとエリカを、心の中で重ね合わせていた。

(!!・・・)

その振動は涼介の心に無遠慮に届いた。

涼介は、エリカの待つBARがある通りへ出る最後の角を曲がるうとしていた

(誰だろう・・・)

エリカでは無い事を涼介は直感していた。

(・・・)

涼介は恭子の顔を思い浮かべながら、Yシャツの胸ポケットに在る携帯電話に触る事無く歩き続けていた。

涼介の目の前にはエリカの居るBARのネオンが迫っていた。  
涼介は足取りを変えず歩いていった。

メールの送り主には、今の涼介を立ち止まらせる程の威力も魅力もなかった。

(.....)

涼介は枕木を敷き詰めた狭い階段を昇り、飾り気の無い、朽ちた様な無垢板を縦に並べた質感のある扉を開けた。

店内に繋がるコンクリートが打ち放されたホールには、晩秋を先取るライティングが施されていた。

(.....)

涼介はカウンターが見渡せる場所までゆっくり歩いた。

L字に象られたカウンターには、十人程の人影があった。

(.....)

涼介は立ち止まり、カウンターの人影をゆっくり目で追った。

「待ち合わせですか？」

貫禄のある、支配人という言葉を連想させる身形の男性が、涼介の後ろから声を掛けて来た。

「ええ。」

涼介は初めて見るスタッフにそう言って、カウンターに座っている筈のエリカを探した。

(.....)

涼介は闇を演出する光の中で静かに揺れる人影から、見覚えのある背中に焦点を合わす事が出来なかった。

別のスタッフが涼介の席を用意していた。

(しょうがない、メールを打とう。)

涼介はそう考えながら用意された席に向かおうとした時、L字カウンターの中央に座っていた女性の横顔を一瞬瞳に映した。

(.....)

涼介は見惚れていた。

「すみません。」

微笑みを取り戻した涼介は、ドレスシーな後ろ姿を持つ女性から視線を外し、後ろに立っていた支配人らしきスタッフにそう言って席への案内を断った。

「お疲れ。」

涼介は上品な黒のスレンダードレスを纏った女性の肩先にそっと近づき、その声を掛けた。

「・・・遅い。」

「・・・ごめんな。」

「・・・ま、いつか。」

エリカは柔らかい瞳で涼介を見上げていた。  
隣に座つてもいいかな？」

エリカのドレスシーな一面に初めて触れていた涼介は、降参している気持ちを悟られまいと気障きさかに振舞った。

「許そう。」

エリカは笑った。

「・・・気付かなかったよ。」

「暗すぎて？」

「・・・エリ。」

「何？」

「美人だな。」

「・・・遅い。」

「・・・そうだな、悪かったよ。」

「違う、気付くのが。」

「・・・なるほど、それも悪かったよ。」

二人の間にある空気は滑らかに融合していた。

エリカは笑い、涼介は根こそぎエリカに攫さらわれようとしている自分の心を笑顔で傍観ぼうかんしていた。

「それ、何？」

涼介はエリカの前で静かに佇む<sup>たたず</sup>、色もグラスもシンプルなカクテルの名前を聞いた。

「ダイキリ。」

「・・・やるじゃん。」

涼介はエリカに攫<sup>ひら</sup>われた心と引き換えに、何処かにあるだろう別の世界の誰かから、自分の居場所を教えられた様な感覚を貰<sup>もら</sup>っていた。

エリカはエレガントだった。ブリーカットやツインテール、タイトなカットソーやキャミソールをセンス良く着こなしている時とは違った気品や聡明さを漂わせていた。

「ね、乾杯しよ。」

エリカは自分のグラスを持ち上げた。

涼介の前にはラムバックが運ばれて来ていた。

「OK、・・・じゃ、今夜のエッチに。」

涼介は自分のグラスを持ってそう言った。

「ははっ、・・・了解。」

エリカは照れ笑いを浮かべていた。

「じゃ、乾杯。」

二人のグラスは、他の誰にも邪魔の出来ない距離を更に縮め、透き通る音を一度立てた。

エリカは涼介が見せる仕草や選ぶ言葉に居心地の良さと安らぎを感じ、同年代では無理かもしれない涼介との距離感を気に入っていた。

エリカは男性を選択する側に居る女性だった。それは理想の恋愛を追う事を許される資質と魅力を持ってしている事を意味していた。故にエリカは涼介と知り合ってから、新たな出会いやセックスを幾つか重ねていた。しかしエリカはその度に涼介の洗練された立ち居振舞いや、自分の“間”を決して崩さない涼介の落ち着きに魅力を

感じている自分を思い出ししていた。

エリカは今夜途中で抜け出した合コンでも、とろける様な優しさを都会的に振舞う格好良い男性達に出会っていた。しかしエリカはその場面場面で、涼介の持つウイットやクールさに思いを馳せている自分が居る事に気付いていた。

「何か今日のリヨウ、格好良いね。」

「おっ、どうした？急に。．．それは愛の告白ってやつか？．．それとも何か欲しい物でもあんのか？」

「んー．．どっちでしょう？．．．」

エリカは肩を竦めた。

「．．．いいよ、言ってみ。」

「あらっ！」

「．．．で？」

「じゃあねえ．．．エルメスのガムケース。」

「．．．了解。」

涼介は穏やかな笑顔でエリカを見つめていた。

午後11時を過ぎた店内は更に照明が落とされていた。

二人の前にはアルコールランプの灯が揺れていた。

壁際にさり気なく置かれたピアノは、誰の手も借りずに綺麗なメロディを奏でていた。

「．．．何か、良いよね、こういうの。こんな時間が毎日の嫌な出来事忘れさせてくれるよね。」

「相手が俺でも？」

「もちろん。」

エリカは涼介を愛している事実を実感していた。

「．．．ねっ。」

エリカは涼介を見つめた。

「何？」

「さっきのは愛の告白だったんだよ。」

「・・・じゃあ、乾杯。」

涼介はマキと別れて以来、未だ見ぬ女性とエリカが重なりつつある現実を実感していた。

BARを出た二人は細い路地を歩いていた。

路地の両側に雑然と立ち並んでいる店の看板や、ビルの壁や窓に張り付いたネオン管は、多彩な光を二人の体に降り注いでいた。

「なあ、エリ、ゼノンの逆説って知ってる？」

涼介はエリカに切り出した。

「何？それ。」

エリカは涼介の右腕を捕まえていた。

「・・・昔、アイデアを追求するストア派の哲学者がいてね。」

「???・・・ちゃんと日本語で喋ってよ。」

エリカは涼介を見上げた。

「ははっ、了解。・・・じゃあさ、エリが俺にキスしたいと思ったとするさ、でもキスをするには、先ず俺の唇までの距離を半分縮めなきゃいけないだろ？」

「うん！」

エリカはそう言って、涼介の右腕に抱きついた。

「いいかい、今二人の唇は50センチから25センチに近づいた訳だよ、な？」

涼介はエリカの瞳を優しく見つめていた。

「うん!!」

エリカはそう言った後、今度は左の頬を涼介の肩に預けた。

「でもさ、エリが俺にキスをする為にはさ、今ある25センチの距離を取り敢えずまた半分縮めなきゃだろ？」

「うんうん！」

「って事は、今二人の唇の距離は12センチぐらいになってる訳だよ。」

涼介はそう言って立ち止まり、エリカに向き合う事を誘った。

「……………」  
エリカは名残惜しそうな瞳で涼介を見つめたまま、涼介の体から離れた。

「さすがにそれ位の距離になるとき、エリがキスしたがってるって俺も気付く訳さ。」

二人は路地の中央で向き合っていた。

涼介は笑顔で頷いたエリカを優しく見つめていた。

エリカは茶目っ気たっぷりに踵を二、三度浮かせ、キスをせがむ仕草を見せ始めていた。

「……でもエリが俺の唇を奪うにはさ、今ある距離をまた半分縮める事が先決じゃない。」

涼介はそう言いながらエリカの肩に両手を掛けた。

「……………」

エリカはキスを待っていた。

「……そうなるとさあ、キスまでの距離には必ず半分の地点が永遠に存在してる訳だから、どんなにエリが俺の唇を奪いたくっても、ゼノンさんの許可が下りないんだよな。」

涼介はエリカを優しく見つめていた。

エリカは微笑を浮かべ、待っていた。

「……ま、そういう事かな。」

涼介は割と大袈裟にエリカの両肩に掛けた手を離し、優しい笑顔のまま、さらりと踵を返して歩き始めた。

「えーっ、キスしてくんないのー！」

エリカはその場で少し拗ねた顔と声を涼介の背中に投じた。

涼介はゆっくりと歩いていった。

「……ねえってば……………」

エリカは拗ねた声に甘さを混ぜ、もう一度涼介の背中に投じた。

「……………」

涼介は立ち止まり、振り向いた。

「……………」

エリカは拗ねた顔のまま、振り向いた涼介の許へ歩き始めた。

「……………」  
涼介は、愛を捧げる女性を悟った時の様な瞳でエリカを見つめ、エリカを待っていた。

音の無い時間が路上の二人に流れていた。

涼介の胸に飛び込んだエリカの唇と、エリカを受け止めた涼介の唇は、愛情を深くお互いに伝え合っていた。

エリカの両腕は涼介の首に絡まり、涼介はエリカを強く抱きしめていた。

二人は心に仕舞い切れない大切な想いを、何度も何度も重ねる唇で伝え合っていた。

「……………」でもキスは出来るんだよ。」

「……………」当たり前じゃん……………」  
エリカは潤んだ瞳を涼介に見られまいと小さく顎を引き、声を少し震わせながら照れていた。

二人はお互いの魂に情熱を注ぎ合い、魅力を放ち合い、心を美しく輝かせていた。

路地の両側から降り注ぐネオンの光は、二人を引き立てる役に徹していた。

「半分の地点の人……名前何てつたっけ……………」

「ゼノンだよ。」

二人は向き合ったまま、お互いの体を優しく抱き合っていた。

「……………」そのゼノンさんって人、持てるでしょ？」

エリカは恥らう心を隠す様に、涼介を見上げていた。

「……………」

涼介は微笑みながらエリカを包んでいた腕をゆっくりと解き、右肘をエリカの前にそっと差し出して、腕を組んで下さいという素振りを見せた。

「……………」

エリカは涼介のその仕草に微笑で答えた後、態と得意顔を作り、涼介の腕に全身で巻き付いた。

夜空の低い位置にはオレンジ色の月が出ていた。

真っ直ぐ延びる路地の遠く先には、リーガロイヤルホテル小倉の明かりが見えていた。

二人は路上を彩る景色に抱かれながら、体を寄せて歩き始めていた。

夜風は凪いでいた。

二人の背中には、言葉ではなく心で会話を交わせる男女の暖かさが溢れていた。

虚飾の無い愛情をぶつけ合い、情熱を糧に主役を務めた路地に二人は別れを告げ、タクシーのテールランプが連なる199号線に出ている。

「乗るよ。」

「うん。」

二人にはそれ以上の会話は無かったが、心と体の行き先は同じだった。

「ちょっと待ってて。」

エリカは涼介にそう言ってタクシーから降りた。

(……………)

涼介は眩し過ぎる明かりの中に消えて行ったエリカから視線を離し、何かを考え始めていた。

市街から抜け出そうとしていたタクシーは、平和通りバス停の傍にあるマツモトキヨシの前でハザードランプを点滅させていた。

(……………)

涼介は携帯電話をYシャツのポケットから取り出した。

受信メール

リヨウスケ、楽しく飲んでそうだね。

メールも電話もないから、ちよつとショック(´|、)  
私も一緒に飲みたい…。

まゆみ 2003/10/10 22:09

受信メール

ワイン飲んだら眠くなっちゃった。

もう寝ますzzz…。

今日はラ・フランスだったのかな？私(＾|＾)

ちゃんと家に帰ってね！

じゃ、明日(＾|＾)

おやすみ

まゆみ 2003/10/10 23:45

「洋梨“用なし”か…。」

涼介はBARを出た直後に受信していたメールが予想通りまゆみ  
だった事に納得しながら、そう一言呟いた。

まゆみは二通のメールに、涼介の行動に歯止めを掛けたいとする  
願いと、来ないだろう返信を見越した自棄と、ささやかな批判と抵  
抗を乗せていた。

「BARに入る前のメールもまゆみか…。」

涼介は更に一言呟き、何かを直感した様なタイミングで入ってい  
たまゆみのメッセージをYシャツのポケットに仕舞った。

(…)

涼介は考えていた。

夜が明け、日が昇れば、涼介が指定したまゆみとのデートの日だ  
った。

(…)

涼介は再び携帯電話を取り出し、まゆみに送信するメールを作り

始めた。

車内にはハザードランプの点滅音だけが響いていた。

(・・・・・・・・)

メールを作り終えた涼介は、携帯電話を握った左手をシートの上に置き、再び考え始めていた。

“コンコン”

涼介はタクシーの窓を叩く音に、泳いでいた瞳の焦点を強引に合わせられた。

「お待たせっ。」

車内に漂い始めていた重い空気を、明るい声と共にタクシーに乗り込んで来たエリカが動かした。

涼介の鼻先に、動いた空気に乗ったエリカの甘い香りが届いていた。

「ごめん、待たせちゃったね。」

エリカは涼介が左手で握っていた携帯電話をさり気なく畳み、スーツのポケットにそっと仕舞った事に気付いていなかった。

「全然。」

涼介の瞳はエリカを慈しんでいた。

タクシーは平和通りを下る車の流れに紛<sup>まぎ</sup>れていた。

エリカは買って来た物の一つを、パッケージから取り出そうとしていた。

(・・・・・・・・)

涼介は、まゆみ宛に作ったメールの送信も、保存もさせてくれなかったエリカの香りに感謝していた。

涼介はタクシーに乗り込む前から、すでに待ち合わせ迄12時間を切っているまゆみとのデートは延期だと決め、延期の報告を何時まゆみにすべきかをずっと考えていた。そしてタクシーの中での一人きりの時間という、予期せぬ形で訪れたチャンスを最大限利用し

ようと携帯電話に手を掛けていた。しかし突然で、しかも制限時間のあるチャンスでは説得力のある延期の理由を探せず、戯言たわごとの様な理由と謝罪を送信画面に打ち込んでいた。そして涼介は、僅かな時間わずを有効利用し、心で燻くすぶっていた懸案けんあんを処理出来るだろう文章を一応完成させたという安堵感あんどが齎もたらす客観と冷静で、文章の中に断腸だんちやうの思いをもっと強く捺ねじ込むべきかどうか考え始めていた。しかし涼介に訪れた客観と冷静は、文章を推敲すいこうしている頭の片隅に、今夜このタイミングでまゆみにメールを送信すれば、これから過ごすエリカとの時間にまゆみが介在してしまうかもしれない事実を気付かせ、焦り、迷い、瞳を泳がせる事となっていた。

涼介はエリカの香りに、今夜起こり得るまゆみとの現実を避け、謝罪を重ねる煩わづわしさを先送りにする決断を下していた。そしてその決断の底には、まゆみの恋心を玩もてあそび、蔑ないがしろにしても胸に痛みを感じない、自分を愛する事が最優先だとするぬるく醜みにくい姿が隠されていた。

## 21・・・弄(いじ)れる情熱

恭子は10月10日に行われた部署間の親睦会以降、今迄以上に気さくな態度で涼介と接していた。仕事中、遣り過ぎではないかと思う程馴れ馴れしく涼介に接している事もあった。

過去、恭子の恋愛は何時も男性から情熱的に追い掛けられる立場だった。その事実は恭子に恋愛の主導権を常に握らせる事となり、そしてある意味当然の如く、その主導権に男性を見下すという歪んだ感情を付け加える事となっていた。

恭子にとって涼介は、自身の経験が生かせない、洞察や分析も、予測や憶測も空回りしてしまう最初の男性だった。

恭子は二人の關係に結論を出した涼介を受け入れていなかった。それ故に恭子は、何時か必ず涼介を完全に振り向かせたいと思っていた。

「岡部。」

涼介は恭子を呼んだ。

(・・・・・・・・)

恭子は反応しなかった。

「岡部！」

涼介は再度、強く恭子を呼んだ。

「！！はいつ・・・・。」

恭子は我に帰った。

「どうした？らしくないぞ。」

涼介の落ち着いた口調が会議室に響いた。

「すいませんでした。」

恭子は立ち上がり、頭を下げた。

「サンプルリストを皆に渡してくれないか。」

「はい……。」

恭子は席を離れ、資料を配り始めた。

恭子は大切な会議中、周囲の音が聞こえなくなる程一人の男性の事を思い詰めてしまっていた。プライベートでの憂鬱<sup>ゆううつ</sup>を仕事に持ち込んでしまう女性を常々批判して来た恭子にとって、それは耐え難<sup>がた</sup>い失態だった。

（……………）

恭子は、尋常<sup>じゆんじょう</sup>ではない動悸<sup>おき</sup>が顔を赤く染めていない事を祈りながらテーブルの周りを歩いていった。

10月17日、企画開発部の会議室だった。

涼介の背中越しに見える向かい側のビルの窓で、夕日が乱反射していた。

恭子は平静を装っていたが、何か理由を付けてこの場所から立ち去りたい位、悔しさと恥<sup>はづか</sup>ずかしさで押し潰<sup>つぶ</sup>されそうになっていた。

あの日から一週間が過ぎていた。

（……………）

まゆみは自分のデスクで仕事をしながら、明日、10月18日の土曜日、涼介とのデートを万全の状態<sup>じょうたい</sup>で向かえる為に、今夜やらなければならぬ肌や爪の手入れを始めとする行動のシミュレーションをしていた。

まゆみは10月4日の土曜日、涼介とのデートを自身の所用で一週間延ばしてしまった事を後悔していた。故にまゆみはその後悔を笑い飛ばせる筈<sup>はず</sup>の、涼介が指定した10月11日のデートを心待ちにしていた。しかしその日のデートは涼介の仕事の都合に因って延

期になっていた。

まゆみは11日の朝、気持ちを整え、身形を整え終わった矢先に届いた涼介からのメールに、世界の終わりが来るかの様な絶望感を味わっていた。そしてまゆみはその日一日中脱力感と戦いながら、涼介とのデートを更に一週間待たなければならなくなるだろう事実を、甘んじて受け入れざるを得ない自分を嘆いていた。

(.....)

仕事に付かないまゆみは、この一週間の間に届いた涼介からのメールを順々に溯っていた。

(長かったな.....)

急遽部長の代わりに横浜に行かなければならなくなったという、たったそれだけの言葉でデートの延期を告げた涼介の、11日の朝届いたメール迄まゆみは溯っていた。

10月17日の金曜日、渡辺通り一丁目にあるオフィスビルの一室に構える設計事務所の中に、容赦なく夕日が差し込んでいた。

(でももう明日なんだから.....)

まゆみは受け入れざるを得なかった現実に耐えた自分を慰めながら、ブラインドを下ろす為に席を立った。

事務所にはまゆみしか居なかった。社長の鈴木周五郎も一級建築士も現場に出ていた。

(.....)

まゆみは窓の傍に立ち、朱色に染まる街を眺めながら、このまま定時が過ぎ、事務所の電話を鈴木周五郎の携帯電話に転送し、“そつと”会社を出たいと思っていた。

まゆみは自身の全てを涼介に受け入れて貰う為に、そして永遠に続けたい二人の関係の象徴的な一日とする為に、明日の土曜日はぬるい行動やつまらないミスは許されないと考えていた。

恋愛の理想という“森”をずっと見続けて来たまゆみは、たった数ヶ月の間に涼介という“木”だけを凝視してしまっている事に気付いていた。そして逃がしたくない恋を掴む為に自身が想い描く理

想の輪郭を何度も修正し、一步間違えば薄くて痛い感情の持ち主だとして誤解され兼ねない陳腐な行為を何度も繰り返していた事にも気付いていた。

(・・・あと30分何事も無い様に・・・)

まゆみは壁に掛かる時計を見た後、夕日をブラインドで遮った。

(ほんと、長かったな・・・)

まゆみは自分のデスクに戻りながら、追い求めて来た理想の恋愛の終着点が、心を弄られ続けている涼介であって欲しいと願っていた一週間を、再び振り返えろうとしていた。

あの日から一週間が過ぎていた。

(・・・)

涼介はまゆみとの会話を振り返っていた。

まゆみはこの一週間、涼介にメールを乱打する事を止めていた。そして涼しくもある隙の無い文章で、涼介好みの話題を時折メール画面に挟んでいた。電話では多彩な表現を積極的に試み、少ない時間を有効に使うとするいじらしさを醸し出した。

まゆみは一週間の間に、涼介に対して自身の違った一面を確実に披瀝していた。

(・・・)

涼介は明日の土曜日に控えたまゆみとのデートを前に、客観的に若々しく、スタイルも良いまゆみとエリカを初めて比較していた。

(・・・)

涼介は考えていた。

涼介はまゆみとのセックスを、今後まゆみに対してどう立ち居振舞うのかを決める最後の判断材料として位置付けていた。涼介の気持ちは当然エリカだった。しかし涼介は、自身の殻を一枚破った様な言動を見せ始めたまゆみとのセックスに因って、まゆみとの間に存在する噛み合わないリズムをも凌駕する様な、まゆみに対して用

意してある答えを書き換えなければならぬ様な、画期的な新機軸が打ち出された場合の事を貪欲に考えている自分を俯瞰ふかんしていた。

「課長代理！」

広山の声が会議室に響いた。

「！！！！！！！！」

涼介は広山の声で我に返った。

何分か前、涼介が恭子を注意した会議中の出来事だった。

「……そうだな……じゃあ……絞り込んだメニューのネーミングの……リストアップだな……広山、続けてくれないか。」

涼介は広山が何度声を掛けて来たのか知りたい思いに駆られながら、誰とも視線を合わさず、資料に目を落とし、何時もより押さえた声で広山にそう指示をした。

「分かりました。」

広山はプロジェクターの準備をする為、席を立った。

（……………）

恭子は広山の動きに呼応する様に席を立った。

向かい側のビルの窓で乱反射する夕日は、更にその輝きを赤く増していた。

（初めて見たな……代理のあんな姿……代理は何を考えてたんだろう……………）

恭子は電動カーテンのスイッチを押した自分の指先に、胸の鼓動が波打つ様に届いている事に驚いていた。

（代理も何か悩んでる……………）

閉まり行くカーテンを見ている恭子は自己の情熱を強烈に弄いじり始めていた。そして恋を攫さらおうとする女性に有りがちな、手前勝手に無遠慮な主観で涼介の心の内を覗のぞこうとしていた。

（……………）

席に戻った恭子は涼介を凝視ぎやうしし、涼介が見せた散漫さんまんな姿の原因が何なのか、猛烈な速さで詮索せんさくを始めた。

（私の事で悩んでるのかも……………）

そう考えた瞬間、胸に走った痛みを恭子は信じた。

ほんの何分か前、恭子は涼介の事を思い詰めていた。そしてその数分後、恭子の姿を焼き映したかの様に涼介の心は何処かに泳いでいた。その事実は男性から情熱的に追い掛けられ、恋愛の主導権を常に握って来た過去を持つ恭子の恋心にとって、見逃す事の出来ない現実だった。

暗い会議室に広山の声が響いていた。

明るさを放つスクリーンの横で、涼介の姿がシルエットとなって浮かび上がっていた。

(.....)

涼介が“岡部恭子”という女性を愛する事を遠慮していると結論付けていた恭子は、シルエットの涼介を見つめる瞳の奥で、今夜その涼介に渾身の力を振り絞ってアプローチをする為の手筈を俊敏に整え始めていた。

二人は居酒屋のカウンターで肩を並べていた。

「我儘わがままを叱れるのは愛だし、許せるのは恋だし、怒るのは体だけかも知らないぞ・・・我儘の質にも因よるとは思っただけだよ。」

涼介は広山の相談に答えていた。

「広山、彼女の我儘を怒っちゃうってのは、今んとこ体だけで繋つながってんのかもしないな。」

涼介は立て続けにそう言った後、広山を見て“冗談だよ”と言った。

「・・・以外とそうなんですかねえ・・・。」

広山は苦笑いを浮かべていた。

「心配すんな、大丈夫だよ。」

涼介は広山のグラスにビールを注ぎながらそう言って笑顔を見せた。

企画開発部の会議後、30分程経っていた喫煙室だった。

「課長代理、ちよつと相談したい事があるんですけど・・・仕事終わったら付き合っもらて貰えませんか？」

涼介を追う様に喫煙室に入って来た広山は、立ったまま余所余所よそよそしく涼介にそう切り出した。

「どうした？・・・シリアスだな。」

「ええ、まあ、ちよつと・・・。」

「仕事の事か？」

「ええ・・いえ・・あの、今からタカハシフーズさんの所に行かないやいけないので・・代理、すいません、今夜お願いします・・ほんとすいません。」

広山はそう言って涼介の問い掛けを恐縮しながら誤魔化し、逃げる様に喫煙室を出て行った。

(・・・)

涼介は煙草を燻らせながら椅子の背凭れに深く体を預け、広山への処遇に何か問題が無かったか振り返っていた。

「岡部。」

広山は恭子のグラスにビールを注ごうとしていた。

「あつ、すいません。」

恭子は両手でグラスを持ち上げた。

広山の隣には恭子が座っていた。

(・・・)

涼介は居酒屋のカウンターで三人が肩を並べている事に胡散臭さを感じていた。そして若し本当にこの状況を恭子が設定したのであれば、恭子の“だし”に使われている事になる広山に申し訳ないと思っていた。

涼介と広山は仕事を午後7時30分に切り上げていた。

二人が会社を出てテナントビル1Fのエントランスを歩いている時、黒崎に在る取引先との打ち合わせ終了後直帰する筈だった恭子が、正面玄関附近で他部署の社員と立ち話をしている姿を広山が見つけていた。

三人はそれぞれの挨拶を交した後、広山は恭子と仕事の話を開始していた。

涼介は少し離れた所で広山と恭子のお話を聞いていたが、“お前も来いよ”と広山の言葉がエントランスに響いた直後、“代理、岡部も一緒にいいですか？”と、恭子を居酒屋に連れて行ってもいいかどうかを訊ねられていた。

涼介は前を歩く二人を追い掛ける様に街頭を歩きながら、相談事のある広山が何故岡部を誘ったのかを考えていた。そして涼介は、“俺は構わないけど”と恭子の合流を受け入れた時、広山が恭子に見せた絶妙な笑顔と、その広山に一瞬呼応した恭子の笑顔を思い出していた。

涼介は時折後ろを振り返り、その都度笑顔を残す恭子を訝<sup>いぶか</sup>っていた。そして喫煙室で広山が見せた態度に端を発している一連の出来事を振り返っていた。

涼介は二人の後ろで、恭子が広山を巻き込んで何らかの知恵を働かせていると仮定し、納得出来る推察を一つ心に落としていた。

「そう、結婚考えてんのか。」

「はい。」

「付き合い長いのか？」

涼介は広山の話当真剣に聞き、真剣に問い掛けていた。

「付き合いは12月で・・・まる2年ですね。」

広山は彼女との間に在る悩みを涼介に相談していた。

「そう・・・。広山、バランスとタイミングは大切だぞ・・・。そうだな、俺が思う結論を言うと、女性は真実より誠実を選ぶぞ。」

「・・・・・・・・。」

広山は黙っていた。

「良く聞く話だと思っただけだし、大切な女性は失って初めて、本

当に大切な女性だったんだって気付くんだよな……。広山も色んな恋を経験してるだろうし、俺がどうこう言う話じゃないんだけどさ。」

広山と彼女の関係や、彼女を想う広山の心情を初めて具体的に聞いた涼介は、穏やかであり真摯だった。

「・・・まあ、俺にそんな話をするって事はさ、例えば勢いで結婚を申し込めた時に動かなかったか、動けなかつたって事なんだろうな。」

涼介はそう言いながら広山にビールを注いだ。

10月17日の金曜日、午後8時30分になろうとしている店内は満席になっていた。

三人は鳥町食堂街に暖簾を出している、広山が行き付けている居酒屋に居た。

三人が店に入った時には、店の出入り口の傍から細く真っ直ぐ延びている、後ろに人が一人やっと通れる程のスペースしかないカウンター席の奥に構える座敷は全て埋まっていた。広山は申し訳なさそうな顔を見せている店長に笑顔を見せながら、まだ誰も座っていないかったカウンターが一番奥に涼介を座らせ様としていた。しかし涼介はその気遣いを断り、至極自然に恭子を奥に座らせ、広山を真ん中に座らせていた。

「岡部。」

「はい。あつ、すみません、ありがとうございます。」

恭子はグラスを持ち上げた。

涼介は広山にビールを注いだ後、そのまま岡部のグラスにビールを近づけていた。

「……………」

恭子は何か喋ろうとしていた。

「広山。」

涼介は恭子のグラスにビールを注ぎ終わる前に広山に声を掛けた。

「はい!？」

話し掛けられると思っていなかった広山は、少しびっくりしていた。

「バランスはほんと大切だぞ。一方的で極端じゃ相手も息が詰まっちゃうからさ。」

「はい……。」

「恋つてのは何時だつて激しくて情熱的じゃない。でも愛はその逆で喜怒哀楽が穏やかで魅力的だろ? 恋愛つてのはその二つがくっついてる訳だからさ、お互い意思の疎通に戸惑う時があると思うんだよ……彼女の事が大切なら、甘え方とか、叱り方とか、そんな様な物に隠れてる思い遣りとか、素直さとか……まあ何て言うか、愛情を彼女に出し惜しみしない様にな。」

「……そうですね……。」

広山は頷いた。

「……大切な時期だぞ、今。」

「そうですね……。」

「広山、悩んだり迷ったりしてる時に隠れてるからな、二人の行く末を決めるタイミングがさ。そして突然試されるぞ、思いの深さを……広山、お前結婚考えてんのなら、そのタイミングを外さない為にもさ、守るべき人を絶対守るんだつていう強い意志を常に心の真ん中に置いとけよ。間違つても俺は常に愛情を注いでるから大丈夫だつて気にはなるなよ。彼女は広山以上に悩んでるかもしれないんだから。」

涼介は語る程に、自分の痛い過去を蘇らせていた。

「……彼女つてそんなに我儘なのか? ……怒り方が間違つてるから彼女が意地になつてるつて事はないのか? ……まあ、広山なりでいいとは思っただけど、愛してんなら何故怒んのか、そのロジックを完成させなきゃな。」

「ロジックですか?」

「そう。……風が吹けば桶屋が儲かるつて知ってるか?」

「・・・聞いた事ありますね。」

「今の広山の態度はそのタイトルに似てんじゃないか？」

「・・・？」

「真ん中を端折はしよっちゃってるって事だよ。」

「・・・言葉が足りないって事ですか？」

「そうなんじゃない？」

「・・・そうなんですかね・・・。」

「例えばさ、我儘を怒るのは愛してるからなんだって事を論理的に繋つなげてみるよ。そして繋げた部分を彼女に見せてあげんだよ。ある意味それが誠実まことってやつだからさ。そうすれば展開はす変わって来る筈だから。」

「・・・なるほどですね・・・。」

広山は遠くを見つめる様な声でそう呟つぶやいた。

「彼女に取っちゃさ、付き合って2年だっけ？それなのに何時も怒られててさ、その理由が“愛してるからなんだ”みたいな一言だけで簡単に片付けられちゃ、何時か広山がロマンティックな状況を作って結婚申し込んだって、彼女即答出来ないだろ？」

「・・・。」

広山は真剣に涼介の話に耳を傾けていた。

「そういう感情に行き着く広山の心の内を具体的に会話しまくんなきゃ駄目だと思っぞ。そうすれば広山が許せないと思っ彼女の一面もきつと減って来るだろうし、そうなれば怒る事も減るだろ？・・・まあ、ちよつと、俺は真ん中を端折はしよらせて貰もらうけど、それを続ければ何時からか怒りが叱りに変わって、お互い素直すじになって、最後は気持ちを伝え合う事に手を抜かなくなるんだよ。」

「・・・代理、勉強になります。」

広山は言った。

「・・・俺には出来ないんだけどな。」

涼介は饒舌じょうぜつの後、そう言っって笑った。

「・・・でも、ほんと勉強になります。」

「広山は涼介からビールを注がれていた。」

「・・・そう?・・・でもそう言ってる内は駄目かもしんないな。」

「涼介は広山にビールを注し返されていた。」

「そうですか・・・。」

「勉強つて言うより“そんな事分かってます!”位、言つて欲しかったな。」

「涼介は笑っていた。」

「なるほどですね・・・。」

「広山は夕方の喫煙室で涼介と会話した時と同じ様に恐縮し、同じ苦笑いを見せていた。」

「彼女との事をさ、俺にこんなに好き勝手に言われて考え込んでる様じゃあ、彼女もきつと広山との将来考え込んでるぞ・・・。」

「グラスのビールを空けた後、広山にそう付け加えた涼介は、大切な女性を守れなかつた過去の自分の痛い姿と、その痛い姿に耐えていただろうマキの顔を思い浮かべていた。」

「・・・なるほど・・・そうですね・・・誰に何と言われ様と、守るのは僕なんですよね・・・。」

「・・・誠実な情熱は伝わるからさ・・・。」

「涼介は独り言の様にそう言つて煙草に火を点けた。」

「広山さん情熱ですよつ、頑張つて下さいね。」

「居酒屋に入つても殆ど喋る機会が無く、二人の話に加わるタイミングを計っていた恭子は、此処ぞとばかりにカウンターに身を乗り出し、笑顔で広山を覗き込み、場に新しい空気を流し込もうとするかの様に涼介の言葉を拾つた。」

「頑張れ?・・・まあ、岡部に取つちや対岸の火事だよな。」

「涼介は恭子の言動に反応し、棘のある言葉を放つた。」

「えっ!そんな事ないですよ・・・広山さん仕事に誠実ですし・・・尊敬してますし・・・そんな広山さんに幸せになつて貰いたいって思つてます・・・。」

「恭子は涼介の不意打ちに毅然と反駁した。」

「・・・岡部さ、今夜俺に何か言いたい事があつたんじゃないのか？」  
涼介は更に恭子の意表を突く様な質問を棘とげに混ぜた。

「えっ!!!・・・あ、いえ・・・別に・・・。」  
恭子は続け様に放たれた涼介からの棘とげに慌あわてた。

広山は“ばつ”が悪そうに背中を丸くしてビールを飲んでた。

涼介は煙草を燻くゆらせながら恭子の言葉を待つていた。

三人の間には居酒屋では似合わない沈黙が訪れていた。

(・・・)

恭子は混乱していた。

恭子は涼介をもう一度自分に惹ひき付ける為に、今夜涼介に女の弱さや“しおらしさ”という武器を見せ付け様と画策していた。故に今日の夕方行われた企画会議の直後、広山に今夜涼介を連れ出して欲しいと無理矢理頼み込んでいた。更に状況を見て広山に途中で抜け出して貰う事も遠慮なく頼んでいた。しかし恭子は広山の相談に集中している涼介に“武器”を使う機会を見つけられず、広山の話題に入り込む余地も見つけられず、企くわてた筋書きが思惑通りに展開しない場面の連続に焦り、苛立ち、戦術を変えるべきかどうか迷い始めていた。しかしそんな矢先、恭子は突然涼介に核心を突かれ、しかも座の中心に君臨出来るチャンスまで与えられ、何か喋らなければとする思いに自分の心を掻き乱し、逆に言葉を失ってしまった。

居酒屋の店内は賑わっていた。

三人だけには重い沈黙が続いていた。

(・・・)

恭子は自分の思惑が全て涼介に見抜かれているかもしれない現実に、言動を封じ込まれたままだった。

「・・・じゃあ悪いけど、俺、明日早いから先に帰るよ。」

涼介は恭子に考える“間”を充分に与えた後、煙草を消した。

「・・・明日早いって・・・ゴルフですか？」

黙っている恭子に痺しびれを切らした様に広山が喋った。

「ゴルフ?・・・そういう方法もあるな。」

涼介は広山に笑顔を見せながら立ち上がり、まゆみとのデートが待っている自分にそう言った。

「……………」  
広山は涼介の言葉を理解出来ないまま、反射的に立ち上がった。

「じゃあな、広山。・・・それじゃあな、岡部。・・・気を付けて帰れよ。」

涼介はそう言って、二人がこの後暫くは飲んでいられる位のお金を広山に渡し、踵を返した。

「お疲れ様です。」

広山は涼介に軽く頭を下げた。

「じゃ。」

涼介は振り向いて手を上げた。

「……………」  
恭子は座ったまま会釈するのが精一杯だった。

広山は涼介の背中をずっと目で追っていた。

(……………)

恭子は涼介の姿が居酒屋から消えた瞬間、涼介に対して用意していた言葉や仕草の数々が永遠に封印された事を悟っていた。そして涼介が見せた居酒屋での振る舞いや、付け入る隙の無かった鮮やかな去り際にある種感動すら覚えていた。

「…………ごめんな、途中抜けらんなくて。」

広山は涼介が去った後、恭子にそう言った。

「そんな事ないですよ広山さん。私の方こそ無理言ってますいませんでした。」

恭子は気丈に、そして素直に謝った。

「・・・俺が言うのも何だけどさ、代理に姑息な手段は通用しないんじゃないかな……………」

「……………」

恭子は不細工ふさいくに引きつっているかもしれない笑顔をかろうじて広山に向けたが、返す言葉は無かった。

「……出ようか。」

広山は座り直し、グラスに残っていたビールを飲み干し、恭子に言った。

「……そうですね。」

恭子はカウンターの隅で、狙い落とそうとした涼介の強さに完全に打ちのめされた事を自覚していた。

「……情熱は誠実でなきゃ伝わらないらしいぞ。」

広山は言った。

「……そうですね……。」

恋を実らせ、愛を育もうとする情熱は潜在的であり、その本質は純粹だという事に恭子は気付き始めていた。そして女王様やお姫様を気取り続け、情熱を不純に扱っていた過去の自分のぬるい恋愛に物悲しさを感じていた。

「岡部、悪かったな。」

「何言ってるんですか広山さん、悪かったのは私です。そんな事言わないで下さい。」

「……落ち込んでないよな？」

「落ち込んでなんかありません。全然大丈夫です……っていうか課長代理もつたいないなあって思ってたんです。私、結構いい女なのになあつて。」

恭子はそう言っつて、広山に向けた自分の笑顔が不細工でない事を再び祈っていた。

(……………)

涼介はBARのカウンターで煙草を燻くらせながら、午後9時を少し過ぎて腕時計の針を確認した。

(まだ早いんだよな……)

涼介は心の中でそう呟き、携帯電話のアドレスを開こうとしていた。

エリカに出逢う前迄の涼介であれば、居酒屋を出た後に誰彼の区別なく女性に電話をし、今から一緒に飲まないかと誘っていた筈だった。そして隣に来てくれた女性をベッドに誘う為だけの優しさを精一杯見せていた筈だった。

(・・・ぬるいな)

涼介はエリカの名前が出ていた画面を閉じ、携帯電話をカウンタに置き、自分を鼻で笑った。

店内には普段流れている自動ピアノの美しい音色ではなく、緩やかなジャズが流れていた。

(・・・)

涼介は二杯目のラムバックを飲み干した。

「・・・何時も有難う御座います。」

涼介の顔を知るバーテンダーが涼介に近寄り、灰皿を交換しながらそう話し掛けた。

「・・・マイヤーズをストレートでくんないかな。」

「かしこまりました。・・・珍しいですね。」

「・・・そんな日なんだよ。」

店内には街の喧騒けんそうとは無縁の空気が流れていた。

間接照明が映し出す客のシルエットは、涼介意外全てカップルで括くくられていた。

(・・・)

涼介は何処を見つめるでも無く、左手で携帯電話を玩もてあそんでいた。

涼介はエリカからのメールを欲しがっていた。そしてエリカにメールを送信する事をずっと考えていた。

(・・・)

涼介は煙草に火を点けた。

「作りますか？」

バーテンダーが涼介に声を掛けた。

「・・・帰るよ。」

Ｌ字に延びるカウンターの一番奥でストレートグラスを三度空にしていた涼介は、そう言っただけで点けたばかりの煙草を消した。

涼介の心の中は居酒屋で恭子に見せた自分の態度と、明日に控えたまゆみとのデートの事が入り乱れ、今夜エリカに会いたいとする気持ちに絡み付いていた。

「・・・有難う御座います。」

バーテンダーは、それだけを涼介に言った。

(・・・)

涼介は会社の駐車場に戻る途中の路上で、恭子との過去の出来事を振り返っていた。

(申し訳ない事をしてたよな、まったく・・・)

涼介は恭子の事を、同じ匂いをさせている女性だと感じていた。そして鬱積している自身の美学の捌け口として、不安定な情緒を救ってくれる女性として冒険し、プライドを守る“いい女”という位置付けで接していた事を思い出していた。

(しかし今夜はあれで良かったと思うんだけどな・・・)

BARに入る前から恭子に対する罪悪感に包まれていた涼介は、恭子に晒し続けていた自分の自惚れた態度を反省していた。

(・・・何処にあるんだ・・・?)

涼介は夜空を見上げた。

(・・・曇ってるのかな・・・)

涼介は出ている筈の月を探しながら、明日に控えるまゆみとのデートの行方も探し始めていた。

(・・・)

まゆみはさり気なく腕時計を見た。

テーブルの下で確認した時間は、午後8時10分を指していた。

「松岡、明日博多の森に行かないか？」

「えっ!？」

「アビスパの試合見に行こう。」

鈴木周五郎は臆する事無くそう言った。

二人は地下鉄中洲川端駅を押さえ付けられる様に建っている、リバレイン五階に在る叙々苑という焼肉店に居た。

「・・・社長、すいません。・・・明日は実家で姉夫婦の子供の世話が待ってるんです・・・。」

まゆみが搾り出した嘘は、思い付きにしてはリアルだった。

「・・・。」

鈴木周五郎はまゆみを見つめながら何かを考えていた。

午後6時過ぎ、まゆみは事務所の電話を鈴木周五郎の携帯電話に転送し、退社時のチェック事項を何時もより時間を掛けて済ませ、事務所を出ようとしていた。

（よし、これで大丈夫。）

まゆみは電気を消した。

明かりの消えた事務所は、降ろされたブラインドの隙間から差し込む夕日の朱色が映えていた。

（さあ、帰ろう。）

まゆみはバッグの中から鍵を取り出し、明日のデートの為に今夜やって置くべき事を頭の中で整理しながらドアに向かった。

“ガチャッ”

（・・・!!）

まゆみがドアノブに手を掛ける寸前、ドアノブはまゆみの手から逃げた。

ドアは勢い良く開いていた。

まゆみは突然目に飛び込んで来た現実がくぜんに愕然がくぜんとしていた。

「おおっ！お疲れさん！！」

鈴木周五郎は目の前の思い掛けない現実に驚き、高らかに声を上げた。

「・・・お疲れ様です・・・。」

まゆみは後退あしひきりなが困惑こんぱくしていた。

「はい、お疲れさん。・・・松岡、電気点けてくれ。」

「・・・はい・・・。」

まゆみは言われるがまま、消したばかりの電気を点けに戻った。

「帰る所だったのかい？」

鈴木周五郎は目で見れば分かる事実を嬉しそうに言葉にした。

「はい。」

まゆみは此処こゝしか無いとばかりに強い意志を込め、返事を事務所に響かせた。

「そうか・・・でも、申し訳ないけど、これを入力してくれないかな。設計変更の打ち合わせ記録なんだ。」

鈴木周五郎はまゆみの顔を見ず、鞆たもとの中を弄もよほっていた。

「・・・あの・・・でも・・・。」

まゆみは返事をする事が出来なかった。

「頼むよ。」

鈴木周五郎の口調は柔らかかった。しかしその言葉はお願いではなく命令だった。

「・・・分かりました。」

まゆみは従わざるを得なかった。

二人は暫しばしくの間、無言のまま残務処理ざんむしりをしていた。

まゆみは後5分早く会社を出ていればと悔やみながらパソコンと向き合っていた。

「なあ、松岡、お腹空いただろ？」

鈴木周五郎は嬉しそうだった。

「えっ？・・・いえ、今日はお昼が遅かったので、まだ余り・・・。」  
まゆみは動揺していた。

「そうか？俺は今日昼飯を食べてないから腹ぺこなんだ。」  
パソコンの画面を見ながら鈴木周五郎はそう言った。

「・・・。」  
まゆみは何も喋らなかつた。

「・・・そうだなあ、それじゃあ残業のお詫びを兼ねてビール奢らせてくれないか・・・そうだ！焼肉にしよう！リバレインに美味しい店があるんだ！」

「・・・ええ・・・。」  
まゆみは澀んだ。

鈴木周五郎は事務所の入り口でまゆみを引き止めた時、このチャンスを逃すまいと思っていた。そして此処までは女性に対して不器用で強引な自分をまゆみには悟られず、自然体で食事に誘えていると思い込んでいた。

「どうした！元気ないな。体調でも悪いのか？」

「えっ？・・・いえ・・・。」

「じゃあ行こう！」

「・・・はい・・・。」

まゆみの頭の中は明日のデートの事で一杯だった。しかしまゆみは折れた。

「松岡、残りは月曜日でいいぞ。」

鈴木周五郎は残務処理を止め、すでに立ち上がっていた。

「・・・はい・・・。」

まゆみはパソコンの液晶をみつめながら、鈴木周五郎の術中に嵌った事を悟っていた。

「じゃあ行こう、腹ぺこなんだ。」

「・・・はい。」

まゆみはそう言ってパソコンの電源を切る手順を踏み始めた。

まゆみは明日の為に立てていた今夜の予定を鈴木周五郎に困つ大

幅に変更しなければならぬ事実を強いられていた。しかしまゆみはその事実思った程苛立ちを覚えていない自分が居る事に少なからず驚いていた。それは一己の女性として誰もが持つている、幸せな家庭を築きたいとする本能が、鈴木周五郎という男性を完全に拒む事をさせない為の姑息なシグナルを、恋愛を司るまゆみの神経に働き掛けている所為かもしれない。かつた。

「今日はデートだぞ！」

「えっ!?!」

「冗談だよ、冗談！」

鈴木周五郎は上機嫌だった。

「そうか・明日は実家か・。なあ、松岡、その前に二人の時に“社長”は止めてくれないか。鈴木さんとか、周五郎さんとか呼んでくれ。」

「でも・。。」

「いいんだよ、“ざつくばらん”な男だから。」

「・。・。。」

まゆみは少し困っていた。

「・。・んー、そうか・。子供の世話か・。でも松岡、それは一日中じゃあないんだろ？」

「ええ、でも、あの、姉夫婦が一泊で温泉に行くらしいんです、たまには二人だけで行きたいらしくて・。だからお母さんと私で土日はずっと子供と一緒になんです・。。」

「そうか・。しかし途中何時間か抜け出す事は出きるだろ？」

鈴木周五郎は粘っていた。

「ええ・。でも、無理だと思いません。お母さん最近体の調子良くないみたいだし、子供達にも遊びに連れてくって約束してあるし・。。」

「そうか。．．じゃ、俺が子供達を遊園地にでも連れて行くのか？」  
鈴木周五郎は食い下がった。

「そんな事出来ないです！社長にそこまでは．．．。」  
まゆみは一向に良くならない状況に焦りを感じていた。

「俺なら平気だから。．．そうだ！そうしよう！」  
「．．．．．。」

まゆみは鈴木周五郎の圧力に、このままでは寄り倒されると感じていた。

「な、いいじゃないか、ドライブを兼ねて遊園地に行こう。そうすればお母さんも楽だろうし、俺は子供好きだし、お子さんは二人だろ？なら四人で家族みたいでいいじゃないか。」

鈴木周五郎は詰め寄り、まゆみは土俵際まで押し込まれた。

「．．．ええ．．．だけど私一人じゃないんです。友達を二人呼んでるんです。大学の同級生なんですけど、二人とも子供が居て、皆で一緒に遊ぶ事にしてるんです．．．。」

まゆみは土俵際で、自分でもびっくりする様な嘘を言い放った。

「．．．．．。」

鈴木周五郎は考えていた。

「すいません、社長．．．それにその日は皆家に泊るので、日曜の夜迄ずっと一緒なんです。」

まゆみは、鈴木周五郎が言葉を発する前に、そう嘘を被<sup>かぶ</sup>せた。

「．．．そうか．．．。」  
「皆久し振りに会うし、女だけだし、私も結構楽しみにしてたから．．．。」

まゆみは必死で、更に嘘を放った。

「．．．そうか．．．。なら、余り無理は言えないな．．．。」  
「すいません。折角のお誘いなんですけど．．．。」

「残念だけでしょうがないな。俺の誘いが急過ぎたしな。」

「．．ごめんなさい。．．あの．．．でも社長、近い内見に行きましよう、サッカー。．．私、サッカー好きなんです。」

まゆみは引き際を知らない二流芸人の様に、余計な事を勢いで喋ってしまつた自分に“はっ”としていた。

「!!!.. そうか、サッカー好きなのか！そりゃ知らなかつたな！」  
鈴木周五郎はそう唸つた後、ジョッキに三分の一程残つていたビールを一気に飲み干した。

「.. ええ...」

まゆみの声から勢いは消えていた。

まゆみは土俵際で鈴木周五郎を綺麗に“うつちやつた”と思つていた。しかし、そう決め込んだ事で軍配が上がる前に勝敗への集中力を欠いてしまつていた。そして当然の様に鈴木周五郎はその隙を見逃さなかつた。

二人の勝負には“物言い”が付いた。

「良かったよ、サッカーが好きで女性と付き合うのは初めてなんだ。趣味が合う事は大切な事だからね。.. そうかあ、じゃあ近い内にチケット買つておくよ。何処のファンかい？アビスパだと嬉しいな。.. すいません！生一っ！」

鈴木周五郎の瞳には輝きが戻つていた。

「ええ...」

まゆみの背中はまだ丸くなり、新たな言い訳を探し始めていた。

「.. 違つんだな？じゃあ、マリノスとかレッズかい？.. 松岡は都会的だもんな。.. そうだ！！大阪や横浜に見に行つてもいいな。面白いぜ、きつと！」

鈴木周五郎は水を得た魚になつていた。

「.. ええ...」

サッカーが好きだと称する事が痴がましいくらい、まゆみが知つているクラブチームの名前は限られていたが、まゆみは取り敢えず笑顔を作つた。

「楽しみになつて来たよ。」

鈴木周五郎の心は跳ねていた。

「.. そうですね...」

まゆみは涼介とのデートの前日に余計な憂鬱を抱え込んでしまった事を後悔していた。しかし鈴木周五郎への詰め甘さを悔やむより、今はまだ乗り込むべき船を二艘用意していても問題は無いという、幸福な未来が約束されている訳ではない涼介との現状に一抹の不安を抱いている、もう一人の自分が画策する思惑に妙味も感じていた。

「ワールドカップのアメリカ大会でさ、バツジョがPK外してさ、松岡は見てたか？あの試合。」

「・・・バツジョって、人気ありましたよね・・・。」

鈴木周五郎は生ビールを美味そうに飲みながら、サッカーについて延々と語り始めていた。まゆみは断片的に知っているサッカーの事を時折会話に挟み、鈴木周五郎の機嫌を伺いながら明日の昼迄に大蒜の臭いを消す方法を考えていた。

“物言い”が付いていた二人の勝負の軍配は、取り敢えずまゆみに上がった。しかし今後あるだろう取り組みで、鈴木周五郎が同じミスを犯す事は考え難かった。

「・・・ベルギー戦の稲本は切れまくってたよな。」

「そうですね・・・。」

まゆみはさり気なく腕時計を見た。

時間の針は9時5分を指そうとしていた。

鈴木周五郎にとっては合格点が与えられる夜となっていた。まゆみにとつては、甘くてぬるい恋の駆け引きを一つ披露しただけの夜となっていた。



## 23・・・最後の幕開け

(大学生の時以来だな・・・)

涼介は煙草が吸えない苛立ちと共に、明るい時間に座れない場所で女性と待ち合わせるといふ、自分のスタイルの中には既に存在していないデートの始まり方に戸惑っていた。

10月18日土曜日の午後、涼介は小倉駅新幹線改札口の前でまゆみを待っていた。

(このまま知った奴に会わなきゃいいな・・・)

涼介は往来の多い連絡通路と改札口の間にあるスペースの壁に寄り掛かり、人通りに背を向けていた。

涼介は小倉に来た事が無いまゆみの希望を全面的に受け入れた事の後悔も、心の中に溜め始めていた。

(・・・それにしても遅過ぎるな。)

涼介は左肩を壁から離し、組んでいた腕を解いてサングラスを一度右手で触り、改札正面にある時計を見た。

時計の針は午後2時15分を指していた。

(何かあったのかな・・・)

“今から新幹線に乗るね”というメールを40分前にまゆみから貰っていた涼介は、既に姿を現していなければならぬ筈の時間を20分程過ぎている事実、ある種別次元の不安を掻き立てられていた。

(この中に居なきゃ電話だな・・・)

涼介は新幹線から降りて来た人達が、ホームからロビーロビーに繋がる階段を一団となつて下りて来る光景を見つめながら、今度こそこの人波の中にまゆみが居て欲しいと思つていた。

(まったく……)

散ひらけ行く一団の中にまゆみがない事を確認した涼介は、シャツのポケットから携帯電話を取り出した。

改札正面の時計は午後2時30分を指していた。

涼介の周りには、涼介と同じ様に携帯電話を取り出している人達が何人が居た。

「お待たせつ!!」

「……」

涼介は突然耳元で響いた声にゆっくりと振り向いた。

「びっくりした?」

まゆみは笑顔を弾かせていた。

「……来てたんだ……」

涼介は携帯電話を閉じ、何時もより低く落ち着いた声でそう言った。

「あれ?驚かなかつた?」

まゆみは涼介の冷めたりアクションに拍子抜けしていた。

「……そうだね……」

涼介は無表情でそう言った。

待ち合わせの時間を過ぎてても連絡の無いまゆみに何かトラブルでもあつたのではないかと心配していた涼介は、まゆみの不意打ちに人間らしく反応する事以前に、不安や苛立ちが自分の顔に齧もたりしている筈はずの厳しい表情を消す事に精一杯だった。

「何だ……」

まゆみはがっかりした仕草を見せながらも、涼介の傍に居る事の嬉しさをはつきりと表情に浮かべていた。

「……何時から居たの?」

涼介は自分の目に出ているだろうまゆみに対する冷やややかな感情が、サングラスで隠れていて欲しいと思いつながらそう聞いた。

「さつきメールした時にはもう小倉に居たの。ちよっと街をぶらぶらしてた。」

まゆみはそう言つて、意地悪な自分を優しく叱つて欲しい素振りをちらつかせた。

「そう……。」

涼介は既に小倉に来ていたまゆみを改札口ですつと待つていた、ある意味滑稽な自分の姿を思い浮かべて冷笑した。

「……待たせちゃつてごめんね……。」

涼介の表情に何かを察知したまゆみは、加える予定の無かつた甘さを声に混ぜた。

「いや、いいんだ。……じゃ、行こうか。」

涼介はまゆみの変化に反応する事無く、小倉駅北口方向に踵きびすを返した。

涼介はまゆみを置き去りにして歩き出した事を気にしていた。しかしその事に対しての効果的なフォローを考えるよりも、涼介はサングラスの奥の瞳に柔らかさを取り戻す事が先決だと思つていた。

「涼介、歩くの速い……。」

「……ごめんな。」

涼介はまゆみの声に振り向き、落ち着いてそう言つた後、露骨に歩く速さをまゆみに合わせた。

10月にしては降り注ぐ日差しの強い午後、二人は肩を並べて小倉駅北口のメイン階段を降りていた。

まゆみは涼介と久し振りに並んで歩きながら、これから始まるデートに胸をときめかせていた。しかし涼介に行使した策略が成功だったのかどうか、心の隅で振り返つてもいた。

涼介はデートの幕の明け方についての感想を何時まゆみに聞かれてもいい様に、心の準備を急いでいた。

「此処こゝに停めてたんだ。」

「そうだよ。」

涼介は自分の車にゆっくりと向かっていった。

二人は小倉駅北口の直ぐ目の前にある駐車場の中を歩いていた。

日差しは容赦ようしゃ無く駐車中の車を照り付けていた。

「……余り喋しゃべらないのね。」

まゆみは涼介の後ろを歩きながら、少しずつ緊張し始めている今の自分の状態をそのまま涼介に向けた。

涼介とのデートを待ち侘わびていた三週間の間、涼介への思いをより一層強くさせていたまゆみは、初めて迎え様としている二人きりになれる空間を前に、思考を微妙に固くしていた。

「何時もと変わらないよ。」

涼介はそう言いながら、ポケットから取り出していたキーを車に向け、ハザードを二度点滅させた。

「この車？」

「そうだよ。」

「……日本車じゃない……よね？」

「そうだね。」

「格好いいね。」

「……」

涼介は薄い笑顔を見せながら、ドアに手を掛けた。

「何て車……だったっけ？」

まゆみは助手席側に回り込みながらそう聞いた。

「……BMだよ。」

「そっか、BMだよね……BM……W！」

まゆみは車の屋根越しに見える涼介に向かってそう叫んだ。

「……」

涼介はまゆみに一度笑顔を見せて、車に乗り込んだ。

（ やっっちゃった…… ）

まゆみは笑顔を引きつらせながら、何であんな話をしたのだろう  
と思っていた。

「ふう……。」

まゆみは恥ずかしさを誤魔化す様な溜息を吐いた後、助手席のド  
アを開けた。

「・・・暑いねっ。」

涼介に見せた醜態を取り繕う事だけを考えていたまゆみは、駐車  
場で50分近く日差しに晒され、かなり上昇していた車内の温度を  
率直に言葉にした。

「ごめんな。」

駐車場の出口ゲートにコインを入れ様としていた涼介は、その動  
作を止め、エアコンの温度を下げた。

「いや、そういう意味じゃなかったんだよ。」

まゆみは慌て否定した。

「分かってるよ。」

涼介は笑った。

「……………」

まゆみは言動の一つ一つが裏目に出ている事に焦っていた。

二人を乗せた車はKMMビルとリーガロイヤルホテル小倉の間を  
抜け、199号線に出ようとしていた。

車内は静かだった。

まゆみは落ち着きを取り戻そうと必死になっていた。

「・・・涼介の車に乗れて嬉しい。」

まゆみは慎重に言葉を選んだ。

「そう?・・・初めてだっけ?」

「うん。」

「・・・ようこそ。」

涼介は少し気取って見せた。

「えっ、あ、こちらこそ……。」

「ははっ、“こちらこそ”って、お洒落な返しだね。」

「え？……そう……かな……。」

まゆみは予期せぬ会話の流れに照れていた。

「……映画だね？」

涼介は穏やかな笑顔を一瞬まゆに向けた後、そう言った。

「映画……うん……。」

まゆみは涼介の至極自然な振舞いに、余計な緊張から解放され様としていた。

「……散歩したかったんだよね？」

「えっ!?!……うん。」

「了解。」

「……優しいね……。」

紫川手前を左に曲がり、ガードを潜っていた車は小倉の目抜き通りに向かっていた。

車内の空気は心地良く乾き始めていた。

まゆみの表情には柔らかさが戻っていた。

「こんな風になってるのね。」

まゆみは目の前に広がった予期せぬ景色に少し感激していた。

涼介は北九州市役所の地下に広がる市営駐車場に車を止め、市役所に隣接する勝山公園の中に出られるエレベーターを使い、まゆみを地上に誘っていた。

肩を寄せ合っている二人は、中央図書館や市民プールを囲む様に形成された緑豊かな場所に背を向け、勝山公園の直ぐ横を流れる紫川沿いに向かつて歩いていった。

木漏れ日が張り巡らされた芝生の上に落ちていた。

「涼介、ありがとう。」

「・・・こちらこそ。」

「もう・・・。」

まゆみは話す必要の無い沈黙を楽しんでいた。

「ね、何考えてる？」

まゆみは沈黙に充分浸った後、涼介にそう聞いた。

「・・・昼間のデート、苦手なんだよ。」

話す事が無く、何も考えていなかった涼介は正直な気持ちを選んだ。

「・・・そう言ってたよね・・・。」

まゆみは涼介の言葉に困っていた。

二人は紫川むらかわを見下ろせる桜並木の中に居た。

対岸には小倉を彩る建物が林立していた。

「・・・映画館に入るのも10年振り位なんだ・・・煙草吸えないし。」

涼介は遠くを見ながら、正直な言葉を被せた。

「・・・そう・・・。」

まゆみは更に困っていた。

涼介は遠くを見たまま歩いていた。

「・・・らしいって言うか、涼介って不思議な人ね。」

まゆみは涼介を見ながら、心の中を忠実に言葉にした。

(・・・不思議な人か・・・)

涼介はまゆみの言葉に笑顔だけで答えながら、擦れ違っ行ってた女性が必ずその言葉を放っていた事を思い出していた。

二人は桜並木を抜け、紫川に掛かる太陽の橋を渡っていた。

「ここだよ。」

涼介は太陽の橋の欄干らんかんを建物の一部にした様な、紫側の土手も敷地の一部にした様な、そんな位置に建つ東京第一ホテル小倉を見上げ、まゆみにそう言った。

「・・・うん・・・。」

ずっと手を繋いで歩きたいと思っていたまゆみは、その思いを帰り道で実現させ様と自分に誓った後、涼介に笑顔を向けた。

映画館は東京第一ホテル小倉の地下に在った。

「・・・次は4時10分か・・・。まだ1時間以上あるな・・・。コーヒーでも飲もうか。」

涼介は映画館専用のエントランスには向かわず、ホテルの中に入り、ロビーの脇に在る室内階段を降りて映画館の前迄来ていた。

「・・・うん。」

まゆみは降りて来たばかりの室内階段へ踵かかとを返した涼介の背中に返事をさせられていた。

二人は東京第一ホテル小倉一階ロビーにあるラウンジに居た。

「博多の方が良かったろ？」

涼介はサングラスを外しながらそう言った。

二人は窓側の席に案内されていた。ラウンジと紫川の間にはホテルの中庭が美しく広がり、中庭の一角を占めるテラスにはオープンカフェ用の白いパラソルが綺麗に立ち並んでいた。紫川の向こうには二人が歩いて来た公園の木々が風に揺れ、その先では小倉城とリバーウォーク北九州の斬新ざんしんなビルが、時代を超越ちやうえつして描かれた一枚の絵画の様な趣おもむきで寄り添っていた。

「ううん、そんな事ないよ。」

まゆみは窓の外に広がる景色を見ながらそう言った。

「・・・まあ、ゆっくりしようよ。」

涼介はそう言った後、窓の外に顔を向け、まゆみや小倉という街に愚かな態度で接している自分の心をぬるく見つめていた。

「・・・」

綺麗な姿勢で座っているまゆみは、優しい瞳で涼介を見つめていた。

二人の前には飲み物が運ばれて来ていた。

涼介は窓の外を眺め続けていた。

(最低の男だな……)

涼介は長い沈黙をそのままにしている自分を苦笑いで区切り、コーヒーにゆつくりと手を掛けた。

「何故笑ったの？」

カップをソーサーに戻し、煙草に火を点け様としていた涼介にまゆみは聞いた。

まゆみはコーヒーを飲む前に涼介が一瞬浮かべた穏やかな笑顔を見逃していなかった。

「?……いや、何でもないんだ……」

涼介は煙を一息吐いた後、まゆみの質問に対してそう答える事しか出来なかった自分に未熟を感じていた。

窓から差し込む太陽の光は、涼介の顔に漂う気まずさをまゆみに晒さらしていた

まゆみは涼介の顔を見つめたまま、次の言葉より沈黙を選んでいった。

「……あそこに行ってみる？」

涼介は窓の外を指差し、まゆみの心を探る様にそう言った。

テラスには十本近くの白いパラソルが傘を広げていた。そしてその中の一組のパラソルに、笑顔を弾けさせている若い男女の姿が見えていた。

「……此処でいい。」

まゆみは柔らかい風の様な声で涼介の誘いを断った。

「そう……」

涼介はまゆみと出会って以来、初めて受身に回っている事に少しだけ焦っていた。

まゆみは綺麗な姿勢で涼介の顔を見つめていた。

涼介はまだ幾いくらも吸っていない煙草を消し、まゆみの視線を避ける様に窓の外を眺めていた。

まゆみに他意は無かった。まゆみは椅子に深く背を凭れ、時折頰杖を付き、時折眩しそうな表情を見せる涼介に心を奪われ、このままずつと涼介を見つめていたと思っただけだった。

涼介は場所を変える事も会話も欲しがっていないまゆみに困っていた。そして自らが自由に操れない沈黙を嫌っていた。

(.....)

涼介は眩しさを嫌がる素振りを見せながらサングラスを掛けた。

まゆみは幸せを感じていた。

涼介はまゆみと目を合わそうとしなかった。

パラソルの下では、若い二人がはしゃいでいた。

(.....)

涼介は立ち上がった。

まゆみは涼介を目で追った。

「.....トイレに行つて来る。」

涼介はそう言つてまゆみに笑顔を残し、歩き始めた。

(.....ほんと駄目だな、俺は.....)

涼介は自分を見つめ続けるまゆみから逃げる様に席を立つた事に辟易へきえきとしていた。

涼介はまゆみから“何故笑つたの？”と問い掛けられた時、テラスではしゃぐ若い二人の聞こえる筈のない声を心感じていた。そしてその声に因つて忘れる事の出来ない一人の女性との過去が揺り起こされ、脳裏にその女性の顔を鮮明に蘇らせていた。

涼介は窺うかがい知る事など到底出来る筈はずの無い心の内をまゆみに見透みすかされたと思ひ込み、動揺していた。

「最低だ.....」

涼介は歩きながら呟いた。

涼介はテラスに咲いたパラソルの下で無邪気にはしゃぐ若い二人に、圭子と過ごした羽田東京急ホテルでの一日を思い出していた。そして第一ホテル東京シーフォートで圭子に晒した、ぬるく不甲斐無ふがいない自分の姿も思い出していた。

(・・・ほんと最低な奴だ・・・)

涼介は何処<sup>どこ</sup>までもまゆみに対して失礼な自分を嘆<sup>なげ</sup>きながら、まゆみとのデートの幕開けを東京第一ホテル小倉の地下に在る映画館にしようと考えていた一週間前、意識の片隅にはつきりと圭子が居た事を振り返っていた。そしてその時に、心の中でずっと封印していた圭子との想い出を、まゆみの前で振り返えってしまうかもしれないと考えた自分を思い出していた。

## 24・・・不細工な葛藤

古川純一と涼介は大学生の時に知り合っていた。

深町圭子は、2002年の5月、古川純一の妻になっていた。

純一と涼介は、昔から語り継がれる“親友”という概念を全て満たしている様な関係を今に繋げていた。

涼介は純一の二つ年上だったが、涼介はそんな事を意に介さず純一に腹を割り、敬意を払っていた。

純一は“浜っ子”だった。それは横浜の大学を選んだ涼介に絶大なメリットを与える事にもなっていた。

2001年の春、転勤で生活の拠点が生まれ育った小倉に戻った涼介は、年に一、二度、纏まった休日を取れる時にしか純一に会えなくなっていた。しかし二人の関係が変わり褪せる事は無く、逆に遠く離れた分、今迄以上に取り合う連絡は増えていた。

涼介は折りに触れ電話やメールで交わす純一との会話に横浜の匂いを嗅いでいた。そしてその匂いは涼介が小倉での生活で蓄積させている心の疲労を取り去り、横浜本社復帰という信念を貫く為のモチベーションを蘇らせていた。

1992年、マキと涼介が蜜月だった夏、純一には彼女が居なかった。その年、社会人2年目だった涼介は、仕事とマキの存在に因って大学生の頃のように純一と遊ぶ時間を作れていない事に気を揉んでいた。そしてそんな涼介の思いはマキとのデート中に時折純一を誘う事となり、純一と二人で飲んでいる時には自然とマキを呼んで

いた。

純一は実家のある桜木町から神奈川大学に通い、マキは根岸からフェリス女学院大学へ通い、涼介は本牧ほんもくから関内かんないへ通勤するという生活環境の下、三人は大らかな時間を1年近く共有していた。

純一と涼介はマキを介在し、絆を更に深くしていた。

1994年の春、横浜駅のすぐ傍そばに本社を構えた、住宅設備機器を取り扱う会社の相生町支社で社会人2年目を迎えていた純一は、イベントコンパニオンをしている知り合いの女性から圭子を紹介され、付き合い始めていた。

圭子は大倉山に住む、明治学院大学の一年生だった。

初夏を迎えていたある夜、純一は涼介を花咲町に在る行き付けのBARに呼び出し、圭子を紹介していた。

涼介はミディアムのナイーブミューズレイヤーをティーブラウンに染め、無彩色のタイトな洋服にシャープなアクセサリをコーディネートして、無彩色のタイトな洋服にシャープなアクセサリをコーディネートして見えた時、内面を絶対人に晒さらすまいとしている様な尖とがった若さを感じていた。

マキと涼介の出会いから終わり迄の日々を誰よりも傍そばで接していた純一は、1993年の冬にマキと別れた涼介が、南青山にある広告代理店で働いているマキの日常を事ある毎ごとに耽ふけり、思いを馳はせ、酷ひどく落ち込み、現実を直視出来ないまま淡々と日々を過ごしている姿に触れる度、悲しみ、苦しんでいた。故に純一は2年前の自分が涼介にそうされていた様に、圭子との食事の時には涼介を誘い、涼介と居る時には躊躇ためらい無く圭子を呼んでいた。

純一と涼介の間に居る女性は1年間の空白を経てマキから圭子へ変わり、三人は文字通り“若い”と形容出来る行動力を活かし、秋口には頻繁ひんぱんに遊びに出掛ける様になっていた。

当初、デートにも拘かわらず頻繁に涼介を呼ぶ純一に対して露骨に不機嫌な態度を見せていた圭子は、時間の経過と共に窺うかがい知る涼介の内面や、空気を読んでいるかの様な気さくな一挙手一投足に、三人で居る事の楽しさを感じる様になっていた。

圭子と涼介は余り会話をしなかったが、“うま”は合っていた。客観的に三人の言動は至る所で不自然に映っていた。しかし三人は三人の関係がどんな風に思われていても気にしなくなっていた。そして街中にクリスマスソングが溢れ始める頃には、主語を使わなのまま成立させている純一と涼介の会話に、圭子もついて行ける様になっていた。

1995年の春、純一と涼介の会話の中に時折出て来るマキと言う女性がどんな人物だったのか、圭子は好奇心を抱き始める様になっていた。そしてその頃から圭子は三人の時間を作る事を積極的に仕切る様になり、真夜中でも涼介に電話を掛け、涼介の過去の話を聞き出そうとし、涼介が持つ世界観を自身の心に取り込む様にもなっていた。

圭子は純一や涼介から受ける刺激に困って物の見方や考え方を變遷させていた。そんな圭子の“若さ”の特権とも言える貪欲な吸収力は、当然の様に自身の恋愛にも影響を及ぼしていた。

1996年の夏、圭子は心の中に涼介を想う気持ちが確実に存在している事に気付いていた。その事実は三人で過ごす時間を減らす事に繋がり、何かに託けて涼介と二人で会う時間を増やしていた。

涼介は夏以降続いている親友の恋人の行動に悩んでいた。しかし涼介は親友の恋人の行動を受け入れていた。

北風が街を乾かし始める頃、圭子は涼介に心をもっと近くで触って欲しいと思い始めていた。

涼介は圭子の思いに気付かない振りを続け、純一は変わらず圭子を愛し、涼介を信じていた。

1997年、三人が一枚のカンバスに同じ色を塗り始めて3年目の8月、三人は昨年と同様、羽田東急ホテルで思い切り遊ぶ事になっていた。

大学生最後の夏を迎えていた圭子は、もう一度三人で羽田東急ホテルに遊びに行きたいと何ヶ月も前から純一に強請っていた。当然純一はそんな圭子の気持ちを受け入れ、プールサイドバーベキュー

というオプションが付いた羽田東急ホテルの宿泊券を二枚、再び会社のコネクションで手に入れていた。

圭子は昨年の夏に味わった、最高に楽しかった一泊二日を、しかし心の何処かに不思議な感覚が残った一泊二日を、もう一度味わいたいと思っていた。

(.....)

涼介は歩道に立ち、煙草に火を点けた。

トイレには行かずホテルの外に出ていた涼介は、堰を切った様に蘇り続ける圭子との出来事に歯止めを掛けられないまま、先生に叱られている中学生の様に俯いていた。

蒸し暑い朝だった。

開け放たれた窓から蝉の声が聞こえていた。

「エアコン入れた方がいいんじゃないか？」

涼介は純一に言った。

「任すよ。」

ベッドに座っていた純一は、辛そうにそう言った。

羽田東急ホテルに遊びに行く当日、純一は風邪を拗らせていた。

「.....」

涼介は未だ荷解きされていないダンボール箱の上に座ったまま動かなかつた。

高島町のワンルームで一人暮らしを始めたばかりの純一の部屋は、収まる場所を待っている荷物が散乱していた。

「.....涼介、行って来いよ。」

ベッドの上に座っていた純一は自分なりの結論を出した後、そう言っただけで体をベッドに横たえた。

(.....)

前夜からずっと純一の看病していた圭子は、純一の隣で二人の会

話を黙って聞いていた。

「・・・今何てつた？」

「・・・券がもつたいねえだろ。」

純一は朝になつても下がらない熱に少し苛立いらだつていた。

「おいおい、お前何考えてんだよ。もう今日は中止なんだよ。」

「・・・お前こそ何言つてんだよ・・・圭子はこの日をずっと楽しみにしてたんだぞ・・・。」

「・・・もういいよ純一、今日はやめよ・・・。」

圭子はそう言つて心配そつに純一を見つめていた。

「・・・いいから行つて来いよ、俺のせいじゃっちまうのは辛つらいんだよ。」

純一は涼介を見つめていた。

「・・・純一、それは違うよ。」

「違うかもしんじゃないけど、いいじゃないか。」

「ぼしやるとかじゃなく、それ以前だろ。」

「・・・俺は大丈夫だから。今日一日寝てりゃいいんだし。」

純一はそう言いながらベッドから抜け出した。

「・・・。」

涼介は純一を目で追いながら言葉を探していた。

純一はキツチンで二人に背を向け、涼介が持つて来た風邪薬を飲もうとしていた。

シンクの横には少しだけ手を付けた跡が残っている、圭子が作った朝食が置かれたままになっていた。

純一の背中では、純一には辛過ぎる沈黙が続いていた。

「やっぱ止めよう。」

涼介が言った。

圭子は純一の背中を見つめていた。

純一は涼介の言葉に、水の入ったグラスを左手に持ったまま動きを止めていた。

「……圭子は行きたいんだよ……だから連れてってやってくれよ……。」

純一は二人に背を向けたまま、涼介でも圭子でもなく、置かれた現実と向き合う自分に、そう静かに語り掛けた。

「ふう……。」

涼介は純一の言葉に、息を一つ逃がした。

圭子は俯うつむいていた。

「……何二人共暗くなつてんだよ、よくある事じゃんかさ、普通に行つて来いよ、いいじゃんそれで、な。」

純一は風邪薬を胃の中に入れ、何かを吹っ切るかの様に力強くそう言つた後、窓際へゆっくりと歩き始めた。

純一は圭子の事を強く愛していた。それ故に圭子の心が涼介に傾いている事をずっと前から気付いていた。

純一は心を葛藤かっとうさせていた。しかし愛情という崇高たうこうな感情に真摯しんしに向き合っている純一の純粹は、愛する圭子の心を束縛そくはくするのではなく、愛する圭子の信じる愛が、信じるがままに成就せうじゆして欲しいと願っていた。

「俺は大丈夫だから。」

窓を閉め、ベッドに戻つて来た純一は圭子の肩に手を触れ、そう言つた。

「……でも……。」

心の中に決して小さくはなく涼介が居る圭子は、そう言つたまま動けなかった。

「……な、涼介、そうしてくれ。」

純一は“でも”と言つたまま動かない圭子を見つめながら涼介にそう言つた。

締め切られた部屋には、蝉せみの鳴き声の代わりに純一がスイッチを入れたエアコンの音が響いていた。

純一はベッドに横たわり瞳を閉じていた。

圭子は純一の顔を見つめていた。

涼介は圭子に対する心の有り方と、純一の本心を察しながらも目を瞑ろうとしている心の有り方を不細工に葛藤させていた。

「何考えてるの？」

ラウンジに戻って来ても何も喋ろうとせず、窓の外を眺め続けている涼介にまゆみはそう問い掛けた。

「・・・俺にもあんな時代があつたなつて。」

まゆみの不満を見越していた涼介は、言い訳を落ち着いた声で届けた後、パラソルの中の若い二人に再び目をやった。

「・・・」

まゆみは仕方なく窓の外に顔を向けた。

「・・・」

涼介はまゆみとの間に態と沈黙を置いていた。

ほんの何分か前、涼介はまゆみの何気無い問い掛けに動揺し、まゆみの前から逃げ出していた。しかし涼介は動揺した事に因って、不埒な策略を閃いていた。

（あの日圭子を抱いてたらどうなつてたんだろう・・・。）

涼介はまゆみとの間に流れている不自然な空気を無視し続けた。

涼介は純一を部屋に残し、圭子と出掛ける事が間違いではないのだと、何度も何度も自分の心に言い聞かせていた。

横羽線を飛ばす涼介は、胸を締め付けられながらも純一の事を頭

の中から消そうと努力していた。そしてそうする事が圭子に対する  
礼儀だと思い込んでいた。

圭子は涼介の気持ちを察し、助手席で明るく振舞っていた。

照り付ける太陽の下、圭子の黒いビキニは涼介の瞳に余りにも眩  
しく映っていた。

プールサイドに並ぶ白いビーチパラソルの中、二人はビールで乾  
杯し合い、プールの中では付き合い始めたばかりの恋人同士の様に  
はしゃいでいた。

時折二人は芝生の上に並んだデッキチェアに体を横たえ、頭上を  
低空で頻繁に横切るジェットひんぱんの巨体が残す轟音ごうおんを、昨年とは明らか  
に違う感覚で聞いていた。

ダイナーの時の圭子は、肩紐の細い花柄に染まったニットのワン  
ピースを纏まとい、昼間と違ったしおらしさを見せていた。

圭子の日に焼けて赤くなった頬と肩は、甘いカクテルでその赤い  
色に優美さを加えていた。

涼介は潤うるいを増す圭子の瞳に、純粹に“恋”を感じていた。

圭子は部屋へ戻るエレベーターの中で、もう少しお酒が飲みたい  
と涼介に強請ねだっていた。

純一は昨年と同様、ツインとシングルを予約していた。

圭子は極自然ごくしぜんにツインの方に涼介を招き入れていた。

涼介は仰々おごごしく気取りながら、何処かの映画を真似まねてシャンパン  
と母いぢいのルームサービスを頼んでいた。

圭子は気持ちを整理していた。

涼介は純一の姿を圭子の笑顔に常に重ねていた。そしてその姿を  
絶対消しては駄目だと思っていた。

午後11時を回った頃、涼介はシングルの窓から羽田空港の夜景を眺めていた。

涼介は純一の姿を掻き消す寸前だった自身の心と、圭子への想いを見つめ直していた。

ほろ酔いの体をベッドに伸ばし、天井をぼんやりと見つめていた涼介の耳にドアがノックされる音が届いていた。

涼介はドアを開ける前に、圭子の覚悟を受け止め、圭子を守り抜く強い意志が在るのかどうか自分自身に問い質していた。

圭子は左手に持ったシャンパンを笑顔の横で揺らしながらドアの前に立っていた。

圭子の瞳は艶やかだった。

壁に掛かったブラケットの柔らかな明かりは、ベッドの上で肩を寄せて語り合う二人に恋人同士のシルエットを与えていた。

圭子は涼介から瞳を外さなかった。

涼介は圭子を見つめ、髪に触れていた。そして心も体も圭子に渡してしまいたい自分を許して欲しいと何かに祈っていた。

二人は情熱を押し殺した穏やかなキスで、唇から胸の鼓動を互いに伝え合っていた。

圭子は情熱を押し殺した分、重ねた唇を離そうとはしなかった。

涼介は圭子を強く抱きしめてしまわない様、情熱を押し殺していた。

ナイトテーブルの上からテレビのリモコンが落ちていた。

涼介は沈黙を引き裂いたその音に体を縛られていた。

涼介は圭子の唇を自分から遠ざけていた。そして抱きしめていた両手を圭子の肩に掛け、自分の額を圭子の額に付けたまま動こうとしなかった。

涼介は静かな部屋に響いた音の中に、圭子を愛する純一の声が混じっていた事を微かに感じていた。

涼介は圭子を見つめ直し、柔らかいキスを一度贈った後、圭子の刺さる様な視線を外して立ち上がった。

涼介は背負う“もの”の重さと戦い、敗れていた。

涼介は窓の傍に立ち、部屋からは見えない海を眺めていた。

圭子の心は途方に暮れていた。

涼介は黙ったまま、窓の外を見つめ続けていた。

圭子には見つめる場所が無くなっていった。

涼介は圭子へ掛ける言葉を探していた。

圭子は涼介が作る沈黙に必死で耐えていた。そして圭子は今夜涼介が守った“もの”以上に、近い将来、涼介は絶対に力強く自分を守ってくれる筈だと信じていた。

「もう！また何か考えてるっ。」

まゆみは少し拗ねた。

「・・・そうだね・・・大した事じゃないんだけど、シーフォートだつたんだよ。」

涼介は準備していた言葉でまゆみとの会話のテーブルに付いた。

「シーフォート？」

「そう、天王洲に第一ホテル東京シーフォートってのがあってさ、

そのロケーションが好きでよく使ってたんだよ・・・ここも第一ホテルだからね。」

涼介は言葉に乗る感情をコントロール出来ている事に少し満足していた。

「・・・その時の彼女を思い出したって・・・事？」

まゆみは思いを素直に口にした。

「・・・そんなんじゃないさ。」

涼介は意味有り気な柔らかい口調で否定した。

「・・・」

まゆみは心の中に湯水の如く湧き出している質問を、一つずつ整理していた。

「・・・映画の時間、まだまだよね？」

涼介はまゆみの顔を見つめたまま、そう切り出した。

「もう一杯何か飲む？」

涼介は何かを思い出した様に素早くメニューに手を掛け、素早く言葉を重ねた。

涼介は自身の過去の恋愛について遠慮無くまゆみに質問して貰う為に、これ以上想い出には触れられたく無いという態度を故意に見せ、まゆみの好奇心を煽<sup>あお</sup>っていた。

「・・・」

まゆみは涼介の事を全て知りたいとする恋心を瞳に溜め、涼介を見つめていた。

「・・・」

涼介は視線をまゆみからメニューに落としていた。

「・・・思い出すぐらい好きだったの？」

まゆみは差し出されたメニューには興味を示さず、涼介を見つめていた。

「・・・シーフォートの話かい？」

「うん。」

「・・・古い話ぞ。」

涼介は意識して会話に“溜め”を作り、まゆみから目を逸らした。  
「聞きたいな。」

「・・・よくある話だから。」

「綺麗な人だったの？」

「・・・綺麗な夜景だったね。」

「もう・・・。ね、彼女、綺麗だった？」

「・・・そうだね・・・でも、もういいんじゃない？その話は・・・。」

涼介はそう言って再びメニューに目を落とした。

「・・・。」

まゆみは何処か安心した様な表情にも見える涼介をじっと見つめていた。

「・・・涼介の好きな場所って興味あるな・・・。」

まゆみは放って置けば何時までも続きそうな沈黙を避ける様にそう言った。

「・・・そう？」

「そのシーフトって所に私も行ってみたい。」

「誰と？」

「もう。」

「・・・すいません。」

涼介はまゆみに向けていた穏やかな笑顔のまま視線を変え、左手を軽く上げ、傍を通り過ぎ様としていたウェ이터を呼び止めた。

「・・・。」

まゆみは涼介の横顔をじっと見つめていた。

「シャンパンでも頼む？」

「えっ？」

「・・・じゃあ、ワイン？」

涼介はウェ이터を待たせたまま、そんな生ぬるい追求の仕方では全てを吐露する訳が無いとでも言いた気に、まゆみを敢えて茶化した。

「うっん、・・・オレンジジュース・・・かな。」

「了解。．．じゃそれとエスプレッソを。」

涼介は待たせていたウェイターにそう言い、まゆみに微笑み掛けた。

「．．．．．。」

まゆみは涼介の微笑みに対し、ぎこちなく笑顔を作り返している自分の背中に走る悪寒おかんを感じていた。

まゆみは涼介の笑顔に“目が笑っていない”という笑顔を初めて体験していた。しかも初めての相手が涼介だった事に愕然がくぜんとし、更に“自分の身を守れ”と第六感から囁ささやかれた事をはつきりと感じていた。

「．．．化粧室は．．何処にあるの？．．．」

ゆっくりとした動作で煙草に火を点け様としていた涼介に、まゆみはそう声を泳がせた。

「出て右に真っ直ぐだよ。」

涼介は指に煙草を挟んだまま、その手でサングラスを外し、そう言った。

「ありがと．．ちょっと．．行って来るね。」

徐に立ち上がったまゆみは、静かに涼介に背を向けた。

「．．．．．。」

まゆみの言葉に軽く頷うなづいていた涼介は、暫しばくまゆみの後ろ姿を目で追った後、煙草の煙を大きく吐いて窓の外に目をやった。

パラソルの中では、若い二人が変わらず笑顔を弾けさせていた。

ラウンジに差し込む日差しは強さを維持していた。

（．．．．．）

涼介は再びサングラスを掛けていた。そして再び圭子との思い出を振り返ろうとしていた。

涼介は策略通りまゆみを混乱させていた。そしてその混乱という感覚は、近い将来涼介が唐突とつとつに別れを切り出したとしても、破局の予測という名目で、別れ際の場面に於おて絶大な効力を発揮する事を涼介は見通していた。

まゆみは涼介の計算通り、涼介が経験した過去の恋愛の断片だけを舐めさせられ、撤収させられていた。それは今更ながら涼介が危険な男だという印象を、まゆみの潜在意識の中に植え付ける事となっていた。

涼介は羽田東急ホテルで圭子と交わしたキス以来、圭子は純一の彼女だと自分に言い聞かせている“自分”と向き合っていた。

圭子はキス以来、涼介しか見えなくなっていた。

二人は純一に対し異質の後ろめたさを感じていた。圭子は純一と別れる決心をしたまま純一から抱かれ続けている事に苛まれ、涼介は圭子を奪い去りたい衝動を、純一に見せる親友面しんゆうづらの下に隠し続けている自分に辟易へきえきしていた。

9月、圭子は大学が夏期休暇中に行う集中講義や就職に関するセミナーひんぱんに出席すると純一に嘘を言い、涼介と会う為に品川まで頻繁に出向いていた。

圭子は涼介が仕事で品川駅の近くにある直営レストランまで車を走らせるスケジュールを把握はあくしていた。そして涼介の元に突発的に入った東京での仕事も、その殆どを逸早く掴つかんでいた。

圭子は純一や涼介と共に8月が終る前に買った携帯電話で自身の生活を劇的に変えていた。

三人は初めて手にする携帯電話を片時も離さず、意味も無く声を乗せ合っていた。そして誰に教わるでもなくショートメール機能を駆使し、メールで会話を成立させる面白さを貪むさぼる事に有頂天になっていた。

圭子は大学が始まると高輪台や台場だけではなく、携帯電話の俊敏性や機密性を巧みに利用し、横浜で二人きりになる事を避けたいとする涼介の思いを押し切り、涼介の住む本牧ほんもくで密会する様になっ

ていた。

圭子は携帯電話の威力に絶大な恩恵を受けていた。そしてその恩恵は日を追う毎ごとに圭子の行動を大胆にさせ、その行動に連動しているかの様に純一に対する嘘も大胆になっていた。

毎日でも涼介に会いたいと思っていた圭子は、東京での密会を増やし続けていた。涼介はそんな圭子を愛しく思い、時間の許す限り一緒に居ようとしていた。しかし涼介は東京で圭子と会う度に、圭子ではない女性の姿を心の中で日々大きくさせていた。

涼介は圭子と東京で初めて会った日、明治学院大学の在る白金台まで圭子を迎えに行く為に、仕事先の渋谷から恵比寿の街並みを抜けていた。以来涼介は深まる秋も、木枯らしが舞う冬も、圭子との密会の為に走らせている車を、遠回りを厭いとわず恵比寿の街中に紛れ込ませていた。

涼介は恵比寿の街並みにマキを思い起こしていた。そして心の大切な部分で眠らせていたマキへの未練を蘇よみがえらせ、圭子に会う為の東京で、何時しかマキとの劇的な再会を期待する様になっていた。それは圭子を奪い去る勇氣も、最高に愛していたマキの心をもう一度奪いに行く勇氣も、ましてや潔いさめく二人共忘れ去る勇氣など持ち合わせていない、涼介の弱くて情けない心を象徴していた。

卒業間近、圭子は純一との付き合いを続けながら、涼介に早く体を奪って欲しいと思っていた。

圭子は証券会社に就職が決まっていた。配属先も横浜にある支店に決まっていた。

圭子が働く事になる支店は馬車道に面した尾上町おのうえちょうにあった。相生町あいおいには純一の働く会社があった。真砂町まごのちやうには涼介の働く会社もあった。

圭子は、三人の距離が更に近づく春を恐れていた。

涼介は、恋人同士という関係や住んでいる場所だけではなく、働く場所までも至近距離になるといふ圭子と純一の繋つながり、軽々しく立ち入れない運命の様なものを感じていた。

純一はずつと悩んでいた。

純一は圭子が放つあざとい嘘に気付かぬ振りをする事に疲れていた。そして純一は半年近く続いている、今は未だ“さざ波”の様な圭子の嘘が、何時か大きな“うねり”となり、その一撃に真実が真実として白日の下に晒され、圭子を愛し続けて来た自分の全てが無くなる事を恐れていた。

圭子の卒業式の前日、花咲町のBARで純一と涼介は素直になっていた。

純一は圭子を愛しているが故に、圭子から静かに身を引きたいとする心情を涼介に吐露していた。

涼介は純一の言葉一つ一つに、圭子の心を驚掴みにしている相手に対して、圭子を大切にしたいという願いが込められている事に胸を擦じられていた。

涼介の心は葛藤していた。しかし純一的心情に圭子を手放しては駄目だという思いを丁寧ていねいに置いていた。

純一はBARのカウンターに両肘を付いたまま少し俯うつむき、涼介の言葉にゆつくりと頷うなずいていた。涼介はそんな純一の姿に、ずっと前に同じ場所で、マキと別れては絶対に駄目だと、純粹な瞳で純一から説得され続けた場面を思い出していた。

卒業式の日、純一は予定より早く涼介を誘い、圭子には内緒で大学の近くまで車を走らせ、式典の終りを待っていた。

予期せぬ二人の笑顔に迎えられた圭子は、驚きの表情に喜びを滲ませ、三人で居る時は何時もそうだった様に自然と後部座席に乗り込んでいた。

運転席に涼介が座り、助手席には純一が座り、圭子は座り慣れた場所から二人の横顔と話す為に時折身を乗り出し、三人は忘れていた指定席の心地良さとドライブを無邪気に楽しんでいた。

夜、三人は久し振りに遅く迄グラスを傾け合いながら、三人で居

る事が最高に楽しかった3年前をそれぞれ思い出していた。しかし三人は暗黙の内に了解しているかの様に、その時代を口に出して迄は懐かしもうとせず、心の中で静かに浸っていた。

(・・・98年の3月って言うと・・・もう5年前か・・・岐路だったのかな・・・)

涼介は窓の外に顔を向けたまま、圭子の卒業を祝った夜の、何処かきこちなかった三人を振り返っていた。

「・・・。」  
テーブルに戻っていたまゆみは、涼介の横顔を少し寂し気に見つめていた。

圭子は三人で過ごした卒業式の夜をそつと終わらせ、次の日の朝純一に別れを告げ、純一の部屋を後にしていた。

圭子はどんな時でも優しかった純一との思い出に心を痛めながらも、涼介と築く事になるだろう新しい日常への期待に、複雑な充実を感じる3月を過ごしていた。

涼介は圭子の卒業式を境に、圭子の事をきつく抱きしめたいという思いを募らせ続け、同時に純一への誠実を心の隅に追い遣り続ける3月を過ごしていた。

二人が交わした約束の日は、纏わり付く様な雨が降り続く寒い夜だった。

入社式が終わり、横浜支店での業務レクチャーも終えた圭子は、

押さえ切れない気持ちを抱え、天王洲アイル・シーフォートスクエアのガレリアで涼介を待っていた。

緩やかな弧を描く、ガレリアを彩る階段から降りて来る涼介の姿を見つけた圭子は、何もかも全てが、此処からまた新しく始まるのだと胸を高鳴らせていた。

二人はアントニオというイタリア料理店で、バジルの香りが漂うテーブルに少し甘めの白ワインを置き、会話を弾ませていた。

食後二人は第一ホテル東京シーフォートの28階で、ピアノの響きを背にカクテルを寄せ合い、珠玉たまごめいの時間を過ごしていた。窓ガラスには雨粒が煌きらめき、時折ガラスを伝う煌きは二人の前で流星の様に振る舞い、レインボーブリッジや東京タワーの光が、その流星の力を借りて情緒豊に瞬いていた。

圭子は視界に広がる新都心の夜景に心を奪われていた。

涼介は圭子の澄んだ瞳に心を奪われていた。

圭子は今夜涼介が全てを奪ってくれろと信じ、今夜を境にずっと傍に居てくれると信じていた。

涼介は、“涼介”という人間の中で新たに呼吸し始めた圭子を守り抜こうとする魂と、“涼介”という人間の中で何かをずっと守り抜いて来た魂が、情熱を全身に纏まとう圭子を前にして不細工ぶさいくに葛藤かつとうし始めている事に戸惑とまどっていた。

涼介は紛れも無く圭子が好きだった。しかし紛れも無く純一も好きだった。そして涼介は、自分を好きで居る事に迷っていた。

雨は何時の間にか窓ガラスを音も無く叩いていた。

涼介は決断しなければならぬ時が迫って来ている事に怖さを感じていた。

涼介は一つ一つ丁寧に、心を込めて圭子に言葉を届けていた。

圭子は涼介から届き始めた言葉の一つ一つを、大切に心の中に仕舞っていた。

長い沈黙が続いていた。

ピアノの美しい音色が二人の間を緩やかに流れていた。

窓ガラスを叩く雨は激しさを増していた。

圭子の瞳は、涼介の瞳の奥に在るものを確かめ様としていた。

涼介は論理や秩序には程遠い不誠実な自己都合を、何時の間にか圭子に向かって喋り続けていた。

圭子は溢れ出している涙を拭おうともせず、寡黙かむくに涼介を見つめていた。

涼介は圭子に涙を拭いて貰もらう為に、戯言たわごとを繰り返して喋り続けていた。

圭子は頬を伝う涙もそのままに、気丈な瞳で涼介を見つめ続けていた。

圭子は人生の中の最も美しい転機となる筈だった夜に、一生忘れ

る事の出来ない傷を心に負わされていた。

圭子は目と耳に届く涼介の全てを必死に耐えていた。しかし心に届く涼介の私慾しよくに塗れた情熱まみだけは耐える事が出来なかった。

圭子は確信していた涼介の愛に実態が無かった事に失望し、恋愛を司る感情を麻痺まひさせながら静かにソファから立ち上がり、無言のまま涼介に背を向けていた。

涼介は圭子の強い涙に、圭子の心を一年半も遊びもてあそび、切り刻んでしまった自分の生ぬるさを思い知らされていた。

夜景は激しい雨に因って掻き消されていた。

涼介には見つめる場所が無くなっていった。それでも涼介は圭子を追い掛ける事を迷っていた。

圭子は自分の体が何故震なせふるえているのか、なのに何故なぜこんなに体が熱いのか、そして何故涼介を愛していたのかを自問しながら、シーフォートスクエアを飛び出していた。

強い雨は、海岸通りを歩く雨が嫌いな圭子を容赦なげな無く叩き付けていた。

涼介はタクシーを捉つかまえ様としているはず濡れの圭子に追いついていた。そして何かに縋すがるかの様に、掴つかんだ圭子の腕を離そうとはしなかった。

圭子は激しい言葉を涼介にぶつけ、涼介の全てを振り払おうとし

ていた。

二人は目の前が見えない程の雨に叩き付けられていた。

圭子は只管涼介を拒否していた。

涼介は圭子に何をどう説明すればいいのか分からないまま、唯、圭子の腕を掴んでいた。

圭子はタクシーの中で泣きじゃくっていた。

涼介は遙か遠くに霞み行くテールランプを目で追いながら、“手を離してよっ！”と叫んだ時の圭子の強い瞳に、初めて会った時の圭子を思い出していた。

1998年4月、圭子は涼介への愛情を第一ホテル東京シーフォートで拒否されて以来、涼介と過ごした膨大な時間を心の中から抹消し、今後一切涼介とは拘わらない事を心に誓っていた。

2001年3月、小倉支店転勤が決まっていた涼介が横浜を離れる前日、純一が企画した三人だけの送別会に圭子は顔を出さず、涼介は圭子に用意していた感謝の気持ち伝える事が出来なかった。そして次の年の5月、楽しみにしていた圭子と純一の結婚式に、涼介は仕事の都合で欠席する事を余儀無くされ、二人の傍で二人を祝福する事が出来なかった。

涼介の心の中に居る圭子は、あの夜から5年が過ぎた今も、頬を伝う涙を拭おうとしない圭子のままだった。

「そろそろ行かない？」

まゆみは涼介に声を掛けた。

「……そうだね……。」

涼介は圭子との余情に心を向けたまま徐に立ち上がり、どんな内容の会話を、どれ位の間まゆみと交わしていたのか振り返ろうとしていた。

「ふーん、そうだったんだね、涼介って。」

まゆみは立ち上がった涼介を見上げながら笑顔でそう言った。

「・・・そうだね。」

涼介はまゆみが見せている笑顔と同じ位の笑顔を不自然に作り、何を肯定したのか分からないままテーブルの上に置かれた伝票に手を掛け、歩き始めた。

「ふーん。」

まゆみは涼介の返事に満足しながら立ち上がり、涼介の背中に相槌を投げた。

「何か言ったかい？」

涼介は振り向いた。

「ううん。」

まゆみは少し気障な何時もの涼介が戻って来ている事を喜んでいった。

ラウンジにはピアノの美しい音色が緩やかに流れていた。

窓側の席は全て埋まり、ロールカーテンが降ろされていた。

二人が背を向けたテーブルにだけ柔らかい午後の日差しが差し込んでいた。

窓の向こうには、パラソルの下で語らう若い二人の笑顔が見えていった。

「こんなに少ないもんかな？」

涼介は座席に腰を下ろした後、独り言の様な息遣いでまゆみに囁いた。

前評判の高かった映画の封切り初日だというのに、人影が疎らな館内に涼介は少し驚いていた。

「いいじゃない、ゆっくり見れて。」

まゆみは二人の周りに誰も居ない事を喜んでいた。

明かりの落ちた館内は、煌びやかな映像をスクリーンに映し出していた。

まゆみは映像を追いながら、閑散とした館内に感謝していた。

涼介はスクリーンに圭子の幻影を映していた。

(・・・もう俺とは関わりたくないんだろっな・・・)

5年前の春、第一ホテル東京シーフォートで圭子の気持ちを無思慮に打ちのめし、深く傷付け、その日から圭子という名前を口に出す事すら許されない日々が今も続いている現実に、涼介は罪の深さを痛切に感じていた。

映画は“サビ”から始まる音楽の様に、インパクトのある映像を序盤に配置し、観客を圧倒していた。

まゆみは自分の右手を肘掛に乗っている涼介の左手にさり気なく乗せ、少しだけ涼介の方に体を傾けていた。

スクリーンには路上で舞う砂埃を嫌いながら歩く主役の、背中を丸めた寂し気な後ろ姿が映し出されていた。

(・・・同じかもしれないよ・・・)

涼介は左手にまゆみを感じながら、自分が恋愛に晒し続けて来た情熱や、抱き続けている理想の行く末と、風に舞い、水に流され、暗い場所に吹き溜まる塵や埃の中を歩く主役の運命を重ねていた。

映画館を出た二人は、立ち並ぶビルに隠れているだろう落日が染めた朱色の空を真正面に見ながら、太陽の橋を渡ろうとしていた。

「男は愛さなくなった女に嘘を言うって、本当？」

手を繋ぎたい衝動に駆られながら涼介の右側を歩いてきたまゆみは、映画の中に在ったワンシーンを悪戯いたずらっぽく聞いた。

「・・・その愛に因よるんじゃないかな。」

「ふーん・・・。」

まゆみは笑顔の裏で、手を繋ぐきっかけを探していた。

「・・・男は愛してる女性にも嘘は言うよ。」

晴れやかな顔のまま黙っているまゆみに涼介はそう付け加えた。

「ほんと？」

「・・・悲しいけど、俺は嘘の無い恋愛をした事が無いんだ。」

涼介はまゆみの笑顔に誘われる様に一度微笑み、更にそう付け加えた。

「そうなの？」

「・・・恋愛に正直だと危険なんじゃないかな。」

「危険？」

「・・・女性の化粧と同じだよ。」

「・・・化粧？」

「安心するでしょ？」

「・・・そう・・・よね・・・。」

「失礼、ちよつと意味が違つたかな。」

「……。」

ささやかな願いを叶えるきっかけが欲しかったただけのまゆみは、自分の何気ない質問が会話として続き始めた事に戸惑い、涼介の例え話にも戸惑い、少し焦り、笑顔を消していた。

「女は愛し始めたら男に嘘を言うっていうシーンもあつたよね、さつきの映画。」

黙つたまま喋らないまゆみに涼介は問い掛けた。

「……うん……あつたね……そんなシーン……。」

涼介が放つだろつ次の言葉にはしつかりと自分の意思を乗せ、涼介を満足させなければとする観念に囚くわわれていたまゆみは、恐る恐る相槌あいつちを打つた。

「まゆみは俺に嘘を付いてる？」

二人は太陽の橋を渡り終え様としていた。

眼下を流れる紫川は、文字通り紫色に濁っていた。

涼介はまゆみの答えを待たずに正面へ向き直っていた。

涼介は市営の地下駐車場から車を街並みに戻していた。

薄暮はくぼを過ぎた小倉市街は、至いたる所で渋滞していた。

「イタリアンでいいよね？」

涼介は信号機を隠す程の街路樹が立ち並ぶ通りを大手町に向かう途中、まゆみにそう聞いた。

「うん……。」

まゆみは躊躇ためらう様にゆつくりと動く車の中で、涼介に喋り掛ける事を躊躇ためらっていた。

映画を見た後の然さり気無けさの中、涼介の問い掛けを上手にあしらえず、手も繋ぐ事すら出来なかつたまゆみは落ち込んでいた。

「……どうした？……元気無いじゃない？」

涼介は車に乗る前からまゆみが見せていた憂鬱ゆううつな表情をずっと気にしていた。

「うつん、普通だよ。」

「そう・・・ならいいんだけど。」

「・・・おなか空いちゃった。」

まゆみは気持ち切り替え様としていた。

「そうだな、了解。」

涼介は明るく振舞ったまゆみを察し、まゆみが喜び、高揚する様な手段を考え始めていた。

「ごめん、あんなに渋滞してるとは思わなかったよ。」

涼介はそう言っで静かな車内の空気を動かした。

「・・・でもそれは涼介のせいじゃないよ。」

「・・・ありがとう。」

「・・・うん・・・。」

市街から抜け出し、大手町の閑静な住宅街を抜け、マンションが立ち並ぶ大通りの路上パーキングに車を止め様としていた涼介は、まゆみの思い遣りに感謝していた。

「・・・好きだよ。」

「えっ！・・・。」

「あそこだから。」

涼介はまゆみの意表を突き、手段を実行し、柔らかな笑顔をまゆみに贈った後、さらりとその場面を流した。

「・・・うつん・・・。」

まゆみは涼介の笑顔に安堵していた。そして萎えていたまゆみの心は、涼介の思い掛けない言葉に勇気を貰っていた。

歩道を挟んだパーキングエリアの真横には、成功者の優越を象徴しているかの様に聳えるマンションがあった。一階は全て店舗で流麗に間仕切られていた。涼介はその中に在る、女性に評判だというイタリア料理店に行こうとしていた。

「じゃ、行こうか。」

涼介はそう言っつて、助手席から降り様としているまゆみに手を差し延べた。

「・・・ありがと・・・。」

たった数メートルの距離でも、それが数秒で終わるとしても、涼介と手を繋いで歩ける珠玉しゆぎゆくにまゆみは胸を高鳴らせていた。

2004年の3月、涼介の会社は大手町に在る商業施設の一角にイタリア料理店をオープンする予定だった。涼介はそのプロジェクトのリーダーとして大手町界隈の市場調査を当然指揮していた。そして自らも五感を駆使し、集めた情報を篩ふるい分け、チームが集約したデータに融合させ、論理立てた方向性や戦略を客観的に検証し、新店舗の柱とする不変のコンセプトを創り上げる作業の真つ只中に居た。

「じゃ、ハウスインの白を。少し甘いやつを下さい。・・・いいよね？」

涼介は仕立ての良い白いシャツの襟を立て、綺麗な姿勢で立っている女性スタッフにそう告げた後、正面に座っているまゆみに確認した。

「うん。」

まゆみは笑顔で頷いた。

「・・・ね、どうして私に選ばせたの？」

相談しながらではあったが、料理を自分で選び、注文し終えたまゆみは涼介に聞いた。

「・・・まあ、それはさ・・・すみません、それとバジリコのフェットチーネを。・・・スモールサイズをお願いします。・・・そうだね、まあ、そんな気分だったんだよ。」

メニューに目を落としていた涼介は、女性スタッフがオーダーを復唱している途中に料理を追加し、まゆみにそう答えた。

涼介は職業意識の下、一度も足を運んでいなかった人気の料理店をまゆみとのデートの場にする事をかなり前から決めていた。そし

て仕事に全く関係の無い純粋なスタンスを持つまゆみが、女性に評判だという店の雰囲気や味にどんな反応を見せるのかを知る為に、その取り掛かりとしてまゆみに料理を選ばせる事を決めていた。更には食事中、まゆみがどんな仕草や態度を見せても苛立たず、丁寧に穏やかに主導権をまゆみに与える続ける事も決めていた。

「・・・良いお店ね。」

まゆみは店内の壁に美しく並ぶ、淡い色使いの絵画を眺めながらそう言った。

「そうだね。」

涼介はまゆみに笑顔を向け、料理にも今夜これからのまゆみにも期待していた。

用意周到よういしゅうとなのか成り行きなのか全く推し量おはかれない涼介の、緊張と安堵あんじょを繰り返し与えてくれる、何れにしても自信に満ち溢あふれた言動や立居振る舞いにまゆみは惹き込まれていた。そしてまゆみは、ともすれば遊び慣れている様に受け取られ兼ねない涼介のクールさに付き纏まとう危険な香りは、弱さや照れを隠す為に涼介が会得えとくした技術なのかもしれないと感じていた。

「美味しい。」

まゆみはワイングラスを唇から離し、ほっとした様な表情でそう言った。

「・・・」

涼介は微笑んでいた。

「このお店は良く使うの？」

「いや、初めてだよ。」

「そうなんだ。」

「気に入った？」

「うん・・・素敵。」

「一度来てみようとは思ってたんだ・・・まゆみでよかったよ。」

「えっ？」

「・・・そういう事さ。」

涼介は二人の声が思いの外ほか店内に響いている事を少し気にしながら、そう言っただ笑った。

時間の経過と共に二人は声を弾ませ合っていた。

涼介は多くを語り、その話題は趣味や学生時代まで遡さかのぼっていた。

まゆみは若い男女で賑にぎわう店内の雰囲気にぎわいに同化した様に笑い、涼介はそんなまゆみに更に軽口を叩きながら、店内をさり気なく観察し続けていた。

「今日は涼介の色んな話聞いちゃったね。」

「そう？」

「うん・・・嬉しかった。」

「そう・・・良かったよ。」

「・・・涼介って高校の時サッカーやってたんだね・・・じゃ、サッカーの試合とかよく見るの？私も覚えなきゃ。」

「そうだね・・・ね、その話はまた今度にしようよ。そろそろ行く。」

店内の客層に因って見えて来た、この店が人気だという幾つかの要因を頭の中で整理し終えていた涼介は、まゆみが切り出した新たな話題を切り捨てた。

「・・・うん。」

まゆみは想像以上に楽しい食事が出来た事に幸せを感じていた。

店を出た二人は歩道を横切ろうとしていた。

外は寒さを感じさせる風が吹いていた。

「次は美味しい所に連れてくよ。」

涼介はまゆみを見ず、料理に期待していた自分を嘲笑あざわらするかの様にそう言っただ、車のハザードランプを点滅させた。

「美味しかった・・・よ・・・。」

まゆみは喋り終わる前に“はっ”としていた。

「・・・そう、じゃあ、取り敢えず良かったのかな。」

「あ、でも・・・そうね・・・もう少しお肉が・・・スパイシーでも良かったかも・・・。」

「・・・了解。」

運転席側に回り込んでいた涼介は、屋根越しのまゆみに笑顔を見せ、そう言った。

(またやっちゃった・・・。)

まゆみは縁石の手前で立ち止まっていた。

(・・・涼介！・・・ほんとはそんなに美味しいなんて思ってたなかつたんだよ！)

まゆみは車に乗り込んだ涼介に向かい、心で叫んだ。

(もう・・・。)

味わっていた幸福感の為に、突然投げられた涼介の言葉を半ば上の空で聞いてしまった事をまゆみは悔いていた。そして不用意に発した自分の一言に因って、涼介に味の分からない女だと思われるだろう事実には、再び心が萎えそうになっていた。

車は滑る様に街路樹が立ち並ぶ通りを走っていた。

涼介は黙ったまま運転していた。

「・・・次は涼介がよく行くお店に連れてってね。」

まゆみは意を決し、明るくそう言った。

「ん？・・・ああ、そうだね、了解・・・。」

まゆみでも、市場調査でも料理の味でもなく、天王洲てんのすずアイルで過ごした圭子との一時を懐かしむ為に、店のメニューにあったバジリコのフェットチーネを敢えて注文した自分の哀しい性質を振り返っていた涼介は、耳に届いたまゆみの一言に虚を突かれ、少し慌ててそう言葉を返した。

「・・・。」

まゆみは、“了解”と言った涼介の思いも寄らない笑顔に虚を突

かかれていた。

涼介は食事をした店の直ぐ近くに在る大手町Ⅰ・Ⅱで都市高速道路に乗り、小倉市街から離れる車線でアクセルを踏み続けていた。

「ね、何処に行くの？」

涼介の穏やかな横顔に、路上で犯した自分の失態をもつと丈夫に繕つくろわなければとする気持ちよりも、涼介を深く知る事が出来る今夜への期待に胸を支配され始めていたまゆみは、そう言って車内に暫しばしく続いた静けさを終わらせた。

「・・・コンビニに寄って、ラブホに行こうとしてる。」

涼介の心は不純な純粹に支配されていた。

「・・・そうなの？・・・」

「・・・却下して飲みに行く？」

「えっ、・・・そういう意味じゃないけど・・・。」

「じゃ、何？」

「・・・コンビニは分かる様な気がするけど・・・リヨウの家に・・・帰るんじゃないの？」

「そうだね・・・でも、それは次にして貰いたいんだ。」

「・・・都合の悪い事でもあるの？」

「見せたくない物があるんだ。」

「・・・見せたくない物って・・・誰にも？・・・それとも私にだけ？」

「まあ、両方だね。」

「そう・・・でも・・・そんな事言われると見たくなっちゃう。」

「だろうね。」

「・・・ねっ、何があるの？・・・見せて欲しいな。」

まゆみは明るくせがんだ。

「・・・。」

涼介は黙っていた。

「・・・ひょっとして・・・女性用の歯ブラシがあるとか？」

「ぶっ・・・。」

涼介はまゆみの一言に少し吹き出し、含み笑いを見せた。

「・・・何故笑ったの？」

「・・・実はね、あなたが手ぶらで来ても二、三泊は出来る女性の物が部屋中にあるんだ。」

「もう、またそんな事言つて誤魔化ごまかそうとしてる・・・ね、本当の理由は？」

まゆみは笑顔でそう言った後、故意に体を涼介に寄せた。

「本当だよ。」

涼介は前を見ていた。

「・・・本当の事言つて欲しいな・・・。」

「・・・。」

涼介は黙っていた。

「・・・涼介の部屋が見たい・・・。」

まゆみは体を綺麗な姿勢に戻し、正直な思いを口にした。

「・・・今日はラブホの広い部屋でゆっくりしたい気分なんだ・・・そんな理由じゃ駄目だろうけど、そんな理由なんだ。」

甲高いエンジン音が響く車内で、涼介は低い声をまゆみの体に押し込む様に響かせた。

「・・・。」

まゆみは涼介を見つめながら考えていた。

涼介はまゆみに横顔を向けたまま、自宅から遠ざかる方向にアクセルを踏み続けていた。

「・・・今度は絶対涼介の家だよ。」

まゆみは折れた。

「・・・了解。」

涼介は真つ直ぐ前を向いたままそう答えた。

車はオレンジ色に光るナトリウム灯の帯の下で速度を保っていた。車内には再び静けさが訪れていた。

まゆみは知らない街の夜景を眺めながら、会話の途切れた空間を埋める話題を探していた。

(男は愛さなくなった女に嘘を言う、か……。)  
涼介は自宅に散らばるエリカの物を思い浮かべながら、昼間に見た映画のワンシーンを思い出していた。

涼介は横代 E・C で都市高速道路を降り、そのまま 10 号線バイパスを下っていた。

「何か欲しい物ある？」

左車線沿いに小さくコンビニエンスストアの看板が光っていた。

「私も降りる。」

まゆみは小さな笑顔を涼介に向けていた。

涼介はコンビニエンスストアを出て直ぐバイパスに別れを告げ、万が一でもエリカや知り合いと遭遇する事は無いだろう、自宅から遙か遠い場所に在るラブホテルに行き着く為に、旧 10 号線に続く県道に車を乗せていた。

涼介は淡々とスマートに車を動かしながら、ある意味純粹に、叶えられようとしている欲望を心の中で整理し始めていた。

まゆみは涼介に喋り掛ける事が出来ず黙っていた。

まゆみは今夜涼介のプライベートを覗き、涼介の生活習慣や癖くせを肌で感じ、涼介をもっと好きになりたいと思っていた。故にまゆみは車の中で、今夜何故ラブホテルなのかもう一度聞くチャンスをとっていた。しかし涼介はそんなまゆみの思いを透かしているかの様に相変わらずまゆみに視線を向けず、近寄り難い雰囲気醸し、“冷たい”と形容しても不思議ではない態度で運転していた。

「煙草吸っていいかな？」

涼介は言った。

「……いいよ……。」

走る車の周囲には“夜景”と呼べるものがなくなっていた。

路面にはヘッドライトの輪郭がはつきりと浮かび上がっていた。

まゆみは時折独り言の様に喋り掛けて来る涼介と、車が向かって

いる遠い先にポツンと一箇所、煌煌と光を放つ建物が在る事に緊張を強いられていた。

涼介が明るくした室内は、クールモダンスタイルの広い部屋だった。部屋の中央にはキングサイズのベッドが配置され、バスルームはガラスの壁で間仕切られていた。

「お疲れ・俺ん家じゃなくてごめんな。」

涼介はラブソファの前にあるセンターテーブルにコンビニエンスストアのビニール袋を置き、上着を脱ぎながらまゆみに向かってそう言った。

「うん……。」

まゆみは車の中で余儀なくされた緊張を増幅させ続けていた。

「ごめん、グラスいいかな？」

ラブソファの上でビニール袋から白ワインを取り出し、コルクを抜こうとしていた涼介はまゆみにそう声を掛けた。

「うん……。」

部屋から見えるバスルームと、会話する素振りを見せない涼介に戸惑いの表情を浮かべて立ち尽くしていたまゆみは、何処かぎこちなくカップボードの方に歩き出した。

「……。」

涼介は白ワインと一緒に買った氷の袋を破りながら、車の中に携帯電話を態と置いて来た事が正解だったのかどうか振り返っていた。そして願わくは今夜エリカからの連絡が無いままであって欲しいと思っていた。

「……。」

センターテーブルの上にグラスを置いた後、その流れの中で自然に涼介の隣に座る事が出来なかったまゆみは、何となく窓の方へ歩き出し、居所無さ気にカーテンを開け、見るつもりが無かった夜景

を瞳に映していた。

「氷入れる？」

涼介は手元に携帯電話が無い方が、今夜入るかもしれない受信や着信の全てに、明日、説得力のある言い訳が出来る筈だと自分の考えを括り、満を持してまゆみとの時間を動かし始めた。

「・・・氷？・・・。」

ラブホテルに入ってからずっと涼介の優しさに触れたがっていたまゆみは、部屋の明かりに困って窓ガラスに映り込んでいた涼介から目を離し、涼介の方へ振り向いた。

月が見えていた。

まゆみが開けたカーテンの間から、ラブソファーに座る二人の背中を見守る様な月が見えていた。

「・・・ごめんな。」

涼介はまゆみにグラスを渡し、そう言った。

「・・・ううん、もういいよ。」

「コンビニで買ったやつで。」

「えっ？・・・もう・・・全然大丈夫。」

ラブホテルに来た事を謝っているのだと思っていたまゆみは、そう言っただけで笑顔を見せた。

「・・・俺ん家じゃなくてさ。」

「え？・・・ありがと・・・涼介らしいね。」

素直な気持ちでウイットで誤魔化す様な、少し照れ屋な涼介の一面に一瞬触れた気がしたまゆみは、強いられていた緊張から解放され様としていた。

「じゃあ、お疲れ。」

「・・・乾杯。」

まゆみは満面に笑みを浮かべ、グラスを鳴らしに行った。

涼介は時間をゆっくりと流していた。

まゆみの瞳には柔らかさが戻っていた。

「・・・ワインに氷入れたりするんだね。」

「そうだね、たまにそうやって飲みたい時があるんだよ。」

「・・・今度涼介の家でご飯作ってあげる。」

「了解。」

「・・・どんな料理が好きなの？」

「そうだなあ・・・。」

「私、結構料理得意なんだから。」

「・・・そう・・・じゃあ・・・そうになると和食っていう流れだよな。」

「いいよ、煮物でも何でも。」

まゆみは涼介が自分の彼氏である事を実感していた。そしてまゆみはこのままずっと涼介と喋り、涼介との距離をもっと縮めたいと思っていた。

「了解。じゃ、よろしく。」

涼介は背中中で優しく輝く月の様に穏やかだった。しかしその心の中は、青く純粋な月に遠く及ばない不純な感情に支配されていた。

「しっ……。」

涼介は突然人差し指を口に当て、心地良さそうに喋っていたまゆみの動きを止めた。

「……………」

まゆみは涼介の強い眼差しに、浮かべていた笑顔に戸惑いの表情を加えた。

「……………」

涼介はワインで少し赤く染まっていたまゆみの頬にゆっくりと近づいた。

ソファーに浅く座っていたまゆみは、涼介の圧力に困って体を背<sup>せ</sup>凭<sup>もた</sup>れに倒す事を余儀<sup>よぎ</sup>なくされていた。

突然の出来事に、暫<sup>ひまじ</sup>くの間まゆみは驚きの表情を浮かべたまま涼介のキスを受け入れていた。

「……………」

和やかに交わしていた会話が何の脈略<sup>みやくりやく</sup>も無くキスに困って突然終わるなどと考えてもいなかったまゆみの心臓は、体中に激しい鼓動を伝えていた。

二人の傍<sup>そば</sup>を流れる時間は不変の清流の様だった。しかし重ねた唇を離そうとはしない涼介に、まゆみは風雲急を告げられていた。

涼介は強いキスでまゆみを圧倒しながら、左手に持ったままだったワイングラスを見えていないセンターテーブルに置いた。

まゆみはかろうじて両手を涼介の肩に掛けていた。しかしその両手は涼介を受け入れ様とする動きではなく、涼介の圧力から身を守ろうとする動きを見せていた。

涼介の左手はまゆみの腰を抱いていた。同時にまゆみの肩に掛けていた右手は、まゆみの髪を掻き乱し始めていた。

まゆみは身動きが取れないまま、涼介の激しいキスに全てを焼き尽くさんばかりの熱を体から発していた。

「はあっ、はあっ・・・。」

唇を涼介に塞がれ、呼吸を乱し続けていたまゆみは、堰を切つて流れ出した水のように声を出した。

まゆみの唇に自由を与えた涼介は、穏やかな眼差しでまゆみを見つめていた。

まゆみは涼介を見つめられず、頬を赤く染めていた。

(・・・あっ！)

突然涼介にジャケットを両肘の辺りまで剥がされたまゆみは、心の中で叫んだ。

肘まで落ちたジャケットに両腕を引つ張られたまま胸を強く掴まれているまゆみは、どうにかして涼介の背中を抱こうとしていた。

「ああっ・・・。」

鈍い刺激に代わり、針で刺された様な刺激がまゆみを襲った。

涼介はオーブンでチキンを焼く様にゆっくりと時間を掛けてまゆみの胸を甚振った後、ニットとブラジャーを同時に摺り上げ、乳首を噛んでいた。

「あっ、ああっ・・・。」

まゆみは自分の胸にある涼介の頭を両手で掴み、乳首から体中に走る羞恥を抑え切れず声を漏らし続け、大きく体をくねらせた。

涼介はまゆみの胸を乱暴に可愛がっていた。

まゆみの体は、身を守ろうとする本能と快感を貪ろうとする本能

に因<sup>よ</sup>つて、どうしようもなく熱く濡れていた。

涼介の左手がまゆみの大切な部分に伸びた。

(ああ・・・駄目・・・)

まゆみは恥ずかしい程濡れ溢<sup>あふ</sup>れている自分の体を涼介に暴<sup>あは</sup>かれな  
い様、反射的に両膝<sup>両ひざ</sup>に力を入れた。

無駄な抵抗だった。

(ああ・・・)

まゆみは涼介に乳首を噛まれたまま、右足をソファアの上に乘せ  
られ、立膝を付かされ、脚を大きく開かされた。

膝の上で止まっていたまゆみのスカートは、右足の付け根まで擦  
り上がっていた。

まゆみは滑らかに動く涼介の指先に為<sup>な</sup>す術<sup>すべ</sup>が無いまま、切ない声  
を小刻みに漏らしていた。しかしその声は涼介の指先を更に自身の  
大切な部分へ誘<sup>いびな</sup>う事となっていた。

「ああっ・・・うっ・・・」

まゆみは体中に突然襲<sup>襲</sup>つた強い刺激に因<sup>こぼ</sup>つて零れた声を、涼介の  
唇で再度強引に殺された。

涼介はストッキングを下げ、パンツをずらし、当然の様に指先を  
まゆみの奥深くで蠢<sup>めいじ</sup>かせていた。

まゆみは髪の毛の先にまで涼介の指を感じていた。

(うっっ、あっ・・・)

まゆみは唇の自由を奪われたまま、ソファアの上の右足を背凭<sup>せせ</sup>れ  
に掛けられた。

両足を更に大きく広げられたまゆみのスカートは更に上へ擦り上  
がった。

まゆみは明るい部屋の中で涼介に両手の自由を奪われ、服を一枚  
も脱がないまま大切な部分だけを曝<sup>さら</sup>け出されていた。

激しく動く涼介の指先は何度もまゆみを仰<sup>の</sup>け反らせていた。

(はあっ、あっ、駄目・・・)

まゆみは唇を塞<sup>ふさ</sup>がれたままソファアの上に倒れ込んだ。

ストッキングは左足首辺りで小さくなっていた。  
まゆみは羞恥に焦がされた意識の中で、部屋の明かりを消して欲しいと切望していた。

「はあっ、はあっ。」  
ジャケットを剥ぎ取られたまゆみは呼吸を乱したまま、涼介の胸を探した。しかしまゆみは涼介に抱き付く事を許されず、体を起こされた。

まゆみは寄り添いたい瞳を涼介に向けていた。しかし涼介はまゆみの瞳を見ず、両手でまゆみの髪を掻き乱しながらゆっくりと立ち上った。

「うう……。」  
その瞬間、まゆみは強引に目を瞑らされた。同時にまゆみは両手で涼介の腰を強く掴んだ。

口の中で涼介が蠢いていた。  
熱く、堅い涼介が喉の奥に刺さっていた。

「うぐう……うう……。」  
暴君と化した涼介の恥辱にまゆみは何度も咽せ返していた。  
（……涼介……苦しいよ……）  
まゆみは痛め付けられていた。しかしまゆみは過去に経験した事の無い興奮を感じ始めていた。

「はあっ、はあっ……。」  
まゆみは口の中から溢れ出している唾液もそのままに、体を反転させられた。

両膝を床に付かされ、ソファアの背凭れに横顔を押し付けられたまゆみの呼吸は乱れ続けていた。

涼介はまゆみの両腕を取り、まゆみの背中を掴んだ。

（ああ、いや……。）  
まゆみは声にならない声でささやかな抵抗をした。

「あつ。」  
まゆみは背中を丸める事が許されず、パンツを両膝まで下ろされた。

涼介は熱く濡れた敏感な部分を攻めていた。

まゆみは刺激と快感を声に変えていた。

(涼介・駄目・おかしくなっちゃう・・・。)

そう思った直後、まゆみは涼介との最初の夜だからこそ最後まで守っていたかった恥じらいを自ら剥ぎ取った。

「あつ、あつ・・・。」

まゆみは辿り着けそうで辿り着けない頂点にストレスを感じ始めていた。

涼介の指は、まゆみの中で激しさと優しさを何度も繰り返していた。

(・・・涼介・・・もう焦らさないで・・・。)

まゆみは気が狂いそうな程の刺激に体をくねらせながら、滅茶苦茶にして欲しいと心の中で懇願していた。

「ああつ、もう駄目・・・。」

まゆみは消え入りそうな声で涼介にそう訴えた。

「・・・ああつ。」

涼介が欲しいと思った瞬間、まゆみは貫かれていた。

まゆみの体は激しく前後に揺れていた。

涼介は優しさとは無縁のリズムでまゆみの子宮を痛め付けていた。強い刺激は電流となってまゆみの体を駆け巡っていた。

まゆみは体が粉々になりそうな程涼介を全身に感じ、脳が痺れ、悦びを叫びに変えていた。

「はあっ、はあっ。」

まゆみは涼介に後ろから叩き付けられながら両腕を引っ張られ、上体を起こされた。

「うっ……。」

まゆみは唇を塞がれた。

乱れた髪が、まゆみの顔を覆っていた。

擦れた体は激しく貫かれ続けていた。

胸は驚掴みにされていた。

（はあっ、はあっ、ああ……。）

まゆみは愛する人に犯される事に興奮していた。そして快感は貪るものだと覚醒していた。

（……ああ・・涼介・・駄目……。）

まゆみは涼介に未知の世界へ連れて行かされ様としていた。そしてその頂点は、過去のどの頂点よりも鮮明な記憶として体中に刻まれ様としていた。

「……。」

涼介は荒々しく傲慢なセックスをしている自分を、もう一人の涼介に俯瞰させていた。

涼介はまゆみに残していた最後のカードを自虐的に切っていた。

最初で最後になるかもしれないリスクな賭けだという事は理解していた。しかしそんなセックスが、唯一二人の接点を見つけ出す為の決定的な行為だと思い込んでいた。

涼介はまゆみを叩き付けながら、まゆみの見せる反応が視覚と聴覚から自身の脳に強く届いてくれる事を願っていた。そしてその反応に夢中になり、過去味わった事の無い興奮をまゆみと共に味わいたいと思っていた。

涼介はまゆみとの相性をセックスに委ねていた。そしてまゆみを愛する為に、自身に取って都合の良い弁解の様なものをセックスの中に見つけ出そうとしていた。

ぬるい独善だった。

涼介はまゆみとのセックスに陶醉<sup>とっすい</sup>する自分が居るのかどうか確認する為に、言葉ではなく体でナルシズムを論<sup>まげつら</sup>っていた。それは自身を最大限満足させる為の恋の条件として、収入や学歴をその人物の価値として崇拜<sup>すっはい</sup>する女性の心理と似ていた。或<sup>ある</sup>いは、たかが一つや二つの恋愛経験だけで悟り切った様に恋愛論を振り翳<sup>かざ</sup>す女性の心理と似ていた。

涼介はまゆみを貫き続けながら、もっと狂って欲しいと思っていた。

まゆみは優しさが在るからこそ成り立つ極上のセックスとは別の極上に、何度も昇<sup>い</sup>天<sup>てん</sup>っていた。

## 27・・・呪縛との決別

(・・・・・・・・) 涼介の目に、ソファに座ってテレビを見ているまゆみが映っていた。

(・・・・・・・・) 丸一日眠ってしまった様な感覚に襲われていた涼介は、ベッドの上で体を擦<sup>ぬ</sup>じり、コントロールパネルの横に置いてあった腕時計に手を伸ばした。

(12時半か・・・・・・・・) 涼介は今朝8時30分位に一度目が覚めた時、少しだけまゆみと会話をした事は覚えていた。

(・・・・・・・・) 涼介は体を擦<sup>ぬ</sup>じったまま腕時計を右腕に填<sup>は</sup>め、醒<sup>さ</sup>める前の脳が毎朝行うルーティン通り、セブンスターの箱に手を伸ばした。

「おはよう。」  
ベッドで煙草を吸おうとしている涼介に気付いたまゆみは、そう言って優しい笑顔を涼介に向けた。

「・・・・・・・・おはよう。」  
涼介は上半身を起こし、煙草に火を付けた後、朝の挨拶をまゆみに返した。

「良く眠れた？」  
まゆみは立ち上がった。  
「最高に眠ってたよ。」

涼介はそう答えながら枕を背中に回し、ベッドをリクライニングシートの様に仕立てて足を投げ出した。

「・・・私もさつきまで最高に寝てた。」

まゆみはベッドに歩み寄りながら着ていたバスローブの裾を丁寧ていねいに重ねた後、涼介の足元に座り、嬉しそうにそう言った。

「そう。」

涼介は微笑んだ。

「・・・コーヒー入れる？」

「そうだね、よろしく。」

まゆみは涼介を背にし、カップボードの前でコーヒーカップにお湯を注いでいた。

開いているカーテンの間から差し込む太陽の光は、今朝涼介が目覚めた時の様にはつきりとした輪郭りんかくを作る程強さを保っていないかった。

涼介はベッドから見える室内の光景を、時折煙草の煙で臙おんげけにしながらまゆみとの事を振り返っていた。

「ティーバッグ式のコーヒーも結構美味しいね。」

まゆみはソファに座っていた。

「・・・そうだね。」

涼介はベッドの中に居た。

「涼介、コーヒー好きなんだよね？」

「好きだよ。」

「・・・コーヒー豆とか凝こってるの？」

「・・・ね、シャワー一緒に浴びようよ。」

涼介は砂糖の入っていたコーヒーの甘さと、鈍にぶく続くかもしれないまゆみとの会話を嫌った。

「えっ、やだ、恥ずかしいもん。」

「そう？」

「だって・・・それに私、もうシャワー浴びちゃったもん。」

「そう・・・。」

涼介はまゆみの拒否をあつさりと受け入れ、照れているまゆみに笑みを見せながら徐おもむきにベッドを抜け出した。

「……………」  
まゆみは涼介に何か言おうとしたが、全裸を気にする事無く歩き始めた涼介に俯うつむいた。

ラブソファーに座り、綺麗な姿勢でテレビを見ているまゆみの後ろ姿がガラス張りのバスルームから見えていた。

「ふう……………」

涼介はまゆみから視線を切り、シャワーに顔を叩かせ、お湯を深い息で弾いた。

（…………松岡まゆみ…………真面目な女性なんだよ…………それに比べて俺ときたら…………酷みにくい男だな…………）

バスルームの方を一度も見ないまゆみの心の中を勝手に覗き、二人の結論を頭の中で整理していた涼介は、そんな冷徹れいてつな自分が一端いっぽしの孤独感に襲おそわれている不条理ふじょうりに辟易へきえきしていた。

「出ようか。」

身支度を整え終えた涼介は、上品な姿勢でベッドに座っていたまゆみに言った。

「うん。」

既すでに隙すきの無い姿に自分を仕上げていたまゆみは、笑顔で立ち上がった。

涼介はまゆみを待っていた。

まゆみは動かない涼介との距離をゆっくり縮めていた。

「……………」

まゆみは涼介の柔らかくて優しいキスをもつと感じていたいと思っていた。

「……………」

涼介はまゆみに贈ったキスを後悔していた。

「…………長居しちゃったね。」

はにかみながらまゆみはそう言った。

「…………そうだね……………」

まゆみに見せる笑顔の裏で、涼介は自分の行為の愚かさおろを嘆なげいていた。

ラブホテルの駐車場は冷たい風が吹き抜けていた。

まゆみは涼介の後を追い掛ける様に歩いていた。

(2時半か……………)

涼介は頬を撫なでる風を嫌う仕草まぎに紛れて腕時計を見た。

(本当に長居しちまったな……………)

涼介の頭の中は、昨夜車の中に置いたままにして来た携帯電話に届いているだろう声や文字に飛んでいた。

「涼介。」

まゆみは運転席側に回り込んだ涼介を呼んだ。

「……………」

涼介は車越しにまゆみを見た。

「好きよ。」

まゆみは微笑を満面に浮かべていた。

「…………了解……………」

“涼介の御株おかぶを奪ったよ”とでも言いた気なまゆみの屈託くつたくの無い笑顔に涼介は、“恋愛”というものに何時の間にかぬるく思い上がった態度で接していた自分を見つめさせられていた。

「何か欲しいものある？」

車に乗り込む間際、まゆみの前では携帯電話さわに触らない方がいいと直感していた涼介は、小倉市街へ繋つながるバイパスつなに乗る前にコン

ビニエンスストアに寄ろうとしていた。

「・・・涼介が欲しい・・・ははっ。」

まゆみは涼介との時間を満喫まんきつしていた。

「・・・。」

涼介は作り笑いを浮かべた横顔をまゆみに晒さらし続けながら、シーホークホテル最上階のBARで同じ様なジョークを聞いた時に全身を襲った絶望的な鈍痛を思い出していた。そしてまゆみと自分の心の状態が真逆である事を改めて気付かされていた。

「・・・ね、コンビニに寄るの？」

「そうだよ・・・買って来るよ、欲しい物があれば。」

「いいよ、私も降りる。」

「・・・そう？・・・でも煙草買っただけだし、直ぐ戻って来ちゃうよ。」

まゆみを車に残し、コンビニエンスストアの中で携帯電話を開く事を画策していた涼介は、まゆみの意思に抵抗した。

「そうなの？・・・だったら私が買って来てあげる。」

まゆみは笑っていた。

「いいよ・・・居なよ車に。ゆっくりしててよ。」

涼介は車内の雰囲気壊さない様、優しい口調で穏やかに抵抗を重ねた。

「大丈夫。・・・ね、一緒に行こ。」

「・・・そう・・・じゃあ、悪いけど、セブンスターとボルビツク、いいかな。」

「行かないの？」

当然二人で行くものだと思っていたまゆみは、涼介の答えに少し驚いた。

「・・・二人で行く程の事でもないよ。」

「行こうよ。」

「・・・いや、いいんじゃない？どっちか一人で。」

「・・・何かおかしいよ涼介・・・ひよっとして・・・照れてる？」

まゆみは意味深な笑みを浮かべていた。

「・・・まあ、そんなとこかな・・・」

涼介は予測していなかったまゆみの粘りに、不自然な言葉を連ねて対応している自分に呆あきれていた。

「しょうがないなあ・・・」

まゆみは涼介をからかう様な仕草を無邪気に見せていた。

「・・・」

涼介は苛こ立ちが顔に出ていないか気になっていた。そしてまゆみがこのまま女性特有の第六感を働かせない事を祈っていた。

上空は何時の間にかミディアムグレイの雲で覆おおわれていた。

まゆみの居ない車内にはエンジンのアイドリング音だけが響いていた。

(何でこんなに会いてえんだよ・・・)

涼介は携帯電話の画面を見つめ、そう強く思っていた。

携帯電話には純一からの着信が二度残っていた。メールもエリカからの二通以外に魚町店の店長と恭子から一通ずつ届いていた。しかし涼介はエリカ以外の連絡には見向きもせず、エリカのメールだけを何度も読み返していた。

(・・・)

涼介は携帯電話を閉じ、ヘッドレストに頭を乗せた。そしてフロントガラスの向こうに見える店内の様子を漫然まんぜんと瞳に取り込みながら、エリカに心を奪われている自分を客観していた。

「・・・マキ・・・」

エリカでもまゆみでもなく、そう呟つぶやいた涼介は重く広がる低い空に目を遣やった。そして10年前、横浜の空の下、二人が蜜月みつげつだった頃の元気なマキの姿を思い浮かべた。

涼介はマキから惜しみ無く注がれていた愛情を思い出していた。

更にその愛情に答え様としていた自身の純粹な情熱を思い出していた。しかし同時に涼介は、その美しい時代を恋愛の理想とし、マキ

を心の中に君臨くんしんさせ続けて来た自分自身と決別すべき時が来ている事を痛感していた。

「ふう……。」

涼介は鼓動を落ち着かせる為に大きな息を一つ吐き、携帯電話を再び開いた。

日曜日の午後、涼介の立ち寄ったコンビニエンスストアの駐車場は車で埋うまっていた。

まゆみは混雑しているレジの最後尾に並んでいた。

(……会いたい……。)

涼介はその思いと共に、目に映るまゆみと脳裏を過ぎよるマキの全てを消し去り、メール画面に心声を綴つづり始めた。

新規メール作成 宛先 エリカ

エリ、昨日はごめんな。

会いたい。

今夜迎えに行くから。

サブメニュー 編集 戻る 14:46

降り注ぐべき太陽の光を遮おさえられている街並みは薄暗さを増していた。

まゆみは商品を抱え、レジの前で自分の順番を待っていた。

涼介は液晶に綴つづったエリカへの決心を見つめ続けていた。

「……ふう……長い呪縛まじなだったな……。」

自ら心に嵌はめていた“マキ”という枷かせを外した涼介は、大きな息を一つ吐いた後そう呟つぶやき、店内のまゆみへ徐おもむろに視線を向けた。

「はあ……。まったく……。」

涼介はエリカへのメールを左手で握ったまま、今度は深い溜息を吐いた。

( 自業自得なんだよ…… )  
呪縛と決別し、一人の女性を愛する決心をした涼介の心には、まゆみとのぬるい関係の清算を尚更等閑にする事の出来ない心理が齎されていた。

涼介は徐々にまゆみから離れて行こうと企んでいた。しかし今の涼介にとってその企みは、左掌の中に在るエリカへのメールの価値を無にする事に等しかった。

( ……全部自分が蒔いた種じゃねえか……だから自分で刈り取るしかねえんだよ…… )

涼介は目に映る現実を、半ば捨て台詞の様な言葉で嘆いた。

本来ならば、或いは客観的には、涼介はまゆみに晒し続けて来た愚かな姿を反省し、真摯な態度でまゆみに詫びを入れる場面を考える状況だった。されど主観と客観の狭間で自分を俯瞰している涼介の心は、誠実さが求められる客観とは正反対の憂鬱な思惑に支配されている主観の方に倒れ込もうとしていた。

( ……何て男なんだ、まったく…… )

詰まる所、涼介はエリカへの愛情やマキへの感謝の気持ちを差し置き、まゆみから上手く逃れる術を探していた。更にはまゆみに対する罪悪感からも逃れ様としていた。

「ぬるい野郎だ。」

涼介は自分を切り捨てた。しかしまゆみに切り出す別れの場面を考える事は止めなかった。しかもまゆみが自分に愛想を尽かす決定的な場面を貪欲に考えていた。

まゆみは支払いを済ませ様としていた。

涼介は考えを纏められなかった。

「くそつ。」

涼介は下劣な自分に品の無い言葉を放った。そしてまゆみから視線を切り、携帯電話の液晶画面に視線を落とした。

「畜生……。」

涼介は一人の女性に愛を誓った時の高揚感や躍動感を享受出来な

いまま、左手で握ったままだったエリカへの決心を送信した。

「お待たせ。」

まゆみは助手席に潜り込むと同時にそう言った。

「ありがとう。」

「ここに置いてくね。」

まゆみはボルビックをドリンクホルダーに入れた後、セブンスターをコンソールボックスの上に置いた。

「・・・ありがとう。」

車を動かし始めていた涼介は、ハンドルを切り返しながらまゆみを見ずにもう一度そう言った。

「ガム食べる？」

涼介を土曜日の夜から日曜日中、ずっと独占する事が初めて会った時からの念願だったまゆみは、その日曜日の午後、涼介が運転する車の助手席に座っている事に優越を感じていた。

「いや、いいよ。」

涼介はまゆみを見る事無く、旧10号線に車を放り出す為に左ウインカーを点滅させ、走る車の切れ目に視線を投げたままそう言った。

（このまま暫く付き合う事も出来る・・・来週振られようと思えばそれも出来る・・・。）

涼介はハンドルから手を離し、瞼を閉じていた。

（ほんと腐った野郎だ・・・。）

まゆみの気持ちなど丸で考えず、まゆみの心を踏み躪る場面だけを“いけしゃあしゃあ”と考えている自分のぬるい心に嫌気が差した涼介は、心の中でそう吐き捨てた。

（・・・今朝あんなに強い日差しで起こされたのに・・・。）  
自分の醜い算段から逃避する様に、涼介は目の前に重く広がるミディアムグレイの低い空に視線を投げ出した。

車は旧10号線からバイパスへ合流する交差点の最前列で信号待ちをしていた。

青く光っていた歩行者用信号は点滅を始めていた。

(……)

視界の隅に入り込んで来た青色の点滅に一瞬目を向けた涼介は、再び瞼を閉じた。

(……両方とも駄目だ、今日別れよう。)

アクセルを踏み込む前に結論を下した涼介の心は、空の色と同じぐらい鈍よりとっていた。

(……涼介、何考えてんだろ……)

綺麗な姿勢で助手席に座り、涼介が創る会話の無い空間を心地良く受け入れているまゆみは、時折澄んだ瞳を涼介に向け、この先ずっと涼介から貰えるだろう愛情に寄り添って行く自分の未来を想像していた。

「俺、雨とデブ嫌いなんだよ。」

二人の間に続いていた沈黙を画する涼介の最初の言葉は、優しさとは無縁の、自身の感情をそのまま口にする事に吟味も躊躇いも無い安易な自己主張だった。

「……私も雨は好きじゃない。」

「なんかデリカシー無いでしょ？ 雨もデブも。」

「……ひどい人ね。」

「……でも好きでしょ？」

「……自信たっぷりね。」

「でも、好きでしょ？」

涼介はまゆみを一度も見ること無く同じ言葉を淡々と重ねた。

「……」

涼しく核心を突く涼介の意地悪な問い掛けに、まゆみは恋心を更に心地良く擦り伏せられ、涼介の横顔から視線を外せなかった。

「・・・軽くメシでも食つところか。」

予想外に車の流れが滞っているバイパスを嫌った涼介は、会話の脈絡を無視し、再び安易な自己主張をした。

「うん・・・。」

「渋滞避けよう。」

「・・・うん・・・。」

まゆみは穏やかな表情で涼介を見つめていた。

(・・・何であんな事言つちまうんだ・・・駄目だな俺は・・・。くそっ、仕方ない・・・。)

涼介は再び自分を吐き捨てた。そして吐き捨てた自分を庇護し、開き直り、横顔に刺さり続けるまゆみの視線に笑顔を向けた。

「・・・。」

まゆみは涼介の笑顔に満面の笑みで答えた後、満足した様にゆっくりと街並みに視線を変えた。

「・・・。」

涼介はまゆみが残した意味有り気な余韻に、暫くまゆみの横顔を見つめさせられていた。

(・・・恋愛つてのは夢とか希望とか、情熱とか理想とか、そんな様な物を振り翳してる内は空回りするだけかも知れない・・・。)

正面に向き直った涼介は自分の傲慢な素性を棚に上げ、まゆみの意図的な行動に心の中でそう嘯いた。

車内は静かだった。

まゆみはサイドブレーキの辺りに雑然と重ねられているCDを一枚一枚手に取っていた。

(・・・家まで送ってくなら西公園降りた辺りだし、駅迄なら食後の車の中だな・・・。)

涼介は視界に捕らえているファーストフード店迄の距離を流麗に縮められない事に少し苛立ちながら、まゆみに別れを告げる場面を考えていた。

まゆみは中央区の唐人町とつじんちやうに住んでいる博多の女性だった。涼介の住む小倉とは都市高速道路、九州自動車道と繋つないでも70分近くの距離があった。

「ミスチル、好きなの？」

CDの中から“Mr・children”を見つけ出したまゆみは、無邪気な笑顔を涼介に向けた。

「・・・そうだね。」

涼介は前を向いたまま笑顔を作った。

「何か意外だね・・・私もミスチル好き。」

まゆみはそう言って嬉しそうにCDをプレーヤーに差し込んだ。

(・・・降って来たな・・・)

涼介はまゆみの言葉を拾わず、フロントガラスに姿を現した雨に心の中で舌打ちをした。

涼介は一人の女性を傷付ける事の重大さを真摯しんじに受け止め、同じ過あやまちを二度と繰り返すまいとする自戒じかいの心を、然も当さたり前の様にずっと等閑なあさりにしたまま、まゆみに切り出す別れ話のタイミングと、別れを告げた後、まゆみが車から降りる迄に交わすだろう言葉の選えび方や使い方と向き合っていた。

まゆみは微笑を滲にじませていた。

10月19日の日曜日、午後3時過ぎ、小倉市街へ繋がるバイパスは渋滞が始まっていた。

雨粒は街の至る所で弾け合い始めていた。

車内には“Mr・children”のメロディと、この先ずっと交わる事は無いだろう二人の思惑が漂っていた。

「・・・ぬるいな。」

邪魔な雨を拭ぬぐうワイパーのスイッチを入れた時、涼介は心の声を思わず口にした。

「えっ？何か言った？」

「・・・いや、何でもないんだ。」

涼介は正面を向いたまま努めて自然にそう答えた後、まゆみと一

度視線を交わし、ドリンクホルダーのボルビックにゆっくりと手を伸ばした。

爽やかなBGMが流れている店内とは丸で別世界の如く、豪雨に悲鳴を上げる街並みが窓ガラスの向こうに見えていた。

テーブルの上にはハンバーガーの包装紙やナゲット用の余ったソースが、バスケットの中で賑やかに重なっていた。

(・・・・・・・・) 涼介はコーヒートを片手に荒れる街並みを眺めていた。

(・・・・・・・・) まゆみは雑誌に落とした瞳を時折涼介に向けながら、涼介が創る無言の空間に幸福を感じていた。

まゆみは車の中で涼介が昼食を取ろうと言った時、何処か隠れ家的で洒落な店に入るのはないかと思っていた。しかし涼介は何時ものクールさを纏う事無く、気さくな笑顔でファーストフードの店を選んでいった。まゆみは涼介のそんな行動に、過度の演出で格好良く女性をエスコートする時期の過ぎた、親密な関係になつた女性に対する揺ぎ無い親愛の証を感じていた。そしてその証には、不変の愛を二人で育もうという涼介からの無言のメッセージが込められていると信じていた。

(・・・・・・・・) 涼介は雑誌を読んでいるまゆみの横顔を見つめながら、煙草をポケットから取り出す素振りに紛れて、まゆみに気付かれない様に携帯電話の電源を切った。

(・・・遣り切れない男だな・・・)

食事にファーストフードの店を選んだ事が、一つの恋愛に結論を出し終えた男の、底意地の悪い投げ遣りな選択だと気分を滅入らせ<sup>めい</sup>ていた涼介は、何処を見るでもなく店内に視線を移し、心の中でそう嘆いた<sup>なげ</sup>。

(・・・最悪な男だ・・・)

涼介はこれから切り出さなければならぬ、今日を限りに二度と会う事はないだろうまゆみとの別れ話の最中に、突然割って入るかもしれない受信や着信を避ける為に携帯電話の電源を切った事にも気分を滅入らせ、自己都合だけで恋愛と向き合っている自分を更に嘆いた。

「・・・ね、涼介って何月生まれ？」

放つて置けば何処までも続きそうな沈黙を、まゆみの明るい声が破った。

「・・・ん？」

涼介はまゆみを見た。

「誕生日まだ聞いてなかったよね？」

占いのページを開いていたまゆみは、活き活きとした表情で言葉を弾ませた<sup>はず</sup>。

「そうだった？」

涼介はそう言つて、手に持ったままだった空のコーヒーカップをそつとテーブルの上に置いた。

「・・・ね、何月？」

「3月だよ。」

「3月何日？」

「10日。」

「10日かぁ・・・魚座なんだね。」

「・・・そうだね。」

「魚座の男性ってロマンチストが多いんだよ・・・。」  
まゆみはオレンジジュースを口に付け、笑顔を弾かせていた<sup>はじ</sup>。

「そう？」

涼介は笑顔を作るべきかどうかを迷っていた。

「うん．．だつて涼介、ロマンスだもん。」

まゆみにとつて、テーブルを挟んで続く会話は恋人同士以外の何物でもなかった。

「．．．．．」

涼介はまゆみの一言に笑顔を見せていた。しかし涼介にとつてその笑顔は、作り笑い以外の何物でも無かった。

大粒の雨が乱暴に車を叩く音が、車内に流れるメロディを邪魔していた。

バイパスは家族連れの手車が、地方都市の日曜日になりがちな渋滞に拍車を掛けていた。

涼介は小倉市街へと向かわせている車の中で相変わらず無口のまま、A Tのクリープ現象だけで車を前進させていた。

「ね、マツキヨって小倉にあるの？」

ファーストフード店で空腹と一緒に心も満たしていたまゆみは、何かを思い出した様に突然涼介にそう投げ掛けた。

「．．．あるんじゃない？．．．」

涼介はまゆみの質問に、何時かの深夜、平和通りバス停の前で停めたタクシーの中で、マツモトキヨシに入っていくエリカの後ろ姿に目を奪われていた自分を思い出していた。

「じゃあ行こ！買い物付き合つて！」

まゆみはMr．childrenや雨の音に負けない張りのある声を車内に響かせた。

「．．．．．」

涼介は黙っていた。

「ねっ、行こ！連れてつて！」

明るく強請るまゆみの瞳は輝いていた。

まゆみはずっと前から自分の事をもっと深く涼介に知って貰いた

いと思っていた。そうすれば涼介の心の中にもっと深く入り込める  
と思っていた。そして今、そんな思いを実現できる最高のタイミン  
グが自分に訪れていると思っていた。

「……。」  
涼介はまゆみの問いには答えず、CDを止めた。

「……。」  
まゆみは笑顔で涼介の返事を待っていた。

車を叩く雨音が車内に響いていた。

涼介は時間が濁り行く様な空間に耐え難さを感じていた。

まゆみは二人の間に沈黙が来ているとは思っていなかった。

「……このまま駅迄送るよ。」

涼介は落ち着いた眼差しでまゆみを捉え、心に決めていた事を口  
にした。

「……そう……。」

まゆみは微笑を浮かべ、涼介を見つめ続けていた。

（……涼介ってやっぱりあんな場所好きじゃないんだ……。）  
幸福感に包まれているまゆみの心は、涼介の言葉にそんな解釈を  
こじつけた。

涼介は真つ直ぐ前を向いていた。

まゆみは涼介を見つめ続けていた。

（……でも、駅まで送るって言ったよね？……って事は、今日  
はこれでお別れって事なのかな……？）

まゆみは南国で生活する人々が刻むリズムの如く、ゆっくりと涼  
介の言葉の意味を解きに掛かっていた。しかしまゆみの心のベクト  
ルは涼介の言葉の意味を深く探る方向ではなく、涼介を思い遣る楽  
天的な発想の方に向いていた。

（……何かこの後仕事でも入ってるのかなあ……。）

まゆみはそう考えた直後、他愛の無い話の割には余りにも長い沈

黙が二人の間に続いていている事を意識した。

「・・・仕事、入ってるの？」

「・・・いや、仕事じゃないんだ。」

涼介は前を向いたまま冷静にそう言った。

(仕事じゃないんだったら、何か用事でもあるのかな?)

まゆみは涼介の返事に対して、素直にそう考えた。

「・・・じゃあ、何か約束があるとか？」

「約束も無いんだ。」

「・・・？」

まゆみの心は、涼介が放つ現実に因よつて次々と湧わき出て来る疑問符しに収拾うけとを付けられなくなりつつあった。

「・・・じゃ、何？」

まゆみは仕事も約束も無い涼介が、何故デートを早い時間で切り上げ様としているのか理解出来ないままそう聞いた。

「・・・。。。」

涼介は黙っていた。

「・・・ねえ、何？」

まゆみは少し悲しそうに見える涼介の横顔にもう一度聞いた。

「・・・もう会えないんだ。」

「????? どういう事？」

まゆみは涼介の少し太い声に、唯事ただごとでは済まされそうに無い雰囲気を感じた。

涼介は真っ直ぐ前を向いていた。

まゆみは真っ直ぐ涼介を見つめていた。

「・・・ね、どういう事なの？」

まゆみは無理に笑顔を作り、涼介の横顔に詰め寄った。

「・・・終わりにしよう。」

涼介はそう言って、アクセルを強く踏み込んだ。

(??・・・終わりにしようって?・・・え?・・・何を?・・・)

まゆみは急加速の反動に因って、涼介の方に擦ねじつていた体をシートに引き戻されていた。そして混乱している心を如じつ実に物語る様に、呆あっけ気にとられた瞳で涼介を見つめ続けていた。

二人を乗せた車は渋滞のバイパスに別れを告とげ、都市高と速道路横代しろI・C手前の緩やかな上り坂を走っていた。

雨は相変わらず激しく、車の走行を邪魔していた。

「・・・終わりにしようって・・・どういう事?」

声を少し張ったまゆみの顔から笑顔は消えていた。

「別れよう。」

涼介は近づいて来た料金所を前にアクセルを緩め、スーツの胸ポケットから財布を取り出し、その言葉を静かに放った。

「えっ!?!」

まゆみは事の重大さにやっと気付こうとしていた。

「・・・」

涼介は表情を変えずブレーキに足を乗せ、パワーウィンドウのスイッチを押した。

「別れようって!?!」

「・・・」

涼介はまゆみの質問に黙もくしたまま料金所で紙幣を渡し、おつりの硬貨と領収書を無造作にポケットに入れた。

「ねっ、涼介!・・・どういう事なの!?!」

まゆみは再び詰め寄った。

「・・・今日で終わりにしよう。」

涼介は加速させ続けている車のドアガラスが閉まり切るまで待った後、その言葉を強い声で車内に置いた。

「・・・」

まゆみは感情の欠片かけらすら覗のぞかせない涼介が口にした言葉を理解出来なこないでいた。

「・・・」

涼介は真つ直ぐ前を向いていた。

(分からない・・・何が起こってるの・・・?)

まゆみは言葉を見つけられないまま涼介を見つめていた。

(ねえ涼介、分かんないよ・・・別れるってどういう事なの?・・・)

涼介と知り合って以来何度も不意を打たれていたまゆみは、無意識の内に過去の涼介の不意打ちを振り返っていた。しかしまゆみの胸の中に在る涼介の不意打ちは、ほろ苦くも幸せを感じられる微笑ましいものばかりだった。

(ねえ、涼介・・・)

まゆみは微動だにしない涼介の横顔にどんな言葉を選べばいいのか、そしてどんな態度を見せれば涼介の言葉を打ち消す事が出来るのか懸命に考え始めていた。

(涼介・・・ねえ、涼介、今日で終わりって?・・・嘘でしょ?・・・)

冗談だよな?・・・ねえ涼介・・・何か喋って・・・お願い・・・)

涼介から受けた霹靂へきれきに混乱しているまゆみは精一杯平静せいへいを装い、心で涼介に絶すがった。

「・・・愛せないんだ。」

涼介は黙り込んでいるまゆみに“駄目”を押した。

「・・・。」

まゆみは瞬まはたきもせず、涼介に瞳を泳がせていた。

「ごめんな。」

まゆみの心情を無視している事を本人に分からせるかの様に涼介はそう続け、話を括くくりに掛かった。

車は豪雨の中、九州道へと繋つながる紫川ジャンクションを通り過ぎていた。それは氷の様に硬く冷たい心で別れを告げるタイミングを計算していた涼介が、まゆみを車から降ろす最適の場所がまゆみの住む博多ではなく、小倉駅だと弾はじき出していた事を意味していた。

「・・・愛せない・・・って?・・・。」

茫然自失ぼうぜんじしつになりそうな気持ちを堪こらえ、涼介から突き付けられた言

葉の意味を噛み砕く為に、心の中で何度もその言葉を反芻していたまゆみは気丈に聞いた。

「……………」  
涼介は黙っていた。

「…………愛せないって…………どういう…………事…………」  
自分なりに考えていた二人の絆を強くする為の計算や目論見が、更には二人の未来を夢見る乙女心の様なものが、しかしそんなものより自分の存在自体が涼介に因って抹消され様としている現実が、今、目の前に確実に存在している事実さまゆみは切実だった。

「…………何でなの涼介…………何でこんな事になるの…………」  
二人の付き合いを最初からやり直す事を、願わくは涼介にもう一度考え直して欲しいまゆみは、心に漂い始めた絶望感を必死で払い除けながら、そう言葉を重ねた。

「……………」  
涼介は無表情だった。

「…………何で…………答えて…………くれないの…………」  
何も喋ろうとしない涼介に三度重ねたまゆみの声は細く、小さかった。

「……………」  
涼介は横顔をまゆみに晒し続けていた。

「……………」  
まゆみは心に途方も無い静寂を感じていた。

「……………」  
まゆみは心の中で呟いた。そして目の前に居る涼介の冷めた態度が意地悪な冗談などではなく、紛れも無い真実である事をはつきりと認識した。

「…………ほんとにどうしよう……………」  
まゆみは再度そう呟いた瞬間、顔から血の気が一気に引いた事が

分かった。

(・・・ねえ・・・涼介・・・)

背中を伝う搔いた事の無い冷たい汗に、まゆみは涼介との恋愛関係が修復不可能である事を直感させられていた。

車は小倉駅北出口に向かう車線で水飛沫を上げていた。

薄暗く濁った視界の先には、同じ車線を走る車のテールランプが右曲がりて連なっていた。

二人の間には長い沈黙が続いていた。

まゆみは滲み始めた涙を絶望の淵で止め、涼介を見つめていた。

涼介は横顔をまゆみに晒し続けていた。

「・・・涼介・・・何故・・・私だったの?・・・」

動揺と混乱を悟られまいと涼介に背を向けたまゆみは、胸に迫り来る慟哭を抑え、雨で霞む小倉の街並みに瞳を泳がせながら気丈に聞いた。

「・・・」

涼介は黙っていた。

「・・・聞かせて・・・何故こんな風になったのか・・・涼介の本心が知りたい・・・」

まゆみは残酷な現実には震えそうになる声を必死に耐えていた。

「・・・私の・・・何がいけなかったの?・・・」

まゆみは涼介の沈黙に従順だった。そして涼介と重ねて来た時間を顧みながら、健気にも自分を責めていた。

「・・・」

それでも涼介は黙っていた。

「・・・何故・・・何も喋ってくれないの?・・・」

「・・・」

「・・・涼介・・・」

「・・・ごめんな。」

「!?!?!?!?!」

涼介との恋愛に断腸の思いで終止符を打とうとしていたまゆみの恋心は、涼介の一言に“ぞっ”としていた。

車は都市高速道路から199号線への合流を許す為に設けられている信号でアイドリングをしていた。

涼介は綺麗な姿勢で遠くを見つめていた。

雨で霞む街並みを力無く見つめていたまゆみの瞳は、まるで別人の様な鋭さで再び涼介を映していた。

「・・・ごめんって・・・何？」

まゆみの第六感は、一つの言葉と無言を判で押した様に繰り返す涼介の心の中を垣間見ている。

「ねっ・・・ごめんって、何?・・・」

まゆみは涙が残る瞳で涼介を刺し、言葉で涼介の心の奥底を刺した。

「・・・。。。」

涼介は黙っていた。

(・・・馬鹿にされてる・・・)

まゆみはそう思った瞬間、“涼介”という人間を信じ過ぎていた自分を哀れむ事を止め、破局の原因は自分に在ると思つ事を止めた。  
「ねえっ！ ごめんって、何!？」

まゆみは語気を荒げた。

まゆみは“ごめん”とだけしか言わない涼介の心に、恋愛という情熱的な行為を巧みに操る打算を垣間見ている。そして人の心を蔑ろにしても痛みを感じない、想像を絶する悪臭を放つ腐った性根を垣間見ている。そしてまゆみは垣間見たものに、過去に経験した事の無い怒りの感情を体中に沸き立たせていた。

「・・・もう私に用は無いつて事？」

まゆみの瞳から涙は消え、さつきとは違った震えを唇に感じていた。

「ごめんな。」

「涼介は間髪かんぱつを入れず、判を押した。」

「まゆみは涼介のその言葉に、背負っていた哀れさや惨めさという重荷しんいの中身を完全に瞋恚しんいに変えた。」

「(じゃ、あのキスは!?あのメールは!?あの言葉は!?・・・)短い時間だったけれども涼介を愛して良かったと思える幕切れを望み、涼介にとって都合の良い女などでは決してなかったとしたかった自分への愛情が呆れる程生ぬるく、世間知らずのお人好しだった事を痛烈に思い知らされたまゆみの心には、涼介に対する攻撃的な思考が止め処なく溢れ始めていた。」

「私に見せてた涼介の姿って、全部嘘だったの?」

「まゆみは涼介から貰った愛情表現らしいものの全てを振り返る前にそう言った。」

「涼介はブレーキペダルに右足を乗せていた。」

「車は199号線に別れを告げる右ウインカーを点滅させていた。」

「赤信号の右手にはリーガロイヤルホテル小倉が、左手には巨大なAIM小倉ビルが雨で霞かすんでいた。」

「・・・嘘じゃないんだ。」

「涼介は物哀しい情熱に因って創造された“独善”の正当性を短い言葉にした。」

「嘘じゃない?・・・何が嘘じゃないの?・・・分からない・・・もつと分かる様に話して。」

「・・・ごめんな・・・。」

「涼介は我慢していた。車の中でまゆみを無視し続けて来た事を台無しにしない為にも、傷付き怒れるまゆみの心を此この期こに及んで無闇やみに刺激しない為にも、まゆみの気持ちを理解した風な中途半端な相槌あいつちを打ち、自分の複雑な心の内を滔滔とうとうと言葉にする事を我慢していた。」

「・・・さつきからごめんねって・・・それだけ言って置けば済むとも思ってるの?・・・ねえ涼介何で?何でそんなに格好付ける必要

があるの？」

まゆみは涼介の狡賢い部分こつめがしを最後の最後まで見抜けなかった自分にやるせなさを感じていた。

「……………」

涼介は黙ったままハンドルを動かしていた。

「……また黙り込むの？ ……ねえ涼介分らないってば！ 何か言つてよ！！……何だったのこの何ヶ月間……何が目的だったの！？ 全部計算だったの！？ セックスをしなきゃ答えが出せなかったって事なの！？ それとも最初からセックス迄って決めてたの！？ ねえ！！ そのつもりだったの！？ その為に見たくも無い映画に付き合つたの！！」

平然と構えている涼介の隣で体を震わせている事に耐えられなくなったまゆみは、自らの手で理性を粉々に砕くだき、涼介が創る沈黙を切り裂さいた。

「何で黙ってるのよっ！！」

まゆみは涼介を睨にらみ、幾重あるのか分からない涼介の化けの皮を最後の一枚まで剥はぎに掛かった。

「……………」

涼介は前を向いたまま静かに呼吸をしていた。

「ねっ！！ 最初から嘘だったの！？ キスもメールも、好きとか愛してるとか、ついさっき迄“好きだよ”みたいな事言っとして、ねえっ！！ 何故！！」

まゆみの声は荒々しさを増していた。

涼介は心に訪れている葛藤かっとうを静かに押さえ込んでいた。

「いい加減にしてっ！！……黙つてたらその内私が大人しくなるんでも思ってるの！！ それとも凶星だから何も喋れないのっ！！……人の心を踏み躪じつて、無視して、投げ捨てて……そんな事が許されるところでも思ってるの！！」

嵐のような雨が車を叩いていた。

車は路上でエンジン音を殺していた。

まゆみは呼吸を乱し、涼介を睨んでいた。

涼介は瞳を閉じていた。

「……………」

もつときつい言葉で涼介を詰り、傷付け、泥々の世界に涼介を引き摺り込もうとしていたまゆみは、涼介の向こう側に見える景色が動いていない事にふと気付き、ゆっくりと周囲を見渡した。

「……………はあ……………」

突然まゆみは、二人の間に続く無言の空間に大きな溜息を一つ吐いた。

瞳を閉じたままの涼介は、眉間に皺を加えていた。

助手席の窓の向こうに見える建物の壁には、“小倉駅”という文字が張り付いていた。

「……………何だったのよ涼介と私って……………」

まゆみは涼介の仕打ちに愕然としていた。

「……………分からないよ涼介……………何故こんな突然なの……………何が気に入らなかったの……………ねえ！何故！？……………」

弾き出した感情の欠片にすら触ってくれない涼介に、まゆみは思いを振り絞った。

「……………何か言つてよ……………」

まゆみの心は虚無感に締め付けられていた。

「……………ねえ！何か言つてよ……………ねえ……………ねえ……………ねえ……………」

まゆみは瞳に涙を滲ませ、涼介の体を揺すり、懇願した。

「……………」

涼介は黙り続けていた。

「……はあつ……。」

まゆみは涼介の沈黙に、完全に打ちひしがれた。

ワイパーは動きを止めていた。

車内には車を叩く雨音の隙間に、ハザードランプの点滅音が微妙かに響いていた。

「……ごめんな……。」

戸惑いも躊躇いも、言い訳も反駁も、感謝も反省も、思い遣りや誠実さも、不埒な慰めや労わりや詭弁さえ、おおよそんな状況の時に男として最低限見せるべき殊勝な態度や言葉を何も選ばず、涼介は二人の間に漂う重い空気に低い声を置いた。

「……ごめんって……何よ……。」

まゆみは声を震わせながら“涼介”という遊び人に遊ばれた事を嘆いた。そして涼介という“遊び人”を真剣に愛した事が後悔の念となり、暫くは自分の恋愛観を荒らす事になるだろう現実が、直ぐ目の前に迫って来ている事に唇を噛んだ。

涼介は瞳を閉じ、眉間に皺を寄せ、唇を一字に閉じていた。

「……。」

まゆみは視線を涼介から切った。

色取りどりの傘の群れが小倉駅に吸い込まれていた。

まゆみは濡れた瞳で、濡れた街を暫く眺めていた。

「……。」

まゆみは腹を括った。まゆみにも最低限譲れない、引き際に対するプライドがあった。

「……さようなら。」

まゆみはドアに手を掛けた。  
涼介の視線を背中に感じていた。  
車内には凜とせざるを得ない空気が流れていた。  
振り向けない事は分かっていた。  
向き直れない事も分かっていた。

「……………」

まゆみはドアを開けた。  
左足を路上に降ろす事を躊躇っていた。  
振り向きたかった。

もう一度向き直り、もう一度話がしたかった。そしてもう一度、  
涼介に縋りたかった。

強い雨がまゆみの体を叩いていた。  
まゆみは背中を涼介に向けたまま路上に立っていた。  
強烈な孤独を感じていた。

傘の群れが不思議そうにまゆみを見ていた。  
まゆみは知らない街の駅に向かって歩き始めていた。  
歩き出すしか術が無かった。  
何故歩いているのか分らなかった。  
誰の意思で何処に向かっているのかも分らなかった。

まゆみは頬を打つ雨に、惨めな心も体も溶かして欲しいと忍び泣  
いていた。

「ごめんな……………」

涼介は、雨の中をゆっくりと駅の構内に向かって歩いて行くまゆ  
みの背中にそう呟いた。

「……………本当にごめんな……………」

傘の波に紛れ<sup>まぎ</sup>行くまゆみに、涼介はもう一度そう呟いた。

29・・・捧げる決心

とどまる事を知らない時間の中で  
いくつもの移りゆく街並を眺めていた  
幼な過ぎて消えた帰らぬ夢の面影を  
すれ違う少年に重ねたりして

無邪気に人を裏切れる程  
何もかもを欲しがっていた  
分かり合えた友の愛した女でさえも

now” by Mr. children never k  
“ Tomorrow never k

(最低の男だ・・・もう二度とこんな事やつちや駄目だ・・・。)  
涼介は罪の無いまゆみの心を粉々にし、最後まで口を開かず、  
劣で卑怯な男に徹したためく情けない自分にそう吐き捨てた。  
下

償う事さえ出来ずに今日も痛みを抱き

夢中で駆け抜けるけれども

まだ明日は見えず

勝利も敗北もないまま

孤独なレースは続いてく

“ Tomorrow never k  
nows” by Mr. children

涼介は遣り切れなさを紛らわす為にCDのスイッチを入れていた。  
まゆみを選んだアルバムが車内に再び息吹いていた。

ワイパーは視界を確保する為に激しく動いていた。  
涼介の心も、自身の恋愛の行く末を知りたがる様に激しく動いて  
いた。

人は悲しいぐらい忘れてゆく生きもの  
愛される喜びも 悲しい過去も

今より前に進む為には  
争いを避けて通れない  
そんな風にして世界は今日も回り続けてる

“ Tomorrow never k  
nows” by Mr. children

涼介は激しい雨音に負けないぐらいボリュームを上げていた。  
雨脚は前を行く車の輪郭を消す程酷くなっていた。  
運転には煩わしさやうつつとうしさを超越させた集中力が必要にな  
っていた。

(畜生……。)  
涼介は耐えていた。不誠実な態度でまゆみに接し続けて来た数ヶ  
月間を、そして人間として恥ずべき態度で無視し続けたほんの数分  
前を、涼介は耐えていた。

(自分らしいって何なんだよ……。)

涼介は考えていた。恋愛に限らず、誠実や思い遣りやバランスという、生きて行く為に必要で大切な物の見方や考え方を満遍無く行使し続けなければ、幸せな結末と向き合えないのかもしれない事を考えていた。そして歳を取るに連れ、恋愛を重ねるに連れ、尚且つそこでまた新たに割り振られる自分へのあらゆる現象を受け入れる事を良識とし、決してたじろがず、果敢に立ち向かわないスタンスを守り、そんな知恵に自分らしさを融合させ、人間としての品格や人生の秩序を見出すしかないのかもしれない事を考えていた。

果てしない闇の向こうに oh oh 手を伸ばそう

誰かの為に生きてみても oh oh

Tomorrow never knows

心のまま僕はゆくのだ

誰も知る事のない明日へ

“ Tomorrow never knows ” by Mr. children

渋滞していた。

車は小倉駅南口へ抜けるガード下でアイドリングを長く続けさせられていた。

車内はガードのお陰で雨音の混じらない澄んだメロディが流れていた。

反対側の歩道に一組のカップルが雨宿りをしていた。

二人は雨宿りを楽しんでいるかの様に、笑顔で何かを話し合っていた。

優しさだけじゃ生きられない

別れを選んだ人もいる

再び僕らは出会っだろう

この長い旅路のどこかで

“ Tomorrow never k  
nows” by Mr. children

(・・・)

涼介はメロディを全身に浴びながら、現実から目を背け様として  
いる瞳の中に若いカップルをずっと取り込み続けていた。

男性は苦笑いと嫌がる素振りを見せていた。

女性は男性の腕を終始笑顔で引っ張っていた。

車はゆっくりと前へ進んでいた。

二人の姿は涼介の瞳を独占していた。

(マキ・・・)

意を決しただろう男性が、今度は逆に力強く女性の手を握り、ガ  
ード下から雨の街へ飛び出して行った瞬間、涼介は心の中でそう呟  
いた。

(・・・マキか・・・)

涼介は二人の背中を目で追いながら、もう一度脳裏にその名前を  
走らせた。

(あんな二人を見ちゃ、蘇よみがえっちゃうよな・・・)

ガード下で戯れ合った後、雨の街に消えて行った二人に涼介はず  
ぶ濡れのマキを思い出していた。

梅雨明け前の渋谷だった。

涼介はマキの買い物に昼間から付き合っていた。

二人は一頻り遊び、夕食後、思い掛けず入ったBARで涼介はほ  
ろ酔いになっていた。

知らない間に街は土砂降りに見舞われていた。  
桜木町さくらぎまで帰れる最終電車さいしゅうでんしゃに乗る為に、二人は駅に続く道を走っていた。

「雨っ、もう嫌いつ。」

「・・・俺は？」

「好きっ。」

マキは笑顔で息を切らしていた。

涼介はマキの手をしつかり握っていた。

東横線のホームには発車を待つ電車が、各車両のドアを全開にして停車していた。

車内はすでに人で溢あふれていた。

二人は電車に乗る前にお互いのハンカチでずぶ濡れの体を拭き合っていた。

マキの濡れたTシャツからブラが透すけて見えていた。涼介はマキのその姿に、車内でマキを守る方法をずっと考えていた。

涼介は自分達が最後の乗客になる迄までホームに残っていた。そして涼介は発車のベルと同時に満員の車内を背中で押し、作った小さなスペースにマキを抱き込んだ。

涼介はマキを他の誰にも触れさせない為にドアの隅に立たせ、車内に背を向けさせ、自分の両肘をドアに付けてマキを守っていた。

マキは涼介に包み込まれていた。

時折二人はドアガラスに映るお互いの瞳を見つめ合っていた。

「……………」

元住吉もとすまよしを過ぎた辺り、マキはドアガラスに息を吹き掛け始めた。

「……………」

涼介はガラスに映るマキの笑顔に首を少し捻ひねった。

「……………」

マキは少しだけ曇った部分に“やるじゃん”と指を走らせた。

「……………」

涼介はマキに笑みを返し、右肩に感じているマキの髪に頬を寄せた。

「……………」

マキは涼介の頬に自分の横顔を寄せ、背中を預けた。

「やるじゃん、か……………」

涼介は呟いた。

車は小倉駅から着実に遠ざかっていた。

ワイパーは賑にぎやかに動いていた。

果てしない闇の向こうに oh oh 手を伸ばそう

癒える事ない傷みなら いっそ引き連れて

少しぐらい はみだしたっていいさ oh oh 夢を描こう

誰かの為に生きてみたって oh oh

Tomorrow never knows

心のまま僕はゆくのだ

誰も知る事のない明日へ

“Tomorrow never knows”  
by Mr. children

涼介はマキと決別し、エリカへの愛を誓っていた。しかしマキが涼介にとって珠玉たまごの女性である事に変わり無かった。

(あの夜、何故愛なせしてるって言わなかったんだろう……。)

涼介はマキと本牧の“司”で差し向かった最後の夜、誠実や思い遣りという“愛情”を形にしなかった事をずっと後悔していた。そしてマキ以降、“愛情”を曖昧あいまいな情熱としてでしか女性に届けられなかった自分の性質たちを後悔していた。

雨脚は強いまま街を叩いていた。

車は小倉市街に蔓延はびっている渋滞を抜け出そうとしていた。

(自分らしい恋愛こって何だろう……。)

一生“珠玉”に縛られ続ける事を覚悟し、しかも時が経つと共にその“珠玉”を物哀しい迄に理想化し、そして新たな女性との恋愛の中にその理想を投影し、そんな自分をぬるい男なのだと思つて無責任に括くつた拳あひく句自分の恋愛に匙さじを投げ、しかしその度に何度も何度も密ひそかに自問自答して来た自分勝手な命題を、涼介はある意味何時もの様に脳裏に浮かべた。

誰にも利用されず、誰にも指図さしを受けず、誰にも頭を下げない、例えそれが物哀しい理想であつたとしても、涼介がそんな心のままの“自分らしい恋愛”を求める一己いっの人間で在り続ける為には、心を開く事を頭の中で一度整理してしまふ冷徹な感情の醜みにくさを思い知る必要があつた。愛情の中に包括ほうかくされた自己犠牲や純粋な情熱は、計算の上に成り立つ訳が無いという事を思い知る必要があつた。そして涼介がそんな当たり前の事を本当に思い知り、自分の狡賢さうかさを理解した時、一己の人間として尊厳そんげんを得られる“自分らしい恋愛”を必然として手に入れる事が出来る筈はずだつた。

(……。誰も知る事のない明日へ……。か……。)

涼介はざらついている自分の恋愛観にどんなはじめを付けなければいいのか分からないまま、シャツのポケットに手を伸ばした。

道路は至る所に水が浮いていた。

激しい雨に抗あう車の殆どがスモールランプを点けていた。

「止んでくれよ……。」

涼介はフロントガラスを叩く雨にそう呟きながら携帯電話の電源を入れ、受信メールを確認する為にセンターへ問い合わせた。

### 受信トレイ

15:54	<未開封>	岡部恭子	2003/10/19
15:21	<未開封>	エリカ	2003/10/19
11:30	<未開封>	岡部恭子	2003/10/19
11:05	<未開封>	魚町店畑中	2003/10/19
01:47	<開封>	エリカ	2003/10/19
22:15	<開封>	エリカ	2003/10/18

: : :

コンビニエンスストアの駐車場で呪縛<sup>くわばく</sup>と決別し、遣り切れない思<sup>や</sup>いを抱えたまま情熱をエリカに送信し、腐った男だと辟易<sup>へきえき</sup>しながらファーストフード店で電源を切つて以降、涼介の携帯電話は二通のメールを受信していた。

(・・・ふう・・・)

運転に必要な集中力を最低限維持しながらハンドルを握る左手で受信トレイを開いていた涼介は、一通のメールを開く為に息を一つ逃がした。

受信メール

お疲れ〜！

やっと応答したねっ！

昨日は誰とエツチしてたの？

ウソウソ^^

携帯つながんないし（´|`、）会いたかったんだよ！

今日はね、仕事早く終るから7時に

迎えに来て（^|`-）- 待ってる（^|`^）

髪の色少し変わったよ

じゃね

エリカ 2003/10/19

15:21

（・・・エリカ・・・）

涼介は心の中で穏やかにエリカの名前を呼んだ。そしてバックミラーに目を遣り、アクセルを緩め、左ウインカーを点滅させた。

（・・・らしいな）

エリカに誓った愛情が今は未だお互いの結論では無い事に一抹の不安を抱えていた涼介は、素直な恋心が鏤められていたエリカのメールに心を打たれていた。

車は速度を落とし、道路の端に寄り始めていた。

左ウインカーはハザードランプの点滅に変わっていた。

普段の涼介なら何の躊躇いも無く運転しながらメールを作り始めている筈だった。しかし涼介は車を止め様としていた。それは雨が酷過ぎるからではなく、エリカの愛情を冒瀆しない為の、エリカへ贈る愛情を陳腐なものにしない為の、無意識の内の行動かもしれないなかつた。

「・・・エリカに救われたな。」

涼介は呟いた。

涼介は愛情が凝縮された様なエリカのメールに“自分らしい恋愛

”の結論を教えられた様な気がしていた。そして罪悪感で濁り切っていた心が徐々に澄み始めて行く感覚を享受していた。更にはエリカを愛する事に何の躊躇いも無い無防備な自分が存在している事ははっきりと認識し、その認識が齎す幸福感に因って、失っていたときめきや愛する人を思い慕う気持ちが体中に蘇って来た事に驚きも感じていた。同時に“恋愛”という人間にとって必要不可欠な領域を泳ぎ回り、しかもどんな時でも泳ぎ切る前に別の領域を探していた身勝手な過去が愚の骨頂だった事も思い知らされていた。

(・・・・・・・・)

路肩に車を停めた涼介はエリカのメールと向き合っていた。

(エリ・・・・・・・・)

ある種感動を覚えていた涼介は緩まっていた顔を一気に締め、諸手を挙げて捧げたい情愛と、理想を追う事に対する渴愛と、全てを包み込む慈愛を融合させた。

新規メール作成 宛先 エリカ

愛してる。

7時、美容室の前で。

サブメニュー 編集 戻る 17:05

(・・・・・・・・)

涼介は再び顔を緩め、液晶に綴った気持ちを眺めていた。

雨は車を激しく叩いていた。

曲を流し終えていたCDプレイヤーは、新たに曲を流すのかどうかのサインをオレンジ色の液晶画面に表示していた。

涼介は自身の全てをエリカへ惜しみなく永劫捧げる決心を、目に見えない何かに誓っていた。

(頼むから止んでくれ・・・)

涼介はそう願いを込めて、エリカへメールを送信した。



「・・・長いな・・・。」

早く自宅に戻りたい衝動に駆られている涼介は、目の前の赤信号にそう呟いた。

車は左ウインカーを点滅させていた。

助手席のガラス越しには、涼介の自宅があるマンションが見えていた。

「ほんと、雨とデブと・・・赤信号は・・・嫌い、か・・・。」

涼介は言い放とうとした言葉を途中で止め、ヘッドレストに頭を持たせ掛け、苦笑いを浮かべた。

(ふっ・・・デリカシーが無いのは俺じゃないか・・・。)

苛立ちを何時もの口癖で紛らわそうとしていた涼介は、そんな今までの“痛い”自分を鼻で笑い、蔑んだ。

「・・・休みなんだからゆっくり休むもんだぞ。・・・ん？そうか？何か日本語変だったか？」

涼介は雨の駐車場を歩きながら恭子の笑い声を耳に当てていた。

「・・・まあ、そういう事だよ、ご苦労さん。・・・了解、それじや明日改めて。」

エントランスの奥に在るエレベーターホールで涼介は恭子との穏やかな会話を閉じた。

マンションの駐車場に車を停めた後、開封していなかった恭子と魚町店の店長のメールに目を通して涼介は、車の中で魚町店の店長と話し、続け様に恭子に電話を掛けていた。

（立ち会ったのかよ・・・岡部らしいな・・・）

エレベーターに乗り込み、八階フロアのボタンを押した後、一息つくように壁に寄り掛かっていた涼介は、休日出勤をして魚町店の厨房補修工事に立ち会い、その結果を然りげ無くメールで報告し、電話ではそんな自分の行動をアピールする事無く終始笑い声を絶やさなかった恭子に、リーダーとしての資質が備わっている事を改めて感じ、敬意を表する微笑を浮かべていた。

「?・・・」

目の前に長く延びている室内共用廊下に遠慮がちに靴音を響かせていた涼介は、右手に持ったままだったキーケースの釦を玄関ドアの前で弾いた後、動きを止めた。

ドアレバー近くの隙間にメモ紙の様な物が挟まっていた。

（何だろう・・・）

涼介はその紙に手を伸ばした。

玄関ドアを照らすスポットライトが、ドアの前で動かない涼介の後ろ姿を照らしていた。

「あいつ・・・」

涼介は二つ折りにされていた紙に書かれていた文字に、そう一言呟いた。

「どこにいるの!？」・・・か・・・」

ソファの背凭れに上着を投げ掛けた涼介は、キッチンに向かいながらエリカの口調を真似る様にメモに書かれてあった言葉を呟き、ダイニングテーブルの上にキーケースとメモを置いた。

（・・・参ったな・・・）

涼介は徐に冷蔵庫の扉を開け、ボルビックに手を伸ばした。

(・・・まったく・・・)

メールではメモの件に一切触れず、電話もせず、合鍵を持っているのにシリンダーにキーを差し込まず、玄関ドアの隙間に会いたい気持ちを差し込んでいたエリカの昨夜の行動に涼介は魅力を感じ、愛おしさを募らせていた。

リビングは何時もと変わらない表情で涼介を包み込んでいた。キッチンからコーヒーメーカーのドリップ音と心地良いコーヒーの香りが届いていた。

涼介は体をソファに深く沈み込ませ、センターテーブルに足を投げ出し、誰にも邪魔をされない一人の時間に目を閉じていた。

(そうだ・・・)

涼介は体を起こした。そしてソファに放り投げていた上着の内ポケットに手を伸ばした。

昨夜、車の中に置きっ放していた携帯電話をコンビニエンスストアの駐車場で開いた時、メール以外に純一からの着信が二度残っていた事を涼介は思い出していた。

キッチンはコーヒーの香りで彩られていた。

「もしもし・・・」

涼介はマグカップにコーヒーを注ぎながらそう言った。

「・・・はいはい・・・どうよ?・・・まあ、普通かな・・・」

マグカップに一度唇を当てた涼介は、左耳に携帯電話を当てままゆっくりとソファに戻り始めた。

「・・・そうそう・・・だよなあ・・・ああ、いいんじゃない。」

涼介は純一と交わすスローな会話が好きだった。

「了解。・・・ああ、そうだね・・・そういう事かな・・・」

涼介は培って来た二人の関係だけにしか成立し得ない、主語の無

い会話に夢中になっていた。

「……はいはい……じゃ、よろしく。」

そう言つて電話を切つた涼介の顔は緩んでいた。

「……そつか……悪くないな……。」

純一の言葉を心に落とした涼介はそう呟き、センターテーブルに投げ出していた足を下ろして右腕に目を遣つた。

（……5時40分か……シャワー浴びなきゃだな……。）

エリカを迎えに行く迄の残り時間を確認した涼介はゆっくりと立ち上がった。そして思いを行動に移す前にリビングの掃き出し窓に向かった。

小倉の街は夜を迎えていた。

空には昼の名残が微かに残り、その明かりをバツクに街の光が静かに瞬いていた。

「……このまま止んでくんねえかな……。」

ベランダに出ていた涼介は、目に映る雨が音も無く細くなっている事に期待を込めてそう言った。

コーヒーの香りはユーティリティまで届いていた。

洗面台の廻りにはエリカのグルーミング道具やTシャツが無造作むぞうさくに置かれていた。

（……なかなかいいんじゃない？）

涼介は服を脱ぎながら振り返っていた。

（……いいじゃん……。）

涼介は圭子とエリカを並べ、イメージしていた。

（……なるほどな……。）

更に涼介は圭子とエリカの横に純一と自分を加え、四人が食事をしているシーンをイメージしていた。

(・・・“彼女連れて来いよ・・・四人で飯でも喰おうぜ”、か・・・)  
涼介は純一と電話で話した内容を振り返っていた。

(圭子と会うのは何年振りになるんだろう・・・。)

涼介はシャワーを浴びながら、久し振りに中華街で年を越さないかと持ち掛けて来た純一の言葉を再度思い返していた。

涼介が圭子の顔を涙で曇らせた日から5年が過ぎていた。そしてその5年という年月の間には、圭子と純一が夫婦として今も穏やかに重ね続けている1年半が織り込まれていた。

(!!!・・・。)

涼介は“はっ”とした。

(・・・そっか・・・。)

突然、思い掛けない強い衝撃を胸に受けた涼介は、シャワーを浴びている体を動かさなかった。

(何やってんだろうな俺は・・・自分の事しか考えらんねえのかよ・・・。)

純一の提案は圭子の賛同がなければ有り得なかった。その事にやっと気付いた涼介は、シャワーに背を向け、天井に一つ息を吐き、人の心を察する事が今だ不得手な自分を嘆いた。

圭子は涼介の曖昧な恋心に因って心に深い傷を残していた。しかし中華街で年を越そうという純一の提案を受け入れていた。それは圭子が持っている涼介へのわだかまりや嫌悪を遠い昔の良き思い出として水に流し、心の傷を別次元の空間に昇華させた事を意味していた。

涼介は圭子の心に一生残るかもしれない傷を付けていた。圭子にとって当然それは許し難い過去だった。しかし圭子は、涼介が過去の恋愛に対する懺悔の気持ちある毎に心から引つ張り出し、一生引き摺り、苛まれ続ける事も許さなかった。

(まだまだ・・・だな・・・。)

涼介は電話口の純一や、電話中隣に居ただろう圭子という、自分の性格を知る二人から慮おもんばかられている事実じつじに、改めて自分の生き様さまが甘くぬるく情けない事を痛感させられていた。

(.....)

涼介はダイニングテーブルに一脚だけ差し込ませている何時ものエグゼクティブチェアに座り、濡れた髪をバスタオルで拭きながらポットに残るコーヒーをマグカップに移した。

コーヒーマーカーの横にエリカのクレンジングフォームが転がっていた。涼介の対面にある椅子の背せもたれ凭れには、エリカが部屋着として使っているTシャツが掛けられていた。

涼介の自宅にはエリカの物が溢あふれていた。リビング、キッチン、玄関ホール、バスルーム、パソコンの横にもベッドの上にも、微笑ましくなる程エリカの物が散乱していた。

(.....)

涼介は煙草に火を点け、体を椅子に沈み込ませた。

深い自我じがの下、愛情の在り方あを確立し、突き詰め様とするが故ゆえにその愛情を客観し過ぎていた涼介は、気付かぬ内に愛情を持つ本質から遠ざかっていた。しかし涼介は圭子や純一の思い遣りやに触れ、まゆみやエリカに触れ、愛情その物を素直に振り撒まいていた頃の自分を思い返し始めていた。

(何時からこんな風になつちまつたんだろう.....)

涼介は瞳を閉じ、圭子や純一、まゆみやエリカに感謝していた。同時に四人との出逢いをくれた、必然や偶然という言葉で片付けるには余りにも運命的過ぎる、突き詰めて行けば論理的に説明出来るかもしれない、しかし人の五感に決して触れる事は無いだろう何かに感謝していた。

(.....愛情つてのは何時でも容易たやすく取り出したり受け取れたりする場所で宿やどつてんだよな.....)

涼介はコーヒーを飲み干し、幾らも吸っていない煙草の火を消した。

(難しくも何ともねえじゃねえか……。)

涼介は更に心の中でそう呟き、携帯電話に手を伸ばした。

(……出会い系か……。)

打算的だった自分を省み、失っていた大切な感情を蘇らせていた涼介は、何かを懐かしむ様に携帯電話にブックマークされたままになっっていた出会い系サイトを開いた。

(……“包容力”……“安心感”……“同じ価値観”……“思い遣り”……“優しさ”……“嘘を付かない人”……。)

涼介は殆どの女性が掲示板に書き込んでいるそんな言葉を目で追いながら、時に凶々しく、時に馴れ馴れしく、過剰な自虐の下、女性の気持ちなど丸で考えず出会い系サイトを泳ぎ続けていた頃の自分を思い起こしていた。

(……“煙草を吸わない人”……“髪の毛の薄くない人”……“太っていない方”……“背が高い人”……“若く見られます”……“彼氏が居る様に見られます”……“仕事が忙しくて出会いがありません”……。)

涼介は椅子に体を投げ伸ばした格好で、身動き一つせず左手の親指と瞳だけを動かし、女性達の思惑を黙々と追い続けていた。

キッチンにしては多過ぎるダウンライトの光が、真夏の太陽の如く涼介に煌煌と降り注いでいた。しかしそのキッチンには雪が深深と降り積もる真冬の夜の様な静けさが訪れていた。

「……ふう。」

涼介は何かを見切った様な大きな息を唐突に吐いた。そしてその気になれば何時までも表示出来る出会い系サイトの掲示板を閉じた。

「ぬるいな。」

涼介は呟いた。

(ふっ、しかしまあ……それは俺の事だな……。)

愛情の本質など知る由も無く、しかし知らない間に愛情の本質を体中から溢れさせていた時代に回帰していた涼介は、“ぬるい”と呟いた自分を冷笑し、携帯電話の時計を見た。

「・・・時間だ。」

涼介は心をエリカとのデートに切り替える為に、その言葉を毅然と放った。

涼介は出会い系サイトをスクロールしながら、反省という、同じ過ちを何度も繰り返さない為の誓いを心の中に導いていた。そして女性達が掲示板に残している男性への要求が、欲望を満たす為のプライド高き傲慢にしか見えなくなっている自分が居る事を冷静に見つめていた。更に涼介は、思慮深く、広い心で人を受け入れる事を包容力と言うのなら、気に掛かる事が無くなり、心を安らかにする事を安心感と言うのなら、相手の気持ちや立場を考える事を思い遣りと言うのなら、上品で美しい、素直で大人しい、親切で情が深く、ごつごつしていない柔らかい感情を優しさと言うのなら、事実ではない事を言う嘘が嫌いだと言うのなら、そしてその中の一つでも誰かに求めるのなら、普段の生活の中でそれら全てを、先ず自分が率先して不特定多数の人々に示す必要がある筈だと、そしてそれが掛付け替えの無い出逢いや珠玉の恋愛を享受する為の道理なのではないかという思いを、心の中に引き入れていた。

(・・・ん?)

その振動は椅子から立ち上がっていた涼介を振り向かせた。

「ふう・・・。」

涼介は二回の振動で止まった携帯電話に直ぐ手を伸ばさず、天井にゆっくりと顔を向け、息を一つ吐いた。

受信メール

愛?・・・何??^^

そんな事ずっと前から知ってたよ(^^) -

でも今夜もう一度言っつて！

エリカ 2003 / 10 / 19

18 : 20

(・・・あいつ・・・)

涼介は久し振りに自分の鼓動を全身に感じていた。

「まったく・・・タイミング持つてるやつだな。」

涼介は自分の顔が“照れ”に因ってだらしなく緩んでいるだろう事を誤魔化す様に、そう呟いた。

涼介は崇高で尊い命の全てに与えられた“愛情”という、どんなに酷使しても壊れる事の無い、しかもどんな命をも決して傷付ける事の無い武器でエリカに心を射貫かれ、自分が救われた事を実感していた。

(・・・さて、と)

涼介は誤魔化した羞恥を態とらしく区切り、身支度を整える為に踵を返した。

ダウンライトの明かりは主の居なくなったキッチンを照らし続けた。

エグゼクティブチェアの肘掛けにはバスタオルが掛かったままになつていた。

ダイニングテーブルの上には無造作に放り出された携帯電話があった。そしてその傍で、昨夜エリカが残したメモがキーケースの下敷きになつていた。

最終話・最高の沈黙

長い沈黙にも慣れてきた  
冷めた横顔が得意になる  
ためらいは 癖になり  
手紙を書くのも怖くなる

二人 腕をからめ歩いてた  
遠いずっと遠い記憶  
聞かせてよ あの頃の歌を  
好きだった あの声

世界中の 誰より  
私の心を照らした  
愛をからだに感じてた  
君がいた夏： 忘れないよ I f e e l i n l o v e

“君がいた夏” by

小柳ゆき

「どうした？・・・具合でも悪いのか？・・・」  
「・・・この曲、いいね。」

助手席に深く凭れ掛かり、フロントガラスの遠い先を見つめていたマキが、運転している和明かずあきの方を向いてそう言った。

10月19日の日曜日、第三京浜に夜が訪れていた。

二人を乗せた車は、オレンジ色の光を流麗しゅつれいに連ねたナトリウム灯に誘いわれる様に、横浜市街へ向かう首都高速道路に向かっていた。

「何だそうだったのか・・・話の途中で急に黙もっちゃったから心配したよ。」

マキの沈黙が、マキの為に選んだアルバムに耳を傾けてくれた。だからだと分かった和明は安心し、素直に喜んでいて。

「曲、気に入って貰もらえたみたいだね。」

和明は上機嫌でアルバムの話題を振った。

「・・・ね、本牧ほんもくで御飯食ごはんべない？」

マキはそう言った後、悪戯いたずらっぽく微笑えいごうんだ。

「・・・いいけど・・・中華粥ちゅうかがゆの美味しい店、7時半に予約してるんじゃないかったの？」

「・・・和食の美味しいお店があるよ。」

「・・・そっか、地元だったな、あの辺り。」

「うん。」

「・・・じゃあ、案内して。」

「了解・・・。」

マキは嬉うれしそうな声を和明に届けた後、再び助手席もたに深く凭たれ掛かり、笑顔を仕舞まった。

雨は止んでいた。

魚町交差点ういしちまは信号を待つ人達ひとが窮屈きうくつそうに肩を寄せ合っていた。

交差点を囲んで立ち並ぶビルの壁に取り付けられたプロジェクターやメッセージボードは、それぞれが鮮あやかな映像や光のオブジェを映し出していた。

(.....)

ちゅうぎん通りに車を向けて縦列駐車じゅうれいちゅうしゃしていた涼介は、正面しょうめんに見えている魚町交差点の雑踏ざつたつから、助手席の向こう側に在る雑居ビル

の一階に視線を変えた。

全面ガラス張りの店舗からは眩<sup>まぶ</sup>しい程の光が広い歩道<sup>あふ</sup>に溢れ出し  
ていた。店内は昼間の様に明るく、スタイリッシュな女性達が動き  
回る姿がはつきりと見えていた。

車はスモールランプを点けたままアイドリングを続けていた。

メインパネルに埋め込まれたデジタル時計は7時10分を表示し  
ていた。

(……………)

涼介は美容室の様子を暫<sup>ひま</sup>く眺めた後、煙草に火を点け、ドアレバ  
ーに手を掛けた。

一人 頼杖をついていた

君が帰らない夜に

繰り返し口ずさむ歌は

好きだった あの歌

“君がいた夏” by

小柳ゆき

(……………)

マキは何処<sup>どこ</sup>にも焦点を合わさず、曲に身を委<sup>ゆた</sup>ねていた。

(リヨウ、まだ本牧<sup>ほんもく</sup>に住んでんのかな……………)

マキは思い出していた。涼介を愛しているのに自信を失い掛けて  
いた22歳の夏の終わり、涼介の部屋で一人頼杖を付き、涼介の帰  
りを待ち続け、弱気な心と戦っていた自分を思い出していた。

(逢いたい……………)

2年前の春、涼介が転勤で地元の小倉に戻った事を知らないマキ  
は、助手席の窓越しに流れる横浜の街並みを眺めながら心でそう咳  
いた。

世界中の 誰より

私のすべてを照らした

愛は永遠に終わらないと

君がいた夏： 信じていた I f e e l i n l o v e

“君がいた夏” by

小柳ゆき

マキの脳裏のうらには、ビーチパラソルの中で眠っている涼介にキスをした真夏の砂浜、炭焼き屋で酔っ払った後、涼介に悪戯いたずらばかりして怒られた帰りのバスの中、ベイブリッジの上から二人で見下ろした大黒埠頭、涼介の家に先に帰っていたイヴの夜、日付が変わり、店のケーキとシャンパンを持ってやっと仕事から帰って来た涼介に、少し拗ねすて見せた最初のクリスマスが、つい昨日の事の様に鮮明に蘇よみがえっていた。

「マキ、聞いている？」

「・・・えっ？うん、聞いているよ。」

マキは聞いていた。涼介を忘れられず、涼介を愛し続けている自分が居る事をはっきりと気付かせてくれたメロディを、マキは聞いていた。

「その美由紀って、そんなに仲良いの？」

「えっ、美由紀？・・・あ、うん、・・・だって私、美由紀には隠し事が無いかも・・・。」

涼介に“さよなら”と背を向けた次の日、美由紀の前で泣きじゃくった事も思い出していたマキは、美由紀の存在自体や学生時代から続く美由紀との関係を、無意識の内に和明に語っていた自分に驚いていた。

「そうなんだ。」

「・・・やるじゃん・・・って感じなんだ、美由紀。最近なかなか会え

ないけど、結構相談乗って貰ってる。」

マキは涼介の口癖くちくせを使い、今度は丁寧ていねいに美由紀との絆きずなを和明に伝えた。

「へえ……。マキって相談されるタイプの方だと思ってたよ。」

「……。そんな強くないよ、私……。」

「そっか……。」

和明はそう言っマキに微笑み掛けた。

(……。やるじゃん、か……。)

マキは和明を見つめる瞳の奥に、渋谷から桜木町さくらぎちょうへ帰る東横線の最終電車、船詰めすしづめの車内で身を守り続けてくれた涼介を映し出していた。

エリカは美容室の同僚達と談笑していた。

ローライズのブーツカットが似合っていた。

涼介はポケットに両手を入れ、助手席のドアに背を凭もたせ掛け、エリカに視線を注いでいた。

「横浜公園で降りよつ。」

長い沈黙を続けていたマキが突然そう言っ微笑んだ。

マキの背中でランドマークタワーが大写しになっていた。

和明の横顔の向こうには、桜木町の駅が見えていた。

「……………」

涼介に気付いたエリカは、ゆっくりと談笑の輪から抜け出した。同僚達はエリカの行動を目で追いながら、外の様子を伺う素振りを見せていた。

「……………」

ガラスに張り付いたエリカは涼介に軽く手を振った。

「……………」

涼介は両手をポケットに入れたまま、一度だけ微笑んだ。

「ん？本牧なら新山下の方がいいんじゃない？」

「かもしんじゃないけど、横浜公園で降りよつ。」

「…OK。」

「ありがと。」

マキは元町から麦田トンネルを抜ける本牧通りの景色に思いを馳はせていた。

街の雑音は遠慮なく涼介に降り注いでいた。

歩道を行き交う人達が、涼介の瞳に映るエリカの姿を時折遮ときおりさえぎっていた。

エリカは小さな会釈えしやくを始めていた。そして会釈の度、エリカは同僚達の輪から離れていた。

涼介は変わらず両手をポケットに入れていた。

君はずっと 輝いていた

空の星より奇麗に

過ぎる夏の日の想い出

ずっと見ていた この場所ですっと

“君がいた夏” by

小柳ゆき

(リョウウ……“司”つかやに居たり……する訳ないか……)

マキは久し振りに戻る本牧という町に、有り得るかもしれない微かな必然を期待していた。

「・・・・・・・・。」

美容室から出たエリカは歩き出す前に涼介と視線を重ねた。

「・・・・・・・・。」

涼介は柔らかい眼差しをエリカに贈っていた。

「・・・・・・・・。」

エリカは腰の後ろに回した両手でトートバックを持ち、照れを隠す様に一瞬下を向き、零れてしまう笑顔（こぼれ）を隠そうとする様な上目遣いのまま、涼介の方へ歩き始めた。

歩道のインターロッキングは濡れ残っていた。

二人の間を多くの人達が行き交っていた。

「・・・・・・・・。」

歩行者を避けながら涼介との距離をゆっくりと縮めていたエリカは、広い歩道の真ん中で一度振り返り、ガラスの向こうに居る同僚達に手を振った。

「・・・・・・・・。」

涼介はエリカが見せている一連の仕草を瞳で優しく包み込んでいた。同時に涼介は、その仕草と珠玉（たまごめ）の女性の姿を瞳の奥で重ねていた。

世界中の 誰より

私の心を照らした

愛をからだに感じてた

君がいた夏… 忘れないよ I feel in love

“君がいた夏” by

小柳ゆき

(逢いたい……)

山下町のBARで涼介に言わせた“愛してる”の言葉、涼介に強<sup>ね</sup>請<sup>だ</sup>つて買<sup>た</sup>つて貰<sup>もら</sup>ったピーコート、青く澄んだ真冬の月の下、涼介の腕<sup>から</sup>に絡<sup>か</sup>まって歩いた本牧の裏通り、そして“別れよつか”と意地<sup>よみがえ</sup>を張り、涼介を一人残し“司<sup>つかさ</sup>”を後にした夜。マキは止め処なく蘇<sup>よみがえ</sup>るそんな涼介との思い出に胸を締め付けられながら、10年という歳<sup>さい</sup>月<sup>げつ</sup>が過ぎても色褪<sup>いろあ</sup>せない涼介を想い、再びその言葉を心の中で呟<sup>つぶや</sup>いていた。

「お待ちせつ。」

「……お疲れ。」

「……元気つ?」

エリカは恥じらいを隠す様に言った。

「……ちよつと……落ち着いたな。」

「?……リヨウ、具合でも悪かったの?」

「似合ってるよ、髪。」

「えっ?あ、そうだったね、さっきメールで言ったもんね、ありがとう。」

「……なあエリ。」

「何?……」

「……どうぞ。」

涼介はポケットに忍ばせておいたエルメスのガムケースをエリカに差し出した。

「うわっ、覚えててくれたの!!嬉しい!」

「……誕生日おめでとう。」

「嬉しっ!ありがとう!!!……でもリヨウ、誕生日今日じゃないよ。」

「・・・だよな。でも待てなかつたんだよ、26日迄。」

「えっ！嬉しい！それも覚えてくれたんだね、ありがと・・・。」  
「だから誕生日は何もないぞ。」

「うそーっ！やだっ！」

「・・・25歳だっけ？」

「・・・うん・・・で？・・・。」

エリカは更に“嬉しさ”を強請る様な瞳で涼介を見つめ、茶目っ  
気たっぷりに誕生日のプレゼントを貰う約束を取り付け様としてい  
た。

「大晦日は仕事だよな？」

「・・・うん・・・で??？」

エリカは後ろ手に持ったトートバックを揺らしながら涼介の問い  
掛けを笑顔で流し、約束を強請った。

「・・・休んでくれないか？」

「えー、厳しいよそれ・・・。」

「横浜行くから。」

「うそっ!!！」

「だから俺の為に。」

「・・・。。。」

エリカは涼介を見つめたまま、黙ってしまった。

「・・・どうした？」

「・・・何か嘘みたい・・・嬉し過ぎて・・・。」

エリカは照れていた。

「そっか？」

「だって・・・リョウが住んでた横浜、リョウと一緒に行きたいって  
思ってたんだもん・・・。」

「・・・そっか・・・。」

「嬉しい・・・ありがと・・・。」

エリカの声は小さく、瞳は素直だった。

「それと、誕生日はちゃんと祝うから。」

「リヨウ……。」

「でもそれは俺ん家でエツチするだけだぞ。」

「……バカ……。」

エリカはそう言って“はにかみ”ながら俯いた。

「……おいおい……どうした？」

「だって……優しいんだもん……嬉しいんだもん……。」

少し冷たい湿った夜風が街路樹を微かに揺らしていた。

エリカは変わり行く季節の感触を、心に確かに感じていた。

「……。」

涼介は慈愛に満ちた眼差しでエリカを見つめていた。

「……なあエリ、ゼノンの逆説覚えてる？」

「……覚えてる……けど……やだ。」

「ははっ。」

「……だって……今直ぐキスしたいんだもん……。」

少し拗ねた素振りで見上げたエリカの瞳は潤んでいた。

「……エリ、それは俺の台詞だよ。」

月が見えていた。昼間の豪雨が嘘の様な、輪郭の綺麗な月が見えていた。

プレゼントはエリカの右手にしっかりと握られていた。

エリカの踵は浮き、トートバッグはエリカの足元に落ちていた。

歩道を歩く人達は、二人のシルエットに優しい瞳を向けていた。

涼介は生涯最高の沈黙をエリカに贈っていた。

エリカは生涯最高の沈黙を全身で受け止めていた。

街を彩る無数の光は、二人を祝福するかの様に乱舞していた。

「……まだ足りない？」

「……」

「……愛してるんだ。」

涼介はエリカの肩に両手を掛けたまま真摯しんじに言った。

「……私も愛してる……」

エリカは涼介と離れる事を惜しむ様に、涼介が着ているスーツの袖口そでぐちを掴つかんでいた。

「……リヨウ・もう一度言つて。」

「……やだ。」

「……ケチ……」

エリカは最高の沈黙の余韻よゐんに浸ひたっていた。

涼介は笑っていた。

見つめ合う二人の瞳には、大切な人と創つくるだろう未来が映っていた。

「……彼女、先輩？」

涼介は自分達を見ているだろう一人の女性に気付いた。

美容室の店内に、忙しく立ち回っているスタッフをまるで気にせず、ガラスの壁に張り付いている女性が居た。

「……うん、さゆり……この前リヨウに会う為にご飯断った人……一番仲が良いの……」

エリカは涼介から手を離し、美容室の方に振り返り、小さく手を振った後、涼介にそう言った。

「……彼女、大胆に仕事さぼってるな。」

涼介はそう言いながらエリカのトートバッグを拾い上げた。

「うん、さゆりも早番で仕事は終わってるの……全部見られちゃったかな……」

エリカは“ばつ”が悪そうに涼介からバッグを受け取った後、もう一度振り返り、今度は大きく手を振った。

「……明日大変そうだな。」

驚いた様に手を振り返し、慌あわてて店の奥に消えて行ったさゆりを見届けた涼介はそう言った。

「大丈夫、もう慣れちゃった。」

「おっと、それはどういう意味かな？」

「・・・そういう意味よ・・・ねっ、それよりお腹空いちちゃった。」

店内の様子を眺めながら喋っていたエリカは涼介の方へ勢い良く体を戻し、茶目つ気たっぷりにそう切り出した。

「なるほど、了解。・・・じゃあエリ、運転してよ。」

涼介は明るく切り返した。

「えーっ、何でーっ。」

「だって横浜で年越すんだぞ。」

「何それ・・・ほんと意味分かんないんだから。」

「いいじゃんかさ、たまには。」

涼介はその言葉と笑顔をエリカに残し、体を反転させ、助手席のドアを開けた。

「もう！・・・」

助手席に乗り込んだ涼介にエリカは頬を膨らませた。

涼介は穏やかな微笑みを浮かべていた。

仕方無さそうに微笑んでいるエリカの表情には、隠す事の出来ない幸福感が溢れていた。

「・・・じゃあ、焼肉。」

運転席に乗り込んだエリカはトートバッグを後部座席に置き、シートベルトを付けながら無邪気な瞳を涼介に向けていた。

「和食にしようよ。」

「やだ！美味しい焼肉！」

「・・・了解。」

「よし！」

エリカは“くしゃくしゃ”の笑顔を涼介に残し、イグニッションを回した。

「・・・エリ。」

「はい？」

「今忙しい？」

「・・・何？」

エリカは動かし始めていた車の鼻先を見つめていた。

「俺の事好き？」

「・・・嫌い。」

エリカはハンドルを切り返し、車をバックさせていた。

「何だつて？」

「んー・・・やっぱり嫌い。」

エリカは忙しそうにハンドルを切り返していた。

「・・・やるじゃん。」

「・・・あつ、そうそう、指輪が一つ見当たらないんだけど、リョウん家だよな？」

「・・・そうだな、あつたな、歯ブラシの横に。」

.....  
おわり.....

.....  
.....  
.....

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4169e/>

---

ぬるい恋愛 “情熱という、理想というmelancholy”

2010年10月8日14時32分発行